秋田県文化財調査報告書第347集

向様田B遺跡向様田C遺跡向様田E遺跡

一 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2003 · 3

秋田県教育委員会

一 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2003 · 3

秋田県教育委員会

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、 先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化 財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造 していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成13年度に森吉町において 実施した向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡の発掘調査成果につ いてまとめたものであります。調査では、向様田B遺跡・向様田C遺跡で は、縄文時代の遺構や遺物、向様田E遺跡では、縄文時代、古代、中世の 遺構や遺物を発見し、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺 清

例 言

- 1 本報告書は平成13 (2001) 年度に行われた秋田県教育委員会による森吉山ダム建設事業に係る向 様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。
- 2 本報告書は秋田県教育委員会による森吉山ダム建設事業に係る文化財調査報告書としては9冊目に当たる。
- 3 調査結果については、秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料等でも公表してきたが、本書の記載と相違のある場合、本書によって訂正したものとする。
- 4 向様田B・C遺跡の第3章 自然科学的分析は株式会社パレオ・ラボに、向様田E遺跡の第3章 第1節・2節はパリノ・サーヴェイ株式会社に、第3~5節は株式会社パレオ・ラボに委託した。 また、黒曜石石製品の産地同定は、京都大学原子炉実験所 藁科哲男氏に委託した。
- 5 本書に使用した地形図は、国土地理院発行 1 /50,000地形図「鷹巣」と「米内沢」、同 1 /25,000「阿仁前田」と「太平湖」である。
- 6 本書における土層注記の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研 究所色票監修の『新版標準土色帖』(1997年版)によった。
- 7 向様田C遺跡の石製品の石質鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社 五十嵐俊雄氏からご教授いただいた。
- 8 本報告書の刊行にあたり、次の方々よりご指導、ご教授いただいた。記して謝意を表する (順不同、敬称略)。

小林達雄 冨樫泰時 星雅之 菅原弘樹 佐藤三七

9 本報告書の執筆・編集は河田弘幸が行った。

凡 例

1	遺構番号は検出順とし、	その種別を問わず01より連番を付したが、	精査過程において遺構でない
d	ヒ判断したものは欠番とな	いっている。	

2	本報告書で各遺構	・遺物	7に付している略記号は、	以下の通りである。	配石の下に掘り込みが伴う
j	遺構は土坑とした。	なお、	平面図及び断面図に何も	ら付していないものは	は礫を表す。

遺構…SI 竪穴住居跡 SB 掘立柱建物跡 SA 柱列 SK 土坑 SQ 配石遺構

SR 土器埋設遺構 SD 溝跡 SN 焼土遺構 SQN 炉

遺物…RP 縄文土器・土師器 RQ 石器 S 礫

- 3 本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40を基本とし、配石遺構は1/20とした。遺物の縮尺は、遺構内出土遺物と遺構外出土石器を1/2、遺構外出土土器は1/3を基本とした。挿図にはそれぞれスケールを付してある。
- 4 遺構内出土土器の分類については、遺構外出土土器と共通する。
- 5 挿図中の遺物実測図には、遺構内出土遺物については各挿図ごとに1より通し番号を、遺構外出 土遺物については各遺跡ごとに1より通し番号を付した。
- 6 須恵器と土師器を区別するため、挿図中の須恵器の実測断面を黒く塗りつぶした。
- 7 縄文土器は、口径1に対して器高がそれを上回るものを深鉢形土器、口径1に対して器高が1以下で1/2を上回るものを鉢形土器、口径1に対して器高が1/3以上1/2以下のものを浅鉢形土器、口径1に対して器高が1/3未満のものを皿形土器とした。
- 8 実測図以外の破片拓影図では、両面を採択した場合左側に外面、右側に内面を配した。また、底部の拓影は、上方に内面、下方に外面を配した。
- 9 遺構内土器の分類は、遺構外土器の分類に準ずる。

天然アスファルト

10 土層注記は、基本層位にローマ数字 (・ ・・・) を、遺構堆積土にはアラビア数字 (1・2・3・・) を用いた。

11	挿図中に用いたスクリーン	トーンは以下のとおり)であり、これ以外は	:挿図中に	示す。
	焼土 [注::::::::::::::::::::::::::::::::::::	炭化物の広がり		地山	

酸化鉄の広がり

HHPITITHHHPITHHHPITIHH

目 次

序 例言 凡例 目次 挿図目次 表目次 図版目次	.iii .iv . v .vi
はじめに 調査に至る経過 調査要項 遺跡の環境 遺跡の位置と立地 歴史的環境	2
向様田 B 遺跡 第1章 発掘調査の概要 第1節 遺跡の概観 第2節 調査の方法 第3節 調査の経過 第2章 調査の記録 第1節 基本層位 第1節 基本層位 第2節 検出遺構と出土遺物 第3節 遺構外出土遺物 第3章 自然科学的分析 第1節 出土炭化材の樹種同定 第2節 放射性炭素年代測定	.17 .18 .20 .20 .72
向様田 C 遺跡 第 1章 発掘調査の概要 第 1節 遺跡の概観 1 第 2節 調査の方法 1 第 3節 調査の経過 1 第 1節 基本層位 1 第 2節 検出遺構と出土遺物 1 第 3節 遺構外出土遺物 1 第 3章 自然科学的分析 1 第 1節 出土炭化材の樹種同定 1 第 2節 放射性炭素年代測定 1 第 4章 まとめ 1	09 10 11 11 14 52 53
向様田 E 遺跡 第 1 章 発掘調査の概要 第 1 節 遺跡の概観 1 第 2 節 調査の方法 1 第 3 節 調査の経過 1 第 2 章 調査の記録 1 第 2 節 長出遺構と出土遺物 1 第 3 節 遺構外出土遺物 2 第 3 章 自然科学的分析 2 第 2 節 赤色顔料の素材推定 2 第 2 節 赤色顔料の素材推定 2 第 3 節 出土炭化材の樹種同定 2 第 4 節 放射性炭素年代測定 2 第 5 節 鉄滓の蛍光 X 線分析 2 第 4 章 まとめ 2	69 70 73 73 200 208 214 216 218
報告書抄録	
付図 付図1 向様田B遺跡東部礫群 付図2 向様田B遺跡西部礫群	

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近の地形	第 53図	遺構外出土遺物(14)
	周辺の遺跡	第 54図	
	森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群	第 55図	
ઋ J I	林口山ノム廷以事朱匹以にガルッる退跡は		
	> \# n+	第 56図	
向様田 🛭	3 遠跡	第 57図	
		第 58図	遺構外出土遺物(19)
第4図	向様田B・C遺跡グリッド配置図 向様田B・C遺跡遺構配置図 調査区西側・東側基本土層、SK109土坑 調査区東側基本土層、SK110土坑 SK40土坑及び出土遺物、SK41土坑 SK42土坑及び出土遺物、SK43・44・ 45・78土坑	第 59図	遺構外出土遺物(20)
第5図	向様田B・C遺跡遺構配置図	第 60図	遺構外出土遺物(21)
第6図	調査区西側・車側其木十届 SK109十位	第 61 図	遺構外出土遺物(22)
労っ図	調本区古側甘木十届 C V 110十七	第 62回	遺構外出土遺物(23)
第 / 凶	神里区米川茶平工僧、3 N 110工儿	第 02区	思博介山上思彻(23)
弗 8 凶	S K 40工机及0出工退物、S K 41工机	弗 63四	遺構外出土遺物(24)
第9図	SK42土坑及び出土遺物、SK43・44・	第 64図	遺構外出土遺物(25)
	45・78土坑	第 65図	遺構外出土遺物(26)
第10図	SK46・47土坑、SK48土坑及び出土遺物	第 66図	遺構外出土遺物(27)
第11図	S K 49 · 50 · 51 十	第 67図	遺構外出土遺物(28)
第12回		第 60回	遺構外出土遺物(29)
为 1 2 区 签 4 0 区	45・78工机 S K 46・47土坑、S K 48土坑及び出土遺物 S K 49・50・51土坑及び出土遺物 S K 52・54土坑、S Q 32配石遺構 S K 55・56土坑及び出土遺物、S K 92土坑 S K 58土坑、S K 59・77土坑及び出土遺物 S K 77出土遺物	分 00区	退伸外山上退彻(23) ************************************
弗13凶	S K 55・56工机及び出工退物、S K 92工机	弗 69凶	遺構外出土遺物(30)
第14図	SK58土坑、SK59・77土坑及び出土遺物	第 70図	遺構外出土遺物(31)
第15図	S K77出土遺物	第 71図	遺構外出土遺物(32)
第16図	SK60土坑及び出土遺物、SK61土坑	第 72図	遺構外出土遺物(33)
第17図	SK63土坑、SK62・64土坑及び出土遺物	第 73図	遺構外出土遺物(34)
第18図	S K 65・66・67土坑及び出土遺物	ло <u>г</u>	运情/1日工运15(01)
		白拌皿口	`害 ւ
第19図		門依田 E	退砌
第20図			
第21図		第 74図	
	及び出土遺物	第 75図	遺構配置図
第22図	SK91・93・95・96土坑	第 76図	
	C 1/ 07 + t=	笠 77図	C T 20取立住民味及び出土造物
第24図	S K 99・100土坑及び出土遺物	第 78図第 79図	S K11土坑及び出土遺物
	3 1/400 400 404 405 上台	分 70区	3 トリエル及び山工度初
第25図	S K 102 · 103 · 104 · 105土坑	弗 /9凶	S K 11出土遺物、 S K 19・22土坑
第26図	S K 106工机及び出工退物、 S K 107工机	弗 80凶	SK25・27工坑
第27図	S K 108土坑	第 81図	SR26土器埋設遺構及び出土遺物
第28図	SQ01・02・03配石遺構	第 82図	SI03竪穴住居跡、SD38溝跡
44 /9IXI	S()()5・()9配行直稀		
第29図	S Q 05・09配石遺構 S Q 13・17配石遺構	第 83図	SI03竪穴住居跡土層断面
第30図	S Q 13・17配石遺構		SI03竪穴住居跡土層断面 SI03竪穴住居跡柱穴・カマド、
第30図 第31図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構	第 83図 第 84図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面
第30図 第31図 第32図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構	第 83図第 84図第 85図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物
第30図 第31図 第32図 第33図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構	第 83図 第 84図 第 85図 第 86図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡
第30図 第31図 第32図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構	第 83図第 84図第 85図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構	第 83図 第 84図 第 85図 第 86図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、
第30図 第31図 第32図 第33図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構	第 83図 第 84図 第 85図 第 86図 第 87図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図 第35図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物	第 83図 第 84図 第 85図 第 86図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図 第36図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1)	第 83図 第 84図 第 85図 第 86図 第 87図 第 88図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図 第35図 第36図 第37図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2)	第 83図 第 84図 第 85図 第 86図 第 87図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図 第35図 第36図 第37図 第38図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3)	第 83図 第 84図 第 85図 第 87図 第 88図 第 89図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 35・36土坑、S D 37溝跡
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図 第35図 第36図 第37図 第38図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(4)	第 83図 第 84図 第 85図 第 87図 第 88図 第 89図 第 90図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 35・36土坑、S D 37溝跡 S B 28掘立柱建物跡
第30図 第31図 第32図 第33図 第34図 第35図 第36図 第37図 第38図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(4)	第 83図 第 84図 第 85図 第 87図 第 88図 第 89図 第 90図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 35・36土坑、S D 37溝跡
第30図 第31図 第32図図 第35図図 第36図図 第37図図 第38図図 第38図図 第39図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(4) 遺構外出土遺物(5)	第 83図 第 84図 第 85図 第 87図 第 88図 第 89図 第 90図 91図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 35・36土坑、S D 37溝跡 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K
第30図 第31図 第32図 第33図 第35図 第36図図 第38図 第38図 第39図図 第40図 第41図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(4) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6)	第 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 9 9 1 9 1	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション
第30図 第31図 第32図 第33図 第35図 第36図 第37図 第38図 第38図 第40図 第41図 第442図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(4) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7)	第 8 8 8 8 8 8 9 9 9 1 9 2 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列
第30図 第31図 第32図 第33図 第35図 第36図図 第38図 第38図 第39図図 第40図 第41図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(4) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7)	第 8 8 8 8 8 8 8 8 9 9 1 9 2 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物
第30図第31図図第33回図第333回図第333回図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(7)	第 8 8 8 8 8 8 9 9 9 1 9 2 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、
第30図 第31図 第32図 第33図 第35図 第36図 第37図 第38図 第38図 第40図 第41図 第442図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(7)	第第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡
第30図第31図図第33回図第333回図第333回図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(7)	第第 第第第第 第 <td>S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35)</td>	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35)
第30図 第31図 第32図 第333回 第35回 第36回 第37 第38 第37 第38 第39 第44 第44 第44 第44 第44 第44 第44 第44 第44 第4	SQ13・17配石遺構 SQ21・35・36配石遺構 SQ38・69配石遺構 SQ70・71・84配石遺構 SQ85・86配石遺構 SQ87配石遺構、SX101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(7)	第第 第第第第 第 <td>S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35)</td>	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35)
第30図 第31図図 第32図図 第333回図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8)	第第 第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 35・36土坑、S D 37溝跡 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(36)
第30図図第31図図第33回図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8)	第第 第第第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(36) 遺構外出土遺物(37)
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8)	第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 03出土遺物 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38)
第30図図第31図図第33回図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8)	第第 第第第 第 第 第第第第第第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(36) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8) 遺構外出土遺物(8)	第第 第第第 第 第 第第第第第第 第 第第第第第第第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8) 基本土層 S K 04・05土坑及び出土遺物 S Q01・02配石遺構 S Q01・02配石遺構 = 断面、 S Q03配石遺構 遺構外出土遺物(9)	第第 第第第 第 第 第第第第第第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(36) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率 ら Q N 05の火山ガラスの屈折率 向様田 E 遺跡 S K 19における赤色顔料の
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8) 遺構外出土遺物(8)	第第 第第第 第 第 第第第第第第 第 第第第第第第第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(3) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8) 遺構外出土遺物(8)	第第 第第第 第 第 第第第第第第 第 第第第第第第第 第 第 第 第 第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(36) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率 ら Q N 05の火山ガラスの屈折率 向様田 E 遺跡 S K 19における赤色顔料の
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8) 基本土層 S K 04・05土坑及び出土遺物 S Q01・02配石遺構 S Q01・02配石遺構 S Q01・02配石遺構 S Q01・02配石遺構土層断面、 S Q03配石遺構 遺構外出土遺物(10) 遺構外出土遺物(11)	第第 第第第 第 第 第第第第第第 第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(36) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率 f 以線回折図 向様田 A 遺跡 S K 42における赤色顔料の
第30図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図図	S Q13・17配石遺構 S Q21・35・36配石遺構 S Q38・69配石遺構 S Q70・71・84配石遺構 S Q85・86配石遺構 S Q87配石遺構、S X 101性格不明遺構 及び出土遺物 遺構外出土遺物(1) 遺構外出土遺物(2) 遺構外出土遺物(5) 遺構外出土遺物(6) 遺構外出土遺物(7) 遺構外出土遺物(8) 基本土層 S K 04・05土坑及び出土遺物 S Q 01・02配石遺構 S Q 01・02配石遺構 S Q 01・02配石遺構 S Q 01・02配石遺構土層断面、 S Q 03配石遺構 遺構外出土遺物(10) 遺構外出土遺物(11) 遺構外出土遺物(12)	第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	S I 03竪穴住居跡土層断面 S I 03竪穴住居跡柱穴・カマド、 S D 38溝跡土層断面 S I 04竪穴住居跡 S I 04竪穴住居跡土層断面・カマド、 S I 10竪穴住居跡 S K 06・09・14土坑、S K 31土坑 及び出土遺物 S K 32土坑及び出土遺物、 S K 32土坑及び出土遺物、 S B 28掘立柱建物跡 S B 28掘立柱建物跡柱穴・S K S B 28掘立柱建物跡柱穴・エレベーション S A 17柱列 S Q N 05炉及び出土遺物 S K 01・02土坑、S N 30焼土遺構、 S D 18溝跡 遺構外出土遺物(35) 遺構外出土遺物(36) 遺構外出土遺物(37) 遺構外出土遺物(38) S K 27の火山ガラスの屈折率 S Q N 05の火山ガラスの屈折率 向様田 E 遺跡 S K 19における赤色顔料の X 線回折図

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	図版10	検出遺構(8)
第2表	森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群	図版11	出土遺物(1)
		図版12	出土遺物(2)
向様田 B	3遺跡	図版13	出土遺物(3)
		図版14	出土遺物(4)
第3表	縄文土器観察表	図版15	出土遺物(5)
第4表	石器観察表	図版16	出土炭化材樹種
第5表	出土炭化材の樹種同定結果		
第6表	放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	向様田(遺跡
向様田C	遺跡	図版17	検出遺構(1)
		図版18	検出遺構(2)
第7表	石器・石製品観察表	図版19	出土遺物(1)
第8表	縄文土器観察表	図版20	出土遺物(2)
第9表	出土炭化材の樹種同定結果	図版21	出土遺物(3)
第10表	放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	図版22	出土遺物(4)
		図版23	出土遺物(5)
向様田E	遺跡	図版24	出土遺物(6)
		図版25	出土遺物(7)
第11表	石器観察表	図版26	出土炭化材樹種
第12表	縄文土器観察表		
第13表	土師器・須恵器観察表	向様田E	遺跡
第14表	出土炭化材の樹種同定結果		
第15表	放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	図版27	遺跡全景
		図版28	検出遺構(1)
図 版	目次	図版29	検出遺構(2)
		図版30	検出遺構(3)
向様田B	3遺跡	図版31	検出遺構(4)
		図版32	検出遺構(5)
図版 1	向樣田遺跡群全景	図版33	検出遺構(6)
図版 2	向様田B・C遺跡全景	図版34	検出遺構(7)
図版 3	検出遺構(1)	図版35	検出遺構(8)
図版 4	検出遺構(2)	図版36	出土遺物(1)
図版 5	検出遺構(3)	図版37	出土遺物(2)
図版 6	検出遺構(4)	図版38	出土遺物(3)と軽石・火山ガラス
図版 7	検出遺構(5)	図版39	出土炭化材樹種(1)
図版 8	検出遺構(6)	図版40	出土炭化材樹種(2)
図版 9	検出遺構(7)	図版41	各鉄製品のマイクロスコープ写真

はじめに

調査に至る経過

岩手県二戸郡安代町田山に源を発し、秋田県北部を東から西へ流れる米代川は、31の支流を合わせながら日本海に注ぐ県下二大河川の一つである。この米代川が貫流する花輪・大館・鷹巣の各盆地下流付近は、山地が迫っていて、川幅も狭い。中でも、鷹巣盆地の七座神社付近から荷上場にかけての地域は、北流する阿仁川と南流する藤琴川の合流地点でしばしば大洪水に見舞われている。

昭和47 (1972) 年7月3日、北九州で始まった梅雨前線による集中豪雨は、日本各地に甚大な被害をもたらした。本県でも、この集中豪雨による被害が大きく、県に天災融資法と激甚災害法が適用されるほどであった。また、能代市・二ツ井町・森吉町・合川町・西仙北町・角館町には災害救助法が適用された。この中で、特に被害が大きかったのが、米代川下流に位置する能代市と二ツ井町であった。

翌年、この大洪水を機に「米代川工事実施基本計画」の見直しが行われ、上流ダム群により水量を調節することとなった。この上流ダム群の一つとして阿仁川の右支流、小又川に建設されることになったのが森吉山ダムである。森吉山ダムは、昭和63 (1988) 年に、「森吉山ダムの建設に関する基本計画」が公示され、水量調節のほか、灌漑用水・水道用水の供給、水力発電等を目的とする多目的ダムである。

平成4 (1992) 年、森吉山ダムによって水没する当該地域に関して、埋蔵文化財の保護を目的とした秋田県教育委員会による遺跡分布調査が開始された。当初、新しく確認された遺跡は6遺跡であったが、その後確認調査をしていく中で、新しく発見された遺跡が増え、現在貯水予定地周辺地域では60遺跡を数えている。

森吉山ダム関連の工事は、平成6 (1994)年の下流工事用道路から開始され、翌年には事業地内の材料運搬路に移った。一方、同年に第12回日本ジャンボリーが森吉山麓で開催されることが決定し、これに伴い、中心会場のノロ川への幹線道路として、森吉山ダムの工事用道路を一部供用することとなった。これを受けて、森吉町教育委員会によって、平成7 (1995)年に日廻岱A遺跡・砕渕遺跡、平成8 (1996)年に上悪戸D遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前B遺跡・天津場C遺跡のアクセス道路部分の発掘調査が実施され、記録保存が図られている。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事過程に合わせて発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。秋田県教育委員会では、平成9 (1997) ~平成12 (2000) 年の4年間で、深渡遺跡、姫ヶ岱 C・D遺跡、桐内A ~ D遺跡、桐内沢遺跡、日廻岱 A遺跡の発掘調査を実施した。また、平成13 (2001) 年には、向様田 A ~ F遺跡、砕渕遺跡、漆下遺跡の一部を発掘調査し、記録保存を図った。

調査要項

向様田B遺跡

遺 跡 名 向様田B遺跡 (略号2MSD-B)

所 在 地 秋田県北秋田郡森吉町森吉字向様田67-1外

調 査 期 間 平成13 (2001) 年5月17日~9月7日

調 査 目 的 森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

調 査 面 積 5,400㎡

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 河田 弘幸 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

菅原 一彦 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

成田 雄毅 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

田中 多喜子 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

木村 秀信 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

奥山 美樹 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

佐藤 有 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

藤原 泰史 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

横山 香菜子 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

総 務 担 当 者 佐藤 悟 (秋田県埋蔵文化財センター 総務課長)

嶋田 敏輝 (秋田県埋蔵文化財センター 主査)

高橋 修 (秋田県埋蔵文化財センター 主任)

佐々木 敬隆 (秋田県埋蔵文化財センター 主事)

成田 誠 (秋田県埋蔵文化財センター 主事)

調 査 協 力 機 関 国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所

森吉町

森吉町教育委員会

向様田C遺跡

遺 跡 名 向様田 C 遺跡 (略号 2 MSD-С)

所 在 地 秋田県北秋田郡森吉町森吉字向様田76外

調 査 期 間 平成13 (2001) 年5月17日~8月10日

調 査 目 的 森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

調 査 面 積 810㎡

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 河田 弘幸 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

菅原 一彦 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

成田 雄毅 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

田中 多喜子 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

奥山 美樹 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

佐藤 有 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

藤原 泰史 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

横山 香菜子 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

総 務 担 当 者 佐藤 悟 (秋田県埋蔵文化財センター 総務課長)

嶋田 敏輝 (秋田県埋蔵文化財センター 主査)

高橋 修 (秋田県埋蔵文化財センター 主任)

佐々木 敬隆 (秋田県埋蔵文化財センター 主事)

成田 誠 (秋田県埋蔵文化財センター 主事)

調 査 協 力 機 関 国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所

森吉町

森吉町教育委員会

向様田E遺跡

遺 跡 名 向様田 E 遺跡 (略号 2 MSD-E)

所 在 地 秋田県北秋田郡森吉町森吉字向様田家ノ下モ36外

調 査 期 間 平成13 (2001) 年8月27日~10月19日

調 査 目 的 森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

調 査 面 積 4,200㎡

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 河田 弘幸 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

菅原 一彦 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

成田 雄毅 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

木村 秀信 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

奥山 美樹 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

佐藤 有 (秋田県埋蔵文化財センター 非常勤職員)

総 務 担 当 者 佐藤 悟 (秋田県埋蔵文化財センター 総務課長)

嶋田 敏輝 (秋田県埋蔵文化財センター 主査)

高橋 修 (秋田県埋蔵文化財センター 主任)

佐々木 敬隆 (秋田県埋蔵文化財センター 主事)

成田 誠 (秋田県埋蔵文化財センター 主事)

(職氏名は担当年度のもの)

調 査 協 力 機 関 国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所

森吉町

森吉町教育委員会

はじめに

参考文献

森吉町教育委員会 『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ~ 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~』 1996 (平成8) 年

森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ~ 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~』 1997(平成9)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第251集 1994 (平成6) 年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第259集 1995 (平成7) 年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第267集 1996 (平成8) 年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997 (平成9) 年

秋田県教育委員会 『深渡遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化財調査報告書 第286集 1999 (平成11) 年

秋田県教育委員会 『桐内 C 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化財調査報告書 第299集 2000 (平成12) 年

秋田県教育委員会 『桐内 B 遺跡・桐内 D 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化 財調査報告書第318集 2001 (平成13) 年

秋田県教育委員会 『桐内 A 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化財調査報告書 第334集 2002 (平成14) 年

秋田県教育委員会 『桐内沢遺跡・日廻岱 A 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文 化財調査報告書第335集 2002 (平成14) 年

遺跡の環境

遺跡の位置と立地

向様田 B 遺跡・向様田 C 遺跡・向様田 E 遺跡の所在する向様田地区は、森吉山の北麓を西流する小 又川の右岸に位置する。森吉町北部の米内沢地区にある森吉町役場より南東約11.8km、秋田内陸縦貫 鉄道阿仁前田駅から南東約5.5kmの距離にある。向様田地区には前記の3遺跡の他に、向様田 A 遺跡・ 向様田 D 遺跡・向様田 F 遺跡の3遺跡が隣接しており、向様田 A 遺跡は平成12 (2000) 年と平成13 (2001) 年に、その他の5遺跡は平成13 (2001) 年に発掘調査が実施された。

向様田 B 遺跡は北緯40°2 26、東経140°28 40 の河岸段丘上に、向様田 C 遺跡は北緯40°2 25、東経140°28 40 の河岸段丘上に立地している。向様田 B 遺跡の南側斜面と向様田 C 遺跡の北側は接しており、両遺跡の段丘面の高低差は約 4 mである。

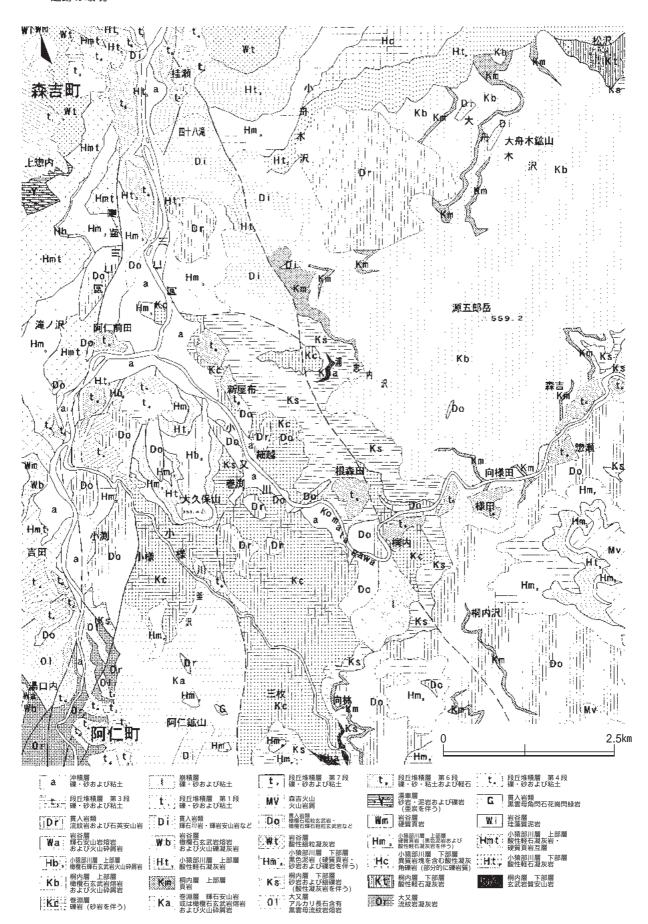
向様田 E 遺跡は、向様田 A 遺跡の北側、北緯40°2 30、東経140°28 32 の丘陵地に立地する。

遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高1,454mの森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地を挟んで、北北東に小繋森(標高1,010m)、北に高烏帽子(標高764m)、北西に源五郎岳(標高559m)などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10~11kmである。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森 (標高1,119m)・ 柴倉岳 (標高1,178m) に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山 北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落、耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大6段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側より山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面側の勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。向様田地区には、昭和53 (1978) 年に戸数12、50人の人が住んでいたが、現在は森吉山ダム建設のため、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側グリーンタフ地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩(粘板岩、ホルンフェルス)が小繋森の頂上に顔を出しているが、それ以外の地域では、新第三紀中新世初期~中期の火山岩類、火山砕屑岩類及び堆積岩類を基盤岩としている。また、第四紀層の森吉山及び柴倉岳の火山活動に伴う泥流堆積物・段丘堆積物・扇状地堆積物・河床堆積物・現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心に被覆している。



第1図 遺跡付近の地形

当地区の地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山性砕屑岩類が分布し、左岸側には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀の火山泥流堆積物が広く被覆している。

歴史的環境

『秋田県遺跡地図(県北版)』(1991年発行)によると、森吉町には58箇所の埋蔵文化財包含地(遺跡)が周知されており、これらのほとんどは阿仁川の河岸段丘上に立地する。その後、秋田県教育委員会による、平成4(1992)・平成5(1993)年の森吉山ダム建設事業に係る分布調査と、平成6(1994)年からの同時業に係る確認調査によって、合計60遺跡が小又川流域の根森田・森吉地区で新しく発見され、町の遺跡分布図は大幅に塗り替えられた。

旧石器時代の遺物は、今まで森吉町では出土していなかったが、上記の調査により二重鳥 A 遺跡より掻器 1 点、二重鳥 B 遺跡よりナイフ形石器 1 点、ネネム沢 A 遺跡より旧石器時代の遺物が報告されている。

縄文時代の遺跡では、爪形文・貝殻沈線文・条痕文の遺物が出土した早期の桂の沢遺跡、前期の長野岱 遺跡・地蔵岱遺跡、前期から後期にかけての大規模な集落跡が確認された狐岱遺跡がある。中期から晩期にかけては、桐内A~D遺跡・桐内沢遺跡・日廻岱A遺跡・砕渕遺跡・深渡遺跡・白坂遺跡・向様田A~E遺跡などがある。これらの遺跡の中で、深渡遺跡の石棺様組石・白坂遺跡の『笑う岩偶』・向様田A遺跡の環状配石は、大きく報道され話題となった。

弥生時代の遺物は、上悪戸B遺跡から出土している。

古代の遺跡では、狐岱遺跡や諏訪岱遺跡などで平安時代の集落跡、地蔵岱遺跡で製鉄関連遺構が確認されており、その他天津場A遺跡・ネネム沢A遺跡・森吉家ノ前A遺跡でも古代の遺構・遺物が確認されている。

中世以降の遺跡では、いわゆる中世城館が町全域で10箇所確認されている。前田地区には、前田館、 花館、天館、仲ノ又館があり、仲ノ又館には空堀や見張り台跡がある。

参考文献

秋田県農政部農地整備課 『大野台開発計画区域 土地分類基本調査 米内沢』 1978 (昭和53) 年

川村公一 「子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ」 モリトピア選書 2 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993 (平成5) 年

秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図 (県北版)』 1991 (平成3) 年

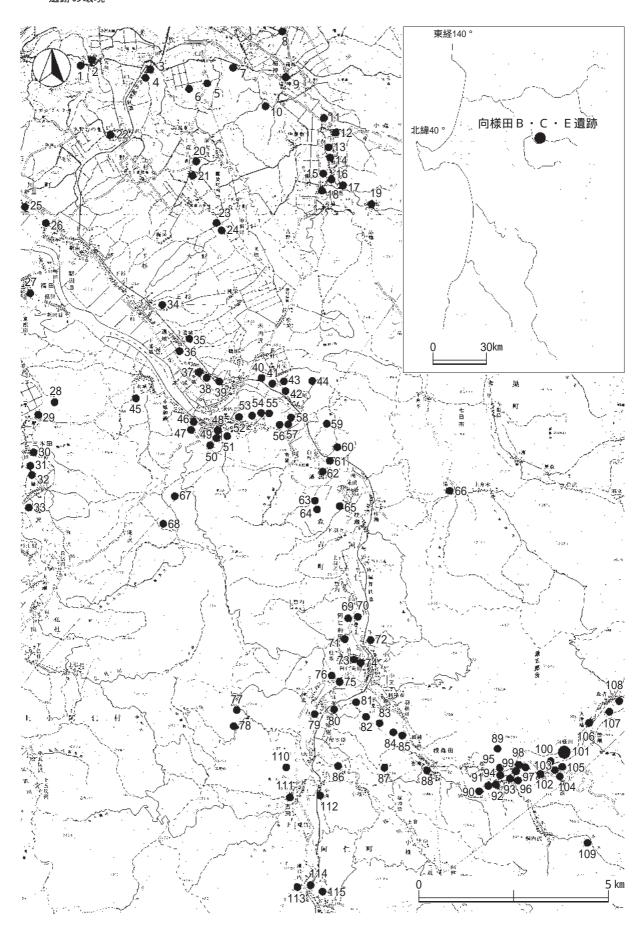
秋田県 『秋田県史 考古編』 1977 (昭和52) 年

奈良修介・豊島昂 『秋田県の考古学』 郷土考古学叢書3 吉川弘文館 1966 (昭和41) 年

大和久震平 「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」 『昭和三十二年度調査研究報告』 秋田県文化財保護協会 1958 (昭和33) 年

大野憲司 「狐岱遺跡について~1989年の範囲確認調査から~」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第5号 1990 (平成2)年

高橋学 「森吉町長野岱 遺跡採集の岩偶」 「秋田考古学』 第42号 秋田考古学協会 1993 (平成5) 年



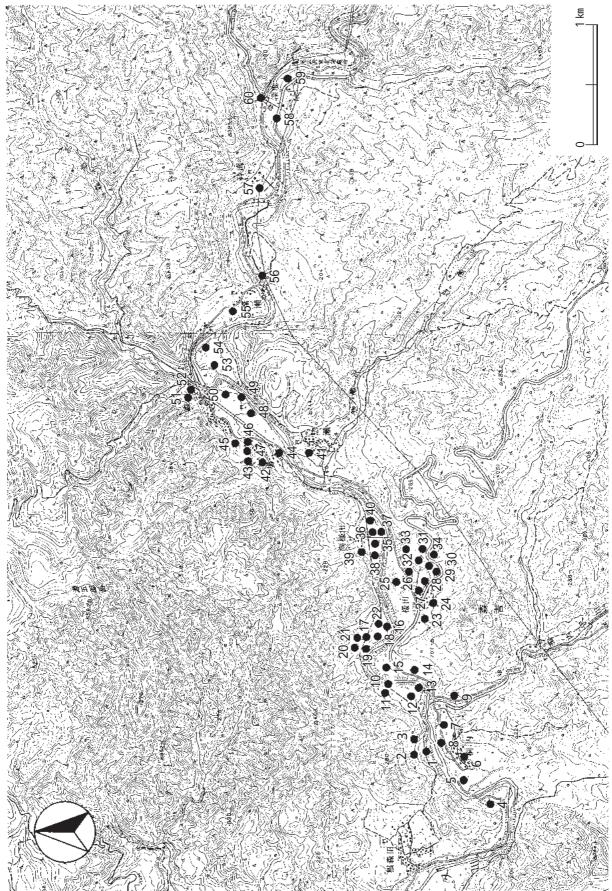
第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所 在 地	主な時代	遺 構・遺 物	備考
1	堀切石	鷹巣町大野尻字堀切石 6	縄文	縄文土器片 (中期・円筒上層a・b式)	
2	観音堂岱	鷹巣町坊沢字観音堂岱6-23	縄文	土器片、石器	
3	小ヶ田	鷹巣町脇神字小ヶ田伊勢堂岱4 - 1	縄文	縄文土器片 (後期)	
4	伊勢堂岱	鷹巣町脇神字伊勢堂岱5-1外	縄文・古代	環状列石、配石遺構、フラスコ状土坑、土器埋設遺構、土偶 三脚石器、竪穴住居跡、須恵器杯、土師器杯	H7・8年調査
5	からむし岱	鷹巣町脇神字からむし岱21	続縄文	縄文土器片	H12年調査
6	からむし岱	鷹巣町脇神字からむし岱93	続縄文	縄文土器片、壺形土器	
7	法泉坊沢	鷹巣町脇神字法泉坊沢49外	縄文・古代	縄文土器、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、磨製石器 土師器、須恵器、鉄製品、鍛冶炉	H 8 年調査
8	高森岱	鷹巣町脇神字高森岱16	縄文	縄文土器片 (前期・中期)	
9	藤株	鷹巣町脇神字藤株塚ノ岱43 - 4	縄文	縄文土器 (前期・後期・晩期)、竪穴住居跡、Tビット、 土製品、石器、石製品	S 55・H 1 ~ 3年調査
10	脇神館	鷹巣町脇神字タタラノ沢31外	旧石器・縄文・古代	旧石器、縄文土器、鉄滓、竪穴住居跡、土坑、鉄製品、石器、土肺器、須恵器	H 8 年調査
11	タモノ木	鷹巣町小森字タモノ木17	縄文	縄文土器片 (中期・大木9・10式)	
12	小森	鷹巣町小森字小森88 - 1	縄文	縄文土器片 (晩期・大洞BC式)	
13	根木屋敷岱	鷹巣町七日市字根木屋敷岱20	古代	土師器	
14	根木屋敷岱	鷹巣町七日市字根木屋敷岱61	縄文	縄文土器片 (後期・晩期)	
15	山の上	鷹巣町七日市字山の上57	縄文	縄文土器片 (中期・大木9・10式)	
16	石倉岱	鷹巣町七日市字石倉岱3 - 1	縄文	縄文土器片 (中期・円筒土層 b 式)	
17	伊勢堂岱	鷹巣町七日市字伊勢堂岱8-4	縄文	縄文土器片(前期・中期・後期)、石棒	
18	囲の内	鷹巣町七日市字囲の内80	縄文	縄文土器片(後期)	
19	野尻	鷹巣町七日市字野尻8-2	縄文	縄文土器片(後期)	
20	大沢岱A	森吉町米内沢字大沢岱148 - 8	縄文	縄文土器片 (後期)、石器	
21	大沢岱B	森吉町米内沢字大沢岱202 - 30	縄文	縄文土鉛力 (後期)、石鉛 縄文土器片 (後期)、石器	
22	金沢	合川町上杉字金沢226	縄文	縄又工器片 (後期)、口器 縄文土器片 (後期)、石鏃	
23	赤坂	合川町上杉字並次226 合川町上杉字赤坂217外	縄文	縄又工器力 (俊期)、石鏃 縄文土器 (前期)	
				` '	
24	赤坂	合川町上杉字赤坂206外	縄文	縄文土器 (前期・後期)	
25	林台	合川町八幡岱新田字林岱52	縄文	縄文土器 (後期)	
26	松石殿	合川町川井字松石殿7-2	縄文	打製石斧、石匙、石錐	
27	李岱	合川町李岱字上岱88	縄文	縄文土器片 (中期)、石器	
28	芹沢館	合川町三木田労切沢	中世	建文十段(施阳) 注口十段 悉仲联十段 十億 石錐	
29	摩当沢	合川町摩当沢字台田10 - 13	縄文	縄文土器 (晩期)、注口土器、香炉形土器、土偶、石鏃、 磨製石斧、石匙、石槍、異形石器	
30	伊勢の台	合川町三木田字伊勢の台26	縄文	縄文土器片、石器破片	
31	石渕	合川町三木田字石渕83	縄文	縄文土器片 (中期)	
32	石渕堂の前	合川町鎌沢字石渕堂の前26	縄文	縄文土器、石器小片	
33	林台	合川町鎌沢字林台62 - 63	縄文	縄文土器片 (前期・中期)、石皿	
34	上杉館	合川町塚ノ岱10 - 1	中世		
35	大野	合川町上道城字大野 1	縄文	縄文土器片 (中期)	
36	小堤岱	合川町道城字小堤岱51 - 2	縄文・古代	縄文土器片 (後期)、須恵器	
37	向本城	森吉町米内沢字本城向屋敷 3	縄文	縄文土器片、石匙	
38	桐木岱A	森吉町米内沢字桐木岱38	縄文	縄文土器片 (晩期)、石器	
39	桐木岱 B	森吉町米内沢字桐木岱20	縄文	縄文土器片、土偶	
40	長野岱	森吉町米内沢字長野岱149 - 2外	縄文・古代	縄文土器片 (前期・中期)、円形ピット、組石群、 弥生土器片、土師器、石器	H13年調査
41	長野岱	森吉町米内沢字長野岱346 - 1	縄文	縄文土器片 (中期)	
42	長野岱	森吉町米内沢字長野岱56 - 1	縄文・弥生・古代	縄文土器片、円形ピット、組石群、弥生土器、石器、土師器	S 41年調査
43	根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56 - 1	中世	空堀	
44	根小屋岱	森吉町米内沢字根小屋1-34	縄文・古代	縄文土器片 (前期、中期、後期)、土師器、石器	
45	阿仁城	森吉町本城字寺ノ沢201、館ノ下10	中世	空堀	
46	御獄	森吉町米内沢字御獄62 - 1	古代	土師器片	
47	御獄館	森吉町米内沢字高御獄 2	中世	空堀、土塁	
48	寺ノ上	森吉町米内沢字寺ノ上12 - 28	縄文	縄文土器片 (晩期)、石鏃、石匙	
49	寺ノ上	森吉町米内沢字寺ノ上27 - 1	古代	土師器片	
50	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99 - 5、寺ノ上77 - 1	中世	空堀、土塁、井戸跡	
51	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢ノ森52 - 57	古代		
52	諏訪岱	森吉町米内沢字諏訪岱 6 外	縄文・古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器	H 3 年調査
53	諏訪岱	森吉町米内沢字諏訪岱111外	縄文・古代	縄文土器片、竪穴住居跡、土坑、磨製石斧、土師器杯、陥し穴	H13年調査
54	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱77 - 1	縄文・古代	縄文土器(前期・中期・後期)、土師器、石器	H11年調査
55	狐岱	森吉町米内沢字狐岱88	縄文・古代	縄文土器片 (前期・中期・晩期)、竪穴住居跡 (縄文・平安)、	S 29年調査
56	山崎	森吉町米内沢字山崎57 - 1	縄文	土坑、配石墓、土師器、石器	2 = V T W9 EL
57	吉野	森吉町米内沢字吉野13 - 1	縄文・弥生	縄文土器力、工机、配石屋構 縄文土器片、弥生土器片、土坑	
58	吉野	森吉町米内沢字吉野5-1	超又・弥主 古代	縄又工命万、 切主工命万、 工功	
59	浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢50 - 1	縄文	縄文土器片、石器	
60	比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根92	縄文	縄文土器 (後期)、石器	C44ケ≒■本
61	塚の岱	森吉町浦田字塚の岱80	縄文	縄文土器 (晩期)、土偶、岩偶 縄文土器 (後期・晩期)、竪穴住居跡、土坑、配石遺構、 岩偶、石器、土製品	S44年調査
(-'')	白坂	森吉町浦田字白坂上岱19 - 22	縄文	岩偶、石器、土製品	H 4 年調査
62	亚ウ业	本十町洋田中延井沼 **	// III -	/m ->-	
62 63 64	愛宕堂 浦田館	森吉町浦田字稲荷沢40 森吉町浦田字愛宕堂下44	縄文 中世	縄文土器片 (中期)、石器破片 館跡	

遺跡の環境

地図番号	遺跡名	所 在 地	主な時代	遺構・遺物	備考
65	石倉坂	森吉町浦田字石倉坂 3	縄文	縄文土器片 (前期・中期)、石器	
66	若木岱	鷹巣町七日市字若木岱9-2	縄文	縄文土器片、石器	
67	長下A	森吉町米内沢字長下2-7	縄文	縄文土器片 (後期)	
68	長下B	森吉町米内沢字長下148	縄文	縄文土器片 (後期)	
69	焼山	森吉町阿仁前田字道行沢136 - 1	縄文	縄文土器片	
70	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片	
71	高館	森吉町阿仁前田字道行沢118	中世	空堀	
72	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片、石器	
73	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	館跡	
74	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片 (前期・中期)、石器	
75	陣場岱	森吉町阿仁前田字陣場岱140 - 1	縄文	縄文土器片 (前期・中期)、石器	
76	陣場岱	森吉町阿仁前田字陣場岱15、字菅ノ沢7	縄文	縄文土器片	
77	冷水沢A	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片 (後期)、石器	
78	冷水沢B	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片 (後期)、石器	
79	五味堀	森吉町五味堀字五味堀 1	縄文	縄文土器片、石器	
80	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前45 - 46	縄文	縄文土器片 (晩期・大洞B・BC式)	
81	五味堀高屋布	森吉町五味堀字下夕大久保岱174	縄文	縄文土器片	
82	五味堀大保苔	森吉町五味堀字大久保岱20	縄文	縄文土器片 (後期)、独銛石	
83	小又小平里A	森吉町小又字涌坪74	縄文	縄文土器片(後期)、石器	
84	小又小平里B	森吉町小又字上岱 9	縄文	縄文土器片(後期)、石器	
85	片平館	森吉町根森田字片平館3	縄文	縄文土器片(後期)、石器	
86	花館	森吉町五味堀字野崎1-82	中世	空堀	
87	天館	森吉町五味堀字天館101	中世	館跡	
88	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢13、字田ノ沢51 - 1	縄文	土坑、縄文土器(早期~晚期)、石器、土器埋設遺構、 配石遺構、竪穴住居跡	H 4 年調査
89	仲ノ又館	森吉町根森田字外ノ又75	中世	空堀	. , , , , , , ,
90	上悪戸D	森吉町根森田字上悪戸7外	 縄文		H 8 年調査
91	桐内A	森吉町森吉字桐内前田5-1、6-1、3外	縄文	郷文土器 (前期・中期・後期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、弥生土器、石器	H11・12年調査
92	桐内B	森吉町森吉字桐内家ノ下16、字桐内33 - 1、34~37外	縄文	縄文土器片、土器埋設遺構、石器	H11年調査
93	桐内C	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文	縄文土器 (前期・中期・後期・晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器、 土製品、石製品、石囲炉、トランシェ様石器、土器埋設遺構	H10年調査
94	桐内D	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文	縄文土器片、石器、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、複式炉	H11年調査
95	上悪戸A	森吉町根森田字上悪戸4 - 1外	縄文		H9年調査
95	上悪戸B	森吉町根森田字上悪戸8 - 12	縄文		H10年調査
95	上悪戸C	森吉町根森田字上悪戸7外	縄文		H10年調査
96	桐内沢	森吉町森吉字桐内沢関下夕103	縄文	縄文土器 (前期・中期・後期)、石器、捨て場、竪穴住居跡、	H12年調査
97	日廻岱A	森吉町森吉字日廻岱65、63 - 1 外	縄文・近世	フラスコ状土坑 縄文土器 (前期・中期・後期・晩期)、石器、土坑、掘立柱建物跡	H12年調査
98	近ヶ岱 A	森吉町根森田字姫ヶ岱8外	縄文	元文工品 (別州 下州 区州 列州)、口品、工机、10011E刊则	H10年調査
98	姫ヶ岱B	森吉町根森田字姫ヶ岱14 - 10~12	縄文		H10年調査
99	姫ヶ岱C	森吉町根森田字姫ヶ岱12 - 2 ~ 11、15外	縄文	縄文土器片、石器、土坑、配石遺構、切断土器	H 9・10年調査
99	姫ヶ岱D	森吉町根森田字姫ヶ岱12 - 31外	縄文	編文土器片、石器、竪穴住居跡、土坑、配石遺構、土器埋設遺構、尖底土器	H9年調査
100	漆下	森吉町森吉字漆下2 - 1、4~8、14 - 2、37外	縄文	縄文土器(前期・中期・後期)、捨て場、フラスコ状土坑石器、	H13・14年調査
101	向様田A	森吉町森吉字向様田家ノ下モ8外	縄文	石製品、土製品 環状配石、縄文土器(晩期)、捨て場、石器、石製品、土製品、墓域	H12・13年調査
101	向様田B	森吉町森吉字向様田67-1外	縄文	網文土器 (後期·晚期)、石器、土坑、配石遺構	H13年調査
101	向様田C	森吉町森吉字向様田76外	縄文	網文土器 (後期・晩期)、石器、土坑、配石遺構	H13年調査
101	向様田D	森吉町森吉字向様田家ノ下モ14 - 1 外	縄文 縄文	縄文土器(複数・成数)、口語、工机、配口虚構	H13年調査
101	向様田 E	森吉町森吉字向様田家ノトモ14・19年	縄又 縄文・古代	總文工器(削捌・甲捌・咣捌)、笠八住店砌、工坑、盆工還傳 縄文土器、竪穴住居跡、土坑、石器、掘立柱建物跡、土師器、須恵器	日13年調直 日13年調査
101	向様田 F	森吉町森吉字向様田307 下で309 森吉町森吉字向様田58、59外	縄文・白八	縄文土器(前期・中期・後期・晩期)、竪穴住居跡、土坑	H13年調査
101	上八岱 A	森吉町森吉字上八岱102外	縄文		H10・11年調査
102	上八岱A	森吉町森吉字上八峃102年	網文 縄文		H11年調査
102	二重鳥C	森吉町森吉子工八品/0~/2	縄文 縄文		H11年調査 H13年調査
103 103	二重鳥 D 二重鳥 E	森吉町森吉字二重鳥39	縄文 縄文		H12年調査 H12年調査
103	二里馬 F	森吉町森吉字二重鳥65外 森吉町森吉字二重鳥124 - 1	縄文		日12年調直 日12年調査
		森吉町森吉字二重鳥124 - 1			
103	二重鳥G	森吉町森吉字二重鳥80外	縄文		H13年調査
104	水上	森吉町森吉字水上42	縄文	 舞女十哭比 左哭	H11年調査
105	様田 工油性 C	森吉町森吉字様田二重鳥131	縄文	縄文土器片、石器 埋文土器片、石器 ・土物	山の年調木
106	天津場 C	森吉町森吉字天津場87 - 1、87 - 3、88 - 2	縄文・中世	縄文土器片、石器、土坑 縄文土器片、石匙、石錘、打製石斧、磨製石斧、配石遺構、	H 8 年調査
107	森吉家ノ前B	森吉町森吉字家ノ前138外	縄文・中世	縄文土器片、石匙、石錘、打製石斧、磨製石斧、配石遺構、 土坑、焼土遺構、中世陶器、鉄器 縄文土器片、石匙、石錘、石錐、打製石斧、磨製石斧、	H 8 年調査
108	地蔵岱	森吉町森吉字地蔵岱74外	縄文	縄文土器片、石匙、石錘、石錐、打製石斧、磨製石斧、 捨て場、配石遺構、焼土遺構、土坑	H 8 年調査
109	桐内沢清兵衛岱	森吉町森吉字清兵衛岱46	縄文	縄文土器片 (後期・晩期)	
110	風張城	阿仁町吉田字寺屋布1-7	中世	空堀、井戸跡	
111	家の上	阿仁町吉田字家ノ上	縄文	縄文土器片、石鏃	
112	高田城	阿仁町小淵字山ノ内65 - 32	中世	空堀	
113	熊堂	阿仁町水無字湯口内451 - 1	縄文	縄文土器片 (中期)、石鏃	
	上岱	阿仁町水無字上岱104 - 2	縄文	縄文土器 (中期・後期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑	S 63年調査
114 115	上岱	阿仁町水無字上岱135 - 2	縄文	縄文土器片 (中期)	



第3図 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

遺跡の環境

第2表 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

W.D.	\# D+ 47	NEW Production and Italia	n+ +n	如本ケウ
番号	遺跡名	遺跡所在地	時期	調査年度
1	上悪戸A	森吉町根森田字上悪戸4 - 1、9、10 - 1、11 - 1・2、12 - 1 ~ 4、13、14 - 1、16 - 1・2外	縄文後期	町H9年
2	上悪戸B	森吉町根森田字上悪戸8-12	弥生後期	町H10年
3	上悪戸C	森吉町根森田字上悪戸7、8-9	縄文後期	町H10年
4	上悪戸D	森吉町根森田字上悪戸34 - 7、34 - 29~41、34 - 60・61・67、54外	縄文後・晩期	
5	桐内A	森吉町森吉字桐内前田5-1、6-1・3外	縄文後期	県H11・12年
6	桐内B	森吉町森吉字家ノ下16、字桐内33 - 1、34~37外	縄文晩期	県H11年
7	桐内C	森吉町森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文前~後期	県H10年
8	桐内D	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文後期	県H11年
9	桐内沢	森吉町森吉字桐内沢関下夕103	縄文前~後期	県H12年
10	姫ヶ岱A	森吉町根森田字姫ヶ岱8、9-1、10-1	縄文前~晩期	県H10年
11	姫ヶ岱B	森吉町根森田字姫ヶ岱14 - 10~12	縄文中~後期	県H10年
12	姫ヶ岱C	森吉町根森田字姫ヶ岱12 - 2 ~ 11、15外	縄文早~晩期	町H9・10年
13	姫ヶ岱D	森吉町根森田字姫ヶ岱12 - 31外	縄文早・中・晩期	町H9年
14	日廻岱A	森吉町森吉字日廻岱65、63 - 1外	縄文前~晩期	県H12年、町H7年
15	日廻岱B	森吉町森吉字日廻岱86、88、89、90、91	縄文前・後期	県H14年
16	橋場岱A	森吉町森吉字橋場岱48、49、50 - 1 外	縄文中期 	
17	橋場岱 B	森吉町森吉字橋場岱69、78外	縄文後・晩期	
18	橋場岱C	森吉町森吉字橋場岱42、62外	縄文後・晩期	
19	橋場岱 D	森吉町森吉字橋場岱110 - 1	縄文時代	
20	橋場岱 E	森吉町森吉字橋場岱109	縄文時代	
21	橋場岱 F	森吉町森吉字橋場岱101、103、104	縄文晩期	
22	橋場岱G	森吉町森吉字橋場岱6-1、39、40、46	縄文後期	
23	上八岱A	森吉町森吉字上八岱102、104、105、106外	縄文中~晩期・弥生	町H10・11年
24	上八岱 B	森吉町森吉字上八岱70、71、72	縄文前~晩期	町H11年
25	漆下	森吉町森吉字漆下2-1、4、5、6、7、8、14-2、37外	縄文前~後期	県H13年・14年
26	二重鳥A	森吉町森吉字二重鳥31 - 1、32 - 2、47 - 1、106 - 1、134、135	縄文晩期	
27	二重鳥 B	森吉町森吉字二重鳥11、99、100外	縄文中~後期	町H14年
28	二重鳥C	森吉町森吉字二重鳥93、94、95、96、97、110	縄文前~晩期	町H13年・14年
29	二重鳥 D	森吉町森吉字二重鳥39	縄文中~晩期	町H12年
30	二重鳥 E	森吉町森吉字二重鳥65、66 - 1、69、70 - 2、70 - 3	縄文前・晩期・弥生	町H12年
31	二重鳥F	森吉町森吉字二重鳥124 - 1	縄文中~後期・弥生	町H12年
32	二重鳥G	森吉町森吉字二重鳥80、81 - 1、84 - 1	縄文早・中~晩期・弥生・近世	町H13年
33	二重鳥H	森吉町森吉字二重鳥 6、14、15	縄文後期	町H14年
34	水上	森吉町森吉字水上42 - 1、43 - 1、44、113 - 6外	縄文中・晩期・弥生	町H11年
35	向様田A	森吉町森吉字向様田家ノ下モ8、9-1・2、11、16、81-1、82、83、84	縄文晩期	県H12・13年
36	向様田 B	森吉町森吉字向様田67 - 1 ・ 2 、70、71 - 1 、72、74、75外	縄文後・晩期	県H13年
37	向様田C	森吉町森吉字向様田76、77、78、79	縄文後・晩期	県H13年
38	向様田 D	森吉町森吉字向様田家ノ下モ14 - 1、17、18、19 - 1、20	縄文晩期	県H13年
39	向様田 E	森吉町森吉字向様田家ノ下モ36、37、39、63、64	縄文晩期・古代	県H13年
40	向様田F	森吉町森吉字向様田58、59外	縄文後・晩期	県H13年
41	惣瀬	森吉町森吉字惣瀬86外	縄文後期・古代	
42	天津場A	森吉町森吉字天津場15 - 3	縄文後期・古代	
43	天津場 B	森吉町森吉字天津場16 - 1	縄文後期	
44	天津場C	森吉町森吉字天津場87 - 1、87 - 3、88 - 2	縄文中・後期	町H8年
				-50
45	ネネム沢A	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35	旧石器·縄文後期·古代	7.1.0
46	ネネム沢 A ネネム沢 B	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期	
46 47	ネネム沢 A ネネム沢 B ネネム沢 C	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期	
46	ネネム沢 A ネネム沢 B ネネム沢 C 森吉家 J 前 A	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178	旧石器・縄文後期・古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期・古代・中世	県Н14年
46 47 48 49	ネネム沢 A ネネム沢 B ネネム沢 C 森吉家 J 前 A 森吉家 J 前 B	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142	旧石器・縄文後期・古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期・古代・中世 縄文中~晩期・室町時代	
46 47 48 49 50	ネネム沢 A ネネム沢 B ネネム沢 C 森吉家 J 前 A 森吉家 J 前 B 森吉家 J 前 C	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世	県Н14年
46 47 48 49 50 51	ネネム沢A ネネム沢B ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前B 森吉家ノ前C 森吉A	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142	旧石器・縄文後期・古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期・古代・中世 縄文中~晩期・室町時代 中世 縄文後期・古代	県Н14年
46 47 48 49 50 51 52	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前B 森吉家ノ前C 森吉B	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家ノ前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期·古代	県H14年 町H8年
46 47 48 49 50 51 52 53	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前B 森吉家ノ前C 森吉B 地蔵岱	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家ノ前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵位74外	旧石器・縄文後期・古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期・古代・中世 縄文中~晩期・室町時代 中世 縄文後期・古代 縄文後期・古代 縄文後期 縄文前~後期・古代	県Н14年
46 47 48 49 50 51 52 53 54	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前B 森吉家ノ前C 森吉B 地蔵岱 地蔵岱A	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家ノ前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵岱74外 森吉町森吉字地蔵岱124外	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期 縄文前~後期·古代 縄文後期	県H14年 町H8年
46 47 48 49 50 51 52 53	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前B 森吉家ノ前C 森吉B 地蔵岱 地蔵岱A 驚ノ瀬	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家ノ前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵岱74外 森吉町森吉字学地蔵岱124外 森吉町森吉字警ノ瀬80外	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期 縄文前~後期·古代 縄文・後期	県H14年 町H8年
46 47 48 49 50 51 52 53 54	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前B 森吉家ノ前C 森吉B 地蔵岱 地蔵岱A	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家ノ前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵岱74外 森吉町森吉字地蔵岱124外	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期 縄文前~後期·古代 縄文後期	県H14年 町H8年
46 47 48 49 50 51 52 53 54 55	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前C 森吉家ノ前C 森吉B 地蔵岱 地蔵岱A 鷲ノ瀬 栩岱 砕渕	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家ノ前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家ノ前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家ノ前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵岱74外 森吉町森吉字学地蔵岱124外 森吉町森吉字警ノ瀬80外	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文晩期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期 縄文前~後期·古代 縄文・後期	県H14年 町H8年 町H8年
46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前C 森吉家 J 前 C 森吉B 地蔵岱A 鷲ノ瀬 栩岱 砕渕 深渡	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家 / 前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家 / 前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵岱74外 森吉町森吉字湖岱74外 森吉町森吉字湖岱74外 森吉町森吉字神渕124外 森吉町森吉字中渕124外 森吉町森吉字中渕124外 森吉町森吉字字沙渕124外	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文師別 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期 縄文前~後期·古代 縄文中・後期 縄文後・晩期 縄文・晩期 縄文・晩期	県H14年 町H8年 町H8年
46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56	ネネム沢A ネネム沢C 森吉家ノ前A 森吉家ノ前C 森吉家ノ前C 森吉B 地蔵岱 地蔵岱A 鷲ノ瀬 栩岱 砕渕	森吉町森吉字ネネム沢26、27、28、29、30、31、32、33、34、35 森吉町森吉字ネネム沢17、19、22 森吉町森吉字ネネム沢6 - 1 森吉町森吉字森吉家 J 前50、145、174、175、176、177、178 森吉町森吉字森吉家 J 前138、139、140、141、142 森吉町森吉字森吉家 J 前101 - 1、103、114、115、116 森吉町森吉字森吉95 森吉町森吉字森吉69 森吉町森吉字地蔵岱74外 森吉町森吉字閣岱74外 森吉町森吉字栩岱74外 森吉町森吉字砕渕124外	旧石器·縄文後期·古代 縄文後期 縄文師期 縄文前~後期·古代·中世 縄文中~晩期·室町時代 中世 縄文後期·古代 縄文後期 縄文前~後期·古代 縄文中・後期 縄文使期 縄文中・後期	県H14年 町H8年 町H8年

- 森吉町教育委員会 『諏訪岱遺跡~堤沢川流路溝工事に係る発掘調査報告~』 1992 (平成4) 年
- 森吉町教育委員会 『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~』 1996 (平成8) 年
- 森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~』 1997 (平成9) 年
- 森吉町教育委員会 『上悪戸 D遺跡発掘調査報告書~比内・森吉線地方道改良工事に係る発掘調査~』 1997 (平成9) 年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981 (昭和56) 年
- 秋田県教育委員会 『白坂遺跡発掘調査報告書 県営圃場整備に係る埋蔵文化財発掘調査 』 秋田県文化財調査報告書 第244集 1994 (平成6)年
- 秋田県教育委員会 『桂の沢遺跡発掘調査報告書 小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査 』 秋田県文化財調査報告書第247集 1994 (平成6) 年
- 秋田県教育委員会 『深渡遺跡 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 』 秋田県文化財調査報告書 第286集 1999 (平成11) 年
- 秋田県教育委員会 『桐内 C 遺跡 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 』 秋田県文化財調査報告書 第299集 2000 (平成12) 年
- 秋田県教育委員会 『桐内 B 遺跡・桐内 D 遺跡 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 』 秋田県文化 財調査報告書第318集 2001 (平成13) 年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997 (平成9) 年工業技術院地質調査所 図幅青森第53号 米内沢 1973 (昭和48) 年



第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

向様田 B 遺跡は、小又川右岸の段丘上に立地し標高は約136mである。遺跡南側は斜面になっており、標高約132mの低位段丘上に立地する向様田 C 遺跡と接する。遺跡西側には、町道で区画された向様田 A 遺跡が同一段丘上に立地する。また、遺跡東側には、標高約138mの高位段丘上に向様田 F 遺跡が立地する。向様田 A 遺跡の西側には標高約134mの段丘上に向様田 D 遺跡が隣接し、北側の標高約145~159mの丘陵地に向様田 E 遺跡がある。かつて、向様田 A ~ D・F 遺跡は水田として、向様田 E 遺跡は畑として利用されていた。

第2節 調査の方法

1 野外調査

調査はグリッド法で行った(第4図)。調査対象全域にグリッド杭を打設するため、建設省が打設した4級基準点DT1とDT2より設定した基準杭、昨年度向様田A遺跡で原点としたMA50(X4316.000, Y-30145.000)を基準杭とした。この基準杭を原点として、原点を通る国家座標第 系の南北方向に南北基準線X軸を設定した。これに直交して、原点を通る線を東西基準線Y軸とし、両基準線を延長して当該区内に4×4m方眼グリッドを組んだ。基準杭をMA50として、南から北へ4mごとに、・・・、47、48、49、50、51、・・・、と南北方向を示す数字と、東から西に、・・・、MM、MN、MO、・・・、と東西方向を示すアルファベットの2文字を付した。各グリッドの呼称は、南北方向の杭を通るX軸と東西方向の杭を通るY軸の組み合わせで、MA50、MB51、MC52、・・・、のように東南隅の杭によって呼ぶこととした。

遺構は検出順に連番で遺構番号を付けた。調査は、原則として半截または十字に土層断面用のベルトを残して、2分割法または4分割法による精査を行った。

遺物は、グリッド単位に取り上げ、出土した層位、グリッド名または遺構名、年月日を記入した耐久性荷札を添付した。

平面図及び断面図は、原則として 1 / 20の縮尺で作成し、細部状況を表すために適宜 1 / 10の拡大図も作成した。発掘調査における写真撮影は、遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、調査区東側と西側の礫出土状況の図面作成のためにラジコンへりによる空中撮影を行った。また、10月には、セスナ機による向様田 A ~ E 遺跡の全景写真撮影を行った。

写真は、35mmカメラを使用し、フィルムはモノクロ、カラーリバーサル (スライド用)、ネガカラーを使用した。

2 室内整理

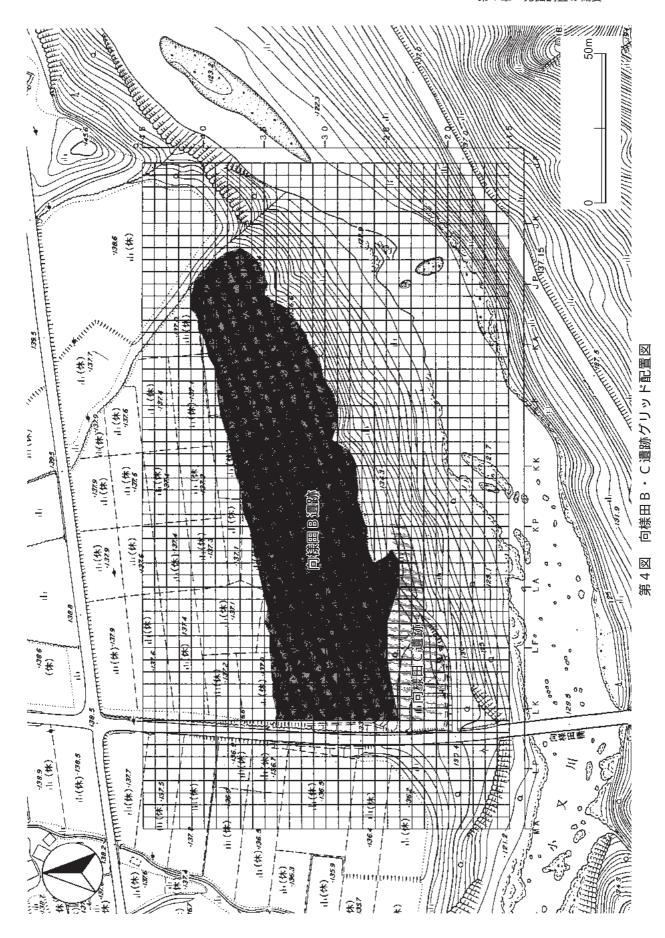
各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第2原図とした。第2原図をスキャナーで取り込み、すべてプロッタでトレースした。

遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作

成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示して ある。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

- 5月17日 向様田B・C遺跡の発掘調査を開始した。調査区東側より粗掘りを開始した。
- 5月21日 調査区東側で礫群を検出した。段丘礫かどうか見極めが難しい。芳賀秋田県埋蔵文化財センター所長が来跡した。
- 5月29日 調査区東側の礫群では、段丘礫の中に配石遺構を検出した。調査区西側は、砂礫層のため 遺構のプランがはっきりせず、サブトレンチを入れて確認中である。八戸市縄文学習館一行 が研修のため来跡した。
- 5月31日 鷹巣阿仁部生涯学習奨励協議会より80名が来跡し、杉渕北調査課長が対応した。
- 6月7日 遺構西側の土坑は、中に礫が入れられているのが多い。図面作成に時間がかかる。鈴木文 化財保護室長・大野副主幹が来跡した。
- 6月8日 合川町消費者の会一行が来跡した。
- 6月21日 前田基幹集落センターで作業員の健康診断を行った。
- 6月25日 調査区西側で約40基の土坑を検出した。10基ほど精査終了した。奥山・佐藤両非常勤職員が実測応援のため発掘調査に参加した。
- 6月26日 櫻田南調査課長・佐々木管理指導員が来跡した。
- 6月28日 調査区東側・西側礫群の図面作成のため空中写真撮影を行った。
- 7月2日 藤原・横山両非常勤職員が実測応援のため発掘調査に参加した。調査区東側礫群のエレベーション図作成を開始した。
- 7月3日 土坑の検出と精査を続ける。土坑内には礫が多く入れられているが、遺物はほとんど出土しない。文化財保護室谷地学芸主事が来跡した。
- 7月17日 調査区南側の斜面から、縄文時代後期中葉の土器がまとまって出土した。芳賀所長・杉渕 北調査課長が来跡した。
- 8月3日 小林達雄國學院大学教授、冨樫泰時秋田県立博物館長、大野副主幹が来跡し、調査区東側 の礫群と配石遺構についてご教授いただいた。
- 8月10日 埋蔵文化財センターの安全衛生管理について職員研修会を行った。
- 8月25日 田中非常勤職員が退職した。
- 9月3日 木村非常勤職員が採用され発掘調査に参加した。
- 9月7日 向様田 B 遺跡の発掘調査を終了した。検出した遺構は、土坑56基、配石遺構19基、性格不 明遺構1基である。
- 9月26日 向様田A・B・C遺跡の記者発表を行った。
- 9月29日 向様田A・B・C・D遺跡の見学会を行った。約400名の来跡があり成功裏に終了した。



第2章 調査の記録

第1節 基本層位

本遺跡はかつて水田として利用されており、昭和40年代のほ場整備の際に削平されている。

調査区西側の基本層位は以下の通りである。 層は耕作土であり層厚は10~40cmである。 ~ 層は旧水田の耕作土であり、層厚は、 層が5~25cm、 層が約15cm、 層が10~30cmである。 層は遺物包含層で 層が漸移層である。層厚は 層が10~30cm、 層は約20cmである。 層の遺物包含層と 層の漸移層は、遺跡南側の一部に残存するのみでほとんど削平されている。

調査区東側には礫群が広がっている。礫群にかかる基本層位は、 層のみで遺物包含層である。層厚は0~30cmである。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 検出遺構の概要

遺構確認面はほとんどが地山であったが、東側の配石遺構は 層の黒色土である。検出遺構は全て 縄文時代の遺構であり、土坑56基、配石遺構19基、性格不明遺構1基である。

- 2 検出遺構と出土遺物
- (1) 土坑
- SK40土坑 (第8図、図版3・11・15)
- 《位 置》 LJ32グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に礫の集まりを検出し配石遺構とした。その後下部に掘り込みを確認し土坑と判断した。
- 《重複》なし。
- 《規模と平面形》 平面形は、長軸1.22m、短軸0.78mの楕円形を呈し、深さは地山面より40cmである。主軸方向はN 12° Eを示す。
- 《埋土》2層に分かれた。
- 《 壁 》 東側はほぼ垂直に立ち上がっており、西側には段丘礫が露出している。
- 《底 面》 東側に傾斜している。
- 《出 土 遺 物》 埋土より壺形土器肩部破片 (1) と深鉢形土器胴部破片 (2)・注口土器肩部から胴部にかけての破片 (3)、調整痕のある剥片石器 (4) が出土した。1は沈線で区画し磨消を施している。地文はLR縄文である。この土器は後期中葉の十腰内2式土器に比定される。2は撚糸文を施文しており、外面には煤状炭化物が付着する。3は肩部下端に1条の沈線を配し弧線により文様帯を表出している。胴部は無文であるがていねいにみがかれている。この土器は晩期の大洞C₁式土器であろう。

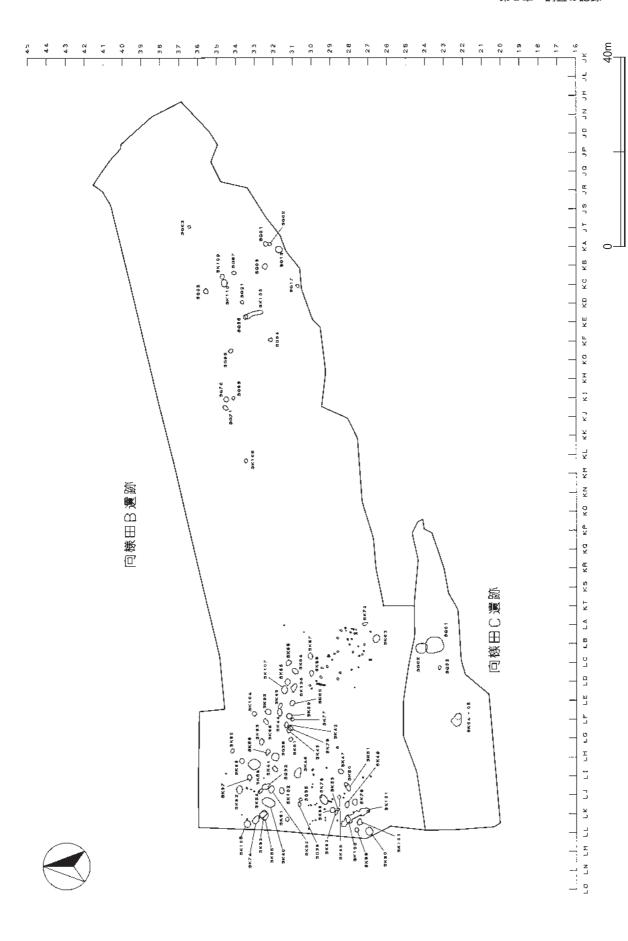
S K 41土坑 (第8 図、図版3)

《位 置》 L H31・32グリッドに位置する。

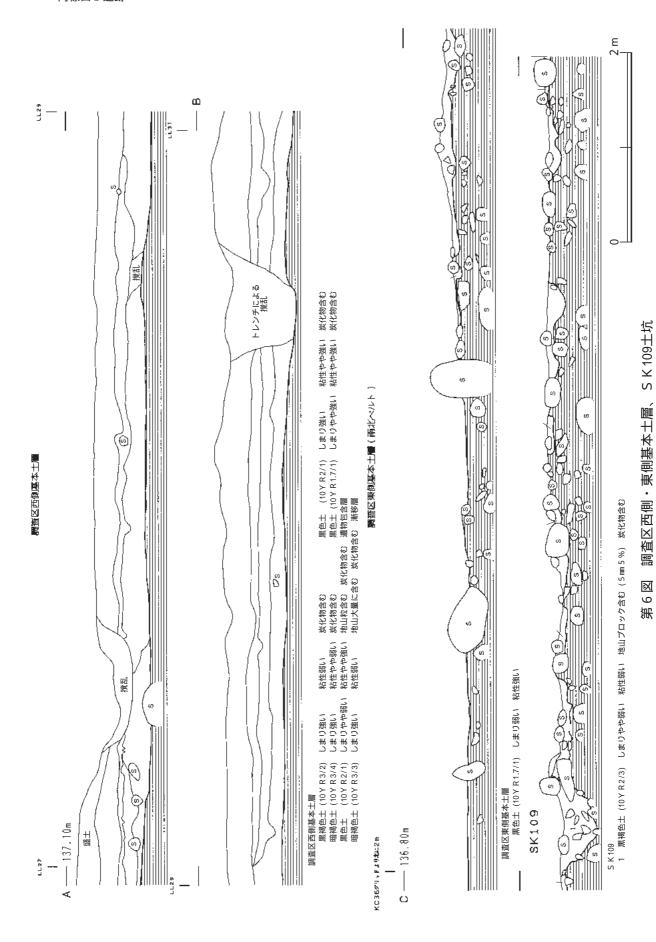
向様田B·C遺跡遺構配置図

5 <u>|</u>

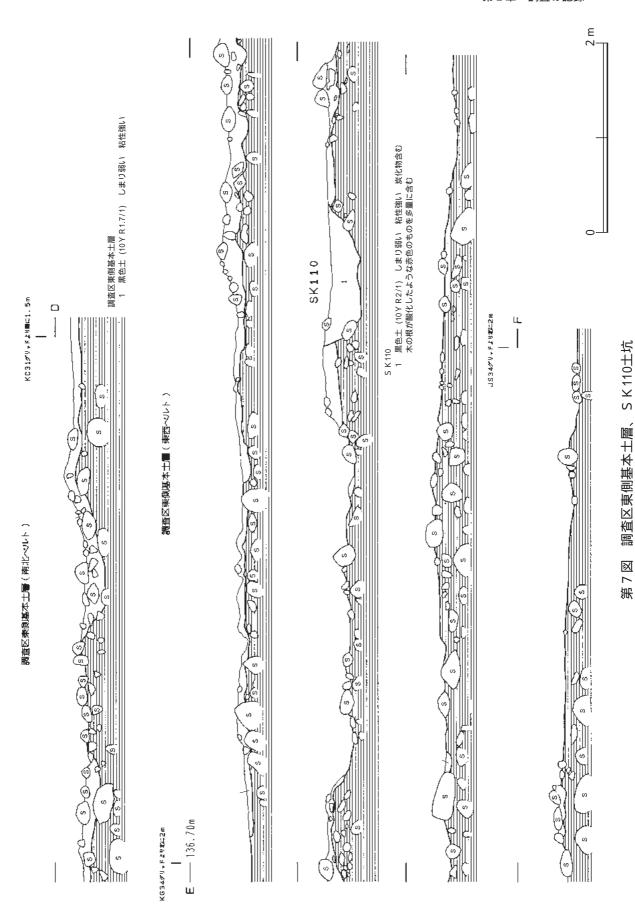
無



21

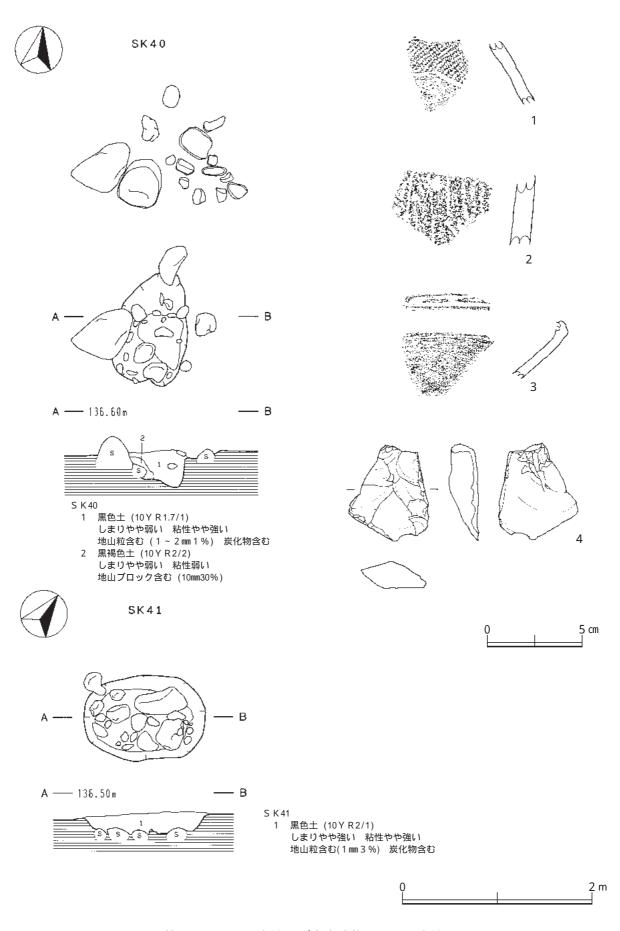


22



23

向様田B遺跡



第8図 SK40土坑及び出土遺物、SK41土坑

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.28m、短軸0.92mの楕円形を呈し、深さは地山面より24cmである。主軸方向はN - 53° - Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》なし。

S К 42土坑 (第9図、図版3・11・15)

《位 置》 LF31グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.20m、短軸0.68mの楕円形を呈し、深さは地山面より18cmである。主軸方向はN - 66° - Wを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 東側は緩やかに立ち上がっており、西側には段丘礫が露出している。

《底 面》 緩やかに西側に傾斜している。

《出 土 遺 物》 埋土より壺形土器胴部破片 (1) と石核 (2) を出土した。1は、沈線で四角く 区画し、区画内に磨消を施している。地文はLR縄文である。この土器は後期中葉 の土器で十腰内2式土器に比定される。

S K 43土坑 (第9図、図版3)

《位 置》 LF31グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 S K 78土坑の東側を掘り込んでいる。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.6m (推定)、短軸0.92mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より18cmである。主軸方向はN - 66° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でやや軟弱である。西側には段丘礫が露出している。

《出土遺物》なし。

S K 44土坑 (第 9 図、図版 3)

《位 置》 LE31グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》 S K 45土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.7m (推定)、短軸0.76mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より20cmである。主軸方向はN - 83° - Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

向様田B遺跡

《 壁 》 西側はやや急に立ち上がっており、東側には段丘礫が露出している。

《底 面》 平坦でしまっている。

《出土遺物》 なし。

S K 45土坑 (第9図、図版3)

《位 置》 LE31グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》 S K 44土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.20m、短軸0.70mの楕円形を呈し、深さは地山面より14cmである。主軸方向はN - 55° - Wを示す。

《埋 土》 第2~6層の5層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》なし。

S K 46土坑 (第10図、図版3)

《位 置》 LH30グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 南側をピットに掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.44m、短軸0.80mの楕円形を呈し、深さは地山面より40cmである。主軸方向はN - 64° - Wを示す。

《埋土 土》 3層に分かれたが、本土坑に伴う層は第1・2層である。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 南側に傾斜している。

《出土遺物》なし。

S K 47土坑 (第10図、図版3)

《位 置》 LH28グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.16m、短軸0.70mの楕円形を呈し、深さは地山面より14cmである。主軸方向はN - 32° - Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 西側はやや緩やかに、その他は急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でやや軟弱である。

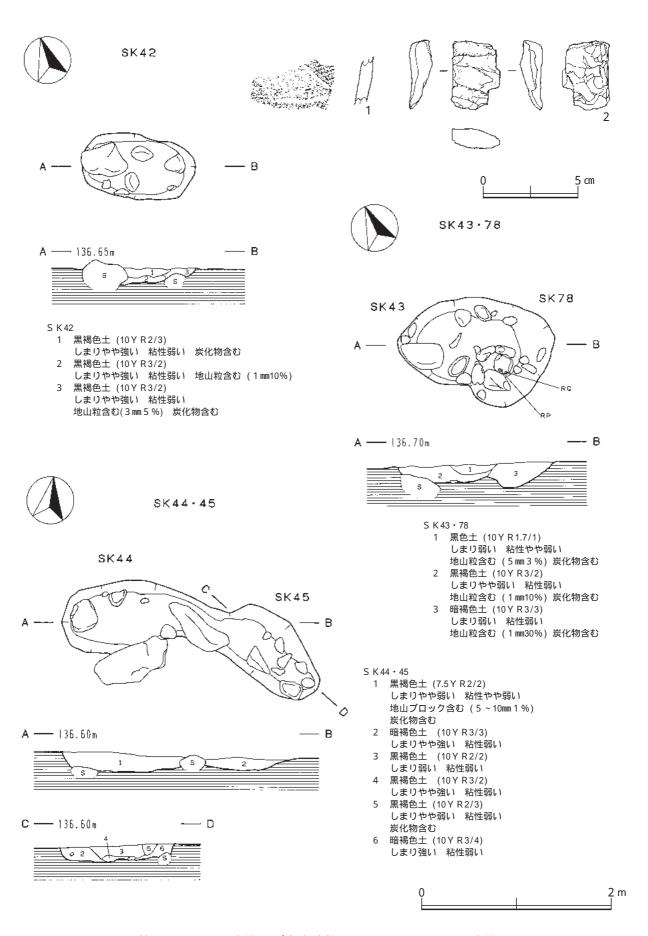
《出土遺物》なし。

S K 48土坑 (第10図、図版 4・11)

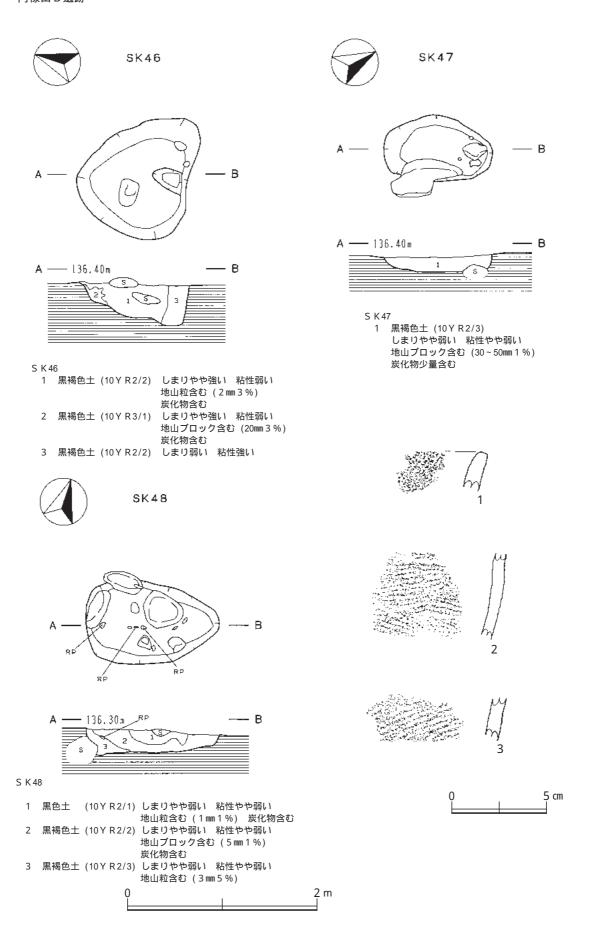
《位 置》 LJ28グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。



第9図 SK42土坑及び出土遺物、SK43・44・45・78土坑



第10図 SK46・47土坑、SK48土坑及び出土遺物

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.42m、短軸0.90mの楕円形を呈し、深さは地山面より26cmである。主軸方向はN - 70° - Eを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で若干西側に傾斜している。

《出 土 遺 物》 埋土よりやや外反する深鉢形土器口縁部小破片 (1) と深鉢形土器胴部破片 (2・3) が出土した。2と3にはLR縄文を施文しており、2の外面には煤状炭化物が付着している。

S K 49土坑 (第11図、図版 4・11)

《位 置》 LJ28グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.44m、短軸0.88mの楕円形を呈し、深さは地山面より44cmである。主軸方向はN - 83°-Wを示す。

《埋土 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でやや軟弱である。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器口縁部破片 (1・2) が出土した。1は口唇部及び胴部にL R縄文を施文している。2はLR縄文を施文しており、口縁部は磨消により無文である。外面に厚く煤状炭化物が付着している。

S K 50土坑 (第11図、図版 4・11)

《位 置》 LI28グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面でSK51土坑と重複して確認した。

《重 複》 西側をSK51土坑に、東側はピットに掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.3m (推定)、短軸0.64mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より36cmである。主軸方向はN - 58° - Eを示す。

《埋 土》 第6~8層の3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 鍋底状を呈し、しまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より無文の小形鉢形土器口縁部小破片 (3) が出土した。口唇部は面取りされている。

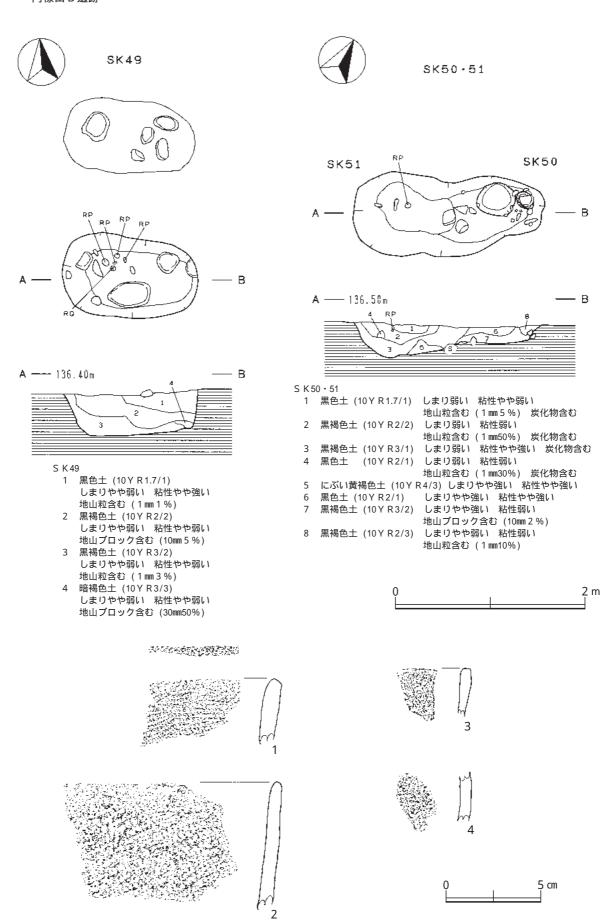
S K 51土坑 (第11図、図版4・11)

《位 置》 L I 27・28グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面でSK50土坑と重複して確認した。

《重複》 S K 50土坑の東側を掘り込んでいる。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.4m、短軸0.90mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山 面より36cmである。主軸方向はN - 56° - Eを示す。



第11図 S K 49・50・51土坑及び出土遺物

《埋 土》 第1~5層の5層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部小破片 (4) が出土した。RL縄文を施文している。

S K 52土坑 (第12図、図版 4)

《位 置》 L I 31・32グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸2.72m、短軸1.90mの楕円形を呈し、深さは地山面より24cmである。主軸方向はN - 37° - Wを示す。

 《埋
 土》 7層に分かれた。

《 壁 》 東側は急に、西側はやや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 平坦でやや軟弱である。

《出土遺物》なし。

S K 54土坑 (第12図、図版 4)

《位置》 LI32グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複数 複数 本土坑の東側にSQ32配石遺構を構築しているが、重複関係はない。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.60m、短軸0.88mの楕円形を呈し、深さは地山面より28cmである。主軸方向はN - 39° -Wを示す。

《埋 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 東側はやや急に、西側は緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 鍋底状になっている。

《出土遺物》なし。

S K 55土坑 (第13図、図版 4・11)

《位 置》 L J 32、L K 32 グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 S K 92土坑を掘り込んでいる。

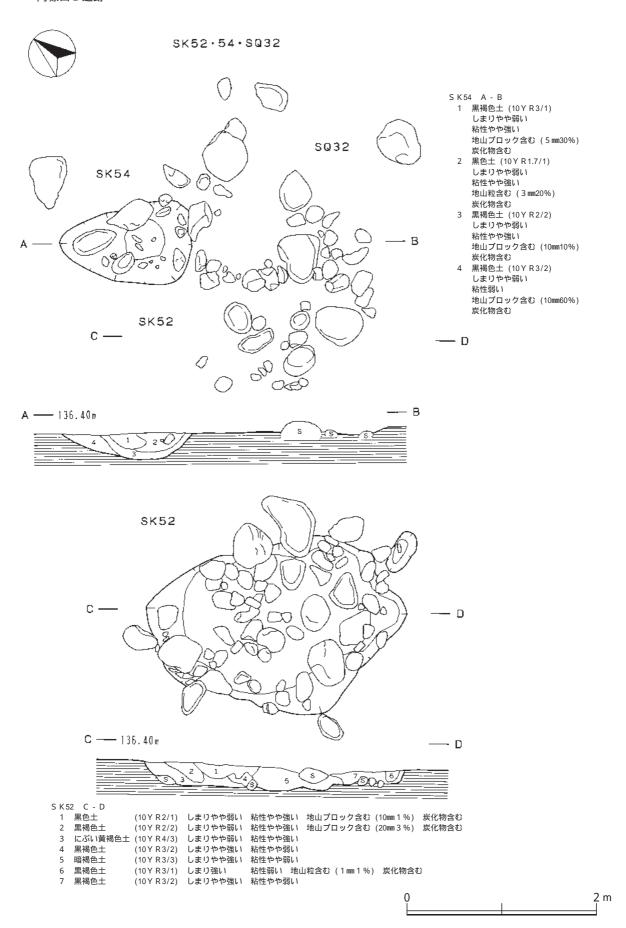
《規模と平面形》 平面形は、長軸2.06m、短軸1.28mの楕円形を呈し、深さは地山面より62cmである。主軸方向はN - 86° - Eを示す。

 《埋
 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっており段丘礫が露出している。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出 土 遺 物》 埋土より鉢形土器口縁部破片 (1) と深鉢形土器胴部破片 (2) が出土した。1 は、1条の沈線で口縁部を区画し、区画内を磨り消している。胴部にはLR縄文を施文し、外面には煤状炭化物が厚く付着する。



第12図 S K 52·54土坑、S Q 32配石遺構

S K 56土坑 (第13図、図版 4・11)

《位 置》 L H32・33グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.80m、短軸1.62mの楕円形を呈し、深さは地山面より60cmである。主軸方向はN - 48° - Wを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっており段丘礫が露出している。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部破片(3)が出土した。LR縄文を施文している。

S K 58土坑 (第14図、図版 4)

《位 置》 LG32グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸90cm、短軸80cmの楕円形を呈し、深さは地山面より24cmである。 主軸方向はN - 27° - Eを示す。

 《埋
 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でやや軟弱である。

《出土遺物》なし。

S K 59土坑 (第14図、図版 5・11)

《位 置》 LE31グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》 SK77土坑に掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.4m (推定)、短軸1.30mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より32cmである。主軸方向はN - 45° - Eを示す。

 《埋
 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 東側はやや緩やかに、西側は急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部破片 (1~3) が出土した。1と2にはLR縄文を、3 にはRL縄文を施文している。

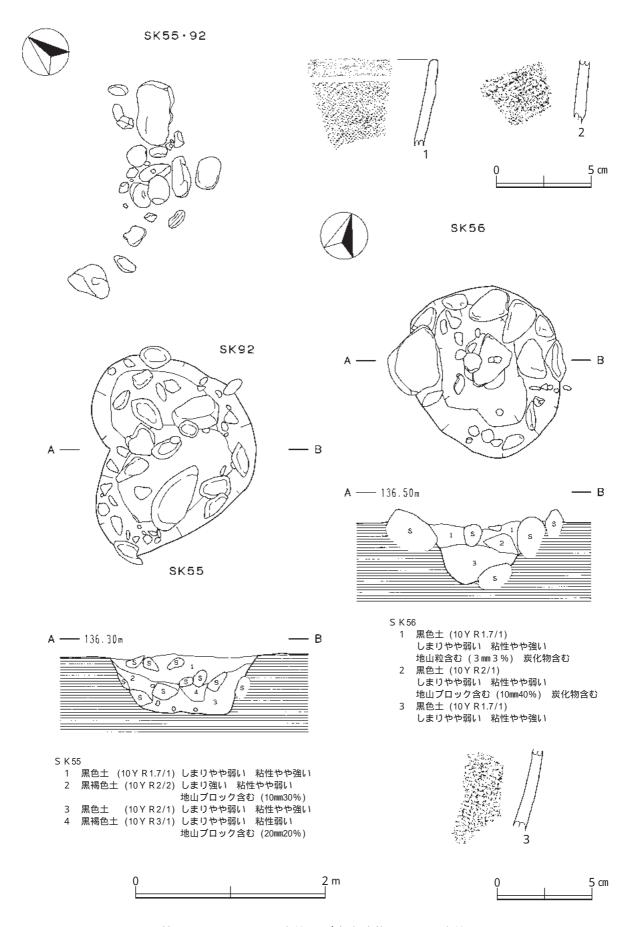
S K 60土坑 (第16図、図版 5・11)

《位 置》 L E 30・31 グリッド に位置する。

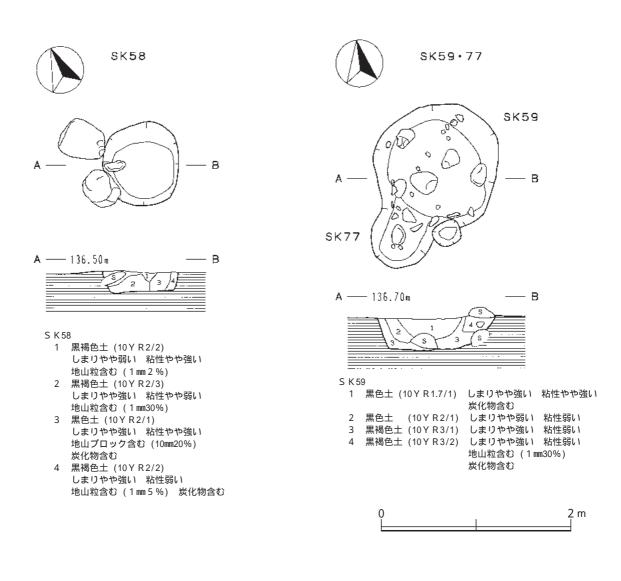
《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.30m、短軸0.98mの楕円形を呈し、深さは地山面より60cmであ

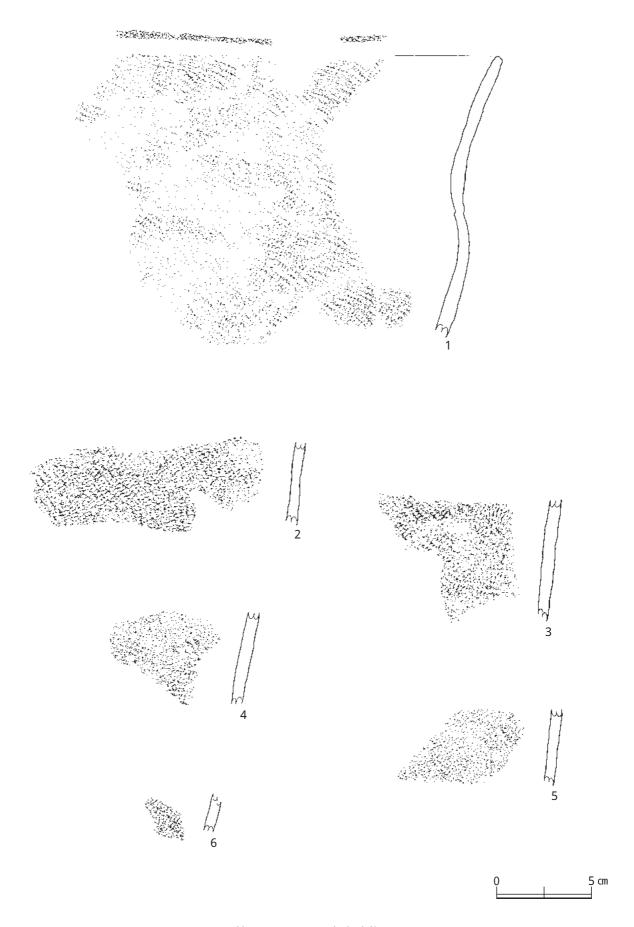


第13図 SK55・56土坑及び出土遺物、SK92土坑





第14図 SK58土坑、SK59・77土坑及び出土遺物



第15図 S K 77出土遺物

る。主軸方向はN - 56° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっており、段丘礫が露出している。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部破片 (1) が出土した。下部にLR縄文を施文し、上部 は磨り消している。

S K 61土坑 (第16図、図版 5)

《位 置》 L F 31、L G 30・31 に位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸2.36m、短軸1.70mの楕円形を呈し、深さは地山面より78cmである。主軸方向はN - 40° - Eを示す。

《埋 土》 2層に分かれた。

《 壁 》 やや急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》なし。

S K 62土坑 (第17図、図版 5・11)

《位置》 LI33グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.74m、短軸1.48mの隅丸方形を呈し、深さは地山面より58cmである。主軸方向はN - 75° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部小破片 (1) が出土した。LR縄文を施文しており、外面には煤状炭化物が付着する。

S K 63土坑 (第17図、図版 5)

《位 置》 LA26グリッドに位置する。

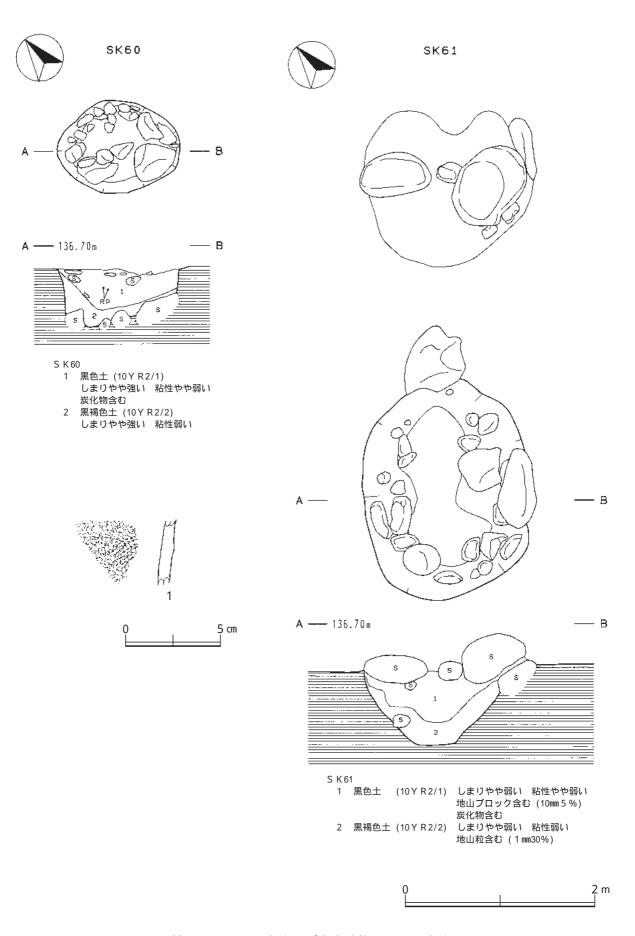
《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.54m、短軸1.34mの楕円形を呈し、深さは地山面より36cmである。主軸方向はN - 74° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 東側は急に、西側は緩やかに立ち上がっている。



第16図 SK60土坑及び出土遺物、SK61土坑

《底 面》 平坦であり、壁際に段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》 なし。

S K 64土坑 (第17図、図版 5・11)

《位 置》 L C 30・31 グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.30m、短軸0.96mの楕円形を呈し、深さは地山面より38cmである。主軸方向はN - 42° - Eを示す。

《埋 土》 3層に分かれた。

《 壁 》 東側は急に、西側は緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部小破片 (2) が出土した。LR縄文を施文しているが全体的に摩滅している。

S K 65土坑 (第18図、図版5・11)

《位 置》 L B 31、L C 31 グリッドに位置する。

《確認》プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.36m、短軸1.06mのやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面より30cmである。主軸方向はN - 60° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 鍋底状になっている。

《出 土 遺 物》 埋土より壺形土器胴部破片 (1) が出土した。沈線による入組文を施文し、一部 回転方向を変えて L R 縄文を充填している。この土器は縄文時代後期中葉の十腰内 2 式土器に比定される。

S K 66土坑 (第18図、図版 5・11)

《位 置》 L C 31、L D 31 グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

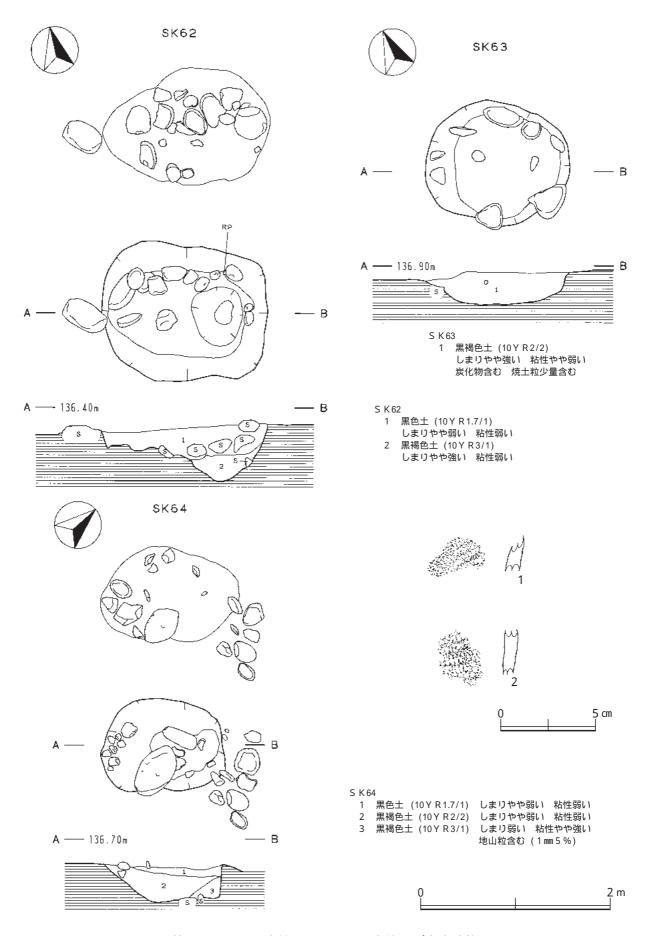
《規模と平面形》 平面形は、長軸1.42m、短軸0.90mの楕円形を呈し、深さは地山面より40cmである。主軸方向はN - 86° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦であり、西側が若干深くなっている。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部破片(2)と皿形土器胴部破片(3)が出土した。2は



第17図 SK63土坑、SK62・64土坑及び出土遺物

R L 縄文を施文している。3 は 1 条の沈線を配する無文の土器である。外面に赤色 顔料を塗布している。

S K 67土坑 (第18図、図版 6・11)

《位 置》 L B 29・30グリッドに位置する。

《確 認》 プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.56m、短軸1.24mの楕円形を呈し、深さは地山面より53cmである。主軸方向はN - 51° - Eを示す。

《埋土》4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっており、南側に多く段丘礫が露出している。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部破片 (4・5) が出土した。どちらにもLR縄文を施文している。

S K 68土坑 (第19図、図版 6・11)

《位 置》 L C 29・30グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.50m、短軸0.96mの楕円形を呈し、深さは地山面より54cmである。主軸方向はN - 89° - Eを示す。

《埋土》 6層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部小破片(1)が出土した。LR縄文を施文している。

S K 72土坑 (第19図、図版 6)

《位 置》 K T 27、 L A 27グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.00m、短軸0.64mの楕円形を呈し、深さは地山面より12cmである。主軸方向はN - 33° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 東側はやや緩やかに、西側は急に立ち上がっている。

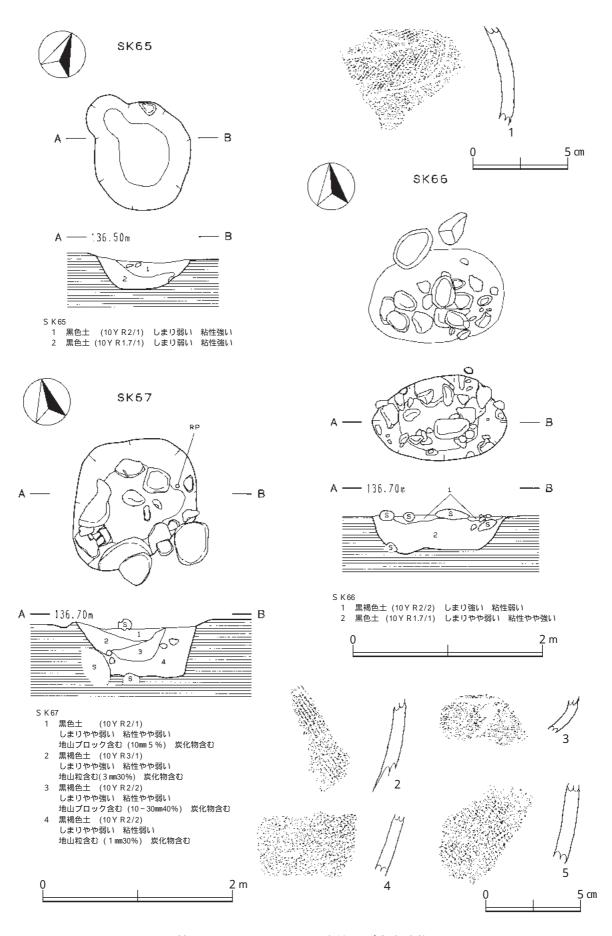
《底 面》 平坦であり、東側に段丘礫が露出している。

《出土遺物》 なし。

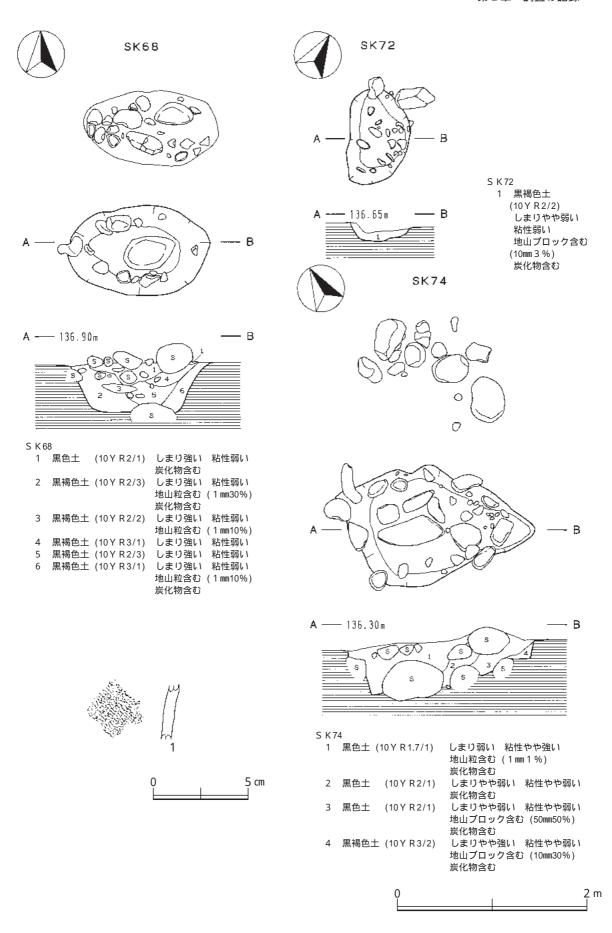
S K 74土坑 (第19図、図版 6)

《位 置》 L K 32・33グリッドに位置する。

《確 認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑



第18図 SK65・66・67土坑及び出土遺物



第19図 SK68土坑及び出土遺物、SK72・74土坑

と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.98m、短軸1.28mのやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面より50cmである。主軸方向はN - 61° - Wを示す。

 《埋
 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっており、段丘礫が多く露出している。

《底 面》 西側に傾斜しており、段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》なし。

S K 76土坑 (第20図、図版 6)

《位 置》 LJ29グリッドに位置する。

《確認》プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重 複》 東側をピットに掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸2.20m、短軸1.52mの楕円形を呈し、深さは地山面より32cmである。主軸方向はN - 57° - Eを示す。

《埋 土》 5層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦であり、段丘礫が露出している。

《出土遺物》なし。

S K 77土坑 (第14・15図、図版5・11)

《位 置》 LE30・31、LF30・31グリッドに位置する。

《確認》SK59土坑を半截中に南側に広がりを確認し、その後土坑と判断した。

《重 複》 S K 59土坑を掘り込んでいる。

《規模と平面形》 平面形は、長軸80cm、短軸70cmの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より28cmである。主軸方向はN - 57° - Eを示す。

《埋 土》 不明。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦であり、段丘礫が露出している。

《出 土 遺 物》 埋土より、深鉢形土器口縁部破片(第14図4・第15図1)・胴部破片(第15図2 ~ 6)が出土した。第14図4は口唇部を面取りしており、口唇部と胴部にRL縄文を施文している。第15図2・3・6は第14図4と同一個体であり、外面に煤状炭化物が付着する。第15図1は胴部上半が膨らみ、口縁部が外反する器形を呈する。口唇部と胴部にRL縄文を施文している。外面には少量煤状炭化物が付着する。第15図4と5は同一個体であり、RL縄文を施文している。これらの土器は、縄文時代後期中葉から後葉の土器と考えられる。

S K 78土坑 (第9図、図版3)

《位 置》 L F 31 グリッドに位置する。

《確認》 SK43土坑を完掘中に南東側に土坑があるのを確認した。

《重複》 西側をSK43土坑に掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.10m、短軸0.6m (推定) の楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より26cmである。主軸方向はN - 56° - Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 鍋底状になっている。

《出土遺物》なし。

S K 79土坑 (第20図、図版 6)

《位 置》 LJ27グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.20m、短軸1.02mの楕円形を呈し、深さは地山面より71cmである。主軸方向はN - 85° - Wを示す。

《埋 土》 5層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっており、段丘礫が露出している。

《底 面》 鍋底状を呈し、やや軟弱である。

《出土遺物》なし。

S K 80土坑 (第20図、図版 6)

《位 置》 LG34グリッドに位置する。

《確認》プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.04m、短軸0.72mの楕円形を呈し、深さは地山面より22cmである。主軸方向はN - 71° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 西側はやや緩やかに立ち上がっており、東側には段丘礫が露出している。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》 なし。

S K 82土坑 (第21図、図版 6)

《位 置》 L J 28、L K 28グリッドに位置する。

《確 認》 プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重 複》 S K 83土坑及び S K 88土坑と重複している。 S K 83土坑を掘り込んでいるが、 S K 88土坑との新旧関係は不明である。

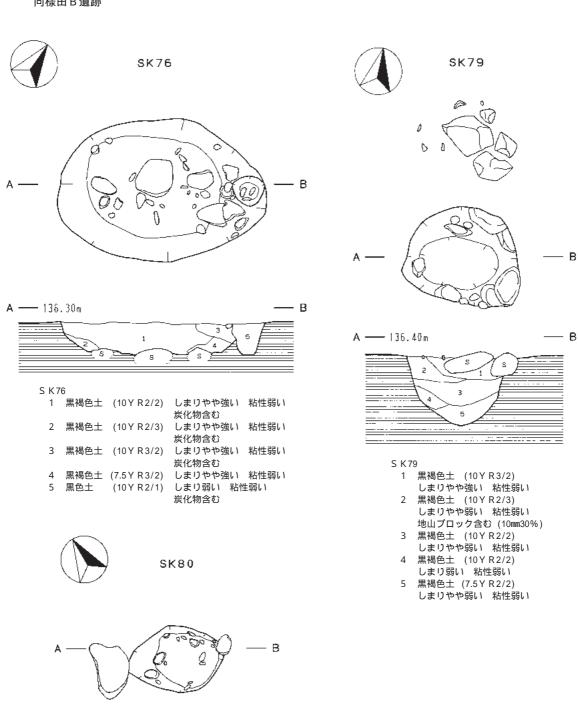
《規模と平面形》 平面形は、長軸1.7m (推定)、短軸0.76mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より22cmである。主軸方向はN - 85° - Wを示す。

《埋 土》 第1~3層の3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

A --- 135.50m

S K 80





第20図 S K 76 · 79 · 80土坑

— в

1

しまりやや強い 粘性やや強い 地山粒含む (1 mm 3 %)

1 黒色土 (10 Y R 1.7/1)

炭化物含む

《底 面》 平坦でしまっている。

《出土遺物》 なし。

S K 83土坑 (第21図、図版 6)

《位 置》 LJ28グリッドに位置する。

《確認》SK82土坑の確認のためにサブトレンチを入れた際に確認した。

《重複》 S K 82土坑及び S K 88土坑と重複している。 S K 82土坑に掘り込まれているが、 S K 88土坑との新旧関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸86cm、短軸60cmの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より26cmである。主軸方向はN - 30° - Eを示す。

《埋 土》 第4・5層の2層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でしまっている。

《出土遺物》なし。

S K 88土坑 (第21図、図版 6)

《位 置》 L J 28・29グリッドに位置する。

《確認》 SK82・83土坑を完掘中に、北側にもう1基土坑があるのを確認した。

《重 複》 S K 82土坑及び S K 83土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.1m (推定)、短軸0.98mの楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より18cmである。主軸方向はN - 1° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 平坦でしまっている。

《出土遺物》なし。

S K 89土坑 (第21図、図版7・11)

《位 置》 LK27グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸80cm、短軸74cmのほぼ円形を呈し、深さは地山面より36cmである。 主軸方向はN‐ 89゜- Wを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

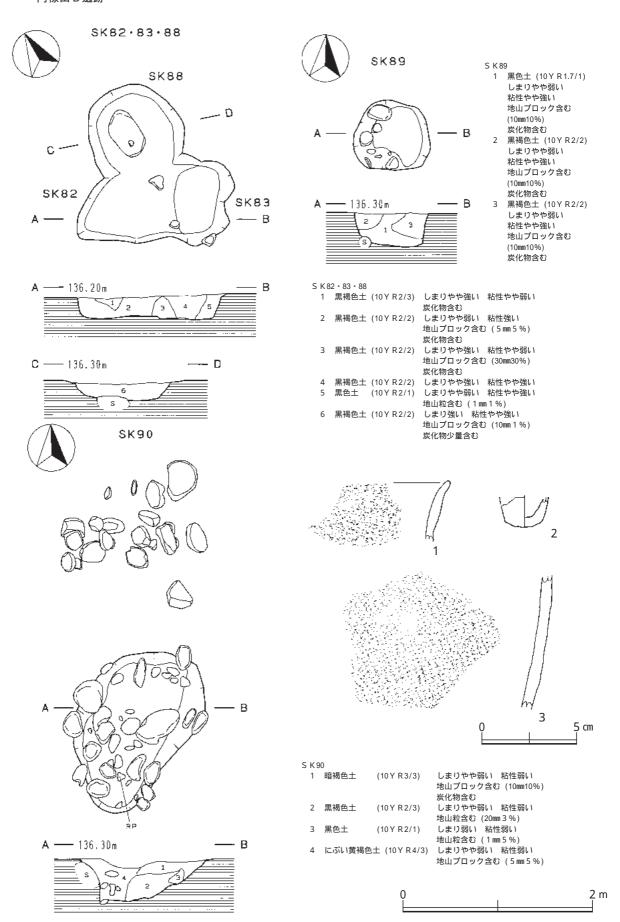
《底 面》 平坦でやや軟弱である。

《出 土 遺 物》 埋土より無文の壺形土器口縁部破片 (1) と、無文のミニチュア土器底部から胴部にかけての破片 (2) が出土した。2は指で押して器面を調整している。

S K 90土坑 (第21図、図版7・11)

《位 置》 L K 26・27、L L 26・27グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑



第21図 SK82・83・88土坑、SK89・90土坑及び出土遺物

と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.80m、短軸1.20mの楕円形を呈し、深さは地山面より46cmである。主軸方向はN - 24° - Eを示す。

 《埋
 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっており、段丘礫が多く露出している。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出 土 遺 物》 確認面より深鉢形土器胴部破片 (3) が出土した。RL縄文を施文しており、内 外面には煤状炭化物が付着している。

S K 91土坑 (第22図、図版7)

《位 置》 LK31グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸90cm、短軸66cmの楕円形を呈し、深さは地山面より20cmである。 主軸方向はN - 87° - Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でやや軟弱である。

《出土遺物》なし。

S K 92土坑 (第13図、図版 4)

《位 置》 L J 32、L K 32グリッドに位置する。

《確認》 S K 55土坑を完掘中に、北側にもう1基土坑が掘り込まれているのを確認した。

《重 複》 S K 55土坑に掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.2m (推定)、短軸1.12mのほぼ円形を呈すると考えられる。深 さは地山面より26cmである。主軸方向はN - 5° - Wを示す。

《埋 土》 不明。

《 壁 》 東側は急に、西側はやや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》なし。

S K 93土坑 (第22図、図版7)

《位 置》 LG32グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.36m、短軸0.98mの楕円形を呈し、深さは地山面より38cmである。主軸方向はN - 70° - Wを示す。

《埋 土》 3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》 なし。

S K 95土坑 (第22図、図版7)

《位 置》 LE32グリッドに位置する。

《確認調査の際のトレンチを清掃中に断面を確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、径1.2m (推定) のほぼ円形を呈すると考えられる。深さは地山面より36cmである。主軸方向はN - 81° - Eを示す。

《埋 土》 2層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっており、段丘礫が露出している。

《底 面》 段丘礫が露出している。

《出土遺物》なし。

S K 96土坑 (第22図、図版7)

《位 置》 L E 32、L F 32 グリッドに位置する。

《確認》プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.52m、短軸0.80mの楕円形を呈し、深さは地山面より26cmである。主軸方向はN - 61° - Eを示す。

《埋土》4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が露出している。

《出 土 遺 物》 埋土より剥片石器 3 個が出土した。

S K 97土坑 (第23図、図版7)

《位 置》 L H32・33、L I 32・33グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸4.36m、短軸2.80mの楕円形を呈し、深さは地山面より38cmである。主軸方向はN - 27° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 全体に段丘礫が露出している。

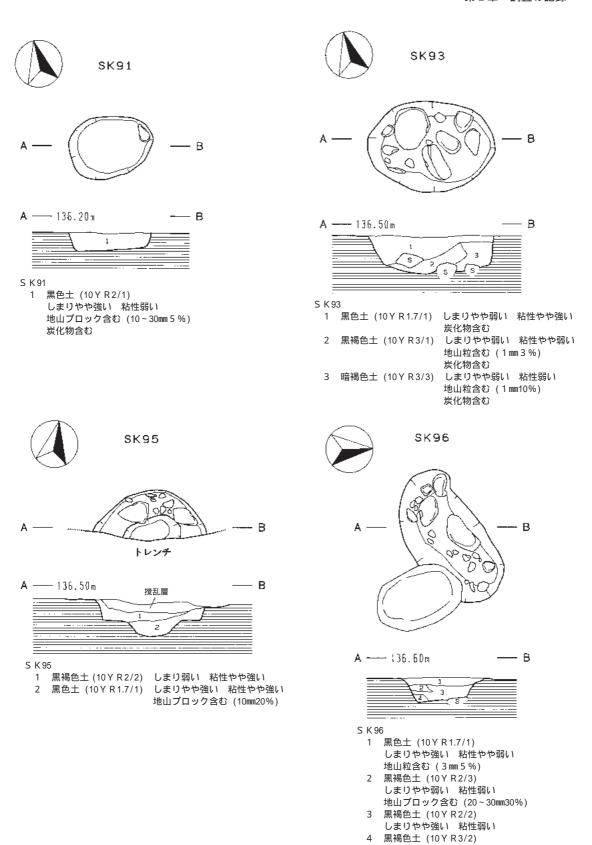
《出土遺物》なし。

S K 99土坑 (第24図、図版7・11)

《位 置》 LH33グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

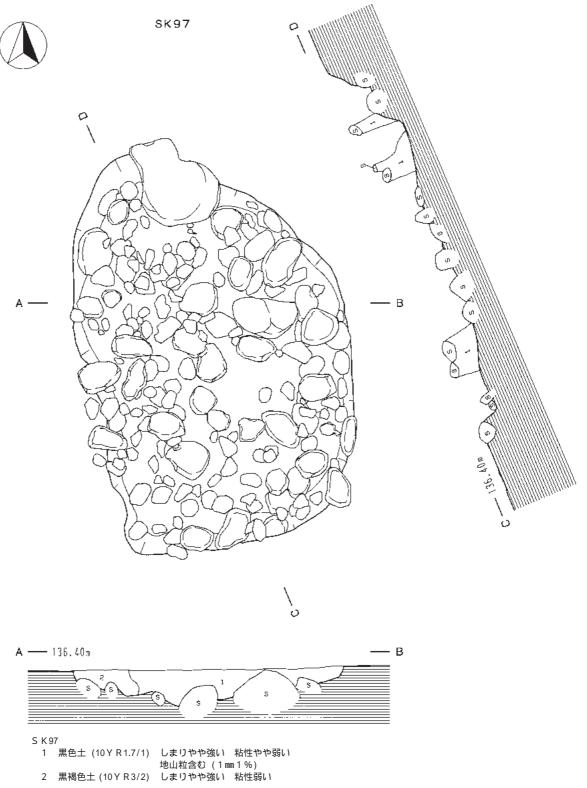
《重複》なし。



第22図 SK91・93・95・96土坑

しまりやや弱い 粘性弱い 地山粒含む (1mm3%)

2 m





第23図 S K 97土坑

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.64m、短軸1.02mの楕円形を呈し、深さは地山面より36cmである。主軸方向はN - 88° - Wを示す。

《埋土》 5層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 確認面より深鉢形土器胴部破片 (1) が出土した。RL縄文を施文しているが全体的に摩滅している。内面に煤状炭化物が少量付着している。

S K 100土坑 (第24図、図版 8・11)

《位 置》 LK28グリッドに位置する。

《確認》プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重複》 S X 101性格不明遺構を掘り込んでいる。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.44m、短軸0.94mの楕円形を呈し、深さは地山面より40cmである。主軸方向はN - 86° - Eを示す。

《埋 土》 4層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で軟弱である。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器口縁部破片 (2) が出土した。LR縄文を施文しており、口縁部にはケズリ痕が残る。

S K 102土坑 (第25図、図版8)

《位 置》 LI31グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.28m、短軸0.88mの楕円形を呈し、深さは地山面より22cmである。主軸方向はN - 83° - Wを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が多く露出している。

《出土遺物》なし。

S K 103土坑 (第25図、図版 8)

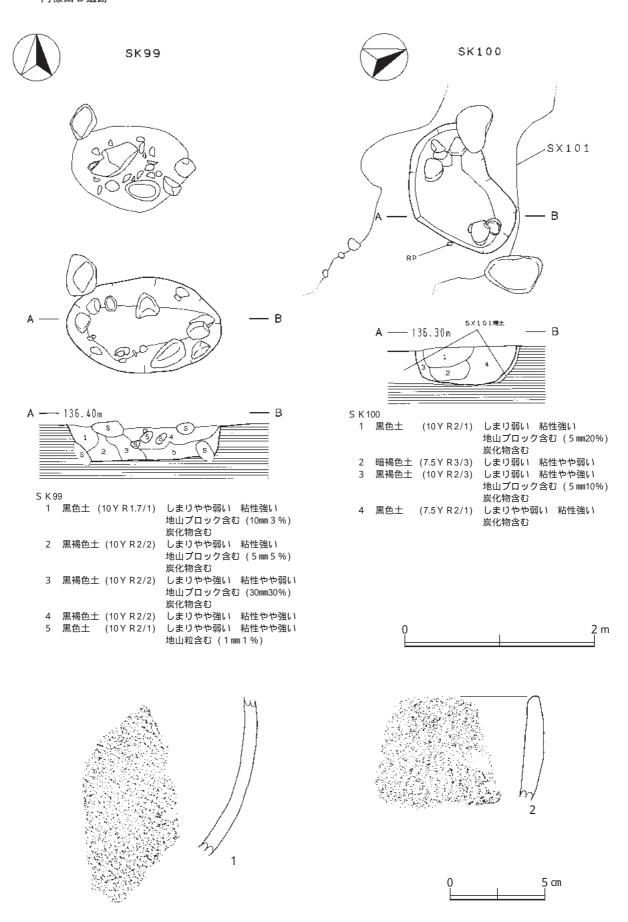
《位 置》 LK27グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重 複》 西側をピットに掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.38m、短軸0.66mの楕円形を呈し、深さは地山面より28cmである。主軸方向はN - 81° - Wを示す。

《埋 土》 単一層であり、第2層はピットの埋土である。



第24図 SK99・100土坑及び出土遺物

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》なし。

S K 104土坑 (第25図、図版8)

《位 置》 L E 32・33グリッドに位置する。

《確 認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸78cm、短軸58cmの楕円形を呈し、深さは地山面より12cmである。 主軸方向はN - 86° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 段丘礫が多く露出している。

《底 面》 全体的に段丘礫が露出している。

《出土遺物》なし。

S K 105土坑 (第25図、図版8)

《位 置》 LK33グリッドに位置する。

《確認》プランがはっきりしなかったためサブトレンチを入れ、断面より土坑と判断した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸74cm、短軸68cmのほぼ円形を呈し、深さは地山面より42cmである。 主軸方向はN - 75° - Eを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 全体的に段丘礫が露出している。

《出土遺物》なし。

S K 106土坑 (第26図、図版8・11)

《位 置》 L D30・31グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

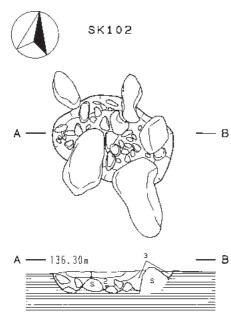
《規模と平面形》 平面形は、長軸1.88m、短軸1.06mの楕円形を呈し、深さは地山面より44cmである。主軸方向はN - 67° - Wを示す。

《埋土》3層に分かれた。

《 壁 》 段丘礫が多く露出している。

《底 面》 段丘礫が露出している。

《出 土 遺 物》 底面より、LR縄文を施文した深鉢形土器胴部上端の小破片 (1) が出土した。 外面には煤状炭化物が少量付着している。



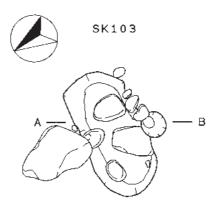
S K 102

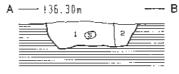
1 黒褐色土 (10 Y R 2/2) しまり強い 粘性弱い

地山粒含む (1 mm 3 %) 炭化物含む

2 黒褐色土 (10 Y R 2/3) しまりやや強い 粘性弱い 地山粒含む (2 mm 3 %)

3 黒褐色土 (10 Y R 2/3) しまり強い 粘性弱い





S K 103

1 黒褐色土 (10 Y R 2/3) しまりやや強い 粘性弱い

地山ブロック含む (5 mm 5 %)

炭化物含む

2 黒色土 (10 Y R 2/1) しまり弱い 粘性弱い

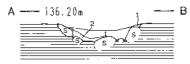
地山ブロック含む (50mm 3 %)

炭化物含む 焼土含む



SK104





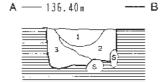
S K 104

- 1 黒色土 (10 Y R 1.7/1) しまりやや強い 粘性やや強い
- 炭化物含む 2 黒褐色土 (10 Y R 3/1) しまりやや弱い 粘性やや強い



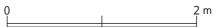
SK105





S K 105

- 1 黒色土 (10 Y R 1.7/1) しまりやや弱い 粘性強い
- 2 黒褐色土 (10 Y R 3/1) しまり弱い 粘性強い 地山ブロック含む (にぶい黄褐色土 (10 Y R 4/3) 40%)
- 3 黒褐色土 (10 Y R 3/1) しまり弱い 粘性強い 礫含む (100mm)





第25図 SK102・103・104・105土坑

S K 107土坑 (第26図、図版8)

《位 置》 LD31グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、下部に掘り込みがあることより土坑と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.60m、短軸1.02mの楕円形を呈し、深さは地山面より30cmである。主軸方向はN - 86° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦でしまっている。

《出土遺物》 なし。

S K 108土坑 (第27図、図版 8)

《位 置》 K D 32・33 グリッドに位置する。

《確 認》 北側にあるSQ86配石遺構の掘り込みを確認するため、SQ86配石遺構を半截中 に南側で土坑の一部を確認した。

《重複》 SQ86配石遺構が上面に構築されている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸4.06m、短軸1.12mの長楕円形を呈し、深さは地山面より30cmである。主軸方向はN - 14° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 東側はやや緩やかに、西側は垂直に立ち上がっている。

《底 面》 若干不整な鍋底状を呈する。

《出土遺物》 なし。

S K 109土坑 (第6図)

《位 置》 K B 33・34、K C 33・34 グリッドに位置する。

《確 認》 東側礫群の基本層位を確認するためにトレンチを入れた際、土坑の断面を検出し 遺構と判断した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 残存する軸は1.04m、深さは 層より36cmである。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 段丘礫が露出しており、凸凹している。

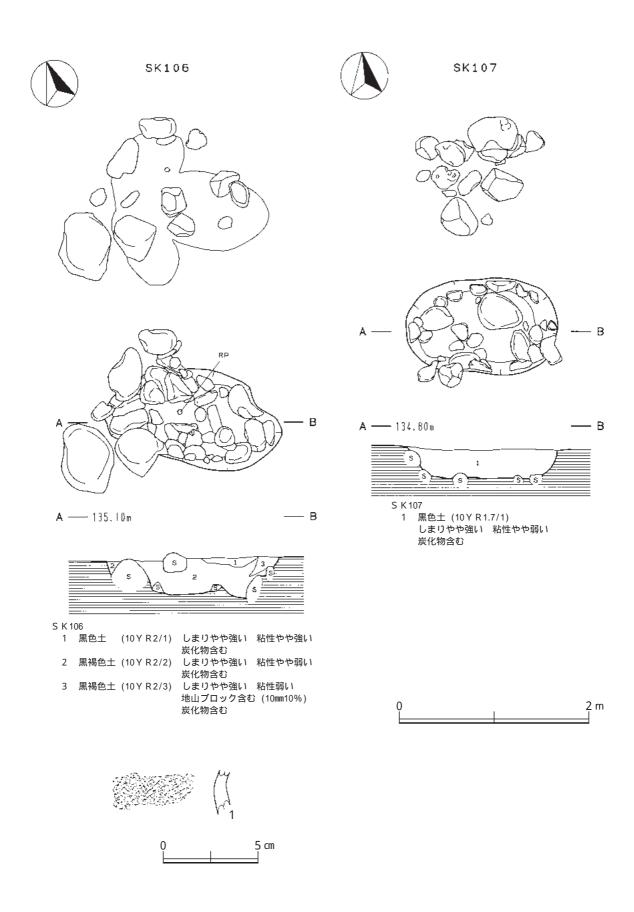
《出土遺物》なし。

S K 110土坑 (第7図)

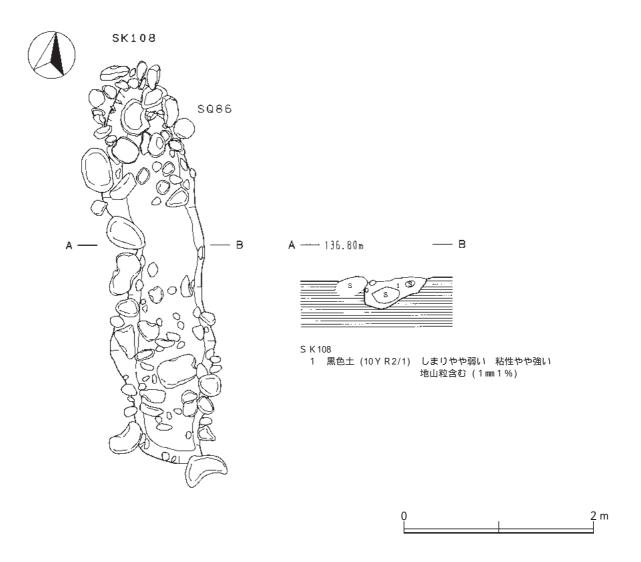
《位 置》 KC34グリッドに位置する。

《確 認》 東側礫群の基本層位を確認するためにトレンチを入れた際、土坑の断面を検出し 遺構と判断した。

《重複》なし。



第26図 SK106土坑及び出土遺物、SK107土坑



《規模と平面形》 残存する軸は1.50m、深さは 層より34cmである。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 東側はやや緩やかに、西側は急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦である。

《出土遺物》 なし。

(2)配石遺構

S Q 01配石遺構 (第28図、図版 9)

《位 置》 JT32グリッドに位置する。

《確認知知。 粗掘り中に 層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複形を表現である。 複製 複型に隣接してSQ02配石遺構があるが、重複関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.05m、短軸0.73mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 80° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q 02配石遺構 (第28図、図版 9)

《位 置》 JT32グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 北側に隣接してSQ01配石遺構があるが、重複関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸83cm、短軸73cmの楕円形を呈する。主軸方向はN - 27° - Eを示す。

《出土遺物》なし。

S Q 03配石遺構 (第28図、図版 9)

《位 置》 JS36、JT36グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸67cm、短軸50cm (推定) の隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向はN - 42° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q 05配石遺構 (第29図、図版 9)

《位 置》 KC35グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

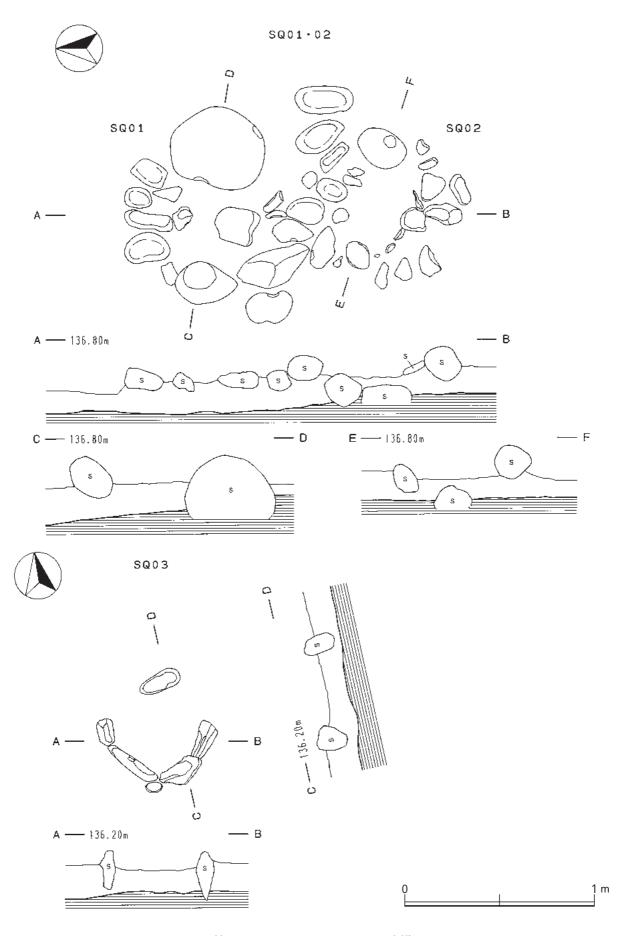
《規模と平面形》 平面形は、長軸1.52m、短軸1.03mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 27° - Eを示す。

《出土遺物》 なし。

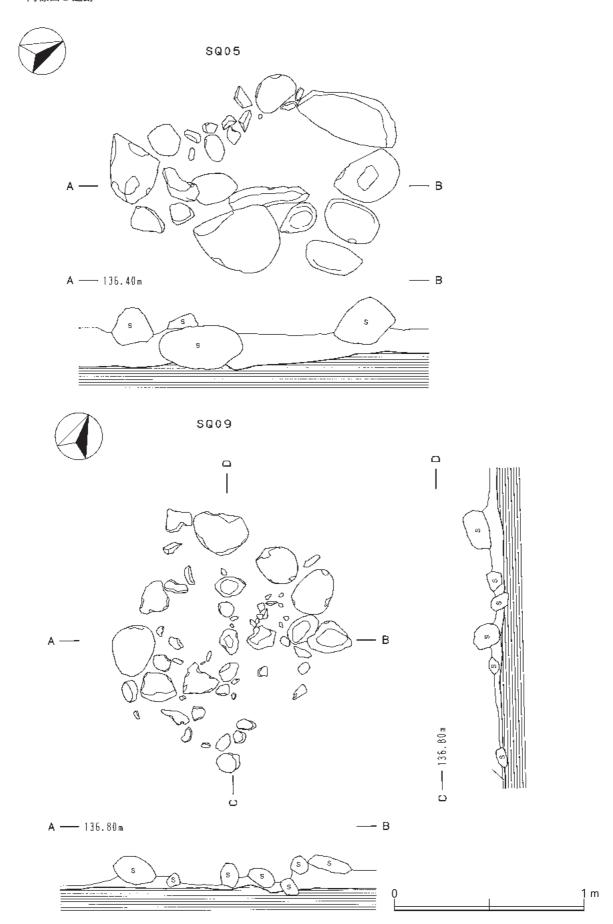
S Q 09配石遺構 (第29図、図版 9)

《位 置》 KA32、KB32グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。



第28図 SQ01・02・03配石遺構



第29図 SQ05·09配石遺構

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.37m、短軸1.26mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN - 28° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q 13配石遺構 (第30図、図版 9)

《位 置》 J T 31、K A 31 グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.30m、短軸1.12mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 28° - E を示す。

《出土遺物》なし。

S Q 17配石遺構 (第30図)

《位 置》 KC30グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸95cm、短軸87cmの楕円形を呈する。主軸方向はN - 88° - Eを示す。

《出土遺物》 なし。

S Q21配石遺構 (第31図)

《位 置》 K C 33、K D 33 グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸74cm、短軸56cmの楕円形を呈する。主軸方向はN - 83° - Eを示す。

《出土遺物》 なし。

S Q32配石遺構 (第12図、図版 4)

《位 置》 LI32グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》 SK52・54土坑と隣接するが重複関係はない。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.82m、短軸1.18mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 40° - Wを示す。

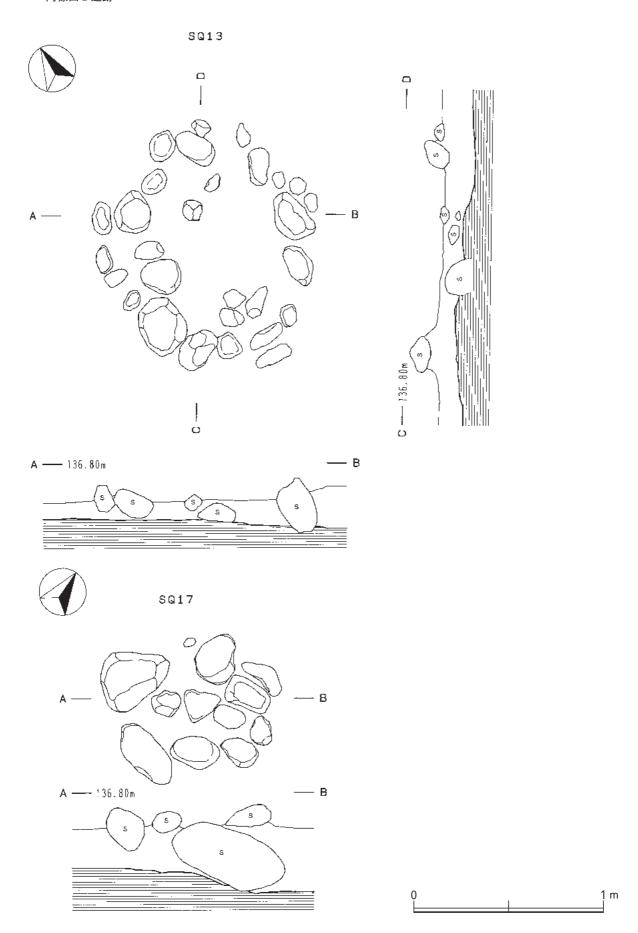
《出土遺物》なし。

S Q35配石遺構 (第31図、図版 9)

《位置》 LJ30グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層下部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.33m、短軸0.61mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 12° -



第30図 S Q 13·17配石遺構

Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q36配石遺構 (第31図、図版 9)

《位 置》 LJ30グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層下部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》東側にSQ35配石遺構があるが、重複関係は不明である。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.45m、短軸1.01mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 37° - Eを示す。

《出土遺物》なし。

S Q 38配石遺構 (第32図、図版 9)

《位 置》 L G31・32、L H31・32グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層下部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.70m、短軸1.05mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 69° - E を示す。

《出土遺物》なし。

S Q 69配石遺構 (第32図、図版 9)

《位 置》 K H 34、 K I 34 グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸88cm、短軸66cmの楕円形を呈する。主軸方向はN - 55° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q 70配石遺構 (第33図、図版10)

《位 置》 K H 34、K I 34 グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、径1.05mの円形を呈する。主軸方向はN - 79° - Eを示す。

《出土遺物》なし。

S Q71配石遺構 (第33図、図版10)

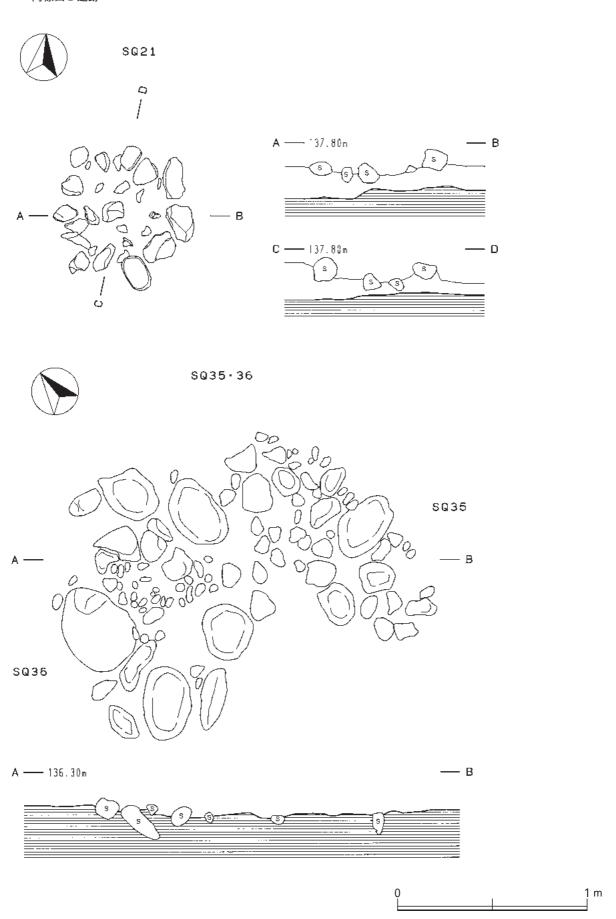
《位 置》 KI34グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

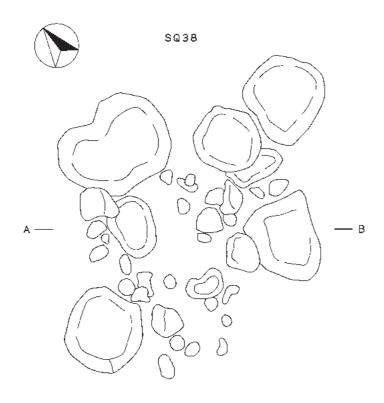
《重 複》 なし。

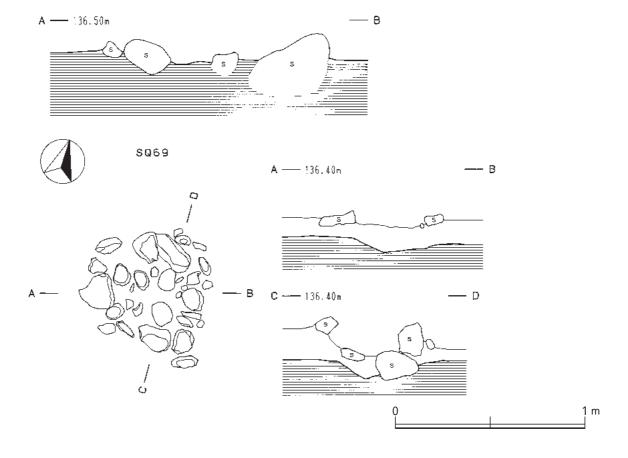
《規模と平面形》 平面形は、長軸90cm、短軸80cmのほぼ円形を呈する。主軸方向はN - 70° - W を示す。

《出土遺物》なし。

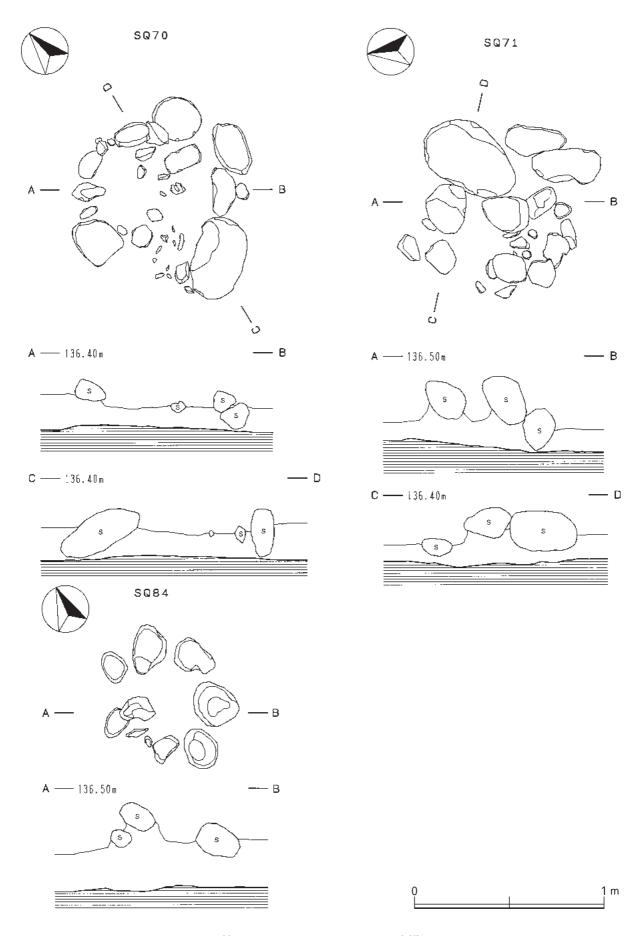


第31図 SQ21・35・36配石遺構





第32図 S Q 38·69配石遺構



第33図 SQ70・71・84配石遺構

S Q 84配石遺構 (第33図、図版10)

《位 置》 K E 32、K F 32 グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸82cm、短軸69cmの楕円形を呈する。主軸方向はN - 20° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q85配石遺構 (第34図、図版10)

《位 置》 KF34グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.08m、短軸0.73mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 43° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q86配石遺構 (第34図、図版10)

《位 置》 KD33グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複》SK108土坑の上面に構築している。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.08m、短軸0.90mの楕円形を呈する。主軸方向はN - 41° - Wを示す。

《出土遺物》なし。

S Q87配石遺構 (第35図、図版10)

《位 置》 K B 33・34 グリッドに位置する。

《確認知知。 粗掘り中に 層上部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸91cm、短軸72cmの楕円形を呈する。主軸方向はN - 28° - Eを示す。

《出土遺物》なし。

(3) 性格不明遺構

S X 101性格不明遺構 (第35図、図版10・11)

《位 置》 L J 26~28、L K 27・28 グリッドに位置する。

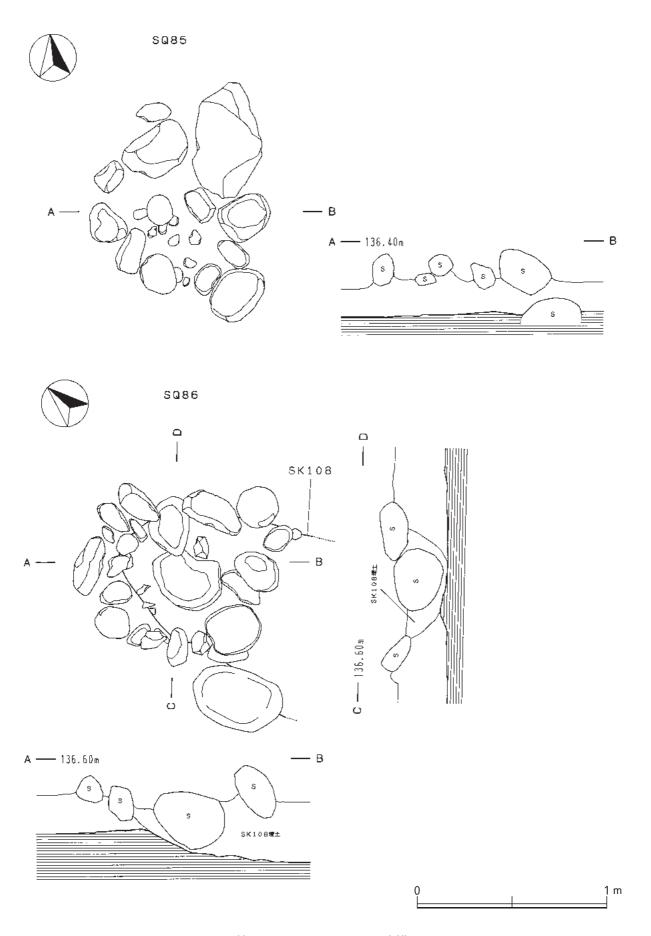
《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 S K 100土坑に掘り込まれている。

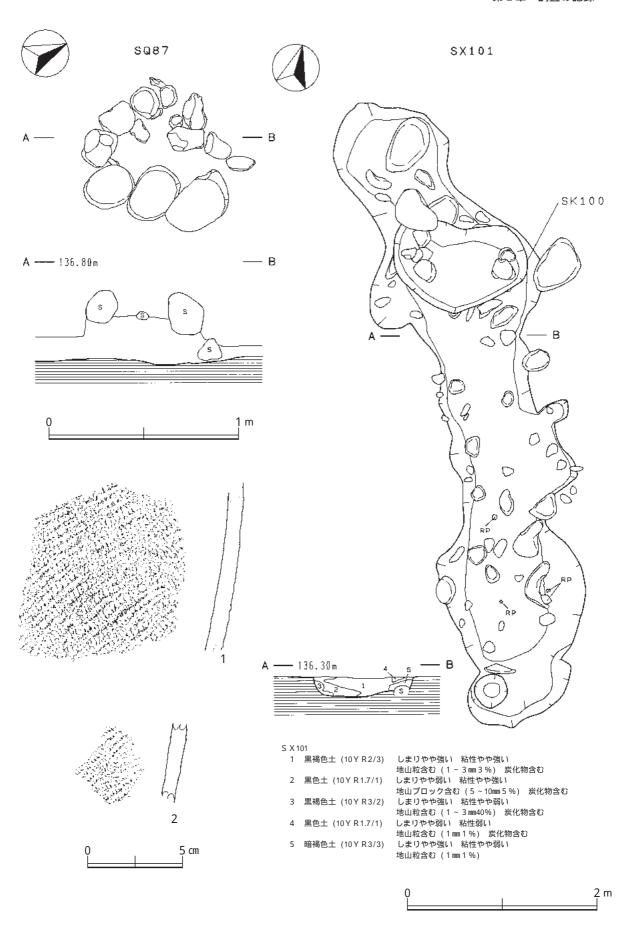
《規模と平面形》 平面形は、長軸6.7m、短軸1.5mの長楕円形を呈し、深さは地山面より20cmである。主軸方向はN - 33° - Wを示す。

《埋土》 5層に分かれた。

《出 土 遺 物》 埋土より深鉢形土器胴部破片 (1・2) が出土した。いずれもLR縄文を施文しており、1の外面には煤状炭化物が付着する。



第34図 S Q85·86配石遺構



第35図 SQ87配石遺構、SX101性格不明遺構及び出土遺物

第3節 遺構外出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器である。遺物については、観察表を掲載しているので、 ここでは大まかな特徴を述べる。

1 縄文土器

【第 群土器】前期の土器 (第36図1~18、図版12)

1は、丸底を呈し、胴部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁部が若干外反する深鉢形土器である。口唇部は刺突による小波状口縁を呈する。胴部上半には2対の補修孔を有する。胎土には繊維を多量に含み、器面全体に組縄縄文を施文している。2~18は、胎土に繊維を含む深鉢形土器口縁部または胴部破片である。2~4には不整撚糸文を、5~8には羽状縄文を施文する。9はゆるやかな波状口縁を呈する。 【第 群土器】中期の土器(第36図19~第37図27、図版12)

深鉢形土器口縁部・胴部破片である。19~22は口唇部に撚糸圧痕を施文しており、19・21・23は、 隆帯を貼り付け、隆帯上に撚糸圧痕を施文している。21~26にはC字状撚糸圧痕を施文している。 27は羽状縄文を施文している。

【第 群土器】後期の土器 (第37図28~第40図106、図版12~14)

1類:深鉢形土器群 (第37図28~第40図85)

1 - A: 口縁部が外反する土器 (第37図28~第38図41)

28は、筒形の胴部に口縁部が大きく外反する器形を呈する。口縁は平縁で、口唇部に無節斜行縄文を施文している。口縁部には6条の平行沈線を配し、補修孔を1対有する。胴部下半に2条の平行沈線を配し、文様帯を区画している。区画した文様帯には、上下から沈線による3対の変形Y字状入組文を施文し、Y字状入組文内には無節斜行縄文を充填する。29~34は口唇部に縄文を施文しており、30は平行沈線で区画し磨消を施す。

1 - B: 口縁が直立する土器 (第38図42~第39図64)

42~47は口唇部に縄文を施文している。48は磨消を施し、55は網目状撚糸文を施文している。50は 刺突文が施されている。

1 - C: 口縁部が内湾する土器 (第39図65~70)

65・66とも口縁部突起破片である。65は突起の左右に小突起を有し、口縁部に沿った沈線により三角文を描く。三角文内は磨り消されて無文帯となる。66は隆帯を貼り付け文様帯を表出している。隆帯上には縄文が充填される。胴部上端には沈線による文様帯が描かれ、磨消を施している。土器内面には厚く煤状炭化物が付着している。

1 - D:胴部破片 (第39図71~第40図85)

71~73は沈線で文様帯を区画し、区画内に磨消を施す。74・75は、口縁部を撚糸圧痕で区画している。76・77には刺突文が配されている。

2類:鉢形土器群 (第40図86~91)

86は口縁部破片であり、2条の平行沈線を配し磨消を施している。87は沈線により方形区画をしている。88は多条沈線文が、89には多条沈線による曲線文が描かれる。91は小突起を有する無文の土器である。

3 類:壺形土器群 (第40図92~101)

92は口唇部に縄文を施文する口縁部破片である。93~100は肩部または胴部破片であり、93~96・99・100は、沈線により区画し区画間を磨り消している。

4 類:台部破片 (第40図102)

台部が「八」の字に広がる無文の破片である。

5 類:底部破片 (第40図103~106)

103~105には網代痕が、106は木葉痕が見られる。

【第 群土器】晩期の土器 (第41図107~115、図版14)

107~112は鉢形土器口縁部破片であり、113・114は壺形土器肩部破片、115は注口土器頸部破片である。107~109の口縁部には太い沈線による曲線文が描かれる。110と111は刻み目による小波状を呈する。113・114には、つまみ出しによる隆線を有する。

1は、丸底を呈する深鉢土器で、器面全体に一見して右下がりにも左下がりにも見える整然とした縄文が密に施文されている。この縄文の原体はいわゆる「ピッチリ縄文」と名称されていた。近年この原体が「組縄縄文」と呼ぶべきものであることが解明された。この土器は、早稲田6類c式土器に比定される。2~4は不整撚糸文を施文する円筒下層a式土器、5~18は円筒下層c~d式土器であるう。19~27の土器は、C字状圧痕を施文する円筒上層b式土器である。28は口縁部に6条の平行沈線を胴部には変形Y字状入組文を施文する土器で、十腰内2式土器に比定できる。また、93~100の沈線による入組文を施文する土器も十腰内2式に比定できるだろう。107~109は口縁部に沈線による文様を施文しており、大洞B式土器であろう。また、115の注口破片も大洞B式土器であろう。

2 土製品 (第41図116、図版10・14)

いわゆる岩偶形土偶で、上半部と右脚部を欠損している。ウエストのくびれから腰にかけては急角度で広がり、腰から脚部先端にかけてはゆるやかな曲線を描く。腹部は沈線により三角形を描き、上部には沈線による曲線文が施文される。背面には沈線により渦巻文が施される。両面とも腰より低い位置は沈線で区画され、中に短沈線が充填される。この土偶は縄文時代晩期の遺物である。

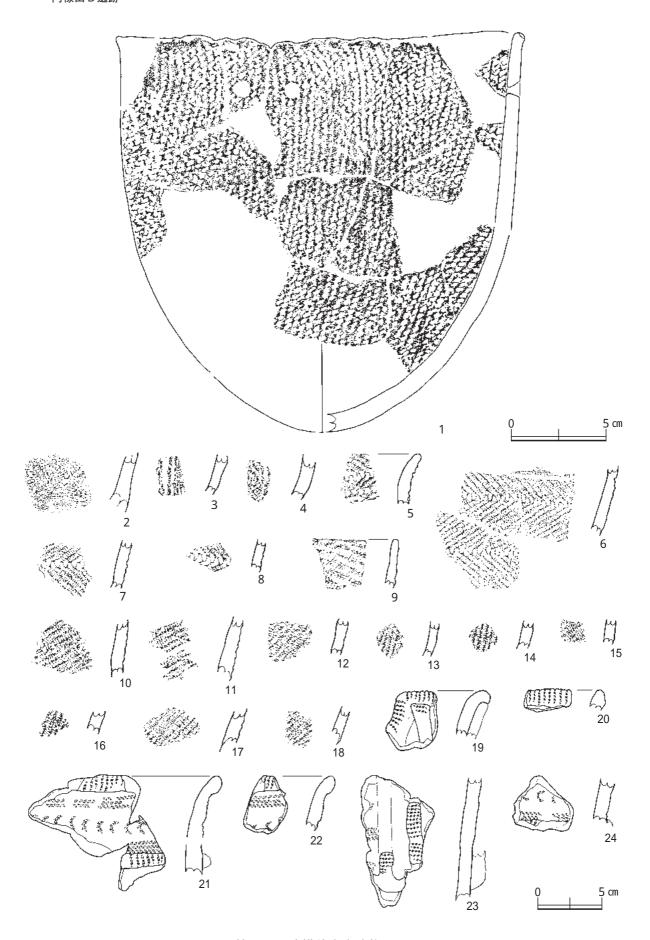
3 石器

石匙 (第42図117~121、図版15)

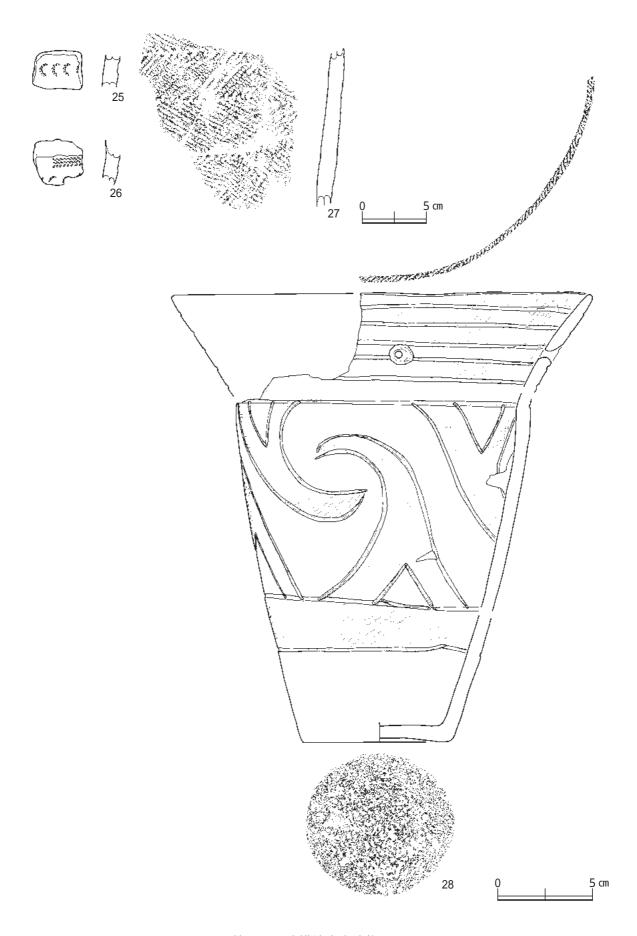
石匙は5点出土した。117~119は縦型石匙であり、120・121は横型石匙である。117は刃部だけでなく器面全体にていねいな調整が施されている。

スクレイパー (第42図122~第43図134、図版15)

スクレイパーは13点図示した。すべて片面のみの調整で刃部を作り出している。133と134は頭部が 欠損している。



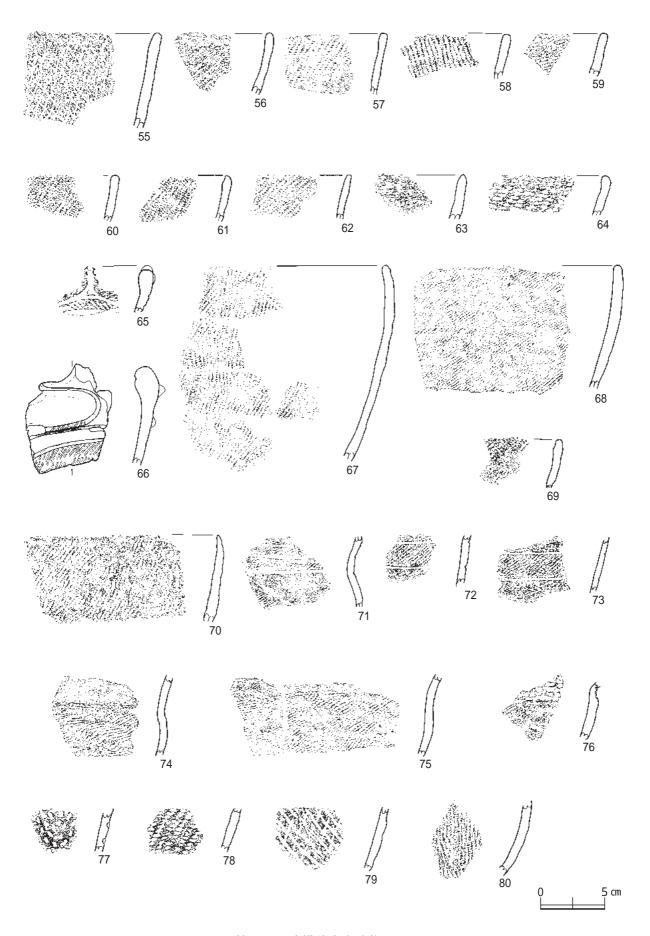
第36図 遺構外出土遺物 (1)



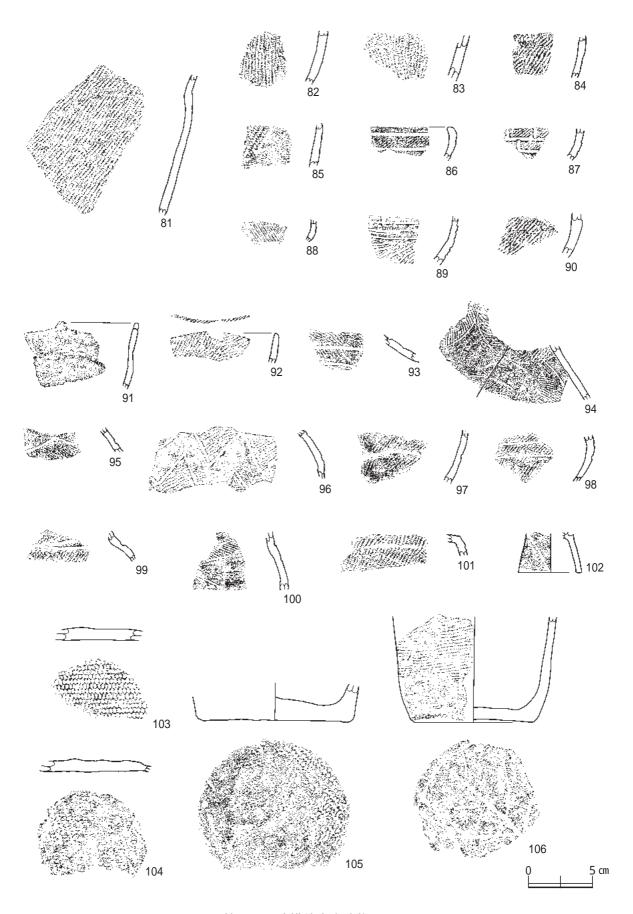
第37図 遺構外出土遺物 (2)



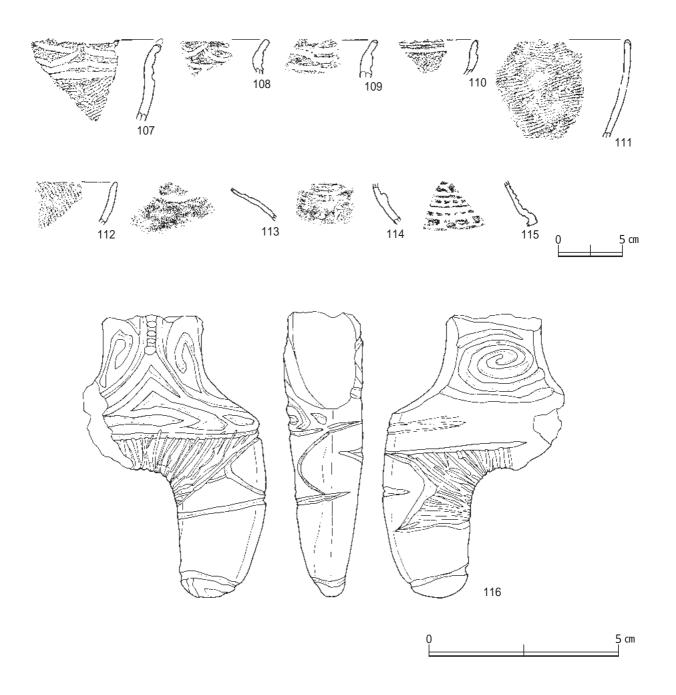
第38図 遺構外出土遺物 (3)



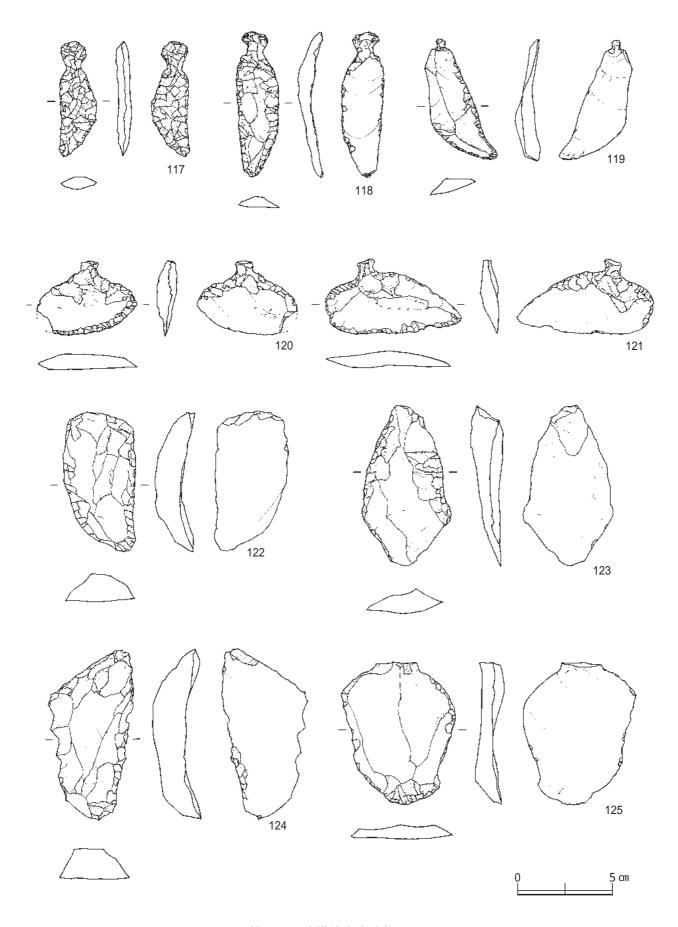
第39図 遺構外出土遺物 (4)



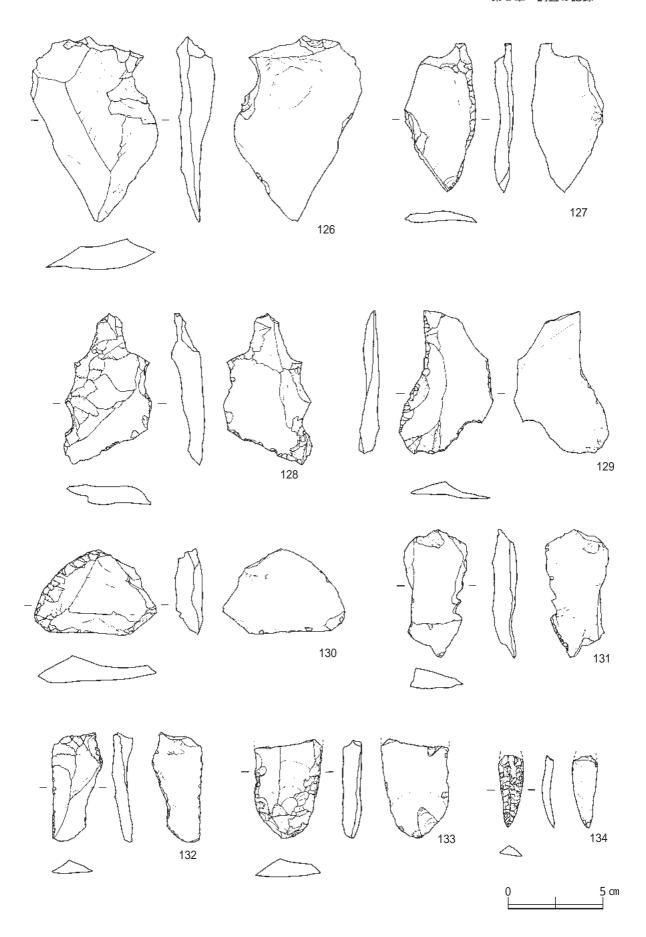
第40図 遺構外出土遺物 (5)



第41図 遺構外出土遺物 (6)



第42図 遺構外出土遺物 (7)



第43図 遺構外出土遺物 (8)

第3表 縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器形	部位	口唇部・口縁部	頸部	肩 部・胴 部	底部	分 類	備考
8 - 1	11 - 1	S K 40	壺	肩部			沈線による区画 磨消 LR 縄文		群 十腰内 2	
8 - 2	11 - 2	S K 40	深鉢	胴部			網目状撚糸文		群	外煤状炭化物
8 - 3	11 - 3	S K 40	注口	肩~胴部			肩部沈線1 沈線による弧線		群 大洞 С 1	
							文 胴部無文 沈線による区画 磨消 L R			
9 - 1	11 - 4	S K 42	壺	胴部			縄文		群 十腰内 2	
10 - 1	11 - 5	S K 48	深鉢	口縁部	口縁外反 無文				群	
10 - 2	11 - 6	S K 48	深鉢	胴部			L R縄文		群	外煤状炭化物
10 - 3	11 - 7	S K 48	深鉢	胴部			L R縄文		群	
11 - 1	11 - 8	S K 49	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文		L R縄文		群	
11 - 2	11 - 9	S K 49	深鉢	口縁部	口縁磨消		LR縄文		群	外煤状炭化物
11 - 3	11 - 10	S K 50	鉢	口縁部	口唇面取り 無文				群?	
11 - 4	11 - 11	S K 51	深鉢	胴部			RL縄文		群	
13 - 1	11 - 12	S K 55	鉢	口縁部	口縁沈線 1 磨消		LR縄文		群	
13 - 2	11 - 13	S K 55	深鉢	胴部			LR縄文		群	外煤状炭化物
13 - 3	11 - 14	S K 56	深鉢	胴部			LR縄文		群	
14 - 1	11 - 15	S K 59	深鉢	胴部			LR縄文		群	
14 - 2	11 - 16	S K 59	深鉢	胴部			LR縄文		群	
14 - 3	11 - 17	S K 59	深鉢	胴部			RL縄文		群	El Mel Industrate
14 - 4	11 - 18	S K77	深鉢	口縁部	口唇RL縄文		RL縄文		群	外煤状炭化物 15 - 2 ・ 3 ・ 6 同一個 体
15 - 1	11 - 19	S K77	深鉢	口縁部	口唇 R L 縄文		RL縄文		群	外煤状炭化物
15 - 2	11 - 20	S K77	深鉢	胴部			RL縄文		群	外煤状炭化物 14- 4、15-3・6と
15 - 3	11 - 21	S K77	深鉢	胴部			RL縄文		群	同一個体 外煤状炭化物 14- 4、 15-2・6
15 - 4	11 - 22	S K77	深鉢	胴部			RL縄文		群	と同一個体 外煤状炭化物 15-
15 - 5	11 - 23	S K77	深鉢	胴部			R L 縄文		群	5と同一個体外媒状炭化物 15-
15 - 6	11 - 24	S K77	深鉢	胴部			RL縄文		群	4と同一個体 外煤状炭化物 14- 4、15-2・3と 同一個体
16 - 1	11 - 25	S K 60	深鉢	胴部			L R縄文		群	15 IEF
17 - 1	11 - 26	S K 62	深鉢	胴部			LR縄文		群	外煤状炭化物
17 - 2	11 - 27	S K 64	深鉢	胴部			L R縄文		群	.,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
18 - 1	11 - 28	S K 65	壺	胴部			沈線による入組文 LR縄文 充填		群 十腰内 2	
18 - 2	11 - 29	S K 66	深鉢	胴部			RL縄文		群	
18 - 3	11 - 30	S K 66	Ш	胴部			沈線 1 無文		群 大洞 С 1 ?	外赤色顔料
18 - 4	11 - 31	S K 67	深鉢	胴部			LR縄文		群	
18 - 5	11 - 32	S K 67	深鉢	胴部			LR縄文		群?	
19 - 1	11 - 33	S K 68	深鉢	胴部			LR縄文		群?	
21 - 1	11 - 34	S K 89	壺	口縁部	無文				群	
21 - 2	11 - 35	S K 89	ミニチュア	胴~底部			無文		群	
21 - 3	11 - 36	S K 90	深鉢	胴部			RL縄文		群	内外煤状炭化物
24 - 1	11 - 37	S K 99	深鉢	胴部			RL縄文		群	内煤状炭化物
24 - 2	11 - 38	S K 100	深鉢	口縁部	口縁ケズリ		L R縄文		群	
26 - 1		S K 106	深鉢	胴部			LR縄文		群	外煤状炭化物
35 - 1		S X 101	深鉢	胴部			LR縄文		群	外煤状炭化物
35 - 2	11 - 41	S X 101	深鉢	胴部			LR縄文		群	LANCES OF THE STREET
36 - 1	12 - 42	L H35	深鉢	n=+-	口縁刺突による小波状		組縄縄文		群 早稲田6類c	繊維含む 補修孔
36 - 2	12 - 43	L H34	深鉢	胴部			不整燃糸文		群円筒下層a	繊維含む
36 - 3		K D31	深鉢	胴部			不整燃糸文		群円筒下層a	繊維含む
36 - 4		K D31	深鉢	胴部	羽状建立 工造游火压病期		不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
36 - 5	12 - 44	K D31	深鉢	口縁部	羽状縄文 下端撚糸圧痕間 に刺突				群 円筒下層 c ~ d	繊維含む 6・7 と同一個体 繊維含む 外煤状炭
36 - 6	12 - 45	K D31	深鉢	胴部			上端撚糸圧痕 羽状縄文		群円筒下層c~d	化物 5と同一個体
36 - 7		K D31	深鉢	胴部			羽状縄文		群 円筒下層 c ~ d	繊維含む 外煤状 炭化物 5・6と 同一個体
36 - 8		K D31	深鉢	胴部	<u> </u>		羽状縄文		群 円筒下層c~d	繊維含む
36 - 9	12 - 46	L E 33	深鉢	口縁部	緩やかな小波状		RL縄文		群 円筒下層 c ~ d	繊維含む 外煤状炭化物
36 - 10		K D31	深鉢	胴部			LR縄文		群 円筒下層c~d	繊維含む
36 - 11		K D31	深鉢	胴部			L R縄文		群 円筒下層c~d	繊維含む
36 - 12		K D31	深鉢	胴部			LR縄文		群 円筒下層c~d	繊維含む

28-14 KO31 次数 同部	1 4±40 0 ±0	
190 - 15		
195-16		
19-1-17 12-40 12-47 10-32 294 1958	<u> </u>	
18-1-19 12-47 1-32 29		
18		
36 - 20		
18		
18 - 12 12 - 50 1 - 10 1		
19-10 19-20 19	b	
12-52 12-53 12-53 12-53 13-62 深終	b	
12-92 12-93 10-93 深終	b	
37 - 26 12 - 54 L D 32 深純 胴部	b	
37 - 27 12 - 55 L D 32 深純	b	
17 - 28 12 - 56 L F 25 深終 日際無限に縄文 次線 6 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 深終 日 日経版工 2 2 - 57 L F 25 L F	b	
12-58 12-56 LF25 深終	b	
18 - 29 12 - 57 F-25 深林 口部 流域性 正端性 下 京 京 京 京 京 京 京 京 京	補修孔	
38 - 30 12 - 58 LF25 深体 口縁部 口縁形 口縁形 口縁所 口縁下流次 RL順文 日縁 口縁所		
18 - 30 12 - 29 12 - 20 12	補修孔	
38 - 33	外煤状炭化物	
38 - 34 13 - 60 L T 25 深鉢 口縁部 口縁和		
38 - 35 13 - 61 L F 25 深鉢 口縁部 口縁間 口縁横ナデ	外煤状炭化物	
38 - 36	外煤状炭化物	
38 - 37	外煤状炭化物	
38 - 38		
38 - 38	外煤状炭化物	
38 - 39		
38 - 41		
38 - 42		
38 - 43	内外煤状炭化物	
38 - 44		
38 - 45	外煤状炭化物	
38 - 46		
38 - 46		
38 - 47		
38 - 48	外煤状炭化物	
38 - 49 L H 34 深鉢 口縁部 沈線2 群 38 - 50 13 - 62 K D 36 深鉢 口縁部 陸線貼付 刺突文 群 38 - 51 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 38 - 52 13 - 63 J R 36 深鉢 口縁部 祭痕 群 38 - 53 13 - 64 J R 36 深鉢 口縁部 祭痕 群 38 - 54 L H 33 深鉢 口縁部 四縁田 日縁田 日縁田 田澤旭文 群 39 - 55 13 - 65 K B 33 深鉢 口縁部 周目状燃糸文 群 39 - 56 L H 34 深鉢 口縁部 口縁面 L R 縄文 群 39 - 57 L E 25 深鉢 口縁部 口縁面 D 段多条 R 縄文 群 39 - 58 L H 29 深鉢 口縁部 D 段多条 R 縄文 群 39 - 59 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 61 L P 23 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 62 L B 26 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 64 13 - 66 J P 36 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 65 13 - 67 J N 38 深鉢 口縁部	717/4/7/2/1013	
38 - 50 13 - 62 K D 36 深鉢 口縁部 陸線貼付 刺突文 群		
38 - 51		
38-52 13-63 JR36 深鉢 口縁部 奈痕 群 38-53 13-64 JR36 深鉢 口縁部 奈痕 群 38-54 LH33 深鉢 口縁部 日暦 39-57 LE25 深鉢 口縁部 口縁部 口縁部 口縁部 日月 日月 <td rowspa<="" td=""><td>外煤状炭化物</td></td>	<td>外煤状炭化物</td>	外煤状炭化物
38 - 53 13 - 64 JR36 深鉢 口縁部 奈痕 群 38 - 54 LH33 深鉢 口縁部 口縁日 口縁上 R縄文 群 39 - 55 13 - 65 KB33 深鉢 口縁部 日縁部 日縁田	- TANKAN TUTO	
38 - 54		
39-55 13-65 K B 33 深鉢 口縁部 網目状燃糸文 群 39-56 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39-57 L E 25 深鉢 口縁部 口唇面取り L R 縄文 群 39-58 L H 29 深鉢 口縁部 0 段多条 R 縄文 群 39-59 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39-60 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39-61 L P 23 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39-63 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39-63 L H 34 深鉢 口縁部 人 保 網文 群 39-64 13-66 J P 36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 R L 39-65 13-67 J N 38 深鉢 口縁部 表飾突起 沈線による区画 群		
39-56 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-57 LE25 深鉢 口縁部 口唇面取り LR縄文 群 39-58 LH29 深鉢 口縁部 O段多条R縄文 群 39-59 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-60 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-61 LP23 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-62 LB26 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-63 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-64 13-66 JP36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 RL 39-65 13-67 JN38 深鉢 口縁部 RL縄文 群	外煤状炭化物	
39-57 LE25 深鉢 口縁部 口唇面取り LR縄文 群 39-58 LH29 深鉢 口縁部 0段多条R縄文 群 39-59 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-60 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-61 LP23 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-62 LB26 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-63 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-64 13-66 JP36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 RL 群 39-65 13-67 JN38 深鉢 口縁部 表飾突起 沈線による区画 群	71 74-17/9/ 1019	
39 - 58 L H 29 深鉢 口縁部 0 段多条R縄文 群 39 - 59 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 60 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 61 L P 23 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 62 L B 26 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 63 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群 39 - 64 13 - 66 J P 36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 R L 群 39 - 65 13 - 67 J N 38 深鉢 口縁部 表飾突起 沈線による区画 R L 縄文 群		
39-59 L H34 深鉢 口縁部 L R縄文 群 39-60 L H34 深鉢 口縁部 L R縄文 群 39-61 L P23 深鉢 口縁部 L R縄文 群 39-62 L B26 深鉢 口縁部 L R縄文 群 39-63 L H34 深鉢 口縁部 L R縄文 群 39-64 13-66 J P36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 R L 群 39-65 13-67 J N38 深鉢 口縁部 表飾突起 沈線による区画 群		
39-60 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-61 LP23 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-62 LB26 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-63 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-64 13-66 JP36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 RL 39-65 13-67 JN38 深鉢 口縁部 表飾突起 沈線による区画 群		
39-61 LP23 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-62 LB26 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-63 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-64 13-66 JP36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 RL 39-65 13-67 JN38 深鉢 口縁部 装飾突起 沈線による区画 RL縄文 群		
39-62 LB26 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-63 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-64 13-66 JP36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 RL 39-65 13-67 JN38 深鉢 口縁部 装飾突起 沈線による区画 RL縄文 群		
39-63 LH34 深鉢 口縁部 LR縄文 群 39-64 13-66 JP36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 RL 39-65 13-67 JN38 深鉢 口縁部 装飾突起 沈線による区画 RL縄文 群	7A-1/1/2/ 1 L 1/2/	
39 - 64 13 - 66 J P 36 深鉢 口縁部 内側に折り返し口縁 R L 39 - 65 13 - 67 J N 38 深鉢 口縁部 装飾突起 沈線による区画 R L縄文 群		
39 - 65 13 - 67 J N 38 深鉢 口縁部 装飾突起 沈線による区画 R L 縄文 群		
39 - 66 13 - 68 L F 25 深鉢 口縁部 口縁隆線貼付 沈線による区画 磨消 L R 群	内煤状炭化物	
39 - 67	外煤状炭化物	
39 - 68 13 - 69 L J 32 深鉢 口縁部 L R縄文 L R縄文 群		
39 - 69 L H 34 深鉢 口縁部 L R 縄文 群		

39 - 70		J Q36	深鉢	口縁部	LR縄文				群		
39 - 71		L I 33	深鉢	胴部	口縁沈線3 沈線による区		磨消 LR縄文		群		
39 - 72		L F 25	深鉢	胴部	画 LR縄文		沈線 2 磨消 LR縄文		群		73と同一個体
39 - 73		L F 25	深鉢	胴部			沈線 2 磨消 LR縄文		群		72と同一個体
39 - 74	13 - 70	L F 25	深鉢	胴部	下端撚糸圧痕 無文		LR縄文		群		720日 旧座
39 - 75	13 - 71	L F 25	深鉢	胴部	上端撚糸圧痕 無文		LR縄文		群		
	13 - 71	J R 36	深鉢						群		
39 - 76	13 - 72	K D33	深鉢	胴部	口縁下端沈線 1 刺突文		L R縄文 刺突文			n 示否	
39 - 77		J R 36		胴部					群初	J 英	
39 - 78	13 - 73		深鉢	胴部			RL縄文		群		
39 - 79	13 - 74	K H34	深鉢	胴部			網目状撚糸文		群初	リ	
39 - 80		L D 25	深鉢	胴部			LR縄文		群		61 344 J 15 44 / 14 4 6m
40 - 81		L D33	深鉢	胴部			LR縄文		群		外煤状炭化物
40 - 82	13 - 75	L D 25	深鉢	胴部			LR縄文		群		
40 - 83		L D 25	深鉢	胴部			撚糸文		群		
40 - 84		L P 32	深鉢	胴部			LR縄文		群		
40 - 85		L P 32	深鉢	胴部			LR縄文		群		
40 - 86		L P 25	鉢	口縁部	口唇面取り 口縁上端磨消 口縁沈線 2 LR縄文				群		
40 - 87	13 - 76	L F 25	鉢	胴部	沈線2 磨消				群		
40 - 88	13 - 77	L F 25	鉢	胴部			多条沈線		群		
40 - 89	13 - 78	K C 31	鉢	胴部			多条沈線による曲線文		群	十腰内 1	
40 - 90		L H34	鉢	胴部			無節L縄文		群		
40 - 91		L E 25	鉢	口縁部	小突起 無文				群		
40 - 92		L E 25	壺	口縁部	口唇LR縄文 口縁LR縄文				群		
40 - 93		L D32	壺	肩部		沈線 2 R L 縄文 磨消			群	十腰内 2	
40 - 94		J O39	壺	胴部			上端沈線 2 沈線による区画 磨消 L R縄文充填		群	十腰内 2	
40 - 95		L F 25	壺	胴部			沈線による区画 磨消 RL縄文		群	十腰内 2	
40 - 96	13 - 79	L E 25	壺	胴部			沈線による区画 磨消 RL縄文		群	十腰内 2	
40 - 97		L F 25	壺	胴部			沈線1 LR縄文		群	十腰内 2	
40 - 98		L P 25	壺	胴部			沈線2 LR縄文		群	十腰内 2	外煤状炭化物
40 - 99		L F 25	壺	胴部			沈線による区画 磨消 LR縄文		群	十腰内 2	赤色顔料?
10 - 100		排土	壺	胴部			沈線による区画 磨消 RL縄文		群	十腰内 2	赤色顔料
10 - 101		L F 25	壺	肩部			LR縄文		群		
10 - 102		L F 25		台部				無文	群		
10 - 103	13 - 80	L D31		底部				網代痕	群		
10 - 104	13 - 81	L E 25		底部				網代痕	群		
10 - 105	14 - 82	L F 25		底部				網代痕	群		
10 - 106	14 - 86	L F 25		底部			L R縄文	木葉痕	群		外煤状炭化物
1 - 107	14 - 83	L H34	鉢	口縁部	刻み目による小波状 口縁 曲線文		LR縄文	112/100		 大洞 B	外煤状炭化物 108と同一個体
1 - 108		L H34	鉢	口縁部	口縁曲線文				群	 大洞 B	107と同一個体
11 - 109		L H34	鉢	口縁部	口唇刻み目 口縁曲線文				群	 大洞 B	
11 - 110		L H 29	鉢	口縁部	刻み目による小波状 沈線 2 磨消		LR縄文		群		
1 - 111	14 - 84	J Q36	鉢	口縁部	刻み目による小波状 無節 L 縄文				群		外煤状炭化物
1 - 112		L F 26	鉢	口縁部	口緣内有段 RL縄文				群		外煤状炭化物
1 - 113		排土	壺	頸部		下段つまみ出 しによる隆線			群		内外赤色顔料
11 - 114		L B 25	壱	頸部		下段つまみ出 しによる隆線			群		外赤色顔料
1 - 115	14 - 85	L F 24	注口	頸部		沈線 5 沈線 間刻み目 刻 み目による文 様帯			群:	大洞B	

第4表 石器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
8 - 4	15 - 88	S K 40	スクレイパー	頁岩	51.2	42.0	15.0	26.8
9 - 2	15 - 89	S K 42	石核	頁岩	37.0	25.0	5.2	13.3
42 - 117	15 - 90	J S 36	石匙	頁岩	61.5	20.5	12.0	10.0
42 - 118	15 - 91	J P38	石匙	頁岩	77.0	23.0	6.0	12.0
42 - 119	15 - 92	K D30	石匙	頁岩	63.5	34.1	8.1	10.8
42 - 120	15 - 93	L T 25	石匙	頁岩	40.0	53.0	9.0	16.9
42 - 121	15 - 94	L D33	石匙	頁岩	40.1	72.0	9.0	19.9
42 - 122	15 - 95	K E 34	スクレイパー	頁岩	78.8	39.1	15.0	49.4
42 - 123	15 - 96	K D34	スクレイパー	頁岩	85.0	45.0	13.0	45.5
42 - 124	15 - 97	K P 32	スクレイパー	頁岩	91.0	46.0	17.0	80.0

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
42 - 125	15 - 98	排土	スクレイパー	頁岩	76.0	60.5	8.0	48.0
43 - 126	15 - 99	J Q36	スクレイパー	頁岩	98.0	54.5	16.1	78.0
43 - 127	15 - 100	K E 34	スクレイパー	頁岩	79.0	38.0	6.0	13.7
43 - 128	15 - 101	K B 35	スクレイパー	頁岩	80.8	46.5	11.0	36.6
43 - 129	15 - 102	J R 36	スクレイパー	頁岩	79.9	50.5	9.1	18.0
43 - 130	15 - 103	L T 25	スクレイパー	頁岩	45.5	64.1	14.9	36.3
43 - 131	15 - 104	J Q38	スクレイパー	頁岩	68.0	33.5	11.1	22.2
43 - 132	15 - 105	J S 36	スクレイパー	頁岩	58.0	27.0	7.1	11.6
43 - 133	15 - 106	L D31	スクレイパー	頁岩	52.0	36.0	10.0	22.5
43 - 134	15 - 107	J Q35	スクレイパー	頁岩	38.0	13.1	5.5	2.0

第3章 自然科学的分析

第1節 出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

北秋田郡森吉町に所在する当遺跡の土坑 S K 67・90・79、溝跡 S D 73から出土した炭化材の樹種同 定結果を報告する。この樹種調査は、当遺跡や周辺地域の古環境を復元していく目的で資料を蓄積し ていく一環として実施されている。

2 炭化材樹種同定の方法

一括採取された試料であり、出土した炭化材破片は小さいものが多かった。樹種同定は、同定可能な大きさの破片を出来るだけ多く観察した。また試料中に複数の樹種が含まれていた試料では、樹種同定用と年代用が同一破片で確保できる大きさのものを年代測定用試料として選別した。

樹種同定は、炭化材の3方向 (横断面・接線断面・放射断面) の断面を走査電子顕微鏡 (日本電子 株製 JSM-T100型) で拡大し、材組織の特徴を観察し、同定と写真撮影を行った。

3 結果

同定結果の一覧を、第5表にまとめた。検出された分類群は、針葉樹のスギ、落葉広葉樹のクリ・カエデ属・トネリコ属であった。土坑67・90・79からは、クリが共通して検出され、そのほかにカエデ属・トネリコ属・スギが検出された。溝跡から出土した針葉樹材はスギであり、スギは土坑90からも検出されている。

以下に同定の根拠とした材組織の観察結果を分類配列順に記載する。

スギ Cryptomeria japonica D. Don スギ科 図版16 1 a-1 c (SD73 PLD-1198) 2 a-2 c (SK90)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。典型的なスギ材に比べ、晩材部の量はやや多い 程度で、仮道管壁もあまり厚くない。これは、北陸や東北のスギ材に見られる傾向がある。分野壁孔 は大きなスギ型で1分野に2~3個ある。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 図版16 3 a-3 c (S K 67 PLD-1195)

年輪の始めに中型~大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

カエデ属 Acer カエデ科 図版16 4a-4c (SK67)

小型の管孔が単独または2~3個が放射状に複合し、均一に分布し年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版16 5a-5c (SK67)

脆い小破片で大型の管孔が配列する部分で割れる為、1年輪分の管孔配列は確認できなかったが、 年輪前半に大型の管孔が分布し、その後は急に径を減じて厚壁で小型または非常に小型の管孔が単独

や放射方向に2個接合して分布し、周囲状・接線状柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔 は単一である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。

遺跡名 遺構 検出樹種 備考 年代測定試料 クリ 破片 5 PLD-1195 (3破片) S K 67 カエデ属 破片 1 破片 1 トネリコ属 スギ 向様田B 破片複数 PLD-1196 (1破片) S K 90 クリ 節部1 クリ 破片 1 PLD-1197 (1破片) S K 79 破片1 S D 73 スギ PLD-1198 (1破片)

第5表 出土炭化材の樹種同定結果

第2節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

向様田B遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2 試料と方法

試料は、SK67遺構内から出土した炭化材 (クリ) 1点、SK90遺構内から出土した炭化材 (スギ) 1点、SK79遺構内から出土した炭化材 (クリ) 1点、SD73トレンチ内から出土した炭化材 (スギ) 1点の併せて4点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した 後、加速器質量分析計 (AMS 法) にて測定した。測定された¹⁴ C 濃度について同位体分別効果の補正 を行なった後、補正した¹⁴ C 濃度を用いて¹⁴ C 年代を算出した。

3 結果

第6表に、各試料の同位体分別効果の補正値 (基準値 - 25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差 を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

14 C 年代値(yrBP)の算出は、14 C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した14 C 年代誤差(± 1)は、計数値の標準偏差 に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の14 C 年代が、その14 C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の14 C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14 C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14 C 濃度の変動、および半減期の違い(14 C の半減期5,730 ± 40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、14 C 年代を暦年代に変換することである。 具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と14 C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて14 C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて14 C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

14 C年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正値は14 C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された14 C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

測定番号	試料データ	¹³ C _{PDB}	14 C 年代	14 C 年代を暦年代に較正した年代				
(測定法)	11八十十一 ク	(‰)	(yrBP ± 1)	暦年代較正値	1 暦年代範囲			
PLD-1195 (AMS)	炭化材 No. 1 (クリ) S K67遺構内	- 26.0	4040 ± 30	cal BC 2570 cal BC 2515 cal BC 2500	cal BC 2580 - 2555 (34.5%) cal BC 2540 - 2495 (58.9%)			
PLD-1196 (AMS)	炭化材 No. 2 (スギ) S K 90遺構内	- 24.8	1510 ± 30	cal AD 545 cal AD 550 cal AD 560	<u>cal AD 535 - 605 (100%)</u>			
PLD-1197 (AMS)	炭化材 No. 3 (クリ) S K79遺構内	- 25.5	3100 ± 30	cal BC 1395 cal BC 1325	cal BC 1400 - 1370 (61.4%) cal BC 1340 - 1315 (33.8%)			
PLD-1198 (AMS)	炭化材 No. 4 (スギ) S D73トレンチ内	- 23.5	80 ± 30	cal AD 1900 cal AD 1905 cal AD 1950	cal AD 1695 - 1725 (28.3%) cal AD 1815 - 1835 (20.4%) cal AD 1875 - 1915 (47.0%)			

第6表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

* S D73は遺構ではないと判断した

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の¹⁴C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴ C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴ C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第4章 まとめ

向様田B遺跡は、遺跡の性格上大きく二分される。配石遺構を検出した遺跡東部は、祭祀関連跡であり、土坑をまとまって検出した遺跡西部は集落跡または墓域と考えられる。なお、遺跡中央部では土坑1基を検出しただけである。

遺跡東部の南側には一面に段丘礫が露出しており、その段丘礫の中に配石遺構が構築されている。 検出した遺構は土坑3基と配石遺構14基である。検出した土坑2基は、基本土層の断面図作成のため トレンチ掘りをし、その断面から遺構と判断したもので、SK108土坑はSQ86配石遺構の掘り込み を確認する際に検出したものである。いずれも掘り込みは浅く、地山面までは掘り込んでいない。段 丘礫が一面に広がっている中での遺構確認は困難を極め、その他の遺構を確認することはできなかっ た。配石遺構は段丘礫を使用しており、プランは円形または楕円形に配石している。下部には掘り込 みが伴わず、共伴する遺物も出土していない。円形または楕円形に配石されている遺構の中で、SQ 03配石遺構だけが隅丸方形を呈する。出土位置も、本遺構だけが遺跡北側の地山面に構築されており、 他の配石遺構とは様相を異にする。遺跡東部は、南側の段丘礫が露出している部分を除いて、ほ場整 備の際に地山面まで削平されている。そのため、遺構外出土遺物はほとんど出土していない。

遺跡西部では、土坑51基、配石遺構3基、性格不明遺構1基を検出した。遺構確認面で礫を伴って検出される土坑が多く、ほぼすべての土坑内に多かれ少なかれ礫が入れられている。S K 97土坑は、長軸4.36m、短軸2.80mと本遺跡の中で最大規模の土坑である。この土坑内にも、全面に礫が入れられていた。このように、土坑内全体に礫が埋められている土坑も多い。遺構に伴う遺物の出土は非常に少なく、縄文時代後期のみの遺物が出土した遺構は、S K 42・48~51・55・56・58・60・63・65~68・77・89・99・100・106土坑、S X 101性格不明遺構である。中でもS K 77土坑からは比較的多くの土器破片が出土した。また、S K 40土坑では、縄文時代後期の土器破片と共に晩期の土器破片が出土している。遺跡西部もほ場整備の際に削平されており、縄文時代の遺物包含層は、南側の落ち際にわずかに残存するのみである。この遺物包含層からは、縄文時代後期中葉の土器が出土している。

上記の調査結果から向様田B遺跡について若干の考察を述べる。遺構西部の土坑群の構築時期に関しては二時期考えられる。一つは、土坑群が縄文時代後期の所産と考える場合である。土坑内の出土遺物から判断すると、S K 40土坑以外の出土遺物はすべて縄文時代後期の土器である。また、南側には縄文後期の遺物包含層が残存しており、南側に隣接する向様田C遺跡の北側斜面でも縄文時代後期中葉の土器が大量に出土している。なお、これらの土器については向様田C遺跡の報告書で詳しく記載している。向様田C遺跡は縄文時代晩期の遺跡である。向様田C遺跡で出土したこれらの土器は、本来は向様田B遺跡に伴うものであり、縄文時代後期の捨て場だった可能性もあろう。もし、向様田B遺跡の土坑群が縄文時代後期の所産である場合、その機能は何だったのだろうか。副葬品と考えられる遺物はないが、ほとんどの土坑内に礫が入っていることから、土坑墓と考え、遺跡西側は墓域ととらえることもできるだろう。ただし、地山面には段丘礫が埋まっており、土坑を埋めたときに掘り上げた礫が偶然入ったとも考えられ、貯蔵穴の可能性もある。縄文時代後期の住居跡は検出されなかったが、集落跡の可能性が高い。縄文時代後期の住居跡は遺跡範囲外北側にでもあるのだろうか。

もう一つは、土坑群が縄文時代晩期の所産と考える場合である。西側に隣接する向様田 A 遺跡と向

様田 B 遺跡は、現代の道路で区切られているが、元々は同一段丘上にある遺跡である。向様田 A 遺跡の東部で約60基の土坑を検出しており、そのうち40基を配石墓または土坑墓としている。配石墓または土坑墓としている土坑内には礫が大量に入れられており、土坑の形態等も本遺跡の土坑と類似する。 S K 79土坑で検出した炭化物試料の放射性炭素年代測定の結果では、暦年代範囲を縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけている。向様田 A 遺跡の出土土器は大洞 B C 式の土器が中心であり、時期的には一致する。本遺跡の土坑群が縄文時代晩期に帰属するものならば、土坑のほとんどは向様田 A 遺跡から続く縄文時代晩期の土坑墓であり、遺跡西側一帯が墓域を形成していたと考えられる。

次に、遺跡東部の配石遺構の構築時期であるが、やはり二時期考えられる。共伴する出土遺物が皆無のため時期を確定することは難しいが、基本的には遺跡西部の土坑群と同時期の所産であろう。向様田A遺跡の配石遺構と比較すると、本遺跡の配石遺構はプランも不明確であり下部に掘り込みもない。また、焼土が含まれている遺構もなく向様田A遺跡の配石遺構とは異なる。ただし、向様田C遺跡で検出したSQ03配石遺構は、隅丸方形を呈しており、前述した本遺跡のSQ03配石遺構と形態・規模ともに類似し、何らかの関連が考えられる。

もし本遺跡が縄文時代晩期の遺跡であるならば、向様田地区に位置する向様田A・B・C・D遺跡は一連の遺跡となる。この広大な遺跡内には、縄文時代晩期の竪穴住居跡が検出されていない。小又川流域沿いの各小集落から集まって遺構を構築し、大規模な祭祀行為をしたのだろうか。

小又川流域の今後の調査により、本遺跡の性格等がより解明されることを期待する。

参考文献

- 秋田県教育委員会 『深渡遺跡 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 』 秋田県文化財調査報告書第 286集 1999 (平成11) 年
- 秋田県教育委員会 『桐内 C 遺跡 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 』 秋田県文化財調査報告書 第299集 2000 (平成12) 年
- 秋田県教育委員会 『桐内沢遺跡・日廻岱 A 遺跡 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 』 第335集 2002 (平成14) 年
- 高橋亜貴子 「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」 「加藤 稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集」 加藤 稔先生還暦記念会 1992 (平成4) 年
- 脚岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『長倉 遺跡発掘調査報告書 広域農道整備事業関連遺跡発掘調査』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集 2001 (平成13) 年
- 財団法人齋藤報恩会編 『宝ヶ峰』 財団法人齋藤報恩会 1991 (平成3) 年
- 日本柳正一 鹿角扇三 佐藤達夫 「青森県北上北郡早稲田貝塚」 『考古學雑誌』 第43巻第2号 日本考古學會 1957 (昭和32)年
- 村越潔 『円筒土器文化』 雄山閣 1974 (昭和49) 年
- 鈴木克彦 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2 十腰内2式土器の研究 」 『考古學雑誌』 第81巻第4号 日本考古学會 1996 (平成8) 年
- 鈴木克彦 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2 (上) 十腰内3,4,5 式土器の研究-」 『考古學雑誌』 第83巻第2号 日本考古学會 1998 (平成10)年

鈴木克彦 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2 (下) - 十腰内3,4,5 式土器の研究-」 『考古學雑誌』 第83巻第3号 日本考古学會 1998 (平成10)年

鈴木克彦 『北日本の縄文後期土器片年の研究』 雄山閣 2001 (平成13) 年

渡辺誠・南博史 共編 『古代學研究所研究報告 第5輯 青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』 財團法人 古代 學協會 1997 (平成9) 年

秋田県教育委員会 『からむし岱 遺跡 - 大館能代空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県教委員会 2002 (平成14) 年

稲野裕介 「亀ヶ岡文化における岩偶 (2) - 岩偶形土偶の下半部資料について - 」 『土偶研究の地平「土偶とその情報」 研究論集 (3)』 勉誠出版 1999 (平成11) 年

鈴木道之助 『図録・石器入門事典 <縄文 >』 柏書房 1994 (平成6) 年

秋田県埋蔵文化財センター 『向様田 A 遺跡発掘調査資料』 2001 (平成13) 年

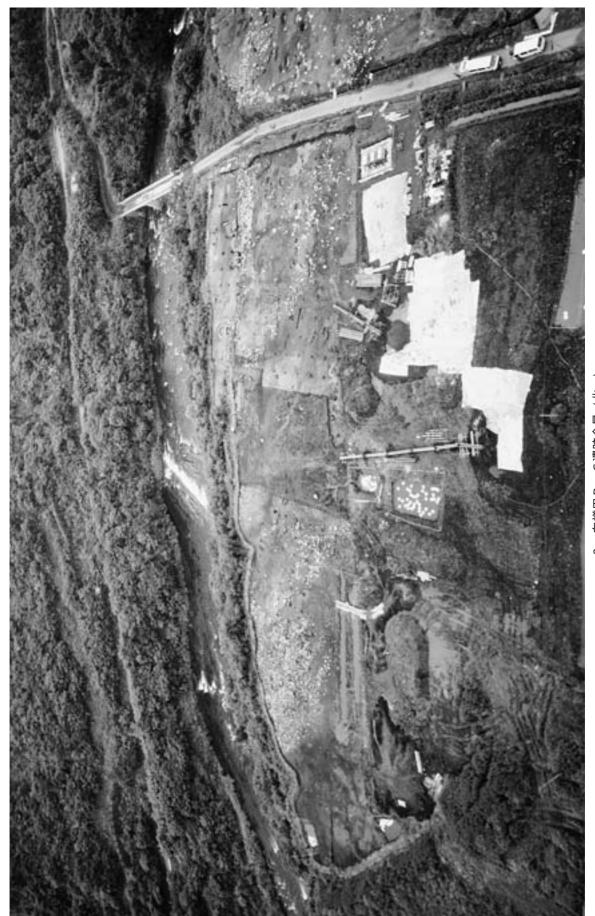
秋田県埋蔵文化財センター 『向様田A遺跡発掘調査資料』 2002 (平成14) 年

秋田県埋蔵文化財センター 『向様田 D遺跡発掘調査資料』 2002 (平成14) 年

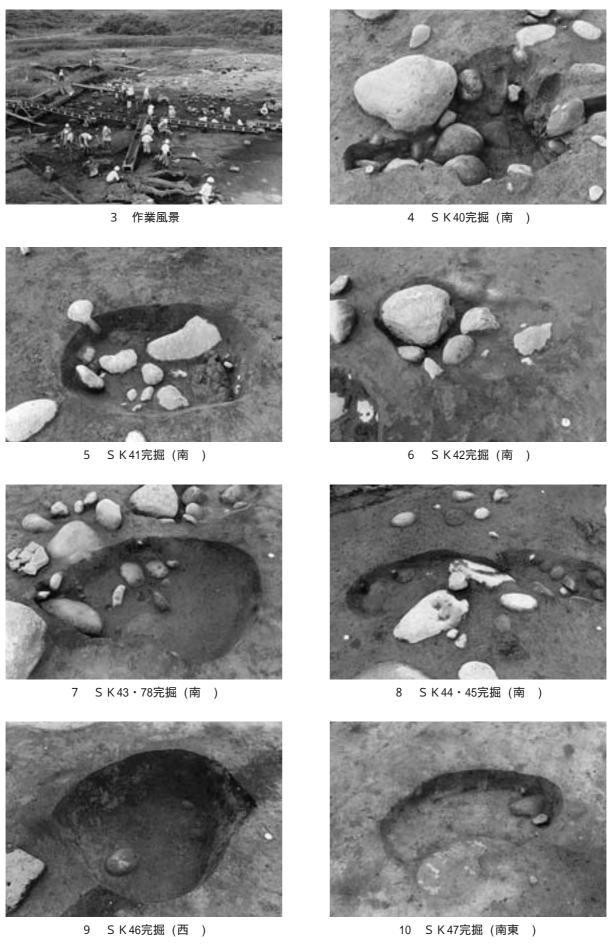
秋田県埋蔵文化財センター 『向様田F遺跡発掘調査資料』 2002 (平成14) 年



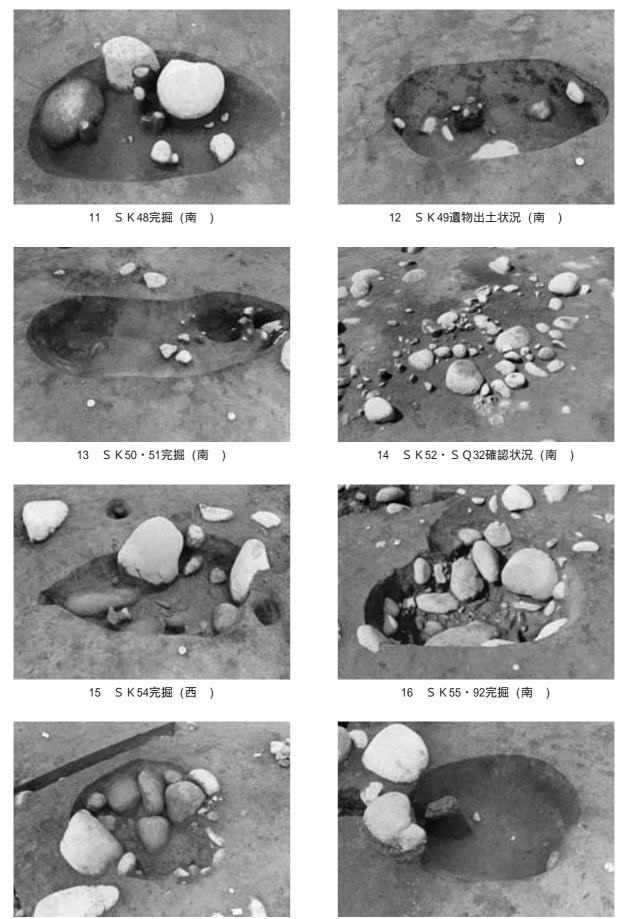
向様田遺跡群全景(上が南) 向様田遺跡群全景



向様田B・C遺跡全景(北) 向様田B・C遺跡全景



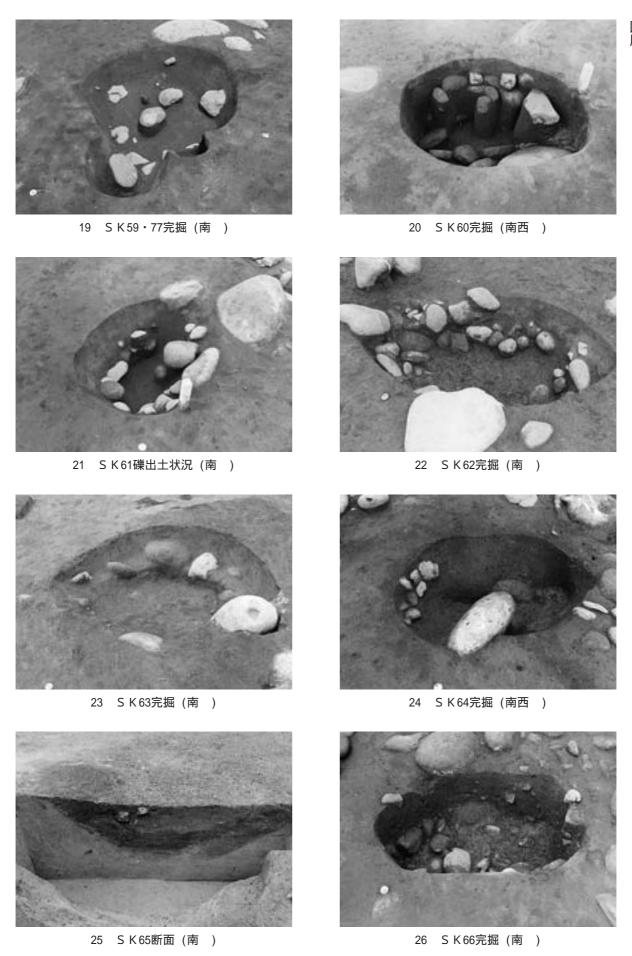
検出遺構 (1)



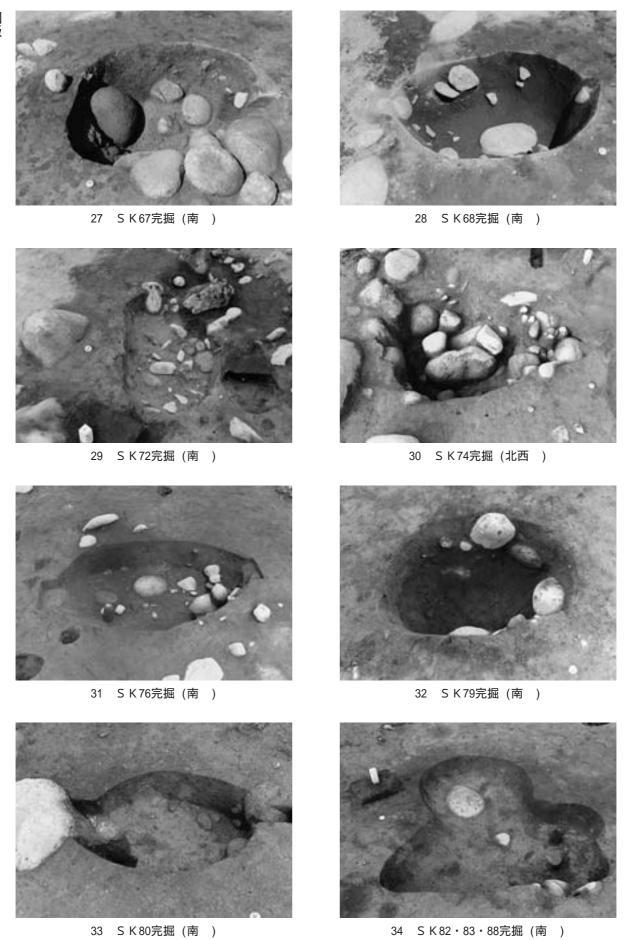
検出遺構 (2)

18 S K 58完掘 (南)

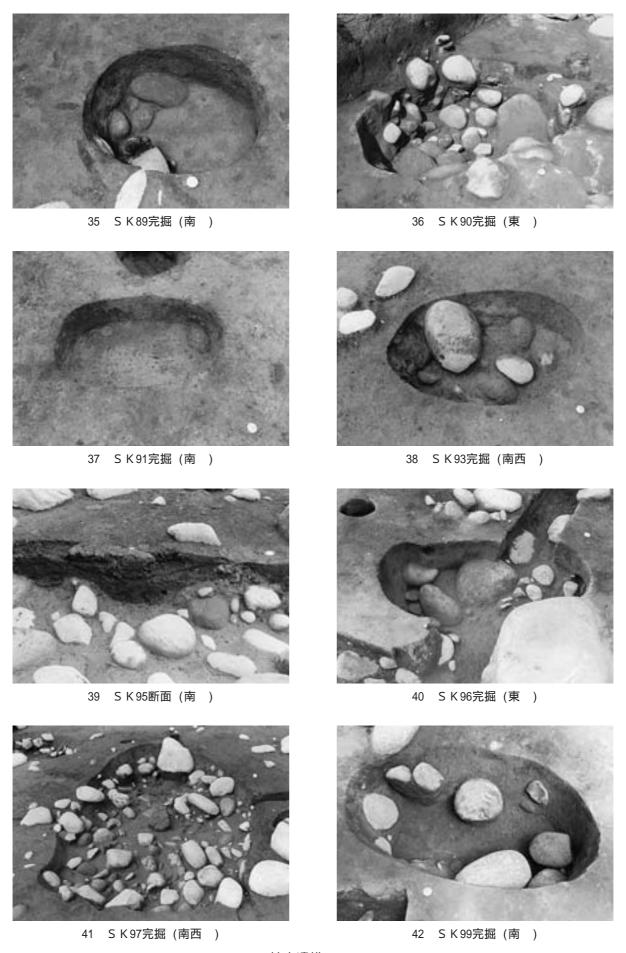
17 S K 56完掘 (南)



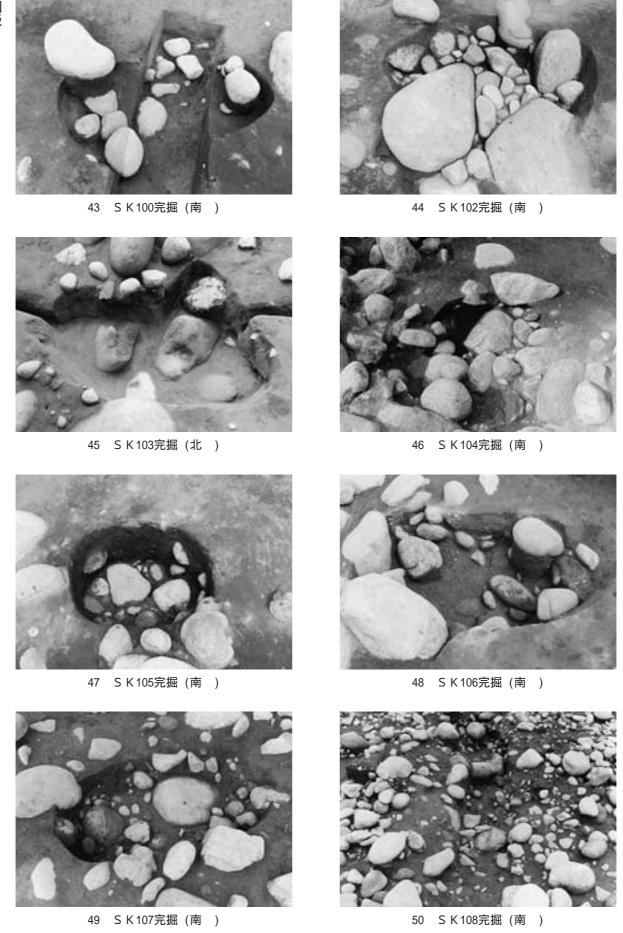
検出遺構 (3)



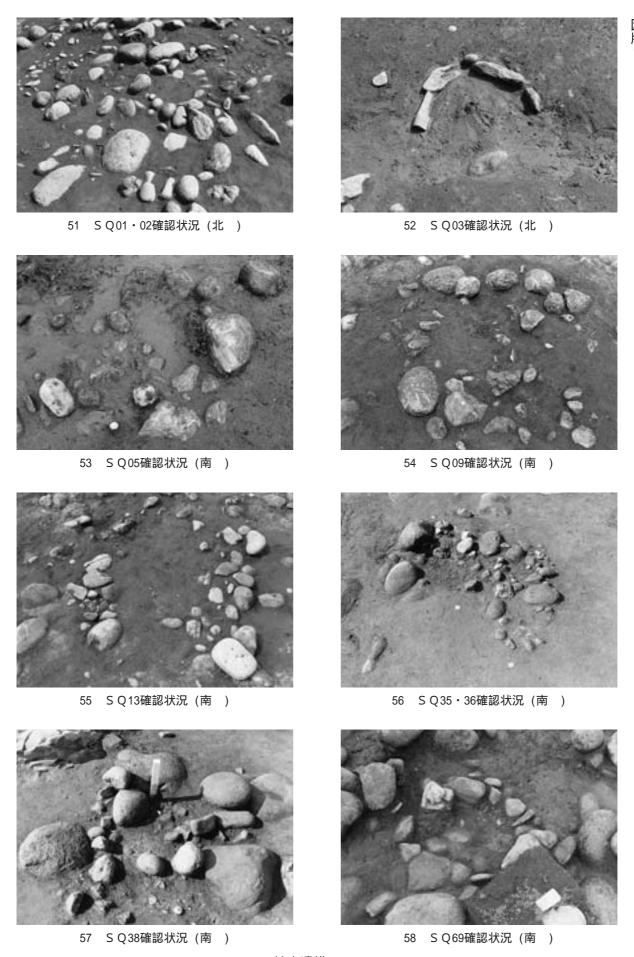
検出遺構 (4)



検出遺構 (5)



検出遺構 (6)



検出遺構 (7)

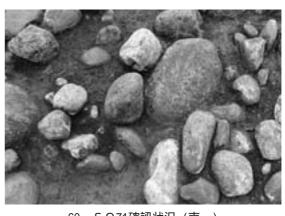




S Q86確認状況 (南)



S X 101完掘 (南)



60 SQ71確認状況 (南)



62 SQ85確認状況 (東)

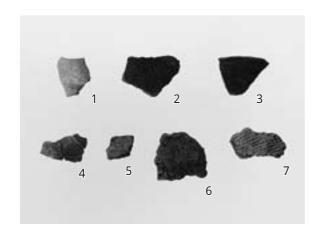


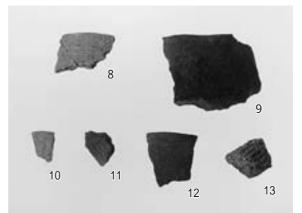
64 S Q 87確認状況 (東)

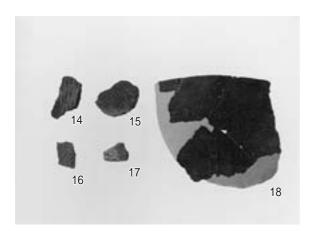


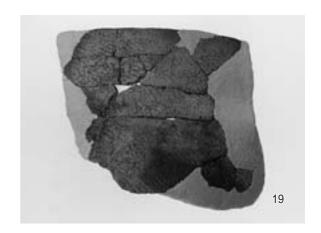
66 遺構外遺物出土状況 (西)

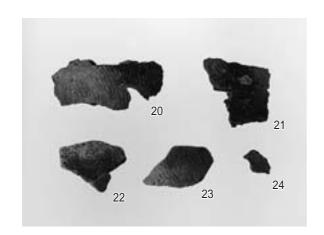
検出遺構(8)

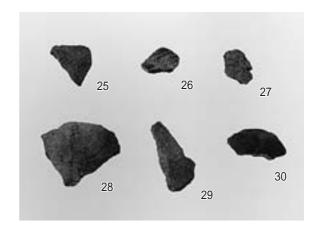


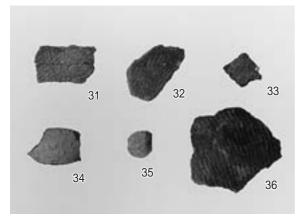


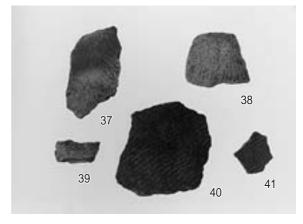






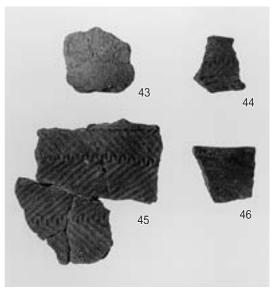


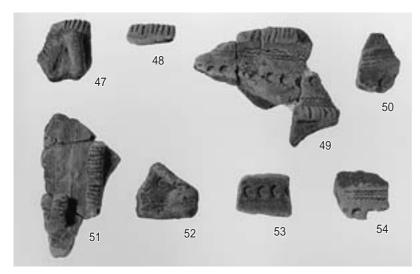




出土遺物 (1)

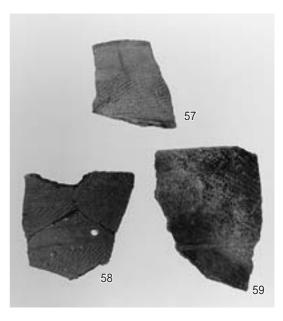






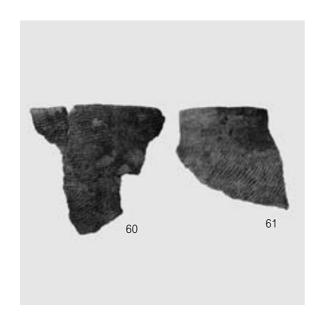


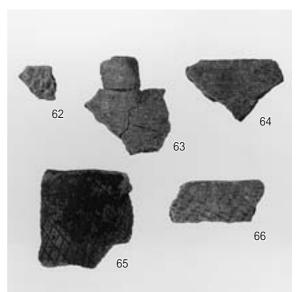


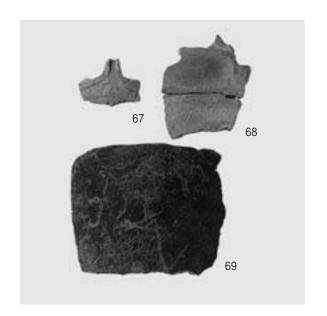


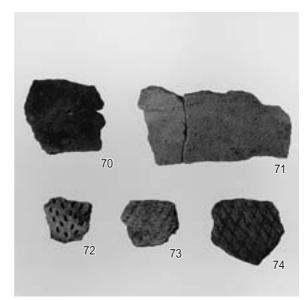
出土遺物 (2)

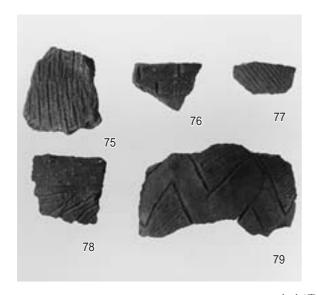


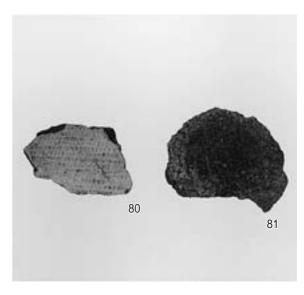






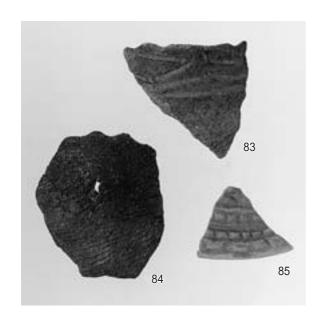






出土遺物 (3)





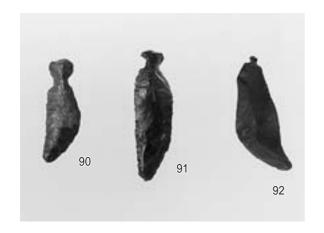


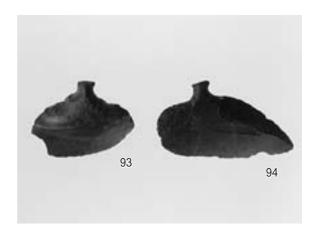


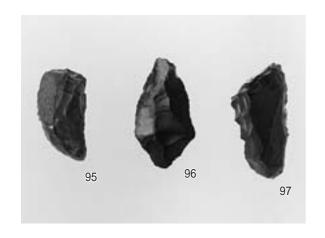
出土遺物 (4)

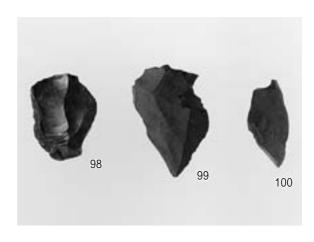


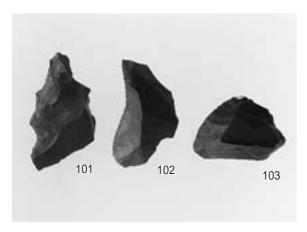


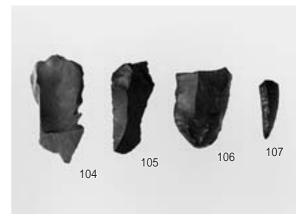




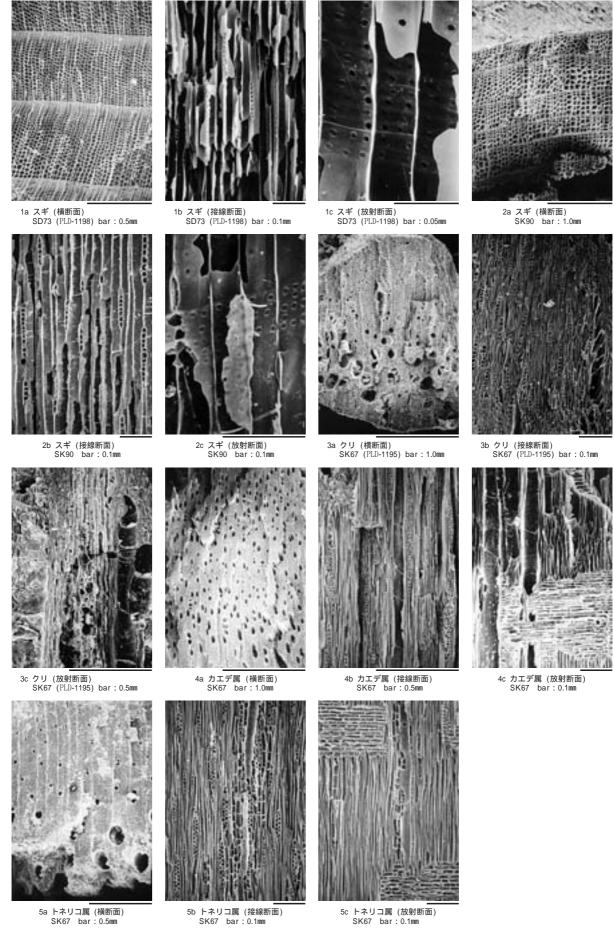








出土遺物 (5)





第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

向様田C遺跡は、小又川右岸の段丘上に立地し標高は約132mである。遺跡北側は斜面になっており、標高約136mの高位段丘上に立地する向様田B遺跡と接する。向様田B遺跡西側は、町道で区画された向様田A遺跡が同一段丘上に立地する。また、遺跡東側には、標高約138mの高位段丘上に向様田F遺跡が立地する。向様田A遺跡の西側には標高約134mの段丘上に向様田D遺跡が隣接し、北側の標高約145~159mの丘陵地に向様田E遺跡がある。かつて、向様田A~D・F遺跡は水田として、向様田E遺跡は畑として利用されていた。

第2節 調査の方法

1 野外調査

調査はグリッド法で行った(第4図)。調査対象全域にグリッド杭を打設するため、建設省が打設した4級基準点DT1とDT2より設定した基準杭、昨年度向様田A遺跡で原点としたMA50(X4316.000, Y-30145.000)を基準杭とした。この基準杭を原点として、原点を通る国家座標第 系の南北方向に南北基準線X軸を設定した。これに直交して、原点を通る線を東西基準線Y軸とし、両基準線を延長して当該区内に4×4m方眼グリッドを組んだ。基準杭をMA50として、南から北へ4mごとに、・・・、47、48、49、50、51、・・・、と南北方向を示す数字と、東から西に、・・・、MM、MN、MO、・・・、と東西方向を示すアルファベットの2文字を付した。各グリッドの呼称は、南北方向の杭を通るX軸と東西方向の杭を通るY軸の組み合わせで、MA50、MB51、MC52、・・・、のようにグリッド東南隅の杭によって呼ぶこととした。

遺構は検出順に連番で遺構番号を付けた。調査は、原則として半截または十字に土層断面用のベルトを残して、2分割法または4分割法による精査を行った。

遺物は、グリッド単位に取り上げ、出土した層位、グリッド名または遺構名、年月日を記入した耐久性荷札を添付した。

平面図及び断面図は、原則として 1 / 20の縮尺で作成し、細部状況を表すために適宜 1 / 10の拡大図も作成した。発掘調査における写真撮影は、遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、ラジコンへリによる S Q 01・02配石遺構の空中撮影を行った。また、10月には、セスナ機による向様田 A ~ E 遺跡の全景写真撮影を行った。

写真は、35mmカメラを使用し、フィルムはモノクロ、カラーリバーサル (スライド用)、ネガカラーを使用した。

2 室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第2原図とした。第2原図をスキャナーで取り込み、すべてプロッタでトレースした。

遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作

成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示して ある。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

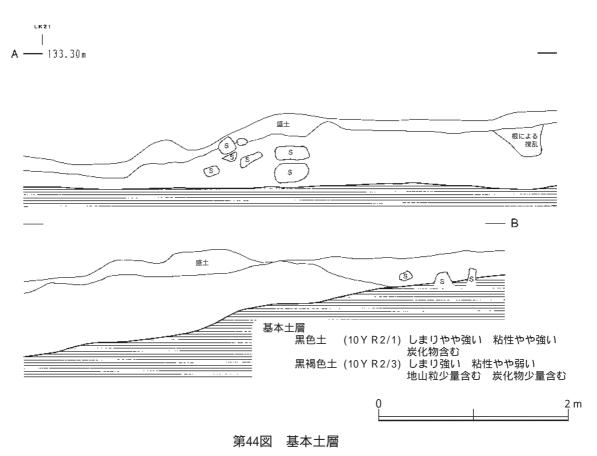
- 5月17日 向様田B・C遺跡の発掘調査を開始した。調査区東側より粗掘りを開始した。
- 5月21日 遺構はほとんど検出されない。芳賀秋田県埋蔵文化財センター所長が来跡した。
- 5月22日 遺跡中央付近で配石遺構2基を検出した。扁平な川原石を円形に配している。
- 5月29日 八戸市縄文学習館一行が研修のため来跡した。
- 5月31日 鷹巣阿仁部生涯学習奨励協議会より80名が来跡し、杉渕北調査課長が対応した。
- 6月7日 調査区のほぼ中央で土坑2基が重複しているのを確認した。鈴木文化財保護室長・大野副 主幹が来跡した。
- 6月8日 合川町消費者の会一行が来跡した。
- 6月21日 検出した土坑2基は、縄文時代晩期の遺構であることがわかった。前田基幹集落センターで作業員の健康診断を行った。
- 6月25日 配石遺構の下部構造を確認するために、サブトレンチを入れた。配石遺構の下部に掘り込みはなかった。奥山・佐藤両非常勤職員が実測応援のため発掘調査に参加した。
- 6月26日 調査区中部の地山と思っていた面が実は盛り土であることがわかり、粗掘りをやり直した。 調査区北側斜面下で縄文時代後期中葉の土器がまとまって出土し始めた。櫻田南調査課長・ 佐々木管理指導員が来跡した。
- 6月28日 配石遺構の空中写真撮影を行った。
- 7月2日 藤原・横山両非常勤職員が実測応援のため発掘調査に参加した。
- 7月3日 文化財保護室谷地学芸主事が来跡した。
- 7月17日 芳賀所長・杉渕北調査課長が来跡した。
- 7月26日 調査区北側斜面下で出土していた土器の取り上げをほぼ終了した。
- 8月3日 小林達雄國學院大学教授、冨樫泰時秋田県立博物館長、大野副主幹が来跡し、配石遺構に ついてご教授いただいた。
- 8月10日 埋蔵文化財センターの安全衛生管理についての職員研修会を行った。 向様田C遺跡の発掘調査を終了した。検出した遺構は、縄文時代の土坑2基、配石遺構3基 である。
- 9月26日 向様田A・B・C遺跡の記者発表を行った。
- 9月29日 向様田A・B・C・D遺跡の見学会を行った。約400名の来跡があり成功裏に終了した。

第2章 調査の記録

第1節 基本層位

本遺跡はかつて水田として利用されており、昭和40年代のほ場整備の際にいったん削平され、その 後盛り土されている。

基本層位は以下の通りである。 層は遺物包含層であり層厚は5~40cmである。 層は旧水田の耕作土であり、層厚は10~70cmである。 層の遺物包含層は遺跡南側斜面落ち際に一部残存するのみである。



第2節 検出遺構と出土遺物

1 検出遺構の概要

遺構確認面はほとんどが地山であった。検出遺構は全て縄文時代の遺構であり、土坑2基、配石遺構3基である。

2 検出遺構と出土遺物

(1) 土坑

SK04土坑 (第45図、図版18・19・25)

《位 置》 L E 22、L F 22 グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面でSK05土坑と重複して確認した。

《重 複》 SK05土坑に掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.74m、短軸1.4m (推定) の楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より24cmである。主軸方向はN - 27°-Eを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 やや緩やかに立ち上がっている。

《底 面》 鍋底状になっており、堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 底面より、RL縄文を施文した深鉢形土器胴部小破片 (1) と使用痕のある剥片 石器 (2) が出土した。

SK05土坑 (第45図、図版18・19)

《位 置》 L E 22、L F 22グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面でSK04土坑と重複して確認した。

《重 複》 SK04土坑を掘り込んでいる。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.34m、短軸1.1m (推定) の楕円形を呈すると考えられる。深さは地山面より12cmである。主軸方向はN - 27°-Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 底面より、鉢形土器胴部破片 (3・4) が出土した。3はRL縄文を、4にはL R縄文を施文しており、内外面には煤状炭化物が付着する。

(2)配石遺構

S Q01配石遺構 (第46・47図、図版17・18)

《位 置》 L A 22・23、L B 22・23 グリッドに位置する。

《確認》粗掘り中に層下部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《規模と平面形》 北から南に緩やかに傾斜する面に構築している。平面形は、径3.3mの円形を呈し、南側半分には礫が二重に巡る。外側に巡る礫までの規模は、長軸4.6m、短軸4.0mである。内側に巡る礫は、20×20~36×72cm程の扁平な川原石で、北側の礫が小さく南側の礫が大きい。南側に巡る外側の礫は、扁平な川原石の側面を上にして埋めている。内側の礫の掘り込みは確認できなかったが、外側の礫は断面V字状に掘り込まれていた。掘り込みの深さは地山面から18cmである。遺構中央やや北側の礫の一部は、確認調査の際にトレンチ調査で抜かれている。主軸方向はN・6°-Wとほぼ北を示す。

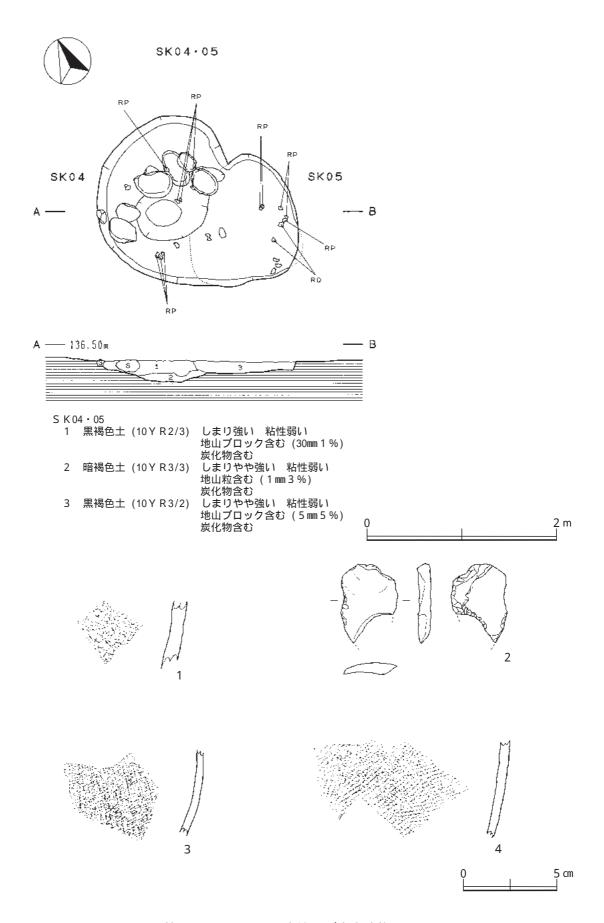
《出土遺物》なし。

S Q 02配石遺構 (第46・47図、図版17・18)

《位 置》 L A 23・24、L B 23・24グリッドに位置する。

《確認知知。 粗掘り中に 層下部で礫の集まりを検出し、その後配石遺構とした。

《重複形を表現である。 複製 複型に重複して S Q 01配石遺構があるが、新旧関係は不明である。



第45図 SK04・05土坑及び出土遺物

《規模と平面形》 向様田B遺跡南側斜面と接し、北から南に緩やかに傾斜する面に構築している。 平面形は、長軸2.2m、短軸1.8mのやや不整な楕円形を呈する。礫は6~10×32~ 40cm程の扁平な川原石で、SQ01配石遺構の礫と比べて小さい。掘り込みは確認で きなかった。主軸方向はN‐ 6°- Wとほぼ北を示す。

《出土遺物》 なし。

S Q 03配石遺構 (第47図、図版18)

《位 置》 L C 23グリッドに位置する。

《確認》 粗掘り中に 層下部で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸 1 m (推定)、短軸0.7m (推定) の隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向はN - 44°-Wを示す。

《出土遺物》なし。

第3節 遺構外出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器、石製品である。遺物については、観察表を掲載しているので、ここでは大まかな特徴を述べる。

1 縄文土器

【第 群土器】後期の土器 (第48図1~第64図178、図版18~22)

1 類:深鉢形土器群 (第48図1~第58図95)

1 - A: 口縁部が外反する土器 (第48図1~第54図57)

1~8は波状口縁を呈する土器である。1~6の突起頭頂部には貼付を施しており、1~3・5・7・8の口唇部には縄文を施文する。1は、貼付の突起部に2条の平行沈線が巡る。口縁部全面に刺突文を配し、胴部上端には沈線で狭い文様帯を区画する。区画内には磨消によりクランク文を描いている。2・3・6~8は沈線で文様帯を区画し磨消を施している。9~55・57は平縁を呈する土器である。9~47は口唇部に縄文を施文している。9~11は口縁部に数条の平行沈線を配する。12は、平行沈線で口縁部文様帯を区画し、区画内を磨り消している。13・14・16・17は、口縁部が無文である。48・49は、口縁部を平行沈線で区画し磨消を施している。胴部は、曲線沈線で文様帯を区画し磨消を施す。50は1条の撚糸圧痕で口縁部を区画する。57は無文の土器で、胎土・焼成とも不良である。

1 - B: 口縁が直立する土器 (第54図58~第55図67)

58は口唇部に縄文を施文している。62は平行沈線で、64は撚糸圧痕で口縁部を区画する。

1 - C: 口縁部が内湾する土器 (第55図68~第56図73)

68・69は口唇部に縄文を施文している。71は、器面全体に0段多条のLR縄文を施文している。内面には、粗いケズリ痕が残る。

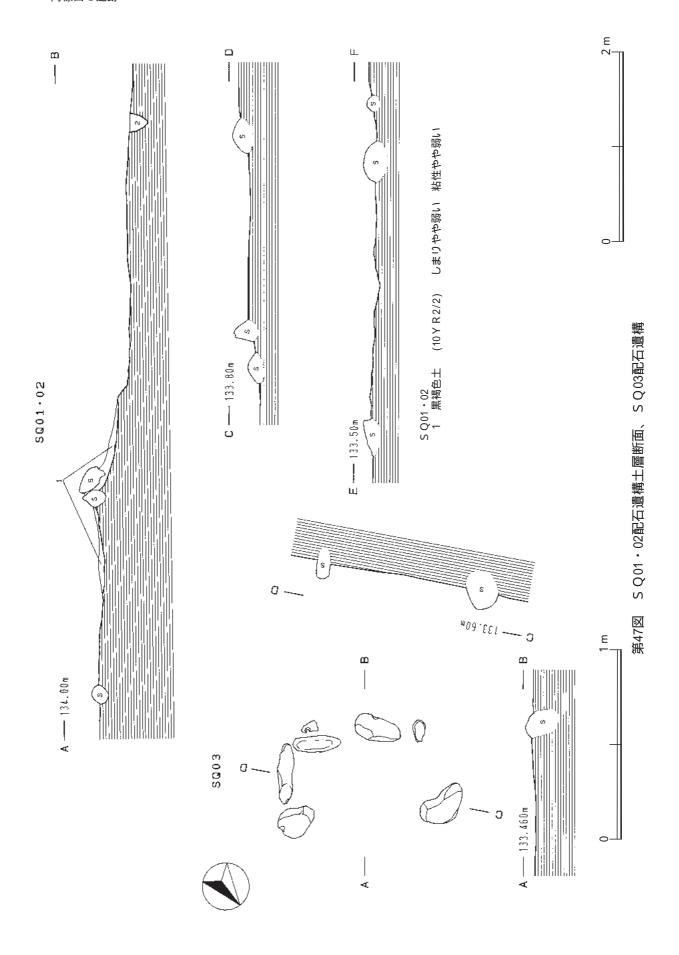
1 - D:突起破片 (第56図74~78)

深鉢形土器の装飾突起破片である。74は内湾する口縁部に耳状突起を貼り付けている。胴部上端に3条の平行沈線を配し、棒状工具による円形刺突文が巡る。胴部には曲線沈線文による文様が展開す





第46図 SQ01·02配石遺構



る。75は、大形の耳状突起破片である。沈線で文様帯を区画し、区画内を磨り消している。文様帯に 沿って棒状工具による円形刺突文が巡る。

1 - E:胴部・底部破片 (第57図79~第58図95)

80・81は、数条の平行沈線を配し、沈線間は縦位のS字状沈線で連結する。79・82~89は、沈線で 渦巻状・弧状・帯状に文様帯を区画し、磨消を施している。90~95は、器面全体に斜行縄文を施文し ているが、胴部下端は雑に磨消を施している。94・95の底部には、木葉痕が残る。

2 類:鉢形土器群 (第58図96~第61図134)

2 - A: 口縁部が外反する土器 (第58図96~第59図102)

96・97は、波状口縁を呈し、突起頭頂部に貼付を施す。胴部上端に3条の平行沈線を配し、96は沈線間を磨り消している。98は、口唇内側に1条の平行沈線を配し、口唇部に刻み目を有する。99は、口唇部に縄文を施文している。胴部上端は、2条の平行沈線で区画し、区画内を磨り消している。胴部全体に沈線で文様帯を描き、磨消による帯状入組曲線文が展開する。100の口縁部は一部に磨消を施し、101・102は口縁部が無文である。

2 - B: 口縁が直立する土器 (第59図103~第60図118)

103~107は、口唇部に縄文を施文している。103は、平行沈線により口縁部文様帯を区画し、区画内を磨り消している。胴部上端は、沈線で方形に区画し区画内に磨消を施す。108は、口縁部に2条の平行沈線を配しており、106・107は底部に網代痕が残る。116~118は無文の土器であり、胎土・焼成とも不良である。

2 - C: 口縁部が内湾する土器 (第60図119~127)

119・121・122は、口唇部に縄文を施文している。120は口唇部に1条の平行沈線を配している。119の胴部は、沈線で帯状に区画し区画内に磨消を施している。123と124は同一個体で、沈線による曲線文を描き、沈線間を磨り消している。また、沈線に沿って棒状工具による円形刺突文が巡る。125~127の口縁部には、数条の平行沈線が配され、125・127は、平行沈線間をS字状または弧状沈線で縦位に連結する。胴部は無文である。

2 - D:胴部・底部破片 (第60図128~第61図134)

128は、上半を方形に、下半は帯状に区画し、区画内には縄文を充填している。底部には網代痕が 残る。129・132・133は、クランク状または弧状に区画し、132には磨消を施し、129・133には縄文を 充填している。

3 類:壺形土器群 (第61図135~第63図165)

3 - A: 口縁部が外反する土器 (第61図135~第62図145)

135は、3単位の大形突起を有し、突起頭頂部には貼付を施す。貼付部分には3条の平行沈線を巡らせる。頸部は磨消により帯状の無文帯を構成する。胴部上半には、沈線による帯状入組文を組み合わせ、連結箇所には平行四辺形文が、その他には弧線による三角文が磨消によって描かれる。帯状入組文は3単位で構成され、磨消による平行四辺形文は大形突起と同一向きになる。器面全体に赤漆が塗布される。136・137は、花びらのように口縁部が開く。136~140・142・143は、沈線で帯状文や入組文・雷文などの文様帯を描き、磨消を施している。143の底部には網代痕が残る。

3 - B: 口縁が直立する土器 (第62図146)

146は、頸部と肩部に貼瘤を有し、沈線による弧状線文が展開する。区画内にはLR縄文を充填する。

3 - C:胴部・底部破片 (第62図147~第63図165)

胴部全体に沈線で帯状文や入組帯状文などの文様帯を区画し、磨消を施している土器が多い。164 と165の底部には網代痕が残る。

4 類:台付土器破片 (第64図166)

台部が「八」の字に広がる深鉢形土器破片である。器面全体に斜行縄文を施文している。

5類:ミニチュア土器群 (第64図167~171)

167は無文の手づくね土器である。168・169は無文の壺形土器である。170は、台部が「八」の字に広がる無文の鉢形土器である。

6類:底部破片 (第64図172~177)

172~175には網代痕が残っている。176には笹痕が、177には木葉痕が残る。

7類:器形不明の土器破片 (第64図178)

口縁部がほぼ直角に開き、口唇部には刻み目を施している。

【第 群土器】晩期の土器 (第64図179~第69図244、図版23・24)

1類:深鉢形土器群 (第64図179・第65図180)

179は、口唇部の一部に刻み目を有し、2条の平行沈線により口縁部と胴部を区画している。180は、刻み目により小波状口縁を呈する。口縁部には3条の平行沈線を配する。

2 類:鉢形土器群 (第65図181~202)

181と182は同一個体である。口唇部にA字状突起を貼り付け、刻み目により口縁部文様帯を表出している。胴部上端にはB字状貼瘤を有し、沈線により区画された文様帯には磨消による雲形文が展開する。183・184は、口唇部にB字状貼瘤を有する。183は、口縁部下端に2条の平行沈線を配し、太い沈線による三叉状入組文が展開する。184は、口縁部下端に3条の平行沈線を配し、棒状工具による円形刺突文が巡る。胴部には弧状沈線文を配する。185・187は、平行沈線で文様帯を区画し、区画内には羊歯状文が展開する。194は、口唇内側に1条の平行沈線を配する。口縁下端に貼り瘤を有し、口縁部には沈線による入組文が展開する。201・202は、平行沈線を配し、沈線間に羊歯状文を施文している。胴部は磨消による文様を描く。

3類:浅鉢または皿形土器群 (第66図203~第67図220)

203は、口唇内側に 2 条の平行沈線を配し、口唇部には刻み目が巡る皿形土器である。口縁部は、刻み目による文様帯を表出している。胴部全体に磨消による雲形文が展開する。底部は沈線で円形に区画される。216は、口縁部に棒状工具による円形刺突文が巡る浅鉢形土器である。胴部にはやや崩れた雲形文が磨消により描かれる。217は、口唇部に A 字状突起を有する皿形土器である。口縁部には刻み目を施し、胴部には雲形文が磨消により描かれる。204~215・217~220は、浅鉢または皿形土器破片である。204~210・212は、口唇または口縁部に平行沈線を配しており、208~211は、口縁部に刻み目が巡る。胴部には磨消による雲形文が展開する土器が多い。

4 類:台付土器群 (第67図221~第68図223)

221・223は、台部が「八」の字に広がる鉢形土器である。221は、胴部上端が内湾し、口縁部が外

反する器形を呈する。口唇部にはB字状突起が刻まれる。口縁部の3条の平行沈線と胴部上端の2条の平行沈線で狭い文様帯を区画する。区画内には、沈線でやや崩れた雲形文が描かれ、磨消により文様が表出される。胴部の平行沈線間には刺突文が巡る。222は、台部が剥離した壺形土器である。口唇部1/3に刻み目が施される。頸部下端には2条の平行沈線を配し、B字状貼瘤を有する。

5 類:壺形土器群 (第68図224~227)

5 - A: 口縁部が外反する土器 (第68図224・225)

224は、口縁部が大きく外反し、胴部はソロバン玉状の器形を呈する。口縁部に3条の平行沈線を配し、頸部にはつまみ出しによる隆線を有する。内外面ともていねいにみがかれており、内面下半に黒漆を、内面上半と外面には赤色顔料を塗布する。225は、頸部につまみ出しによる隆線を有する無文の土器である。

5 - B:肩部・胴部破片 (第68図226・227)

226・227とも沈線で雲形文を描く。227は、磨消により雲形文を表出している。

6 類:注口土器群 (第68図228~第69図243)

228は、口縁にA字状突起を有し、口唇部と肩部は刻み目により文様帯を表出している。頸部全体に磨消による雲形文が展開する。注口部は沈線で区画され、A字状貼瘤を有する。胴部にも磨消による雲形文が展開するが、やや形骸化される。234は、A字状突起を有し口縁部には刻み目が巡る。頸部には、磨消で雲形文を区画しLR縄文を充填する。肩部は刻み目により文様帯を表出する。胴部全体に崩れた雲形文が展開する。その他の土器破片は、沈線で文様帯を描き、棒状工具による円形刺突文を巡らせる土器も多い。

7類:ミニチュア土器 (第69図244)

鉢形のミニチュア土器である。口唇部に刻み目を施し、口縁部には2条の沈線を配している。

第 群の縄文時代後期の土器は、ほとんどが遺跡北側斜面下の同一層で出土した一括資料である。 口縁部の形態は平縁が多いが、波状口縁や耳状装飾突起を有する土器もある。口唇部には縄文を施文 する土器が多い。80・81・127などは、平行沈線による文様帯を構成し、弧状やS字状の沈線で連結 している。磯崎正彦分類の十腰内2式a類土器であろう。胴部には入組文や波状入組文、渦巻文や弧 状文、帯縄文を磨消または充填で施文している土器が非常に多い。また、74・75・77・120・123・124 の土器などは曲線的磨消縄文を構成する沈線に沿って、円形の刺突文を施文している。これらの土器 は十腰内2式b類土器に比定できる。128は、直線的な帯縄文を基調としており、十腰内3式土器で あろう。また、146はいわゆる瘤付土器であり、十腰内4式土器と思われる。観察表では、文様帯を 施文している土器のみ形式名を明記しているが、土器の器形や出土状況から考えるとほとんどの粗製 土器も十腰内2式土器の範疇に入るものと考えられる。

第 群土器は、入組文や羊歯状文などの文様を施文する古手の土器破片もあるが、181・182・203・216・217・228・234など比較的完形に近い土器は、雲形文がくずれだしやや平面的になってくる。これらの土器は大洞 C_2 式土器であろう。221は、刻みにより口唇部に B 字突起を巡らしている。文様帯は狭く区画され、区画内には雲形文が施文されるが躍動感はない。大洞 B C 式から大洞 C_4 にかけての土器であろう。

2 土製品 (第69図245、図版18・24)

豊かな乳房をもつ、土偶右上半部破片である。無文である。

3 石器

石鏃 (第70図246·247、図版25)

石鏃は2点出土した。246は柳葉鏃であり、247は凸基有茎鏃である。247の基部は折損している。

石錐 (第70図248、図版25)

両面からの調整により錐部を作り出しており、先端は折損している。

石匙 (第70図249~253、図版25)

石匙は5点出土し、すべて横型石匙である。251は両面調整により刃部を作り出しており、つまみ部分にはアスファルトが付着している。

磨製石斧 (第70図254・255、図版25)

定角式磨製石斧が2点出土した。255の刃部には使用痕が見られる。

スクレイパー (第71図256~263、図版25)

スクレイパーは8点図示した。257・261は両面調整により刃部を作り出している。

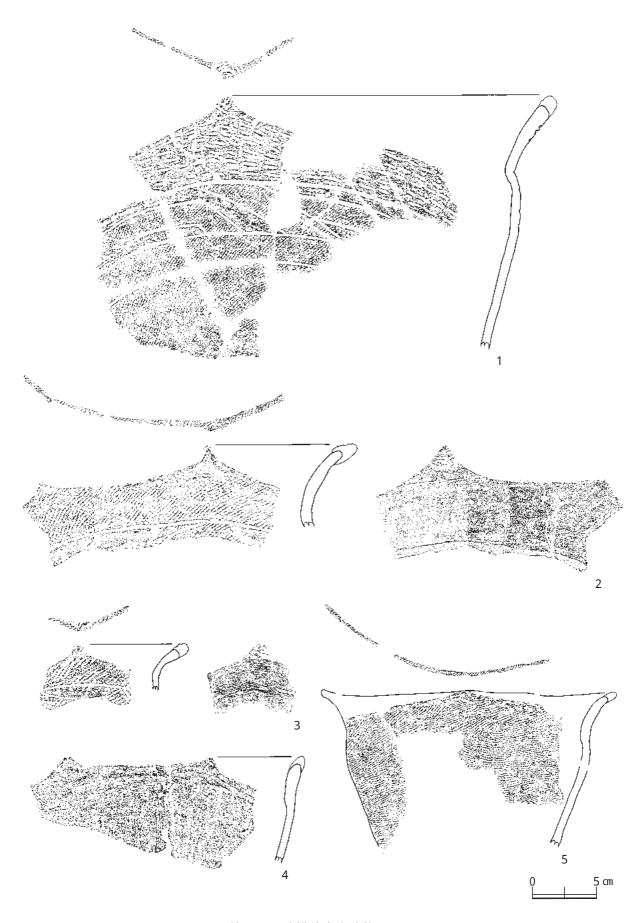
4 石製品

石剣 (第72図264~第73図272、図版25)

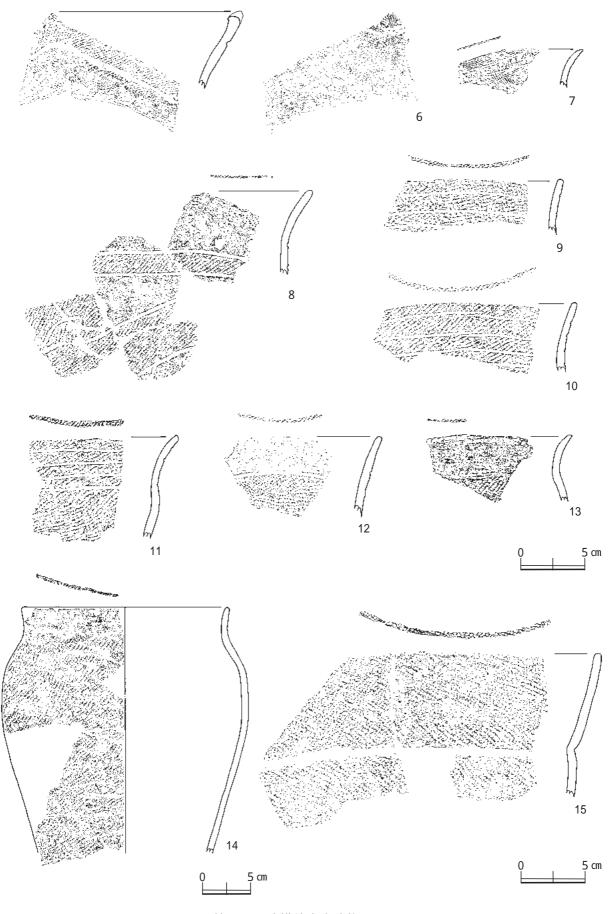
石剣は9点出土した。いずれも折損している。264は線刻により区画した柄頭であり、区画内は襷状に線刻されている。265・271・272にも2または3条の線刻が配される。身はすべて直刃状を呈し、269は身幅が広い。

器種不明の石製品 (第73図273、図版18・25)

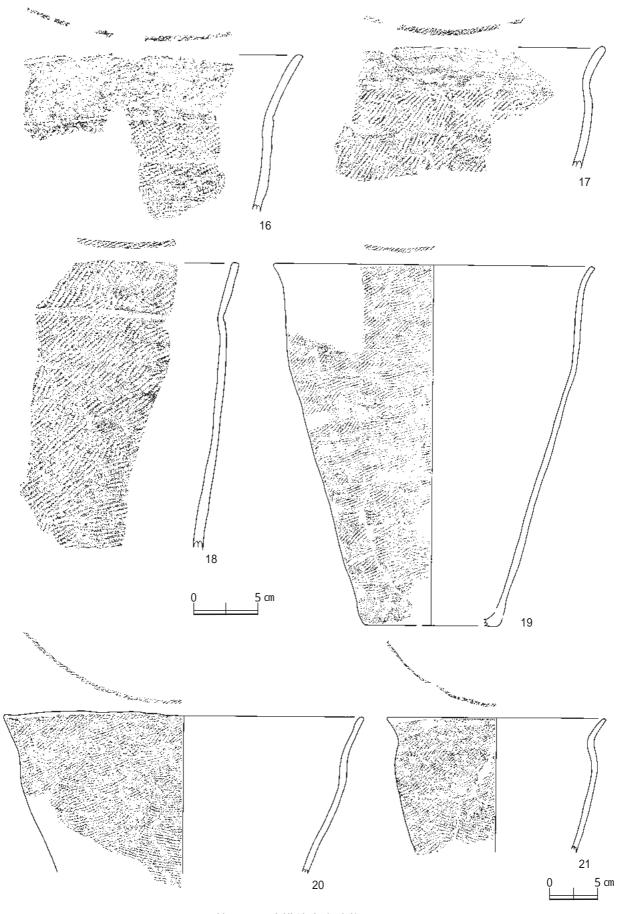
形態は石剣と類似するが、先端部分に窪みを有するため、石剣と分けておく。上下に1条ずつの線刻を配する。



第48図 遺構外出土遺物 (9)



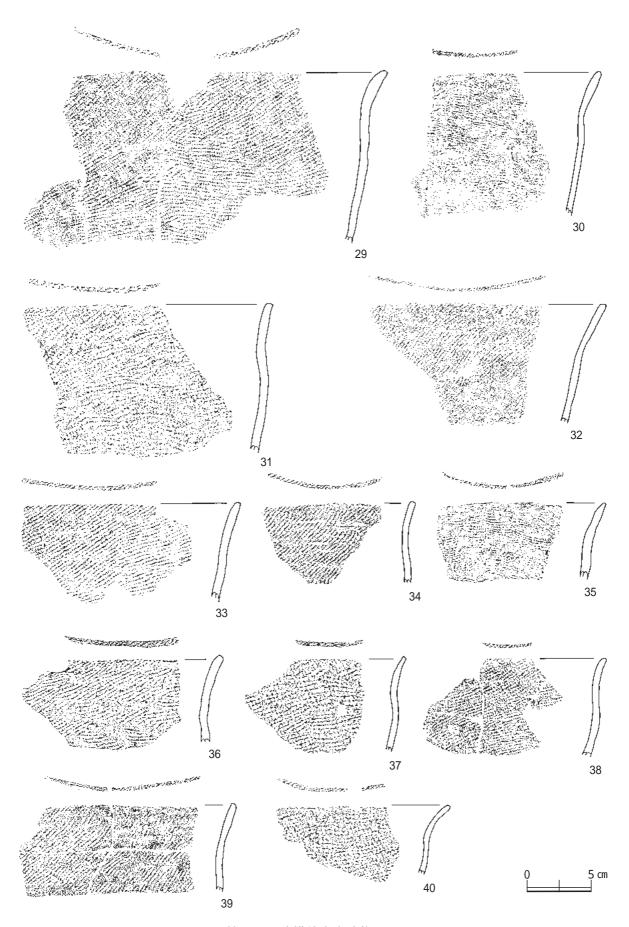
第49図 遺構外出土遺物 (10)



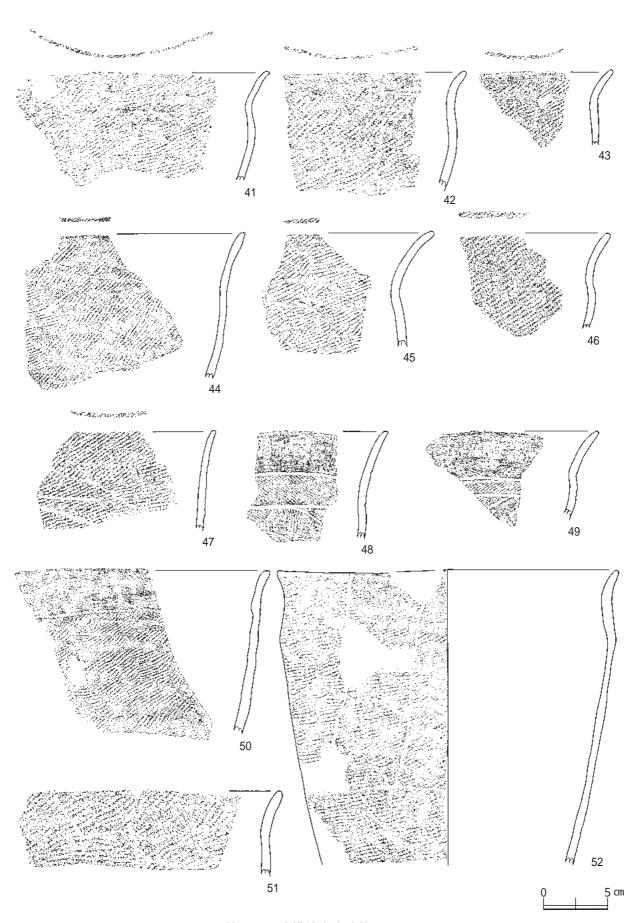
第50図 遺構外出土遺物 (11)



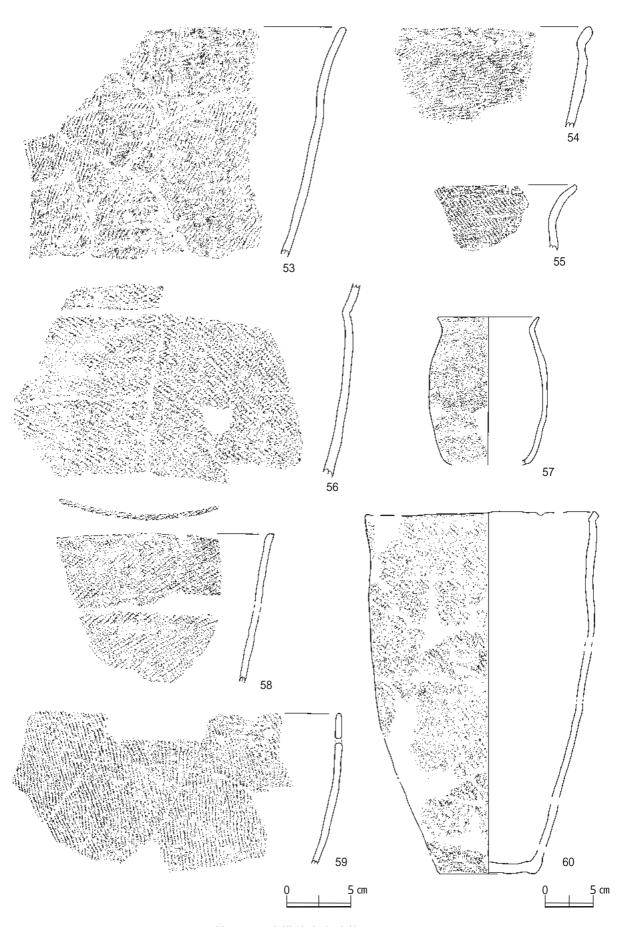
124



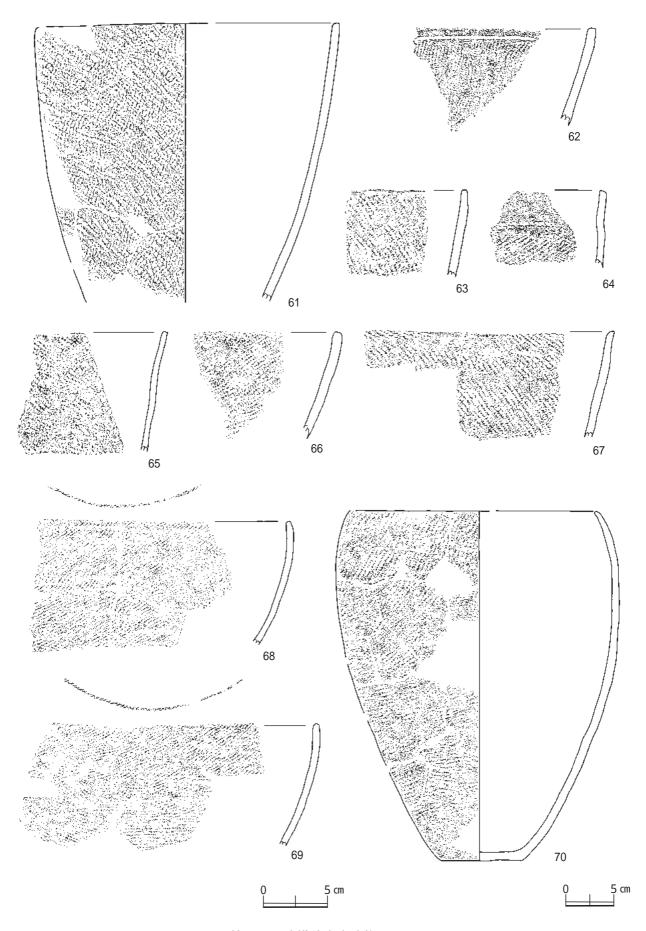
第52図 遺構外出土遺物 (13)



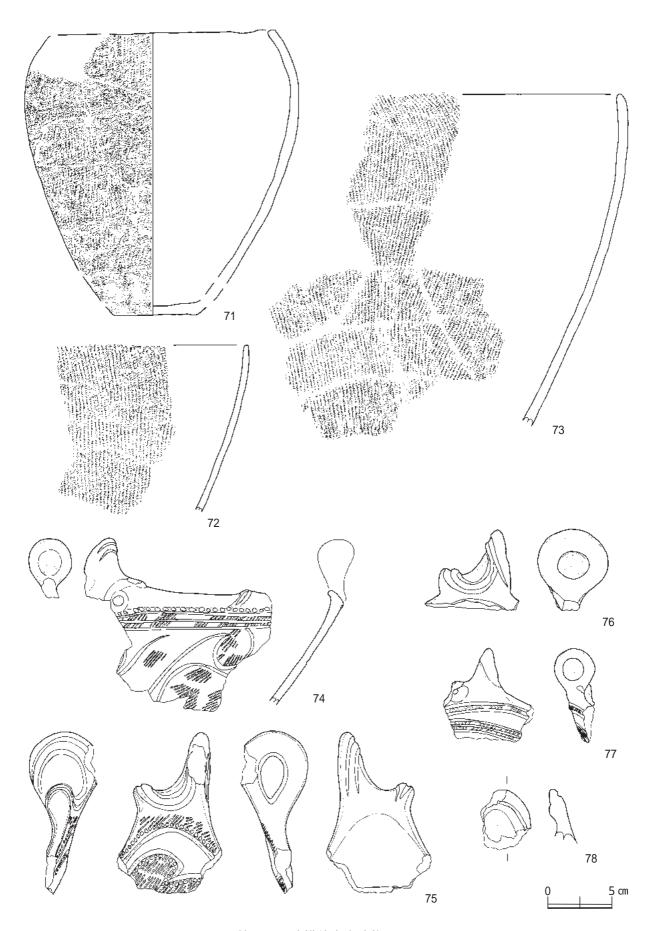
第53図 遺構外出土遺物 (14)



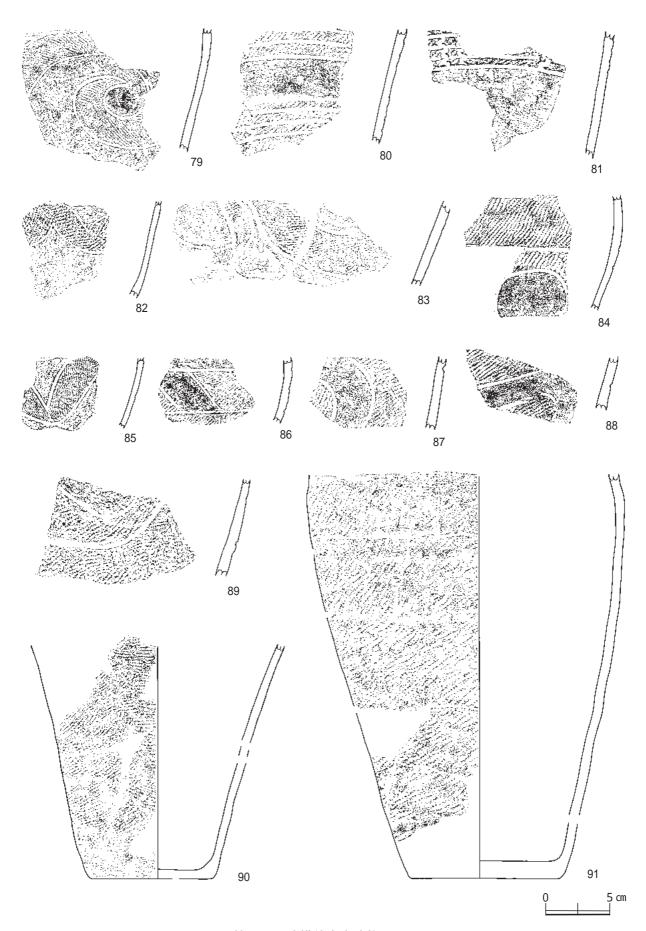
第54図 遺構外出土遺物 (15)



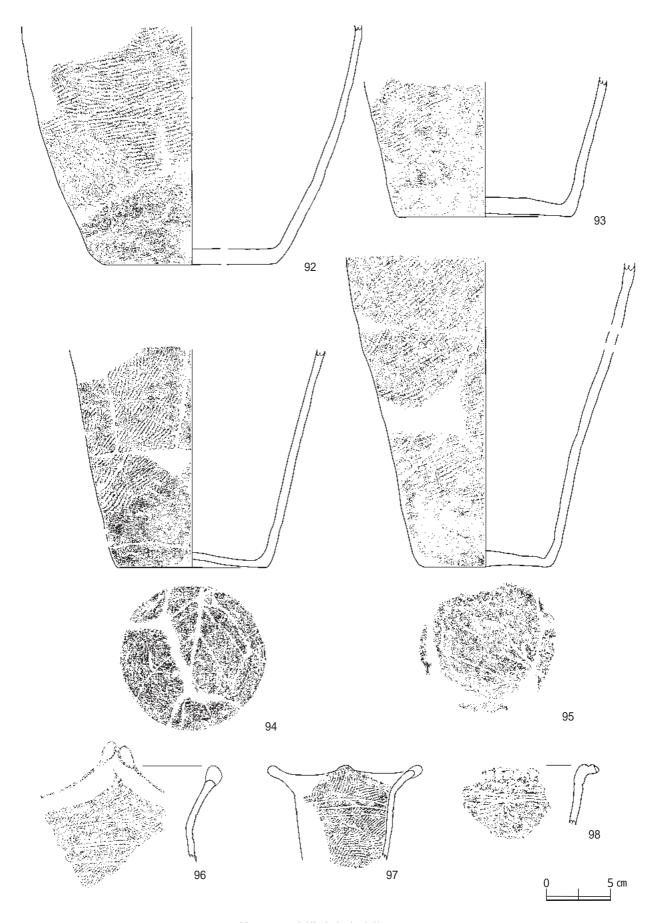
第55図 遺構外出土遺物 (16)



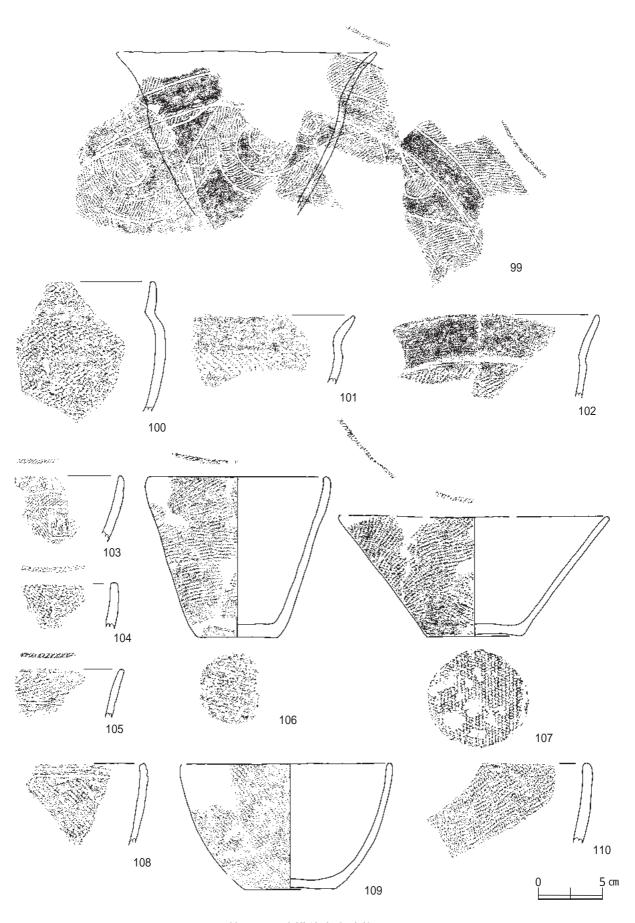
第56図 遺構外出土遺物 (17)



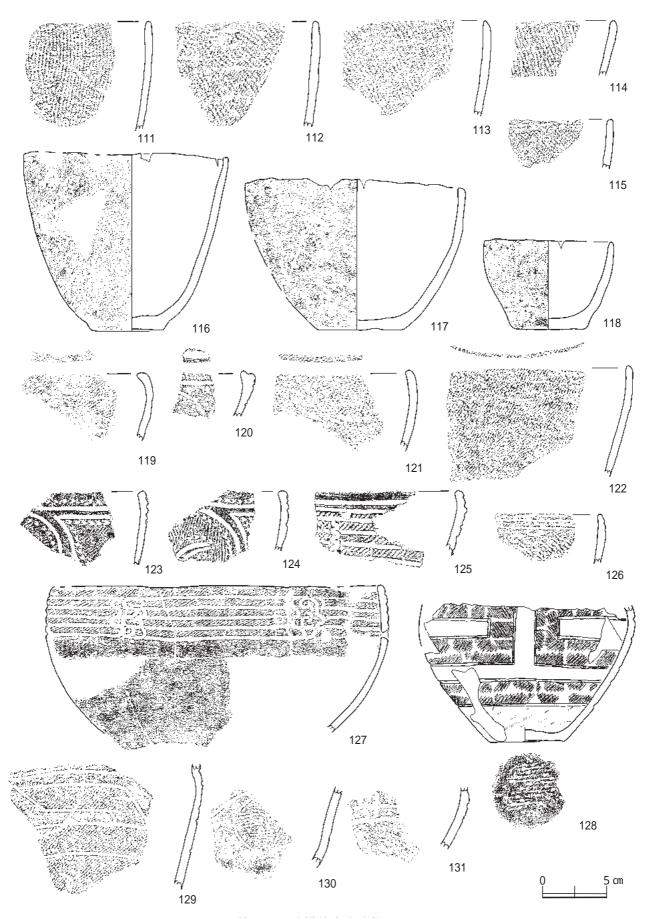
第57図 遺構外出土遺物 (18)



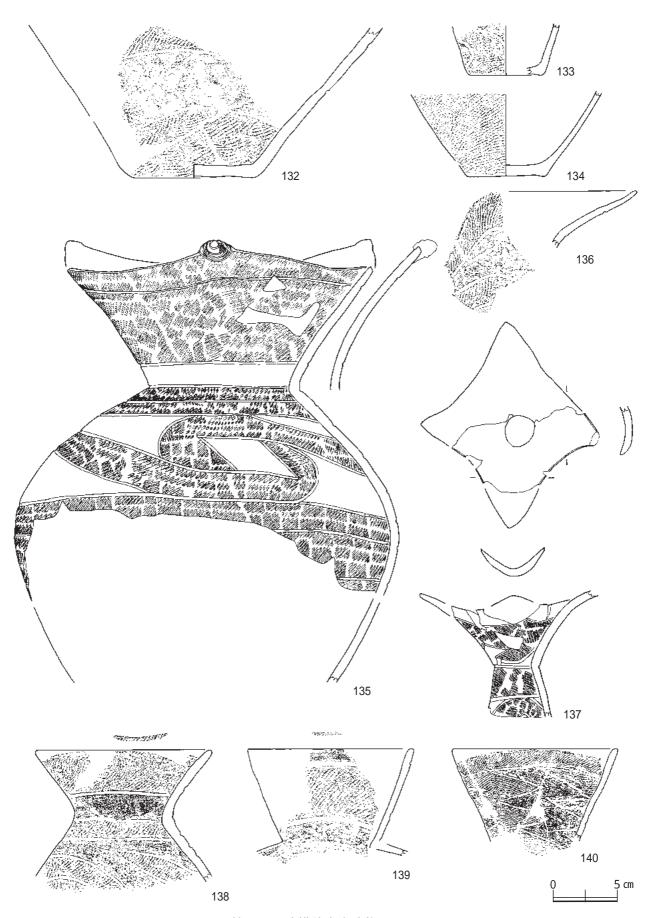
第58図 遺構外出土遺物 (19)



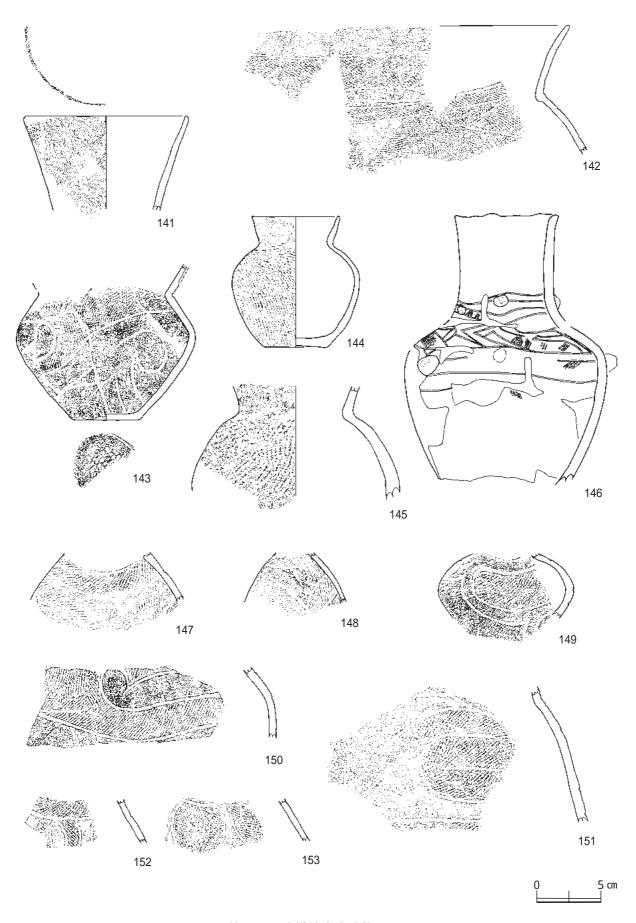
第59図 遺構外出土遺物 (20)



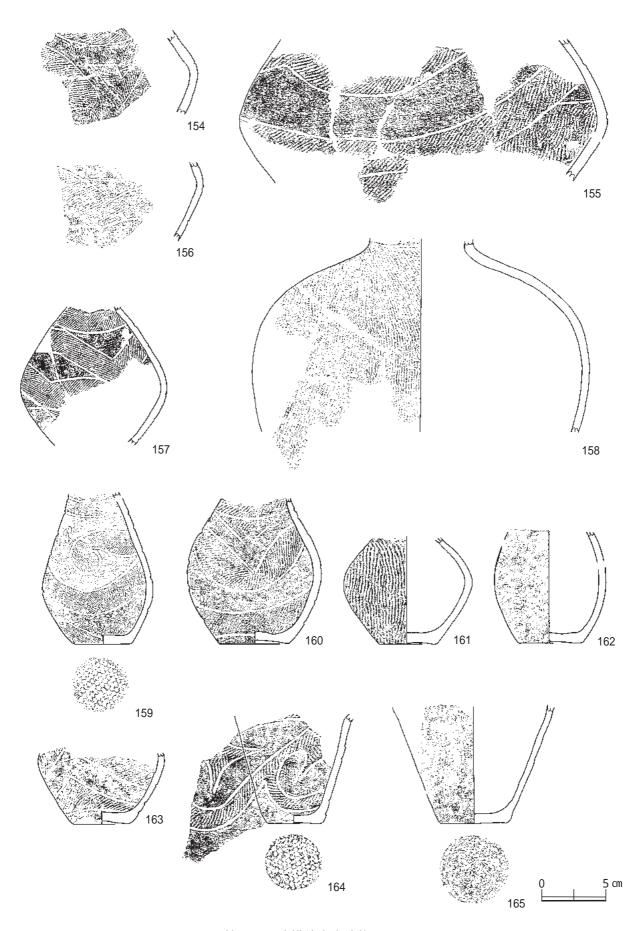
第60図 遺構外出土遺物 (21)



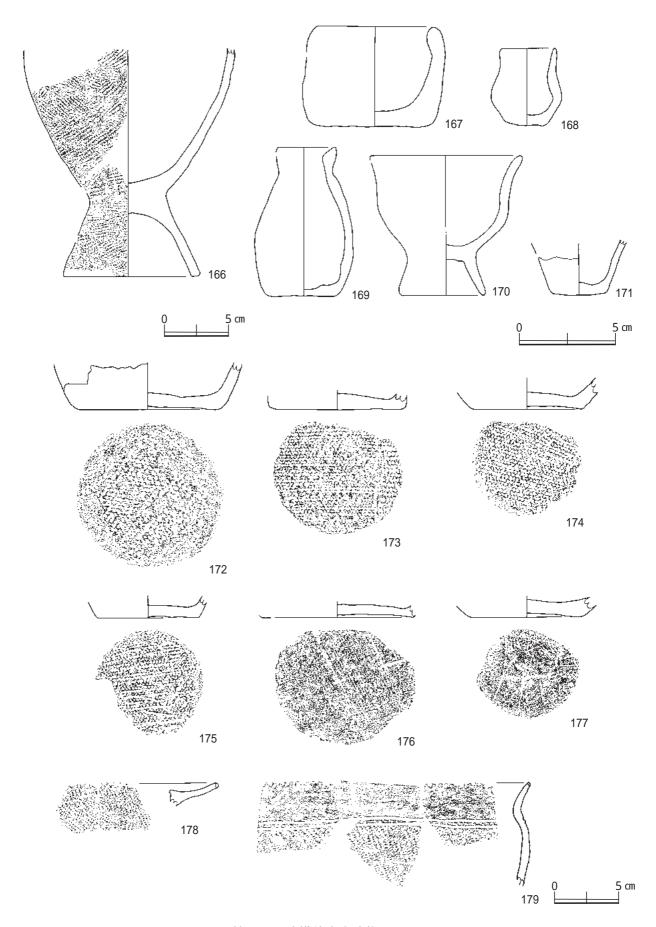
第61図 遺構外出土遺物 (22)



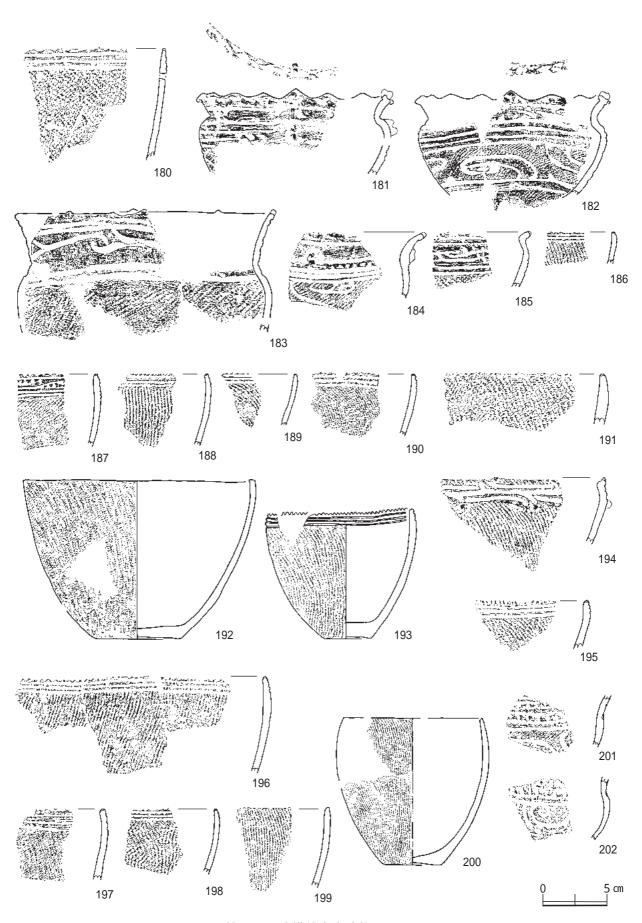
第62図 遺構外出土遺物 (23)



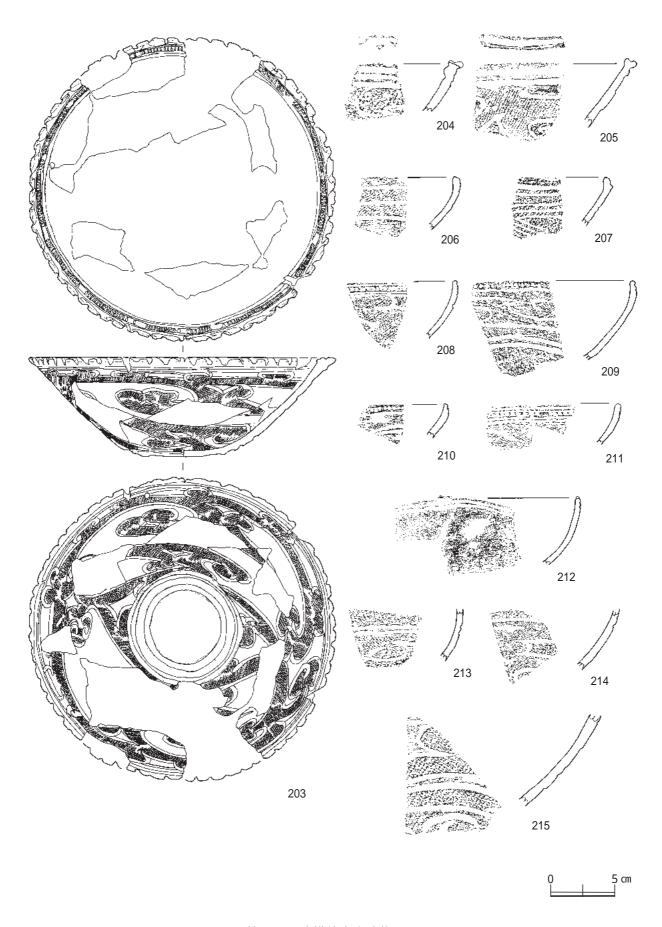
第63図 遺構外出土遺物 (24)



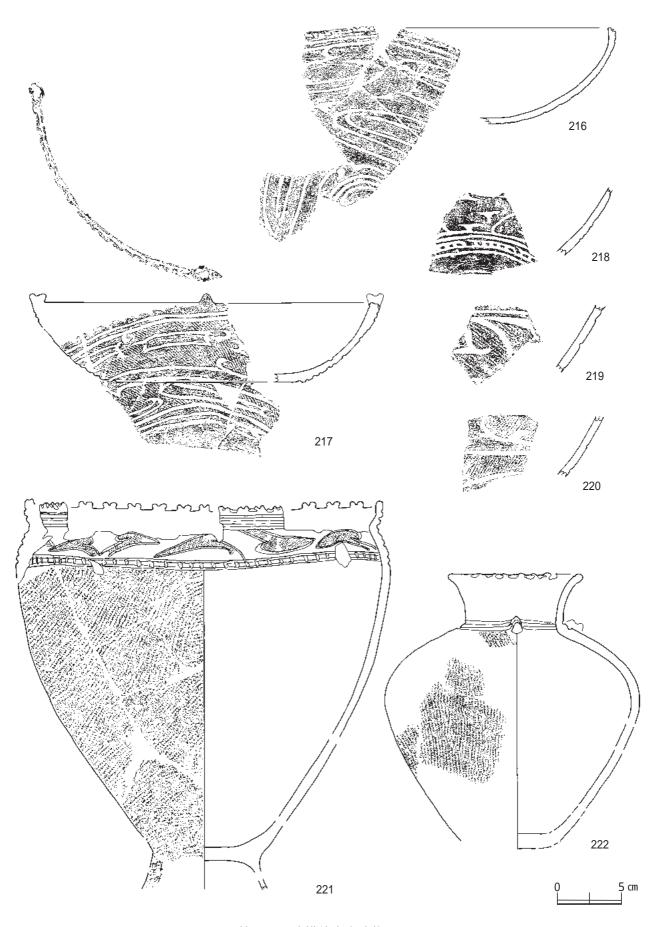
第64図 遺構外出土遺物 (25)



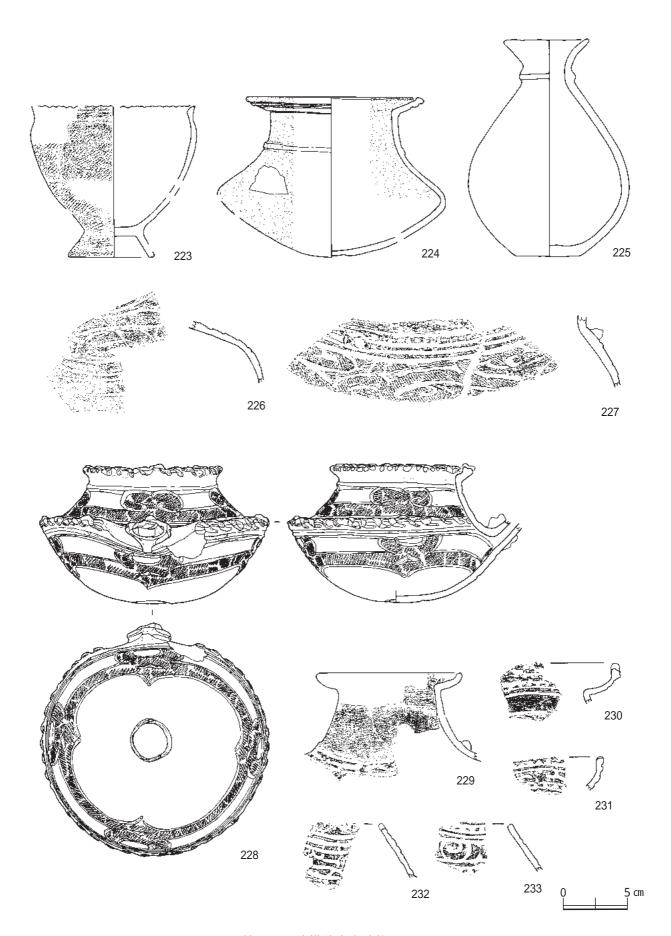
第65図 遺構外出土遺物 (26)



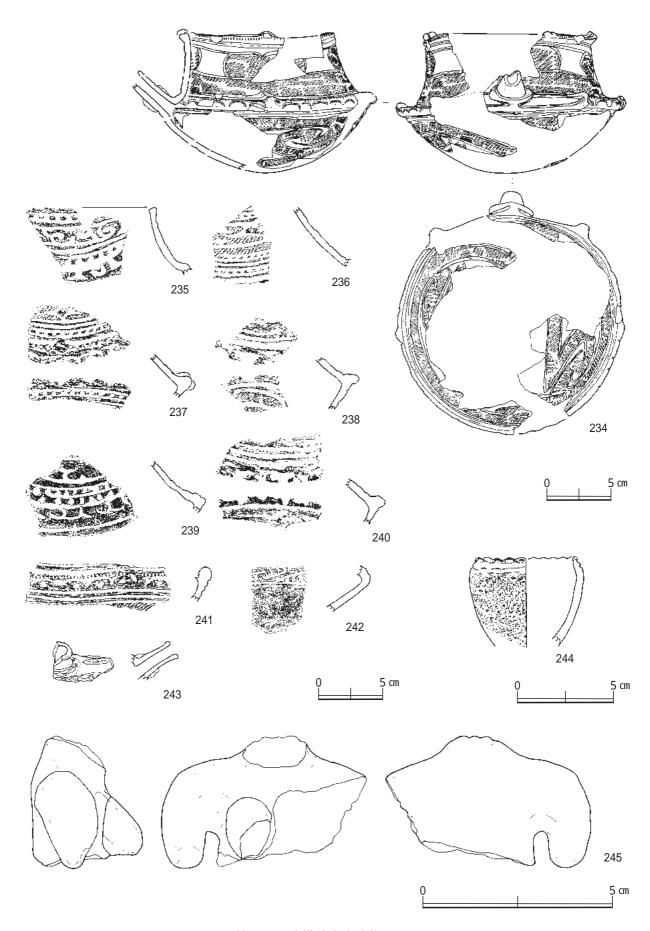
第66図 遺構外出土遺物 (27)



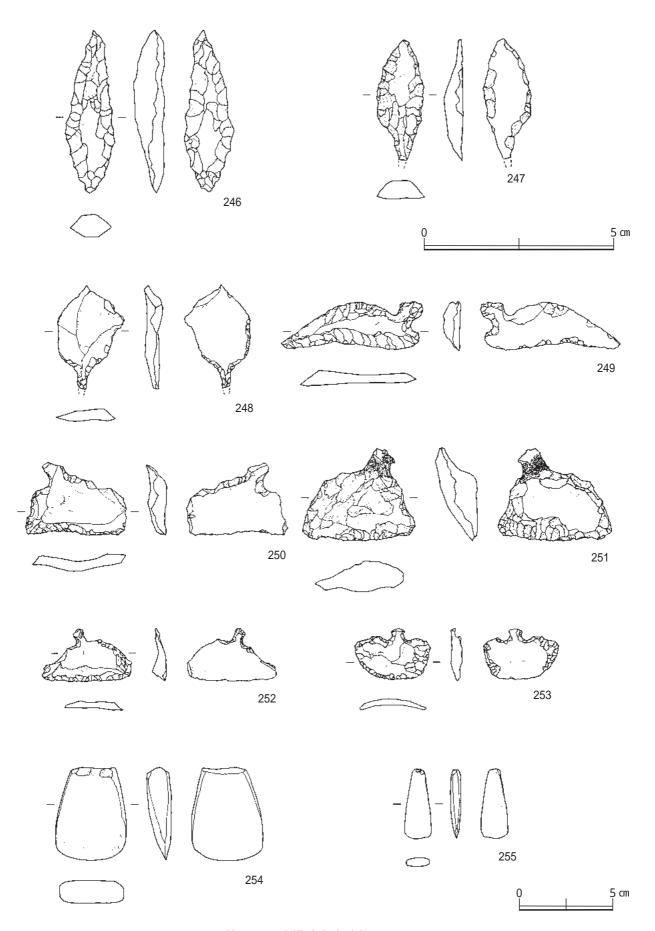
第67図 遺構外出土遺物 (28)



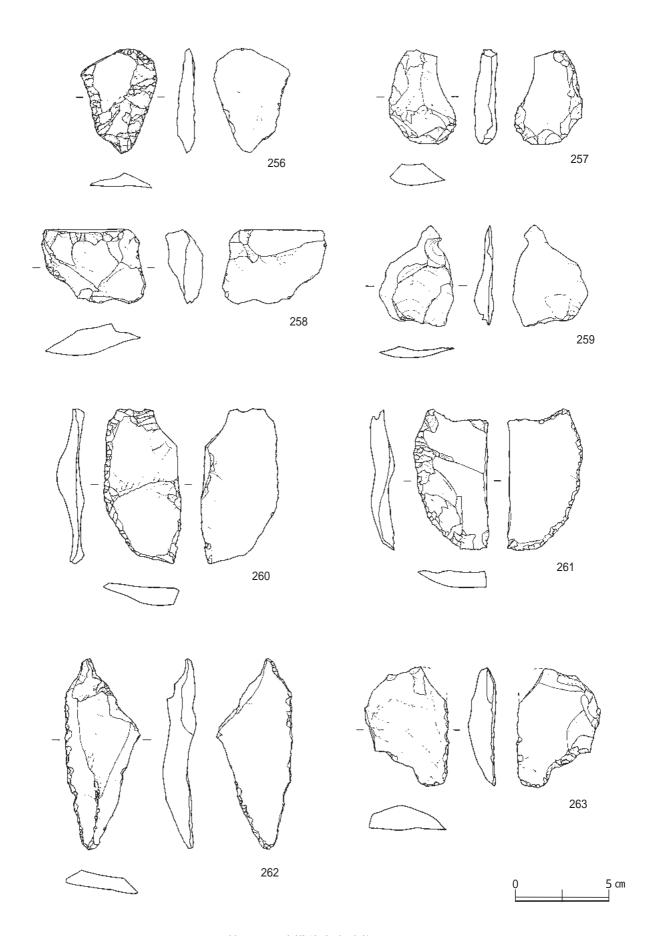
第68図 遺構外出土遺物 (29)



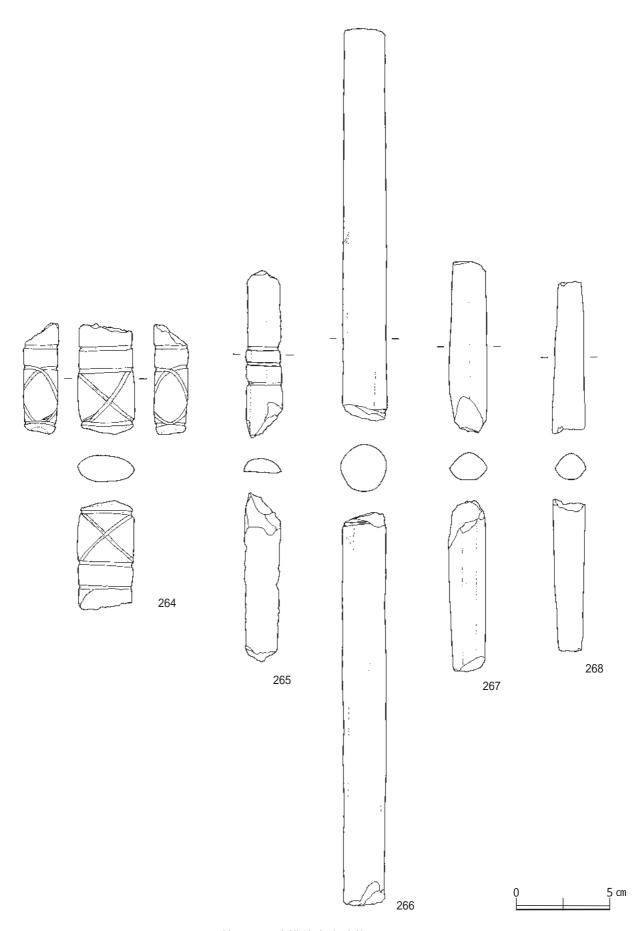
第69図 遺構外出土遺物 (30)



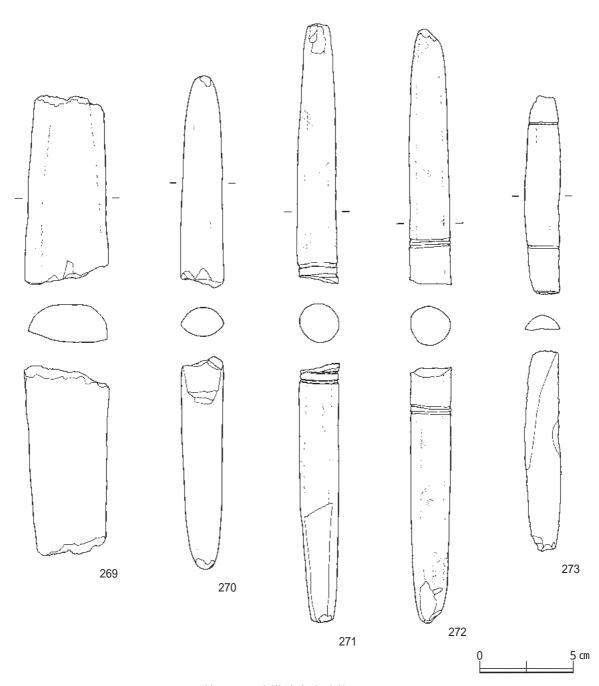
第70図 遺構外出土遺物 (31)



第71図 遺構外出土遺物 (32)



第72図 遺構外出土遺物 (33)



第73図 遺構外出土遺物 (34)

第7表 石器・石製品観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	石質	最大長(m)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	挿図番号	図版番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
45 - 2	25 - 78	S K 04	スクレイパー	頁岩	42.1	29.5	6.0	7.2	71 - 260	25 - 93	排土	スクレイパー	頁岩	82.0	41.0	12.0	30.6
70 - 246	25 - 79	L F 24	石鏃	頁岩	44.0	13.5	6.0	4.0	71 - 261	25 - 94	L D 25	スクレイパー	頁岩	75.0	40.0	9.0	35.7
70 - 247	25 - 80	L G 22	石鏃	頁岩	32.1	13.0	5.1	1.9	71 - 262	25 - 95	L A 24	スクレイパー	頁岩	102.0	38.0	18.0	41.2
70 - 248	25 - 81	K S 24	石錐	頁岩	55.0	35.5	8.0	11.7	71 - 263	25 - 96	L F 23	スクレイパー	頁岩	64.0	45.0	13.0	35.0
70 - 249	25 - 82	L G24	石匙	頁岩	25.9	75.0	9.2	12.3	72 - 264	25 - 97	L H 22	石剣	菫青石ホルンフェルス	58.1	30.0	14.8	60.2
70 - 250	25 - 83	L H24	石匙	頁岩	39.0	53.5	10.0	13.9	72 - 265	25 - 98	K T 23	石剣	菫青石ホルンフェルス	90.0	20.0	8.0	28.8
70 - 251	25 - 84	K T 23	石匙	頁岩	49.0	60.0	17.0	39.5	72 - 266	25 - 99	L E 24	石剣	菫青石ホルンフェルス	120.8	24.0	25.0	233.7
70 - 252	25 - 85	L F 24	石匙	頁岩	28.0	48.0	5.0	6.5	72 - 267	25 - 100	K S 24	石剣	菫青石ホルンフェルス	91.5	20.5	15.0	52.5
70 - 253	25 - 86	L C 24	石匙	頁岩	28.0	40.0	6.0	4.6	72 - 268	25 - 101	L A 24	石剣	黒色千枚岩	80.5	17.1	14.0	40.2
70 - 254	25 - 87	K T 23	磨製石斧	砂岩	50.0	38.0	12.0	42.9	73 - 269	25 - 102	排土	石剣	黒色千枚岩	100.5	45.0	20.0	174.4
70 - 255	25 - 88	L D 25	磨製石斧	変質流紋岩	37.0	15.0	5.0	4.9	73 - 270	25 - 103	L D24	石剣	菫青石ホルンフェルス	112.1	22.5	15.5	82.1
71 - 256	25 - 89	L D 25	スクレイパー	頁岩	55.5	40.5	8.5	14.8	73 - 271	25 - 104	L A 24	石剣	菫青石ホルンフェルス	113.7	21.1	21.0	98.7
71 - 257	25 - 90	L D 25	スクレイパー	頁岩	55.0	35.1	12.0	22.5	73 - 272	25 - 105	L E 24	石剣	菫青石ホルンフェルス	113.6	22.0	21.0	97.9
71 - 258	25 - 91	L F 22	スクレイパー	頁岩	39.5	55.0	17.0	36.0	72 - 273	25 - 106	L B 24	不明	菫青石ホルンフェルス	106.0	20.0	8.5	25.4
71 - 259	25 - 92	L B 23	スクレイパー	百岩	54.0	40.0	6.1	10.5									

第8表 縄文土器観察表

19-1 19-1 19-2	挿図番号	図版番号	出土地区	器形	部位	口唇部・口縁部	頸 部	肩部・胴部	底部	 分 類	備考
19-2 19-2											
49 - 1											
### 1						線3 口唇LR縄文 下		沈線によるクランク文			P37下3来4人/火1154勿
### 1	48 - 2		L G23	深鉢	口縁部	山形小突起 突起貼付 沈線2・LR縄文充填 口唇LR縄文 口縁下端		LR縄文 磨消		群 十腰内 2	
19-9 19-9	48 - 3		L D25	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 波状口縁 突起頭頂貼瘤 突起内沈 線 2・L R 縄文 口縁下				群 十腰内 2	外煤状炭化物
19 1 19 19 19 19 19 19	48 - 4		L F 24	深鉢	口縁部	小突起 無文				群	
19	48 - 5		L E 25	深鉢	口~胴部			LR縄文		群	内外煤状炭化物
19-7	49 - 6		L F 24	深鉢	口縁部	波状口縁・突起貼瘤・縄 文充填・裏沈線1 沈線 2 沈線間磨消 LR縄				群 十腰内 2	外煤状炭化物
1	49 - 7		L H25	深鉢	口縁部	ランク文 磨消 口縁R				群 十腰内 2	
19-10	49 - 8		L E 24	深鉢	口縁部			刺突文 沈線による入組		群 十腰内 2	
49-10	49 - 9		L H24	深鉢	口縁部					群	
49 - 11	49 - 10		L H24	深鉢	口縁部	口唇LR縄文 沈線4				群 十腰内 2	
49 - 12	49 - 11		L H24	深鉢	口縁部	口唇LR縄文 沈線4				群 十腰内 2	外煤状炭化物
19-14 14 12 12 12 12 12 12	49 - 12		L F 24	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R	LR縄文			群 十腰内 2	
49 - 15								LR縄文			
1 日本 1 日本	49 - 14		排土	深鉢							
10 1 1 1 1 1 1 1 1 1	49 - 15		L G24	深鉢		1 口縁 R L 縄文		RL縄文			内外煤状炭化物
So - 18	50 - 16		L E 24	深鉢	口縁部			LR縄文		群	外煤状炭化物
19	50 - 17		L F 24	深鉢	口縁部			LR縄文		群	外煤状炭化物
50 - 20 L G24 深終 口縁部 口縁上 日縁以 口縁上 日縁以 日縁して 日縁して 日縁して 日縁して 日縁して 日縁して 日縁して 日縁して	50 - 18		L E 25					LR縄文			外煤状炭化物
1	50 - 19		L H24	深鉢	口~胴部			LR縄文 下端磨消		群	内外煤状炭化物
1	50 - 20		L G 24	深鉢	口縁部			LR縄文		群	内煤状炭化物
51-22 LF24 深鉢 口緣部 加東文 LRMX 群 51-23 LF24 深鉢 口緣部 加東文 口緣日 RLM2 群 內外煤状炭化物 51-24 LH24 深鉢 口緣部 口緣日 RL RL 群 內外煤状炭化物 51-25 LH24 深鉢 口緣部 日城日 LR LRMX 群 外煤状炭化物 51-26 LF24 深鉢 口緣部 山東日 LRM2 群 外煤状炭化物 51-27 LH24 深鉢 口緣部 口緣日 LR LRM2 群 外煤状炭化物 52-29 LG24 深鉢 口緣部 山塚 LR LR LRM2 群 外煤状炭化物 52-30 L F24 深鉢 口緣部 口緣日 LR LR LR 上R 以上 工程 分煤状炭化物 工程 LR LR 工程 群 外煤状炭化物 工程	50 - 21		L H24	深鉢	口縁部			LR縄文		群	
1	51 - 22		L F 24	深鉢	口縁部			L R縄文		群	
1	51 - 23		L F 24	深鉢	口縁部			L R縄文		群	
1	51 - 24		L H24	深鉢	口縁部	縄文		RL縄文		群	内外煤状炭化物
18-20	51 - 25		L H24	深鉢	口縁部	縄文		LR縄文		群	外煤状炭化物
1 - 28	51 - 26		L F 24	深鉢	口縁部	縄文		LR縄文		群	外煤状炭化物
52 - 29 L G24 深鉢 口緣部 編文 L R總文 群 外煤状炭化物 52 - 30 L F24 深鉢 口緣部 四唇上 R總文 L R總文 群 外煤状炭化物 52 - 31 L E25 深鉢 口緣部 風唇上 R總文 L R總文 群 外煤状炭化物 52 - 32 L E24 深鉢 口緣部 四唇上 R總文 L R總文 群 外煤状炭化物 52 - 33 L F24 深鉢 口緣部 四唇上 R總文 L R總文 群 52 - 34 L F24 深鉢 口緣部 四唇上 R總文 L R總之 群 52 - 35 L F24 深鉢 口緣部 四唇上 R總之 L R總文 群 外煤状炭化物 52 - 36 L G24 深鉢 口緣部 四唇上 R總之 L R總之 群 内外煤状炭化物 52 - 37 排土 深鉢 口緣部 四唇上 R總之 L R總之 群 内外煤状炭化物 52 - 38 L H24 深鉢 口緣部 四唇上 R總之 L R總之 群 内外煤状炭化物 52 - 39 L G24 深鉢 口緣部	51 - 27		L H24	深鉢	口縁部	縄文		LR縄文		群	
1	51 - 28		L F 24	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	
52-31 LE25 深鉢 口縁部 品屋LR縄文 日縁LR LR縄文 群 外煤状炭化物 52-32 LE24 深鉢 口縁部 編文 口縁LR LR縄文 群 外煤状炭化物 52-33 LF24 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR縄文 群 52-34 LF24 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR縄文 群 52-35 LF24 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR縄文 群 外煤状炭化物 52-36 LG24 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR縄文 群 内外煤状炭化物 52-36 LG24 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR縄文 群 内外煤状炭化物 52-37 排土 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR縄文 群 内外煤状炭化物 52-38 LH24 深鉢 口縁部 編文 LR組入 LR組文 群 内外煤状炭化物 52-39 LG24 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR組文 群 内外煤状炭化物 52-40 LF25 深鉢 口縁部 編文 日縁LR LR組文 群 内外煤状炭化物 53-41 LG24 深鉢 口縁部 四縁LR LR組文 LR組文 群 外煤状炭化物	52 - 29		L G24	深鉢	口縁部			LR縄文		群	外煤状炭化物
S2 - 32	52 - 30		L F 24	深鉢	口縁部			L R縄文		群	
1	52 - 31		L E 25	深鉢	口縁部	山暦 L R 縄又 口縁 L R 縄文		L R縄文		群	外煤状炭化物
1	52 - 32		L E 24	深鉢	口縁部			L R縄文		群	外煤状炭化物
1	52 - 33		L F 24	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	
52 - 36 L G24 深鉢 口緣部 縄文 L R縄文 群 52 - 36 L G24 深鉢 口緣部 組文 L R縄文 群 52 - 37 排土 深鉢 口緣部 組文 L R縄文 群 内外煤状炭化物 52 - 38 L H24 深鉢 口緣部 山屋 L R縄文 L R縄文 群 外煤状炭化物 52 - 39 L G24 深鉢 口緣部 組文 L R縄文 群 内外煤状炭化物 52 - 40 L F25 深鉢 口緣部 組文 L R縄文 群 内外煤状炭化物 53 - 41 L G24 深鉢 口緣部 山屬 L R縄文 L R縄文 群 外煤状炭化物 53 - 42 L I 23 深鉢 口緣部 加索 上 R L R縄文 群 外煤状炭化物 53 - 43 L G24 深鉢 口緣部 川屬 L R縄文 L R縄文 群 外煤状炭化物	52 - 34		L F 24	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文		LR縄文		群	
1	52 - 35		L F 24	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	外煤状炭化物
18	52 - 36		L G24	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	
52 - 39 L G24 深鉢 口縁部 編文 L R縄文 群 内外煤状炭化物 52 - 40 L F 25 深鉢 口縁部 細文 L R縄文 群 内外煤状炭化物 53 - 41 L G24 深鉢 口縁部 一個百里 L R縄文 群 内外煤状炭化物 53 - 42 L I 23 深鉢 口縁部 細文 L R縄文 群 外煤状炭化物 53 - 43 L G24 深鉢 口縁部 細索 L R縄文 群 外煤状炭化物 53 - 43 L G24 深鉢 口縁部 一個百里 L R L R縄文 群	52 - 37		排土	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	
1	52 - 38		L H24	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	外煤状炭化物
1	52 - 39		L G24	深鉢	口縁部	縄文		L R縄文		群	内外煤状炭化物
1	52 - 40		L F 25	深鉢	口縁部	縄文		LR縄文		群	内外煤状炭化物
1	53 - 41		L G24	深鉢	口縁部	縄文		LR縄文		群	
50 - 40 L G 24 / /木野	53 - 42		L I 23	深鉢	口縁部	縄文		LR縄文		群	外煤状炭化物
53 - 44	53 - 43		L G24	深鉢	口縁部	山啓LR縄文 口縁LR 縄文		LR縄文		群	
	53 - 44		L F 24	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文				群	

									1
53 - 45		L H23	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文	LR縄文		群	
53 - 46		L H24	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文	L R縄文		群	外煤状炭化物
53 - 47		L F 24	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文	LR縄文		群	
53 - 48		L D 25	深鉢	口縁部	中・下端沈線 1 口縁 R		による曲	群 十腰内 2	外煤状炭化物
					L縄文 上端無文	線で区画 磨消 上端沈線 1 対	線による		7777 7757575
53 - 49 53 - 50	19 - 5	L R 24	深鉢深鉢	口縁部	下端沈線 1 無文 下端撚糸圧痕 無文	区画 磨消 L LR縄文	R縄文	群 十腰内 2	外煤状炭化物
53 - 51	19 - 3	L G 24	深鉢	口縁部	口縁LR縄文	して神人		群	外煤状炭化物
53 - 52		L H24	深鉢	口縁部	口唇面取り	L R縄文		群	外煤状炭化物
54 - 53 54 - 54	19 - 6	L F 24 K R 23	深鉢 深鉢	口縁部	L無節縄文 LR縄文 磨消				外煤状炭化物 内ケズリ
54 - 55		L J 24	深鉢	口縁部	RL縄文	RL縄文		群	内外煤状炭化物
54 - 56		L F 24	深鉢	胴部	口縁下端沈線1 RL縄文	RL縄文		群	外煤状炭化物
54 - 57		L F 22	深鉢	口縁部	無文	無文		群	内外煤状炭化物
54 - 58		L D 24	深鉢	口縁部	│ 口唇LR縄文 口縁LR │縄文	LR縄文		群	
54 - 59		L E 24	深鉢	口縁部	L R縄文	L R縄文		群	2.6年0万分
54 - 60	19 - 7	L G24	深鉢		口縁RL縄文	RL縄文		群	2 種類の原体 外煤状炭化物
55 - 61		L D 25	深鉢	口縁部	口縁RL縄文	RL縄文		群	+ ++ ++ +- / / + / m
55 - 62		L G24	深鉢	口縁部	口縁無文 下端沈線 1 口唇面取り 口縁 R L 縄	LR縄文		群	内煤状炭化物
55 - 63		K R 24	深鉢深鉢	口縁部	文	R L 縄文	£)	群	内外煤状炭化物
55 - 64 55 - 65		L B 24	深鉢	口縁部	口縁無文 下端撚糸圧痕 口縁RL縄文	L R 縄文 (摩源 R L 縄文	6)	群	外煤状炭化物
55 - 66		L H22	深鉢	口縁部	口唇面取り 口縁 L R 縄 文	LR縄文		群	外煤状炭化物
55 - 67		K R 24	深鉢	口縁部	RL縄文	RL縄文		群	内外煤状炭化物
55 - 68		L E 23	深鉢	口縁部	口唇RL縄文 口縁RL 縄文	RL縄文		群	
55 - 69		L E 23	深鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 0 段多条 L R 縄文			群	外煤状炭化物 補修孔
55 - 70	19 - 8	K S 24	深鉢		口縁LR縄文	LR縄文		群	外煤状炭化物
56 - 71	19 - 9	L H25	深鉢		口縁LR縄文	0 段多条 L R 紅	!文	群	内粗いケズリ 内外煤状炭化物
56 - 72		L E 23	深鉢	口縁部	口縁RL縄文	RL縄文		群	外煤状炭化物
56 - 73		L B 24	深鉢	口縁部	口唇面取り 口縁 L R 縄 文	LR縄文		群	
56 - 74	19 - 10	L G24	深鉢	突起	耳状小形装飾突起 口縁	上端沈線 3 階	線による	群 十腰内 2	
					隆線貼付 下端刺突文 耳状大形装飾突起 曲線	入組文 磨消	LR縄又		
56 - 75	19 - 11	L G24	深鉢	突起	沈線文 磨消 沈線に沿っ て刺突文 LR縄文			群 十腰内 2	
56 - 76	19 - 12	L I 24	深鉢	突起	耳状大形装飾突起 曲線 沈線文			群 十腰内 2	
EG 77	10 12	L G24	深鉢	978 ±3	耳状小形装飾突起 つま			# 十冊内 2	
56 - 77	19 - 13	L G24	/木亚	突起	み出し隆線 1 曲線沈線 文3 L R縄文充填			群 十腰内 2	
56 - 78	19 - 14	L E 24	深鉢	突起	耳状装飾突起 内外曲線 沈線文			群 十腰内 2	
57 - 79	20 - 15	L C 24	深鉢	胴部		沈線による渦巻縄文充填	文 R L	群 十腰内 2	外煤状炭化物
57 - 80	20 - 16	L E 24	深鉢	胴部		沈線上端3 下字状沈線 磨消	端4 S	群 十腰内 2	
37 - 80	20 - 10	L L 24		ના ભા		文		11 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	
57 - 81		L G 24	深鉢	胴部		沈線4 沈線間線 LR縄文	無文	群 十腰内 2	外煤状炭化物
57 - 82		L H24	深鉢	胴部		沈線で弧状に区 縄文	画 LR	群 十腰内 2	
57 - 83		L G25	深鉢	胴部		L R 縄文 沈級 区画 磨消	で円形に	群 十腰内 2	外煤状炭化物
57 - 84		L G23	深鉢	胴部		沈線で弧状に区	画磨消	群 十腰内 2	89・87と同一個体
57 - 85		L E 24	深鉢	胴部		LR縄文 沈線による弧物	· 磨消	群 十腰内 2	
						L R 縄文 沈線 2 沈線間			
57 - 86		L G24	深鉢	胴部		画 磨消 LF	縄文	群 十腰内 2	
57 - 87		L G24	深鉢	胴部		沈線 2 沈線間 画 磨消 L F	縄文	群 十腰内 2	89・84と同一個体
57 - 88		L F 24	深鉢	胴部		沈線で弧状に区 縄文充填	画 R L	群 十腰内 2	
57 - 89		L G21	深鉢	胴部		沈線による区画	精円形	群 十腰内 2	外煤状炭化物 84・
57 - 90		L G25	深鉢	胴~底部		暦消 LR縄文 下端磨消 LF		群	87と同一個体
57 - 91		L H24	深鉢	胴~底部		LR縄文		群	外煤状炭化物
58 - 92 58 - 93		L H24 L D25	深鉢深鉢	胴~底部			縄文	群群	
58 - 94		L F 24	深鉢	胴~底部		L無節縄文	上げ	底 辨	内外煤状炭化物
58 - 95	20 - 17	L D 25	深鉢	胴~底部		L R 縄文 磨消	木葉	根 …	1 37 1 AN INDICATION
58 - 96		L G24	鉢	口縁部	小頭部貼付 口縁中・下	上端沈線 磨消		群 十腰内 2	
58 - 97		L C 24	鉢	口縁部	端沈線・磨消 LR縄文 小突起 小頭部貼付	文 上端沈線 3 L	R縄文	群 十腰内 2	内外煤状炭化物
58 - 98		L F 25	鉢	口縁部	口唇内沈線 1 口縁刻み 目 下端沈線 2			群	
					口唇 L R 縄文 口縁中・	沈線による入総	B → I P		
59 - 99		L G24	鉢	口縁部	下端沈線 1 上端 L R 縄 文充填 下端磨消	縄文充填	17 7	群 十腰内 2	
59 - 100		L F 22	鉢	口縁部	下端磨消 LR縄文	L R縄文		群	
59 - 101		L A 24	鉢	口縁部	口唇一部刻み目 口縁無 文	RL縄文		群	外煤状炭化物

59 - 102		L C 25	鉢	口縁部	口縁無文		LR縄文		群		内外煤状炭化物
59 - 103		L D 25	鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁下端 沈線 1 無文 磨消		沈線で方形に区画 磨消		群 十朋	要内 2 ~	
59 - 104		L G24		口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R				群		外煤状炭化物
39 - 104		L G24	亚华	口称可	縄文				ti T		717未1八火1七10
59 - 105		L G24	鉢	口縁部	口唇LR縄文 口縁沈線 1 LR縄文 下端磨消・ 沈線 1		磨消		群		
59 - 106	20 - 20	L G24	金本		口唇LR縄文		LR縄文	網代痕	群		内煤状炭化物
59 - 107	20 - 18	L H24	鉢		口唇 L R縄文		LR縄文 下端磨消	網代痕	群		1377 (7.0 (1010
	20 - 24			- 43 ÷c	1 111			MIST CITE			
59 - 108 59 - 109	20 - 19	L F 22 L D 23	鉢鉢	口縁部	口縁沈線 2 R L 縄文 R L 縄文		RL縄文		群 群		がはおおか
59 - 109	20 - 19	L H22	鉢	口縁部	口唇面取り		R L 縄文 L R 縄文		群		外煤状炭化物 外煤状炭化物
60 - 111		L E 24	鉢	口縁部	口縁RL縄文		RL縄文		群		外煤状炭化物
60 - 112		K S 24	鉢	口縁部	口縁RL縄文		RL縄文		群		内煤状炭化物
60 - 113		L F 22	鉢	口縁部	口縁 R L 縄文		RL縄文		群		外煤状炭化物
60 - 114		L H 23	鉢	口縁部	0 段多条縄文 R L 縄文				群		外煤状炭化物
60 - 115		L C 24	鉢	口縁部			RL縄文		群		外煤状炭化物
60 - 116 60 - 117	20 - 23 20 - 21	L E 24 L G 23	鉢鉢		無文無文				群群		内外ケズリ
60 - 117	20 - 21	L E 24	鉢		無文				群		内がケスリ
	20 - 22			□ 43 ±0	折り返し口縁 口唇 L R		沈線で帯状に区画を消				
60 - 119		L C 25	鉢	口縁部	縄文 口縁 L R 縄文 口唇沈線 下端沈線 刺		LR縄文 弧状沈線による文様帯			要内 2	
60 - 120		L F 24	鉢	口縁部	突文		刺突文		群十朋	要内 2	
60 - 121		L E 25	鉢	口縁部	口唇LR縄文 口縁LR 縄文		L R縄文		群		外煤状炭化物
60 - 122		L H24	鉢	口縁部	口唇 L R 縄文 口縁 L R 縄文		L R縄文		群		外煤状炭化物
60 - 123	20 - 25	K T 24	鉢	口縁部	沈線 1 円形刺突文		沈線による文様帯で区画沈線間磨消沈線に沿って田野刺窓文		群 十朋	要内 2	外煤状炭化物 124と同一個体
60 - 124	20 - 26	L F 24	鉢	口縁部	沈線 1 円形刺突文		て円形刺突文 L R 縄文 L R 縄文		群十朋	要内 2	123と同一個体
	20 - 20				沈線6 S字状沈線 口		上 代源人				1230日 旧座
60 - 125		L G24	鉢	口縁部	縁上端磨消 L R 縄文		(=)			要内 2	
60 - 126		L F 22	鉢	口縁部	口縁沈線 2 磨消		RL縄文		群		外煤状炭化物
60 - 127	20 - 27	L G24	鉢	口縁部	沈線 5 縦位にS字状・ 弧状の沈線 LR縄文		無文		群 十朋	要内 2	
60 - 128	20 - 28	L C 24	鉢	胴~底部			沈線で方形に区画 逆T 字状文 LR縄文充填	網代痕	群 十朋	要内 3	
60 - 129		K T 24	鉢	胴部			沈線によるクランク状文 磨消 LR縄文		群 十朋	要内 2	
60 - 130		L F 24	鉢	胴部			沈線による文様帯 LR		群十朋	要内 2	
60 - 131		L F 24	鉢	胴部	沈線 2 S 字状沈線		縄文充填		群十朋	要内 2	
61 - 132		L G24	鉢	胴~底部	弧状沈線による区画 磨		L R縄文			要内 2	
01 - 132		L G 24	亚华	m ~ 成品	消				10 T I II II	女P3 Z	
61 - 133		L A 21	鉢	胴~底部			沈線による区画 L R 縄 文充填		群 十朋	要内 2	
61 - 134		L E 22	鉢	胴~底部			LR縄文		群		内外煤状炭化物
61 - 135	21 - 29	L E 24	壺	口~胴部	大形突起 突起頭頂部貼付 口唇 L R 縄文 下端 沈線 1 無文	下端沈線	上端沈線 2 中央沈線 3 帯状入組文 平行四角形 文 三角文 0 段多条 L R縄文 磨消		群十朋	要内 2	外赤漆
61 - 136	21 - 30	L I 24	壺	口縁部	口縁沈線で文様帯に区画 磨消 LR縄文				群 十朋	要内 2	外赤漆?
61 - 137	21 - 33	L C 24	壺	口~頸部	口縁大形山形突起 沈線 による帯状入組文 RL	下端沈線	沈線による帯状文 RL 縄文充填		群 十朋	要内 2	
61 - 138	21 - 32	L E 25	壺	口~胴部	縄文充填 口唇 L R 縄文	下端沈線	沈線による入組文 LR		群 十朋	要内 2	内ワヅミ痕
					口唇LR縄文 口縁下端	1 無文	縄文充填				, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
61 - 139		L H24	壺	口縁部	沈線 1 口縁磨消	1 磨消 LR縄文			群 十朋	要内 2	
61 - 140	21 - 31	L E 24	壺	口縁部	口縁上端沈線 1 沈線で 雷文に区画 区画内磨消				群 十朋	要内 2	
					LR縄文						
62 - 141		L C 24	壺	口縁部	口唇 L R 縄文	LR縄文	法独本世生 神中中		群		
62 - 142		K T 24	壺	口縁部	上端沈線・磨消 下端沈 線による区画 RL縄文		沈線で帯状・弧状に区画 R L 縄文 磨消		群 十朋	要内 2	
62 - 143	21 - 34	L H24	壺	胴~底部			上端沈線1 沈線による 帯状入組文 磨消 LR	網代痕	群 十朋	要内 2	
00		. =				N. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.	縄文				AL MALINE MARK
62 - 144	21 - 40	L B 23 K T 24	壺	薬百 。 用 戸立7	口縁無文	沈線 1	RL縄文		群		外煤状炭化物
62 - 145		N 1 24	壺	頸~胴部		無文無文	LR縄文		群		
62 - 146	21 - 37	K S 24	壺	口~胴部	口縁無文	端貼瘤沈線による曲線文	肩部上端沈線による区画 文 貼瘤 LR縄文充填 弧状線文 胴部LR縄文		群十朋	要内 4	
62 - 147		L E 24	壺	胴部			沈線による帯状文 L R 縄文充填		群十朋	要内 2	内ワヅミ痕
62 - 148		L E 24	壺	胴部			沈線による帯状文 LR 縄文充填		群 十朋	要内 2	内ワヅミ痕
62 - 149		L H23	壺	胴部		下端沈線	帯状入組文 磨消 LR 縄文		群 十朋	要内 2	
62 - 150		L H24	壺	胴部			沈線による帯状入組文 LR縄文充填		群		
62 - 151		排土		胴部			帯状入組文 LR縄文充		群 十朋	要内 2	
02 101		74F-IL	ae.	און פוני			填		ыт I D3	~! J ~	内外は445/1/8/m
62 - 152		L H23	壺	胴部			上端沈線1 沈線で文様 帯に区画 LR縄文充填		群十朋	要内 2	内外煤状炭化物 内ワヅミ痕 153 と同一個体
62 - 153		L G24	壺	頸部		下端沈線 1	弧状沈線による区画		群 十朋	要内 2	152と同一個体
		L G24	壺	胴部			沈線による帯状入組文 L R 縄文充填		群十朋	悪内 2	
∪∠ - 153							沈線による帯状入組文				1020回一個

						I	帯状入組文 磨消 LR				I
63 - 155		L G24	壺	胴部			縄文		群	十腰内 2	内外アスファルト
63 - 156		L F 24	壺	胴部			沈線による帯状文 LR 縄文充填		群	十腰内 2	内ワヅミ痕
63 - 157		L D 25	壺	胴部		下端沈線 1	沈線による帯状入組文 L R縄文充填		群	十腰内 2	
63 - 158	21 - 35	L E 24	壺	胴部		無文	上端沈線 R L 縄文 沈線による帯状入組文	67 (N e	群		
63 - 159	21 - 38	L D 25	- 壺	胴~底部		下端沈線	L R 縄文充填 下端沈線 帯状入組文	網代痕	群	十腰内 2	
63 - 160	21 - 36	L G24	壺	胴~底部		1 1	L R 縄文充填	上げ底		十腰内 2	
63 - 161 63 - 162	21 - 41	L B 24 L H 23		胴~底部 胴~底部			0 段多条 R L 縄文 無文		群群		
63 - 163		L I 24	壺	胴~底部			沈線による帯状文 L R 縄文充填		群	十腰内 2	外赤漆 内外煤状 炭化物
63 - 164	21 - 41	L H24	壺	胴~底部			沈線による入組文 LR	網代痕	群	十腰内 2	内外煤状炭化物
63 - 165	21 - 42	L F 24	壺	胴~底部			縄文充填 無文	網代痕	群	1 2213 -	T ST T AN D LOCATION
64 - 166	21 - 43	L G24	台付	胴~底部	L R縄文				群		>
64 - 167 64 - 168	21 - 44	L E 24 L G 24	壺壺		手づくね 無文 無文				群群		ミニチュア土器
64 - 169	21 - 46	L H24	壺		無文				群		ミニチュア土器
64 - 170	21 - 48	L F 24	台付 小形鉢		無文				群		ミニチュア土器
64 - 171 64 - 172	21 - 47	L E 25 L G 24	壺	胴~底部 底部	無文			網代痕	群		ミニチュア土器
64 - 173	21 - 50	L H24		底部				網代痕	群		
64 - 174 64 - 175	21 - 51 21 - 52	L C 24 L F 24		底部 底部				網代痕網代痕	群		
64 - 176	21 - 54	L G24		底部				笹痕	群		
64 - 177	21 - 53	L B 24	不叩	底部口線部	口唇刻み目による小波状			木葉痕	群		古外は4年1/24年
64 - 178		L F 22	不明	口縁部	□縁R L 縄文 □唇一部刻み目 □縁無		Latinhada —		群	1776	内外煤状炭化物
64 - 179	23 - 55	K S 24	深鉢	口縁部	文		上端沈線 2 RL縄文			大洞Cィ?	外煤状炭化物
65 - 180		K T 23	深鉢	口縁部	口縁波状 沈線 3		L R縄文		群 C ₂	大洞 C₁~	内外煤状炭化物 補修孔
65 - 181		L H24	鉢	口縁部	口唇 A 字状突起 沈線 2 刻み目による文様帯	下端 B 字 状貼付			群	大洞 C ₂	182と同一個体
65 - 182		L F 24	鉢	口縁部	口唇 A 字状突起 刻み目 による文様帯 沈線 2	弧状沈線 下端沈線 3	磨消による雲形文 LR 縄文		群	大洞 C 2	内外煤状炭化物 181と同一個体
65 - 183		L G24	鉢	口縁部	口唇 B 字状突起 口縁下 端沈線 2 沈線による入 組文	下端沈線			群	大洞B	内外煤状炭化物
65 - 184	23 - 56	K T 24	鉢	口縁部	口唇刻み目による文様帯 下端 B 字状貼瘤 口縁下 端刺突文		上端沈線3 弧状沈線文 LR縄文		群 C ₂	大洞 C ₁ ~	
65 - 185	23 - 57	L F 22	鉢	口縁部	口唇 B 字状突起	下端沈線 2 羊歯 状文	RL縄文		群	大洞 B C	内外煤状炭化物
65 - 186		表採	鉢	口縁部	刻み目による小波状 沈 線 3		0 段多条 R L 縄文		群 2	十腰内1~	内外煤状炭化物
65 - 187	23 - 58	L E 24	鉢	口縁部	口縁刻み目による波状 下端沈線 2 羊歯状文		L R縄文		群	大洞BC	外煤状炭化物
65 - 188		K T 23	鉢	口縁部	口縁刻み目による波状 沈線3 LR縄文				群 C ₂	大洞 C₁~	
65 - 189		L C 24	鉢	口縁部	沈線3 0段多条RL縄 文 口縁刻み目による小 波状				群 C ₂	大洞 C₁~	内外煤状炭化物
65 - 190		L F 23	鉢	口縁部	刻み目による小波状 沈 線3 LR縄文		LR縄文		群 C 2	大洞 C₁~	内外煤状炭化物
65 - 191		L F 22	鉢	口縁部	刻み目による小波状 R				群		内外煤状炭化物
65 - 192	23 - 61	K T 23	鉢		L縄文 口唇面取り		RL縄文		群		外煤状炭化物
65 - 193	23 - 60	L E 24	鉢		刻み目による小波状 沈 線3		RL縄文		群 C 2	大洞 C₁~	
65 - 194	23 - 59	L B 23	鉢	口縁部	口唇内沈線1 B字状突起 RL縄文 口縁沈線による入組文		上端貼瘤 0段多条RL 縄文		群	大洞B	内外煤状炭化物
65 - 195		L E 24	鉢	口縁部	刻み目による小波状 沈線3 0段多条RL縄文				群 C 2	大洞 C₁~	外煤状炭化物
65 - 196		L E 24	鉢	口縁部	口縁刻み目による小波状下端沈線3		LR縄文			大洞 C₁~	外煤状炭化物
65 - 197		K T 24	鉢	口縁部	刻み目による小波状 沈		0段多条RL縄文		群	大洞 C ₁ ~	
65 - 198		K I 23	鉢	口縁部	線3 刻み目による小波状 沈		LR縄文			大洞C₁~	外煤状炭化物
65 - 199		K T 24	鉢	口縁部	線3 LR縄文 RL縄文				C ₂ 群		外煤状炭化物
65 - 200	23 - 62	L E 23	鉢			****	RL縄文		群		
65 - 201		L E 24	鉢	胴部		羊歯状文 下端刻み 目	磨消		群	大洞 B C	
65 - 202		L C 25	鉢	頸部		羊歯状文 下端刻み 目	磨消による弧状文	Sele fette	群	大洞 B C	
66 - 203	23 - 65	L C 24	Ш		口唇内沈線 2 刻み目による文様帯 刻み目		下端沈線2 LR縄文 磨消による雲形文	沈線で 円形に 区画	群	大洞 C 2	補修孔
66 - 204		K S 23	皿 or 浅鉢	口縁部	口唇刻み目 口縁内沈線 2		磨消による雲形文 L R 縄文		群		
66 - 205		L D 25	皿 or 浅鉢	口縁部	口唇沈線 1 口縁沈線 1		磨消による文様帯 LR 縄文		群	大洞 B C	
66 - 206		L F 24	皿 or 浅鉢	口縁部	口唇面取り 口縁磨消		沈線3 磨消 LR縄文		群		

第2章 調査の記録

66 - 208		L I 23	浅鉢	口縁部	上端沈線 1 沈線間刻み 目		磨消 雲形文 LR縄文		群	大洞BC?	210と同一個体
66 - 209		L B 24	浅鉢	口縁部	口縁沈線 2 刺突文		中端沈線 2 L R 縄文 磨消による雲形文		群	大洞 C ₂	内外煤状炭化物 黒漆
66 - 210		K T 24	ш	口縁部	口縁沈線 2 刺突文		磨消 雲形文 LR縄文		群		内外漆
66 - 211		K T 24	浅鉢	口縁部	上端沈線 1 沈線間刻み		磨消 雲形文 LR縄文		群	大洞BC?	209と同一個体
66 - 212		L G23	浅鉢	口縁部	目 口唇 B 字状突起 沈線 2		無文		群		内外赤色顔料
66 - 213		L H22	浅鉢	胴部			沈線 弧状沈線 RL縄文		群	大洞 C ₂	外赤色顔料
66 - 214		L A 24	皿 or 浅鉢	胴部			弧状沈線 LR縄文		群		
66 - 215	23 - 63	K S 24	皿 or 浅鉢	胴部			L R 縄文 磨消による雲 形文		群	大洞Cュ?	
67 - 216		K S 24	浅鉢	口~底部	口唇刺突文 口縁沈線 2 沈線 1 無文		用消による雲形文 LR 縄文	沈線 3	群	大洞 C 2	
67 - 217		L A 24	ш	口~底部	口唇 A 字状突起 刻み目		磨消による雲形文 RL 縄文 下端沈線 2		群	大洞 С 2	内外煤状炭化物
67 - 218	23 - 64	K T 23	∭ or	胴部	口縁沈線 2		沈線 2 弧状沈線 刺突		群	 大洞 B C	外赤色顔料
67 - 219		L B 24	浅鉢 皿 or	胴部			文 無文 沈線 弧状沈線 R L 縄		群	大洞Cュ?	713.03411
67 - 220		L E 23	浅鉢皿	胴部			文		群	大洞 С 2 ?	
67 - 221	23 - 66	L F 22	台付	口~胴部	口唇 B 字状突起 口縁沈線 3		磨消による雲形文 上端 沈線 2 沈線間刻み目 L R縄文	無文	群 C 1	大洞BC~	内外煤状炭化物
67 - 222		L E 24	台付壺	口~胴部	口唇内沈線 1 1/3刻み 目	下端沈線 2 B字 状貼瘤 RL縄文	肩部無文	台部剥離	群		
68 - 223	23 - 67	L E 23	台付鉢		口唇刻み目による小波状 口縁ケズリ		LR縄文	下端 L R縄文	群		内外煤状炭化物
68 - 224	24 - 68	L B 24	壺		口唇面取り 口縁沈線 2	下端つま み出しに よる隆帯		沈線で 円形に 区画	群	大洞 C 1	胴内下半黒漆 胴 内上半外赤色顔料
68 - 225	24 - 69	L H24	壺	口縁部		つまみ出 しによる 隆線	無文		群		
68 - 226		K S 23	壺	肩部			沈線による雲形文無文		群	大洞 C 2	
68 - 227		K S 23	壺	胴部			上端沈線4 沈線間刺突 文 B字状貼瘤 磨消に よる雲形文 RL縄文		群	大洞 C 2	外煤状炭化物
68 - 228	24 - 70	L E 24	注口		口唇内沈線 口縁A字状 突起 刻み目による文様 帯	下端沈線 2 磨消 雲形文 LR縄文	肩部刻み目による文様帯 上端刺突文 注と口部がは欠 と磨消で区画 窪 隆帯 現 B字状貼霜 隆帯 付付による状況線 を消による状況 よる帯状文	沈線で 円形に 区画	群	大洞℃₂	
68 - 229		L E 24	注口	口縁部		刻み目 無文 貼瘤			群		
68 - 230		K R 24	注口	口縁部	口唇刻み目による文様帯 貼瘤 口縁沈線3 刻み 目				群	大洞BC	
68 - 231		K S 24	注口	口縁部	口唇 B 字状突起 口縁下 端刺突文 沈線による文 様帯				群	大洞 B C	
68 - 232	24 - 72	L J 22	注口	口縁部	口唇 B 字状突起 上端沈線 3 弧状沈線				群	大洞BC?	
68 - 233	24 - 73	L J 22	注口	口縁部	沈線 1 刻み目	弧状沈線 刺突文			群 B C	大洞B~	
69 - 234	24 - 71	K S 24	注口		口唇沈線 1 A字状突起 刻み目	上端沈線 1 磨消 によう R縄文	上端沈線 2 沈線による 雲形文 LR縄文充填 肩部弧状沈線 刻み目 A字状貼瘤 注口部沈線 による区画 隆帯貼付 先端部一部欠損	欠損		大洞C₂	
69 - 235		K S 24	注口	口縁部		上下端刻 み目 沈 線による 弧状文	肩部刻み目		群	大洞 B C	
69 - 236	24 - 74	L B 24	注口	頸部		上み消磨 下目に ま ま ま ま れ に 来 れ に え く え く え く く く く く く く く く く く く く く			群	大洞BC?	
69 - 237		L C 24	注口	肩部			肩部刻み目による文様帯 上・下端刻み目 磨消 LR縄文 貼瘤		群	大洞 B C	
69 - 238		L E 24	注口	肩部		刻み目	磨消による文様帯 肩部弧状沈線による文様		群群	大洞BC 大洞B~	240と同一個体
69 - 239	24 - 75	L E 24	注口	頸部		刻み日弧状沈線	帯		B C	八州口~	
69 - 240		L E 24	注口	肩部		沈線 2	胴部弧状沈線 LR縄文 肩部刻み目による文様帯		群	大洞 B C	238と同一個体
69 - 241		L C 24	注口	肩部		下端沈線	胴部上端沈線3 LR縄 文 肩部弧状沈線による 文様帯 刻み目		群		外赤色顔料
69 - 242		K T 24	注口	胴部		つまみ出	弧状 無文		群	大洞BC	
69 - 243	24 - 76	排土	注口	注ぎ口	口屋加力口によるかが	しによる	胴部刻み目 注口部刺突 文		群	大洞BC?	>-x
69 - 244		L F 24	鉢	口~胴部	│ 口唇刻み目による小波状 │ 口縁沈線 2		LR縄文		群		ミニチュア土器 外煤状炭化物

第3章 自然科学的分析

第1節 出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

北秋田郡森吉町に所在する当遺跡の土坑 S K 04・05から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。 この樹種調査は、当遺跡や周辺地域の古環境を復元していく目的で資料を蓄積していく一環として 実施されている。

2 炭化材樹種同定の方法

一括採取された試料であり、出土した炭化材破片は小さいものが多かった。樹種同定は、同定可能な大きさの破片を出来るだけ多く観察した。また試料中に複数の樹種が含まれていた試料では、樹種同定用と年代用が同一破片で確保できる大きさのものを年代測定用試料として選別した。

樹種同定は、炭化材の3方向 (横断面・接線断面・放射断面) の断面を走査電子顕微鏡 (日本電子 株製 JSM-T100型) で拡大し、材組織の特徴を観察し、同定と写真撮影を行った。

3 結果

同定結果の一覧を、第9表にまとめた。検出された分類群は、落葉広葉樹のクリ・カエデ属であった。このほかに、炭化果実と思われる微破片も含まれていた。

遺跡名	遺構	検出樹種	備考	年代測定試料			
∸ ₩π.c	C K 04 - 05+15	クリ	6 mm樹皮付きと破片 2	LD-1199 (6mm材)			
向様田C	SK04・05土坑	カエデ属	破片 1				

第9表 出土炭化材の樹種同定結果

以下に同定の根拠とした材組織の観察結果を、分類配列順に記載する。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 図版26 1 a-1 c (S K 04・05 PLD-1199)

年輪の始めに中型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。横断面において、髄は突起のある四角形から五角形の形をしている。

カエデ属 Acer カエデ科 図版26 2 a-2 c (S K 04・05)

小型の管孔が単独または2~3個が放射状に複合して散在し年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~5細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。軸方向に連結する結晶細胞が顕著である。

第2節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

向様田C遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2 試料と方法

試料は、SK04・05遺構内から出土した炭化材 (クリ) 1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS 法) にて測定した。測定された14 C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した14 C 濃度を用いて14 C 年代を算出した。

3 結果

第10表に、試料の同位体分別効果の補正値 (基準値 - 25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を 補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

14 C 年代値(yrBP)の算出は、14 C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した14 C 年代誤差(± 1)は、計数値の標準偏差 に基づいて算出し、標準偏差 (0ne sigma) に相当する年代である。これは、試料の14 C 年代が、その14 C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

曆年代較正

暦年代較正とは、大気中の14 C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14 C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14 C 濃度の変動、および半減期の違い (14 C の半減期5,730 ± 40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、14 C 年代を暦年代に変換することである。 具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と14 C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて14 C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて14 C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

14 C年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正値は14 C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された14 C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、炭化材 (クリ) は cal B C 880 - 835年が、より確かな年代値の範囲として示された。

向様田C遺跡

第10表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号	試料データ	¹³ C PDB	14 C 年代	14C年代を暦年代に較正した年代				
(測定法)	三 武林子 一 夕	(‰)	(yrBP ± 1)	暦年代較正値	1 暦年代範囲			
PLD-1199	炭化材 No.5 (クリ)	- 25.3	2750 ± 30	cal BC 900	cal BC 915 - 890 (33.3%)			
(AMS)	SK04・05遺構内				<u>cal BC 880 - 835 (66.7%)</u>			

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の¹⁴C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第4章 まとめ

向様田 C 遺跡で検出した遺構は、土坑 2 基と配石遺構 3 基で、すべて縄文時代に属する。 2 基の土 坑は重複しており、SK04土坑が旧い。SK04土坑の北側から西側の底面には、20×15~40×30cm程 の川原石が敷いたように入れられている。出土遺物と放射性炭素年代測定の結果から、この2基の土 坑は縄文時代晩期の所産であり、規模・形態から考えると土坑墓の可能性が高い。遺跡中央やや東側 には、配石遺構を3基検出した。SQ01配石遺構とSQ02配石遺構は重複しているが、新旧関係は不 明である。SQ01配石遺構は、扁平な川原石を、径3.3mのほぼ円形に並べており、南側には礫が2 重に巡る。北側に重複するSQ02配石遺構は、SQ01配石遺構に比べると規模が小さく、形態も不整 形である。いずれも下部に掘り込みはなく、土坑墓に伴う配石ではない。東側に隣接する向様田A遺 跡でも多数の配石遺構を検出したが、SQ01配石遺構のように規模が大きく、整然と礫が並んでいる 遺構はない。SQ03配石遺構は、隅丸方形を呈し、前述の2基とは異なる。同様の規模・形態の配石 遺構が、向様田 B 遺跡の東端で、1基だけ離れて検出した。本遺構と何らかの関連があると考えられ る。配石遺構の近くでは、石剣が比較的多く出土した。これらの遺物の石質は、ほとんどが菫青石ホ ルンフェルスである。菫青石ホルンフェルスは、主に粘板岩が熱編成作用を受けて生成したもので、 森吉町の小繋森から湯ノ沢温泉にかけてのごく限られた地域に分布する。この地に住んだ縄文の人た ちは、石剣のよりよい石材として菫青石ホルンフェルスを採掘していたのだろうか。そして、円形に 礫を組んだ配石遺構の周りで、祈りや祭りなどの祭祀を行ったのだろうか。

遺跡北側斜面下で縄文時代後期中葉の土器が多量に出土している。これらの土器は、本遺跡に伴う遺物ではない。元々は向様田B遺跡に伴う土器が流れ込んだか、故意に捨てられたものである。縄文時代後期中葉の土器の出土層上位面で、縄文時代晩期前葉から中葉にかけての土器が出土している。本遺跡に伴う遺物と考えられ、本遺跡は、縄文時代晩期前葉から中葉にかけての祭祀関連遺跡である。もし、向様田B遺跡を縄文時代晩期に帰属すると考えるならば、向様田A遺跡からD遺跡にかけては、縄文時代晩期の大規模な一連の遺跡ということになろう。

本遺跡は向様田A・B遺跡より低位段丘面にある。向様田B遺跡南端より本遺跡を眺めると、SQ01配石遺構が円形にきれいに見える。当時の人々はこの配石を眺め、何かを祈ったのだろうか。 小又川流域の今後の調査により、本遺跡の性格等がより解明されることを期待する。

註1 五十嵐俊雄氏のご教授による。

註2 五十嵐俊雄氏のご教授による。

参考文献

秋田県教育委員会 『深渡遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化財調査報告書第 286集 1999 (平成11) 年

秋田県教育委員会 『桐内 C 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化財調査報告書 第299集 2000 (平成12) 年

向様田C遺跡

秋田県教育委員会 『桐内沢遺跡・日廻岱 A 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1 - 』 第335 集 2002 (平成14) 年

(明)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『長倉 遺跡発掘調査報告書 広域農道整備事業関連遺跡発掘調査』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集 2001 (平成13) 年

財団法人齋藤報恩会編 『宝ヶ峰』 財団法人齋藤報恩会 1991 (平成3) 年

村越潔 『円筒土器文化』 雄山閣 1974 (昭和49) 年

今井冨士雄 磯崎正彦 『岩木山 第16節 十腰内遺跡 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』 岩木山刊行会 1968(昭和 43)年

鈴木克彦 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2 - 十腰内2式土器の研究 - 」 『考古學雑』 誌 第81巻第4号 日本考古学會 1996 (平成8) 年

鈴木克彦 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2 (上) - 十腰内3,4,5 式土器の研究-」 『考古學雑誌』 第83巻第2号 日本考古学會 1998 (平成10)年

鈴木克彦 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2 (下) - 十腰内3,4,5 式土器の研究-」 『考古學雑誌』 第83巻第3号 日本考古学會 1998 (平成10)年

鈴木克彦 『北日本の縄文後期土器片年の研究』 雄山閣 2001 (平成13) 年

渡辺誠・南博史 共編 『古代學研究所研究報告 第5輯 青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』 財團法人 古代 學協會 1997 (平成9) 年

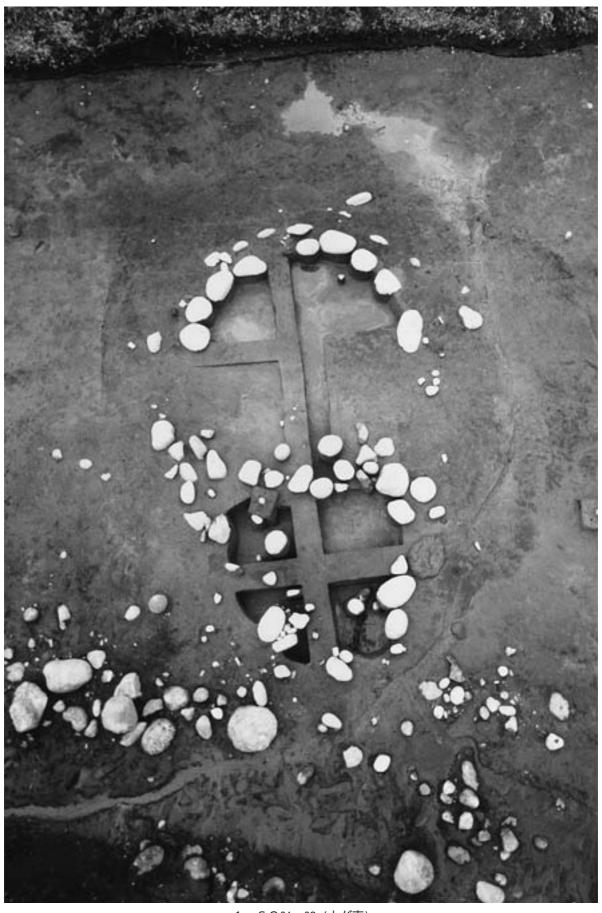
秋田県教育委員会 『からむし岱 遺跡 - 大館能代空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県教委員会 2002 (平成14) 年

鈴木道之助 『図録・石器入門事典 < 縄文 > 』 柏書房 1994 (平成 6) 年

秋田県埋蔵文化財センター 『向様田 A 遺跡発掘調査資料』 2001 (平成13) 年

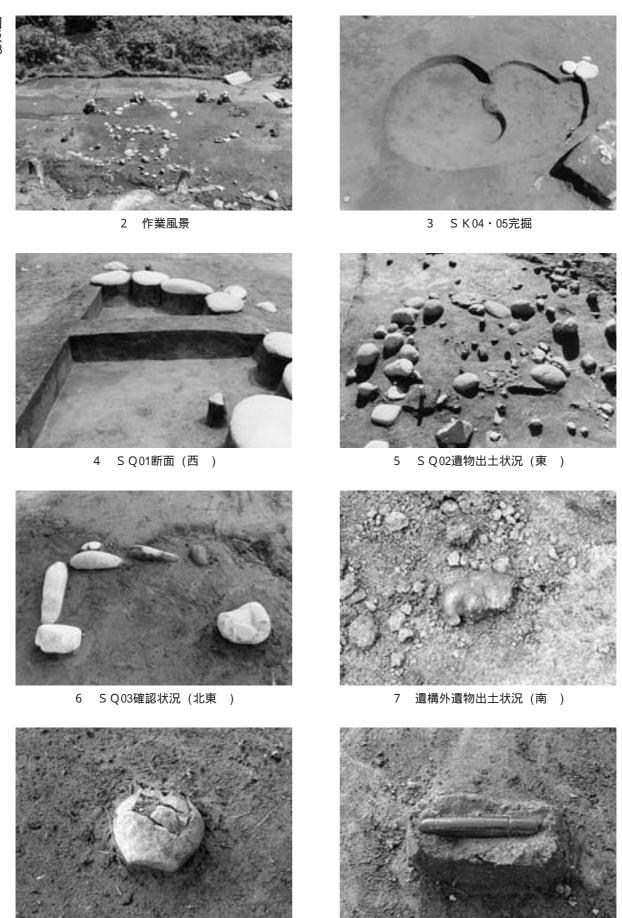
秋田県埋蔵文化財センター 『向様田 A 遺跡発掘調査資料』 2002 (平成14) 年

秋田県埋蔵文化財センター 『向様田 D遺跡発掘調査資料』 2002 (平成14) 年



1 S Q 01・02 (上が南)

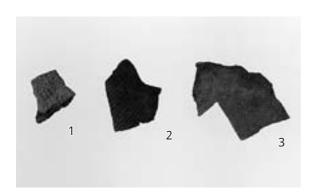
検出遺構 (1)

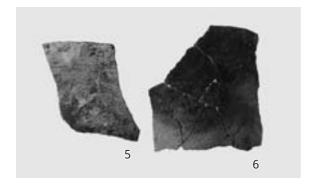


検出遺構(2)

9 遺構外遺物出土状況 (東)

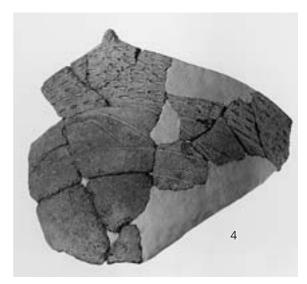
8 遺構外遺物出土状況(南)



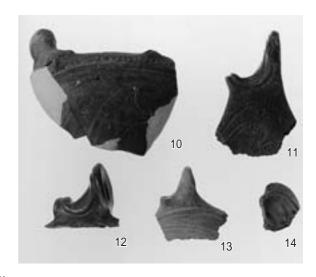




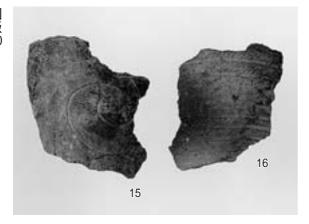








出土遺物 (1)

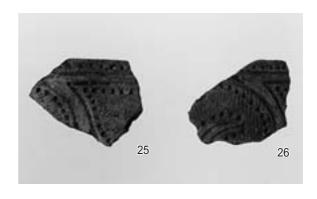










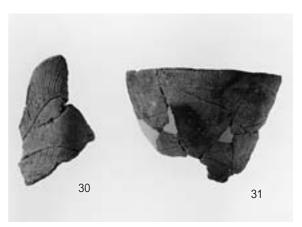






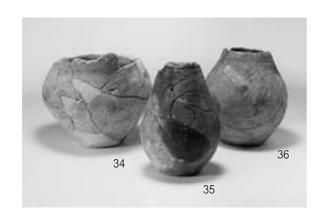
出土遺物 (2)









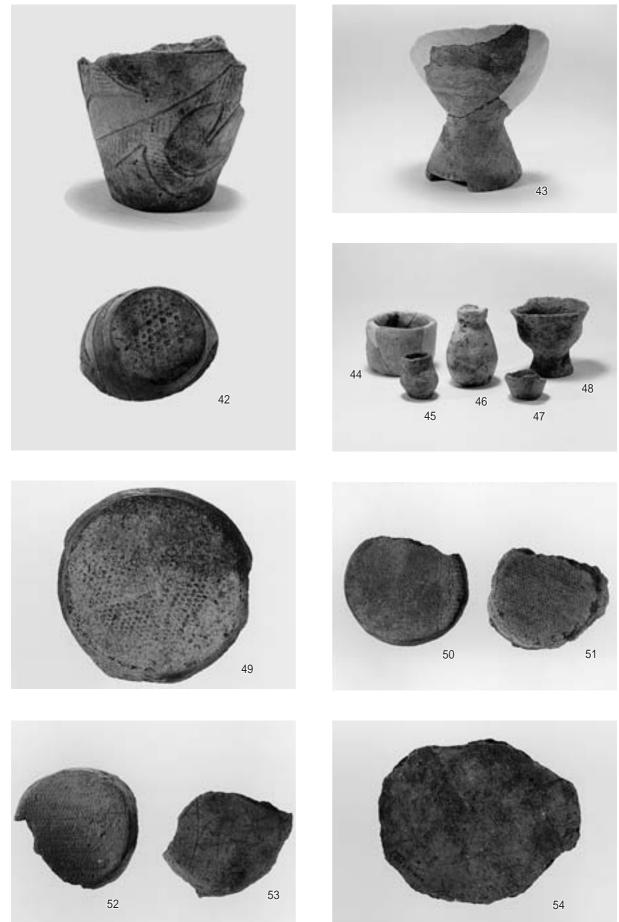




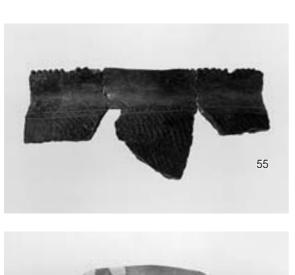




出土遺物 (3)



出土遺物 (4)















出土遺物 (5)





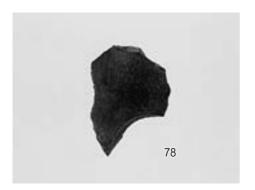


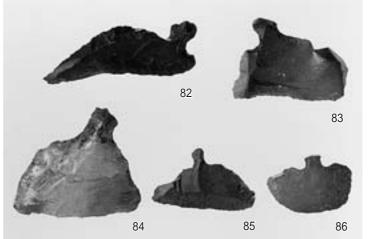


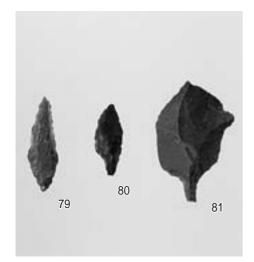


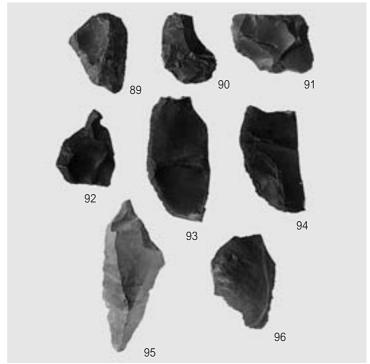


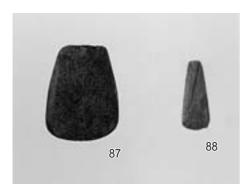
出土遺物 (6)

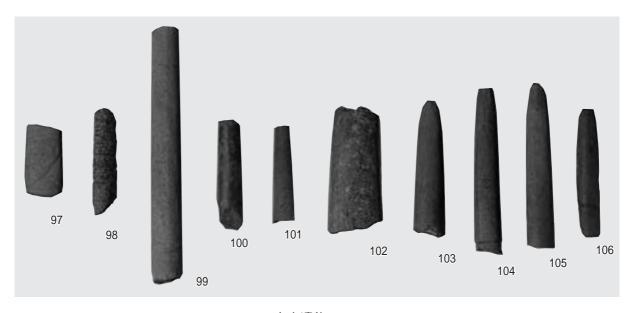




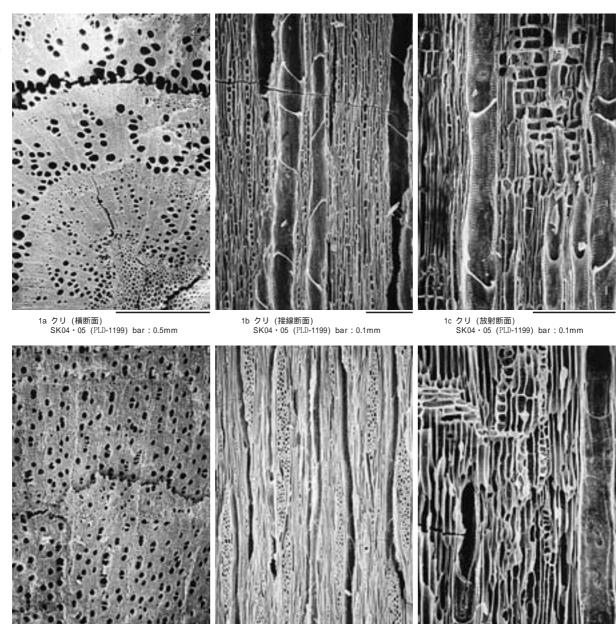








出土遺物 (7)



出土炭化材樹種

2b カエデ属 (接線断面) SK04・05 bar: 0.1mm 2c カエデ属 (放射断面) SK04・05 bar: 0.1mm

2a カエデ属 (横断面) SK04・05 bar: 0.5mm



第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

向様田 E 遺跡は小又川右岸の丘陵地に立地する。標高は145~159mで、遺跡全体が北東から南西に向かう緩斜面上にある。遺跡西側には沢が入り込み、東側と南側は急崖になっている。遺跡の南側には、標高136m前後の段丘が広がり、東から向様田 F 遺跡・B 遺跡・C 遺跡・A 遺跡・D 遺跡が隣接している。かつて、向様田 A ~ D・F 遺跡は水田として、向様田 E 遺跡は畑として利用されていた。

第2節 調査の方法

1 野外調査

調査はグリッド法で行った(第74図)。調査対象全域にグリッド杭を打設するため、建設省が打設した4級基準点DT1とDT2より設定した基準杭、昨年度向様田A遺跡で原点としたMA50(X4316.000,Y-30145.000)を基準杭とした。この基準杭を原点として、原点を通る国家座標第 系の南北方向に南北基準線X軸を設定した。これに直交して、原点を通る線を東西基準線Y軸とし、両基準線を延長して当該区内に4×4m方眼グリッドを組んだ。基準杭をMA50として、南から北へ4mごとに、・・・、47、48、49、50、51、・・・、と南北方向を示す数字と、東から西に、・・・、MM、MN、MO、・・・、と東西方向を示すアルファベットの2文字を付した。各グリッドの呼称は、南北方向の杭を通るX軸と東西方向の杭を通るY軸の組み合わせで、MA50、MB51、MC52、・・・、のようにグリッド東南隅の杭によって呼ぶこととした。

遺構は検出順に連番で遺構番号を付けた。調査は、原則として半截または十字に土層断面用のベルトを残して、2分割法または4分割法による精査を行った。

遺物は、グリッド単位に取り上げ、出土した層位、グリッド名または遺構名、年月日を記入した耐久性荷札を添付した。

平面図及び断面図は、原則として 1 / 20の縮尺で作成し、細部状況を表すために適宜 1 / 10の拡大図も作成した。発掘調査における写真撮影は、遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、遺跡全景を撮影するためにラジコンへリによる空中撮影を行った。また、10月には、セスナ機による向様田 A ~ E 遺跡の全景写真撮影を行った。

写真は、35mmカメラを使用し、フィルムはモノクロ、カラーリバーサル (スライド用)、ネガカラーを使用した。

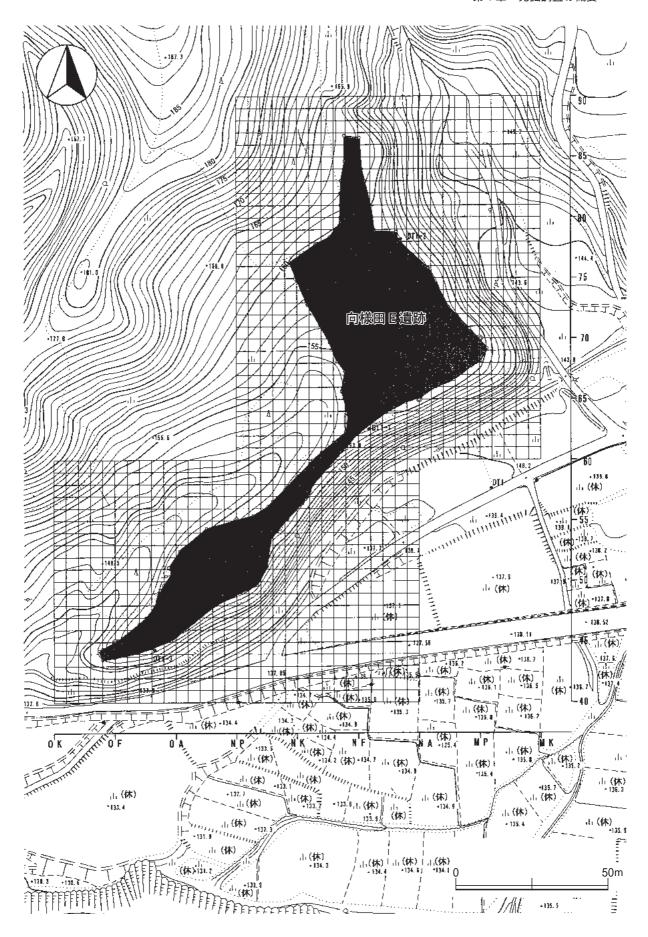
2 室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第2原図とした。第2原図をスキャナーで取り込み、すべてプロッタでトレースした。

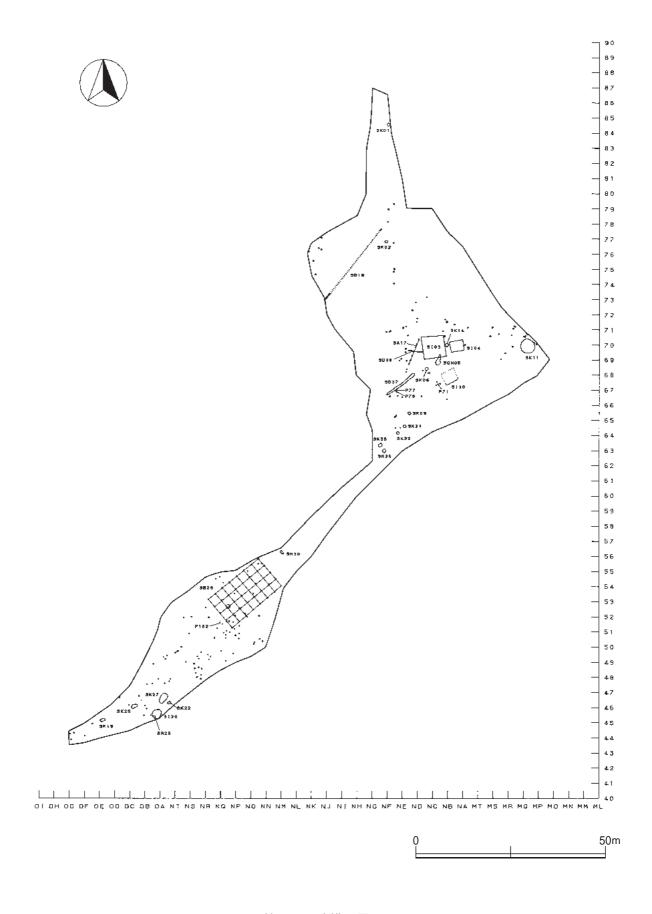
遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

- 8月27日 向様田 E 遺跡の発掘調査を開始した。調査区北東側から粗掘りをした。
- 9月3日 木村非常勤職員が採用され発掘調査に参加した。
- 9月4日 調査区東側で古代の竪穴住居跡2軒と竪穴住居跡を掘り込んでいる炉を検出した。
- 9月17日 調査区西側で縄文時代の竪穴住居跡とこの住居跡を掘り込んでいる土器埋設遺構を検出した。
- 9月7日 向様田 B 遺跡の発掘調査を終了し、全員向様田 E 遺跡の発掘調査に参加した。
- 10月10日 調査区西側の柱穴群が、桁行7間×梁行4間の掘立柱建物跡になることが判明した。
- 10月18日 ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。
- 10月19日 向様田 E 遺跡の発掘調査を終了した。検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 1 軒、土坑 5 基、土器埋設遺構 1 基、古代の竪穴住居跡 3 軒、土坑 7 基、溝跡 2 条、中世の掘立柱建物 跡 1 棟、柱列 1 列、炉 1 基、時代不明の土坑 2 基、焼土遺構 1 基、溝跡 1 条である。



第74図 向様田 E 遺跡グリッド設定図



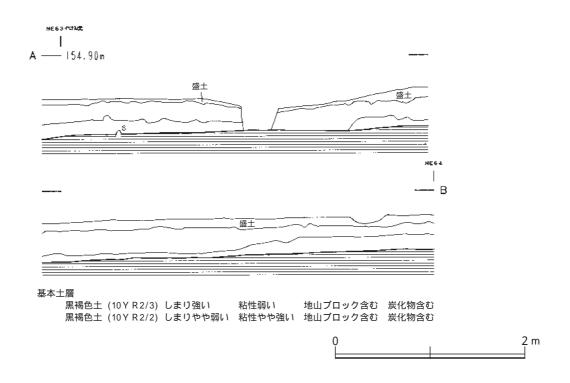
第75図 遺構配置図

第2章 調査の記録

第1節 基本層位

本遺跡は北東から南西にかけて傾斜している。かつては畑として利用されており、ほ場整備の際に 削平を受けている。特に南西側の削平が著しく、地山面には所々に索道跡が残る。

基本層位は以下の通りである。 層・ 層とも耕作土である。 層の層厚は10~30cmで、 層の層厚は5~20cmである。



第76図 基本土層

第2節 検出遺構と出土遺物

1 検出遺構の概要

遺構確認面はすべて地山であった。検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 1 軒、土坑 5 基、土器埋設 遺構 1 基、古代の竪穴住居跡 3 軒、土坑 7 基、溝跡 2 条、中世の掘立柱建物跡 1 棟、柱列 1 列、炉 1 基、時代不明の土坑 2 基、焼土遺構 1 基、溝跡 1 条である。

- 2 縄文時代の検出遺構と出土遺物
- (1) 竪穴住居跡
- S I 20竪穴住居跡 (第77図、図版28・36)
- 《位 置》 N T 45、O A 45 グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中に地山面で円形プランを確認し土坑とした。その後、柱穴と焼土を検出し

竪穴住居跡とした。

《重複》 住居跡南側をSR26土器埋設遺構に掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸2.39m、短軸2.1m (推定) の楕円形を呈する。建物方位はN-64°-Eを示す。

《埋土》8層に分かれた。

《 壁 》 削平が著しく、残存する壁の高さは4~6cmで、西側はやや緩やかに、その他は 急に立ち上がっている。

《床 面》 平坦で堅くしまっている。

《 炉 》 住居跡中央やや南側に地床炉がある。焼土範囲は、30×20cmの規模で3cm程の厚さがある。

《柱 穴》 検出した柱穴は2基である。P1の平面形は、径22cmの円形を呈し、深さは床面より11cmである。P2の平面形は、長軸28cm、短軸22cmの楕円形を呈し、深さは床面より10cmである。

《出 土 遺 物》 確認面より深鉢形土器口縁部破片 (1) が出土した。0段多条のRL縄文を施文 しており、外面には厚く煤状炭化物が付着する。この土器は縄文時代後期の土器で ある。

(2) 土坑

SK11土坑 (第78・79図、図版29・36・37)

《位 置》 M P 69・70、M Q 69・70グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

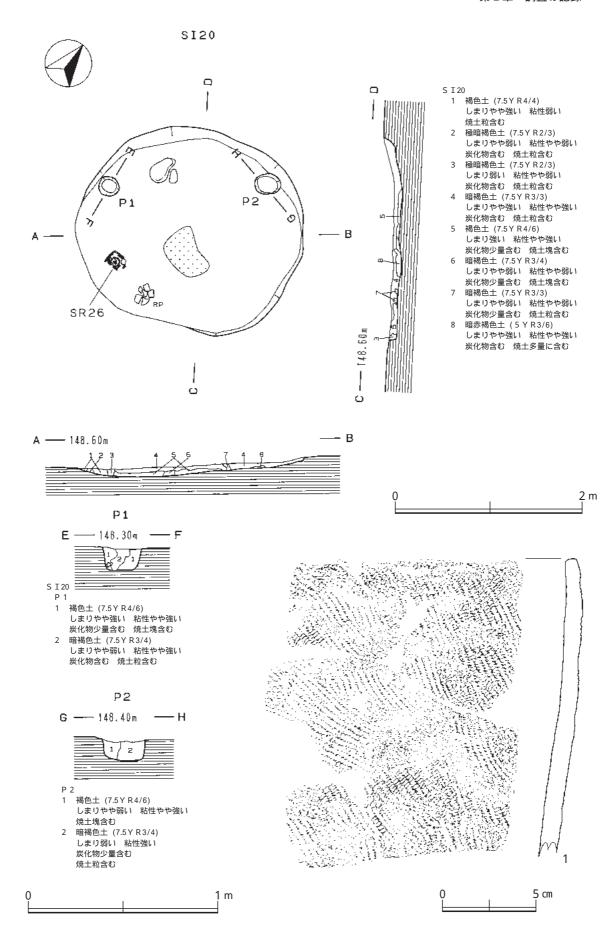
《規模と平面形》 平面形は、長軸4.08m、短軸2.78mの楕円形を呈し、深さは地山面より54cmである。主軸方向はN - 33° - Eを示す。

 《埋
 土》 7層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 確認面より土師器甕底部から胴部にかけての破片、埋土より石鏃 (第79図2) 1 点と剥片石器 6 点、底面より鉢形土器口縁部破片 (第78図1・2)・鉢形土器 (第79図1)が出土した。第78図1と2は同一個体でありRL縄文を施文している。1 の外面には右手母指痕が残る。内外面には煤状炭化物が付着しており、内面の煤状炭化物は厚い。第79図1は、口縁部が外反する鉢形土器である。口縁部内側に1条の沈線を配し、口唇部は刻み目により文様帯を表出している。頸部上端に1条の沈線を配し、ていねいにみがいている。胴部上端と中央に2条ずつの平行沈線で文様帯を区画し、区画内には磨消による雲形文が展開する。胴部全体にはLR縄文を施文しており、底部は1条の沈線で円形に区画している。第79図1の土器は縄文時代晩期大洞C1式土器である。また、第78図1・2も出土状況から考えると大洞C1式土器であろう。第79図2は頁岩製の凸基有形石鏃である。



第77図 S I 20竪穴住居跡及び出土遺物

S K 19土坑 (第79図、図版29)

《位 置》 OD45グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.28m、短軸0.76mのやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面より22cmである。主軸方向はN - 83° - Eを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。土坑西側には50×20cm程の大きさで酸化鉄が沈着している。

《出土遺物》なし。

S K 22土坑 (第79図、図版29)

《位 置》 NT46グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 西側をピットに掘り込まれている。

《規模と平面形》 平面形は、長軸90cm、短軸76cmの楕円形を呈し、深さは地山面より58cmである。 主軸方向はN - 85° - Eを示す。

《埋 土》 2層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 確認面より、無文の鉢形土器胴部小破片と剥片石器 1 点が出土した。

S K 25土坑 (第80図、図版29)

《位 置》 OB45・46グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸1.66m、短軸0.94mの楕円形を呈し、深さは地山面より34cmである。主軸方向はN - 71° - Eを示す。

 《埋
 土》 3層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》なし。

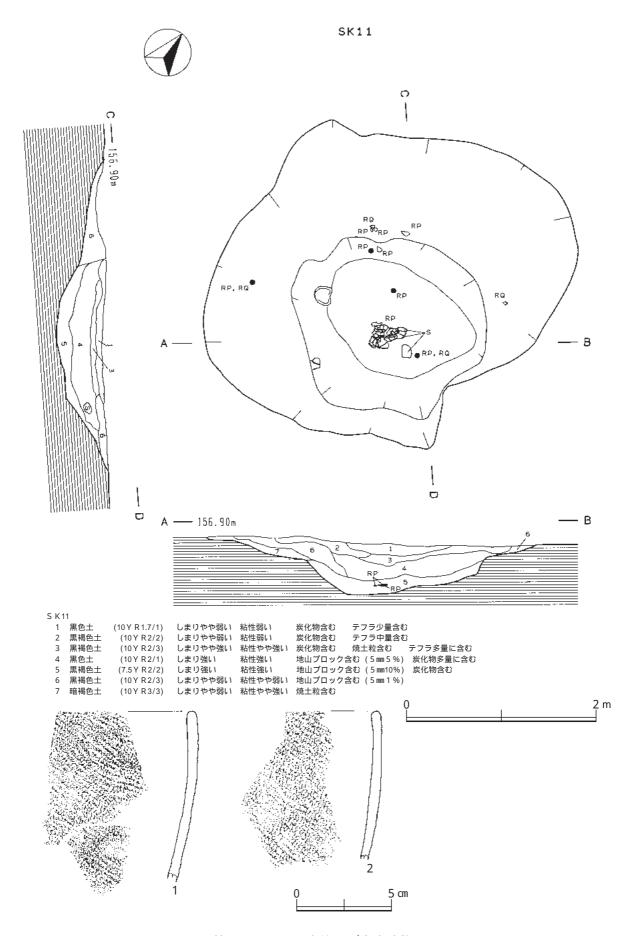
S K 27土坑 (第80図、図版29)

《位 置》 N T 46・O A 46グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

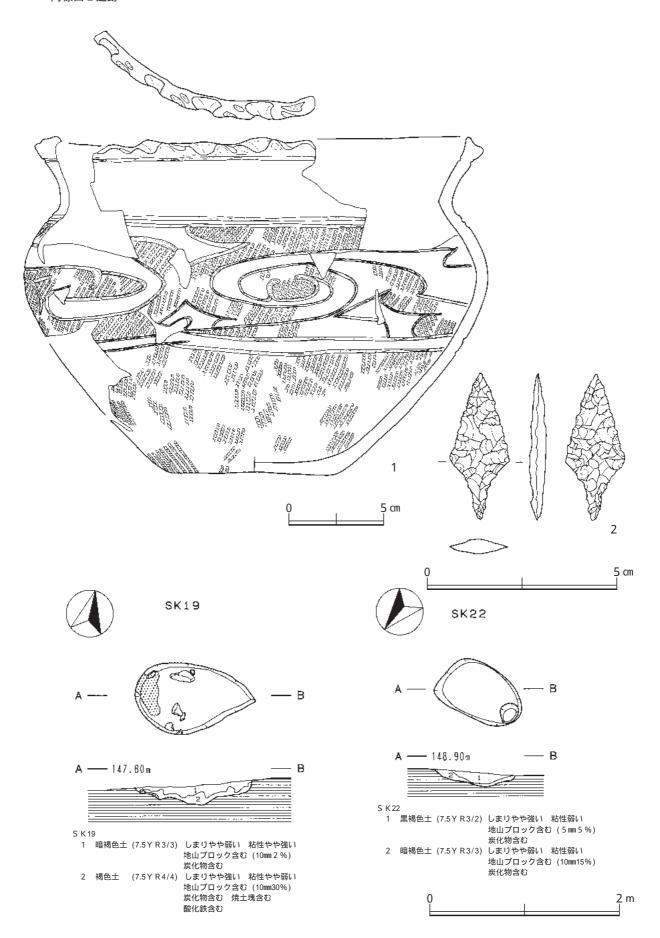
《重 複》 南側半分が大きく木の根により撹乱されている。

《規模と平面形》 平面形は、残存する規模で、長軸1.5m (推定)、短軸1.76mの楕円形を呈すると 考えられる。深さは地山面より48cmである。主軸方向はN - 31° - Eを示す。

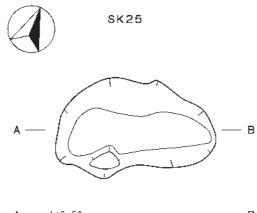


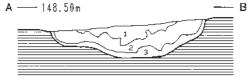
第78図 S K11土坑及び出土遺物

向様田E遺跡



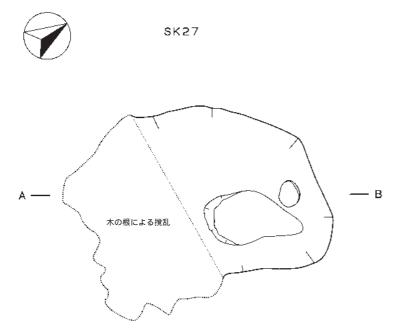
第79図 SK11出土遺物、SK19・22土坑





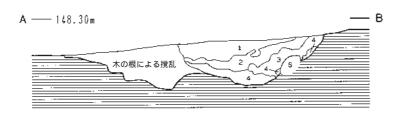
S K 25

- 1 黒褐色土 (7.5 Y R2/2) しまりやや弱い 粘性やや弱い 炭化物含む
- 2 極暗褐色土 (7.5 Y R 2/3) しまり弱い 粘性やや強い 炭化物含む
- 3 褐色土 (7.5 Y R 4/6) しまりやや弱い 粘性やや強い 炭化物含む



S K 27

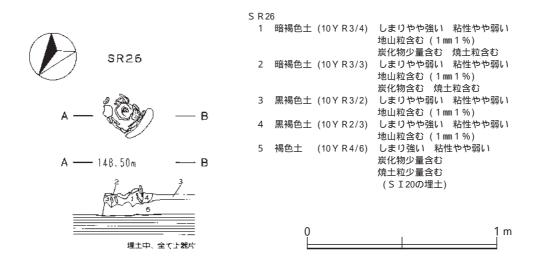
- 1 黒色土 (7.5 Y R 1.7/1) しまりやや弱い 粘性やや弱い 炭化物少量含む 焼土塊含む
- 2 暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) しまりやや弱い 粘性やや強い 炭化物少量含む 焼土粒含む テフラ多量含む
- 3 黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) しまりやや弱い 粘性やや弱い 炭化物少量含む 焼土塊含む 4 褐色土 (7.5 Y R 4/4)
- 4 褐色土 (7.5 Y R 4/4) しまりやや弱い 粘性やや強い 炭化物少量含む 焼土塊含む





第80図 S K 25 · 27土坑

- 《埋 土》 4層に分かれた。
- 《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。
- 《底 面》 平坦で堅くしまっている。
- 《出土遺物》 なし。
- (3) 土器埋設遺構
- S R 26土器埋設遺構 (第81図、図版29・30・36)
- 《位 置》 OD45グリッドに位置する。
- 《確認》 精査中にSI20竪穴住居跡南側の上面で土器片を検出し、その下に土器が埋設してあるのを確認した。
- 《重 複》 SI20竪穴住居跡南側を掘り込んでいる。
- 《形態》 掘り込みは遺構の西側に一部確認できただけである。土器内埋土は、暗褐色土の 単一層である。土器は口縁部を下に逆位に埋設されていた。胴部下半が割れており、 底部は内側を向いて出土した。耕作の際に割れたものと考えられる。
- 《出 土 遺 物》 出土した土器は、台部が「八」の字に広がる台付鉢形土器である。口縁部には小 突起を5単位(推定)有し、小波状口縁を呈する。口縁部と肩部に2条ずつの平行 沈線を配し、沈線間には刺突文が巡る。平行沈線で区画された文様帯には、上下に 単沈線による曲線文が描かれる。胴部にはRL縄文を施文しており、外面には煤状 炭化物が付着する。この土器は縄文時代晩期大洞B式土器である。
 - 3 古代の検出遺構と出土遺物
- (1) 竪穴住居跡
- S I 03竪穴住居跡 (第82~85図、図版30・31・36・37)
- 《位 置》 N B 69・70、N C 69・70グリッドに位置する。
- 《確認》精査中に地山面で方形プランを確認した。
- 《重複》 住居跡西側壁からSD38溝跡に掘り込まれており、住居跡南側はSQN05炉に掘り込まれている。
- 《規模と平面形》 北側壁長5.75m、南側壁長5.92m、東側壁長5.65m、西側壁長5.65mの方形を呈する。建物方位はN 78° Eを示す。住居跡西壁から西側の緩やかな斜面に向かいSD38溝跡が延びる。この溝跡は本遺構に伴うもので、排水溝と考えられる。
- 《埋土 土》 17層に分かれた。
- 《壁 溝》 北側壁の東側半分と南側壁の西側半分に巡る。
- 《床 面》 平坦で堅くしまっており、広く炭化物が覆っている。住居跡中央北側で、長軸89 cm、短軸85cmのほぼ円形を呈し、深さが床面から36cmの土坑を検出した。
- 《カ マ ド》 東側壁の南側寄りに構築していた。火床面の上には、扁平な礫が敷いたように覆っている。芯材に使用した礫が崩れたものと考えられる。礫の下には燃焼部があり、 堅く焼きしまっていた。袖部と煙道は検出されなかった。
- 《柱 穴》 検出した柱穴は10基である。平面形は、長軸21~59cm、短軸17~39cmの楕円形や





第81図 S R 26土器埋設遺構及び出土遺物

径22~37cmの円形を呈する。深さは床面より14~32cmである。

《出 土 遺 物》 床面より、縄文時代後期の深鉢形土器口縁部破片(1)・胴部破片(2~5)、 土師器坏(6)、土師器碗口縁部から底部にかけての破片(7)・口縁部破片(8) ・底部から胴部にかけての破片(9)、土師器甕(10)、器形不明の底部破片(11) が出土した。1~4は同一個体であり、1には口縁部に1条の沈線が配される。2 ~4には、沈線による曲線文で文様帯を描き中を磨り消している。地文はLR縄文である。5にはLR縄文を施文しており、外面に煤状炭化物が少量付着する。6は口縁部がやや肥厚し、体部にロクロ目と底部に回転糸切り痕が見られる。7は非ロクロ成形の土師器であり、内側は黒色処理されている。8はロクロ成形の土師器である。9の底部は張り出しており、10は砂底である。11には回転糸切り痕が見られる。

S I 04竪穴住居跡 (第86・87図、図版31・32)

《位 置》 M T 69・70、N A 69・70グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 北側壁長3.82m、南側壁長3.81m、東側壁長2.90m、西側壁長2.70mの方形を呈する。建物方位はN - 82° - Eを示す。

《埋土》10層に分かれた。

《 壁 》 削平が著しく、残存する壁の高さは3~5cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

《壁 溝》 検出されなかった。

《床 面》 平坦で堅くしまっている。住居跡中央南側で、長軸83cm、短軸79cmのほぼ円形を 呈し、深さは床面より20cmの土坑を検出した。

《カ マ ド》 東側壁の南寄りに構築していた。袖部は確認できず燃焼部のみ検出した。燃焼部はやや軟弱で堅く焼きしまってはいない。燃焼部中央には10cm程の礫が数個ある。これらの礫は被熱しているが、支脚ではなく袖部の補強の礫であろう。煙道はわずかに検出したのみである。

《柱 穴》 検出した柱穴は6基である。平面形は、長軸16~37cm、短軸14~29cmの楕円形や 隅丸方形、径16~26cmの円形を呈する。深さは床面より5~12cmである。

《出 土 遺 物》 カマド底面より縄文時代の深鉢形土器胴部小破片が出土した。

S I 10竪穴住居跡 (第87図、図版32)

《位 置》 N A 67・68、N B 67・68グリッドに位置する。

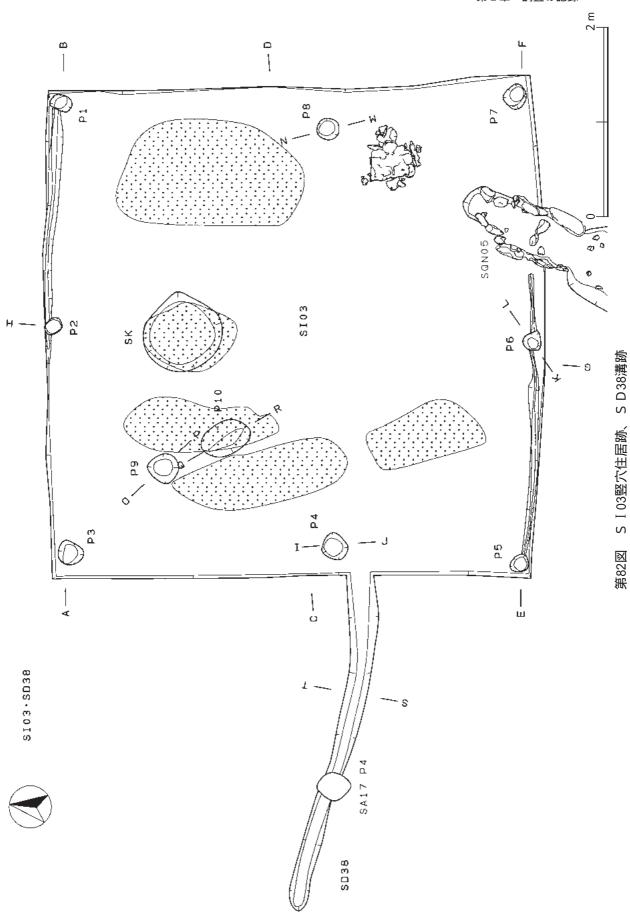
《確認》精査中に地山面で南側の一部を確認した。

《重複》なし。

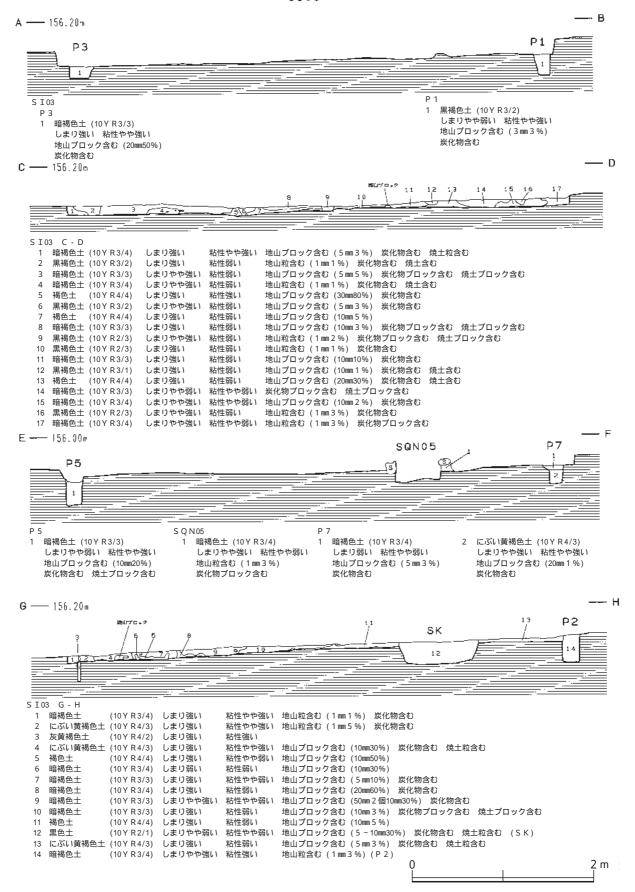
《規模と平面形》 検出したのは南側壁長3.81mのみであるが、方形を呈すると考えられる。建物方位は不明である。

《埋 土》 削平が著しく不明である。

《 壁 》 不明である。

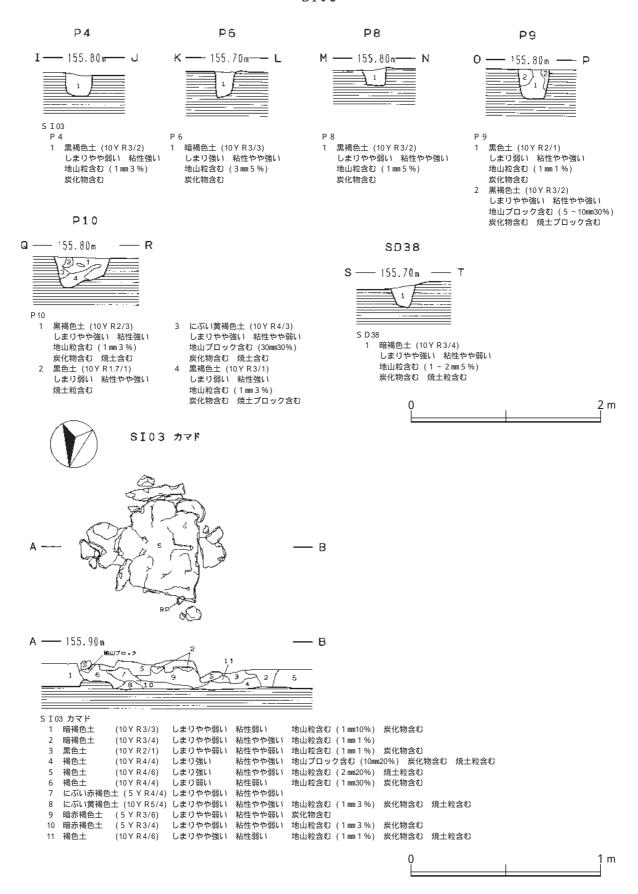


SI03

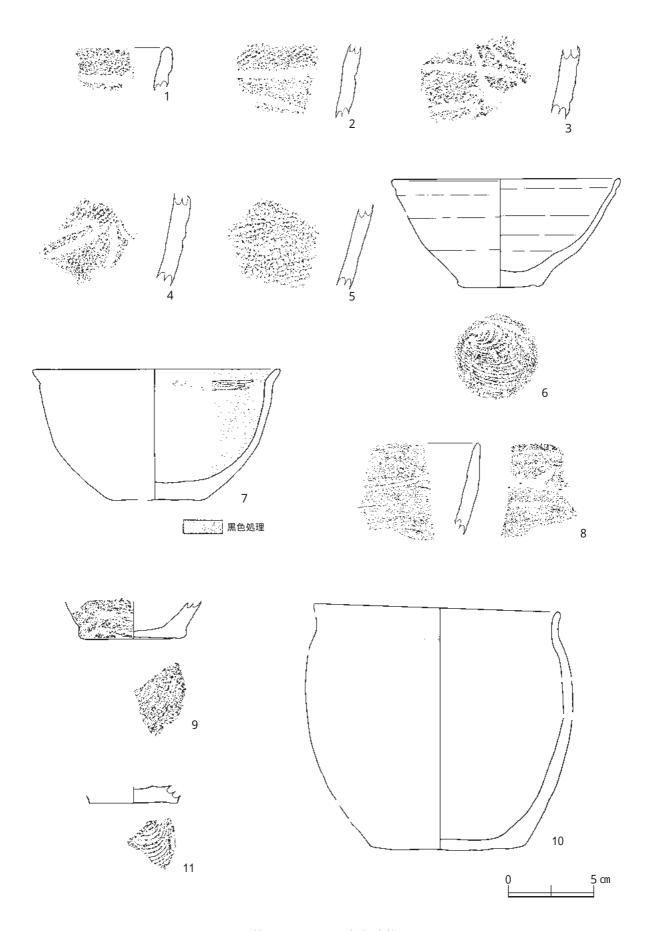


第83図 S I 03竪穴住居跡土層断面

SI03



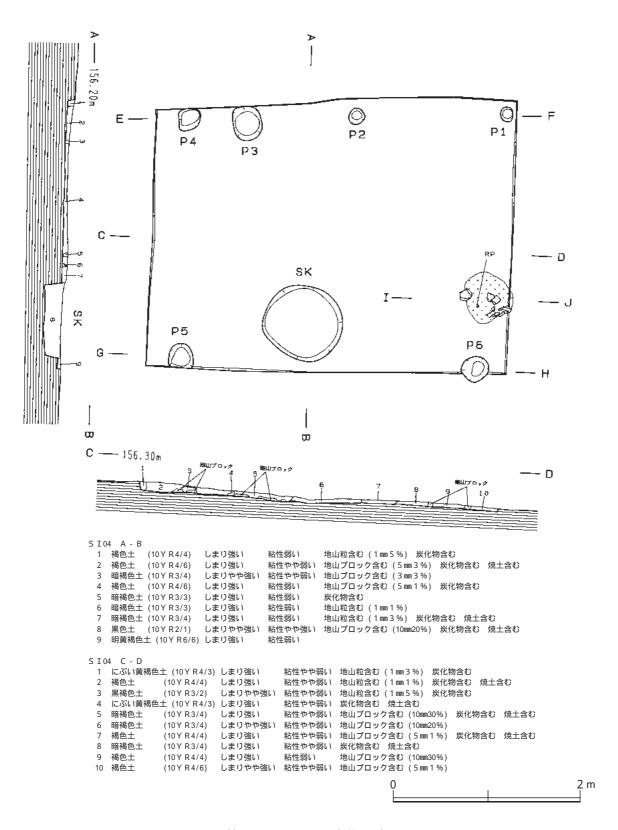
第84図 SI03竪穴住居跡柱穴・カマド、SD38溝跡土層断面



第85図 S I 03出土遺物



SI04



第86図 S I 04竪穴住居跡

SI04 E --- 156.20m Ρ2 P1 1 Р3 P4 S I 04 P 2 P 4 P 3 暗褐色土 (10 Y R 3/4) 1 褐色土 (10 Y R 4/4) 1 褐色土 (10 Y R 4/4) 1 暗褐色土 (10 Y R 3/3) しまりやや強い しまりやや強い しまり強い しまり強い 粘性やや弱い 粘性弱い 粘性やや強い 粘性やや強い 地山粒含む (1 mm 1 %) 地山ブロック含む (10mm50%) 地山ブロック含む (30mm50%) 地山ブロック含む (10mm 5%) 炭化物含む 炭化物含む 炭化物含む G - 156.00m P5 P6 暗褐色土 (10 Y R 3/4) 黒褐色土 (10 Y R 2/3) しまりやや強い 粘性やや強い 地山ブロック含む (10mm20%) しまりやや強い 粘性やや強い 地山ブロック含む (20mm50%) 炭化物含む 焼土粒含む 炭化物含む 焼土含む SIO4 カマド 3 暗褐色土 (10 Y R 3/4) しまりやや強い 粘性弱い 地山粒含む (3 mm10%) 炭化物含む 焼土含む I -- :56.40m 褐色土 (10 Y R 4/4) しまりやや強い 粘性やや強い 地瓜ブロック 地山粒含む (1mm 3 %) 黒褐色土 (10 Y R 3/2) しまりやや弱い 粘性強い 1,0 炭化物含む 暗褐色土 (10 Y R 3/4) しまり強い 粘性やや強い 地山ブロック含む (5 mm 3 %) 炭化物含む 赤褐色土 (5 Y R 4/8) しまりやや強い 粘性弱い 焼土多量に含む 8 暗褐色土 (7.5 Y R 3/4) しまり強い 粘性やや弱い SI04 カマド 焼土含む 1 暗褐色土 (10 Y R 3/3) しまりやや弱い 粘性強い 9 にぶい黄褐色土 (10 Y R 4/3) しまり強い 粘性やや弱い 地山粒含む (1 mm 1 %) 炭化物含む 焼土粒含む 10 灰黄褐色土 (10 Y R 4/2) しまり強い 粘性弱い 地山粒含む (3 mm 1%) 炭化物含む 焼土塊含む 暗褐色土 (10 Y R 3/3) しまり弱い 粘性強い 地山粒含む (1 mm 5 %) 炭化物含む 地山ブロック含む (10mm30%) 炭化物含む SI10 P1 A --- 155.70m --- B Р1 S I 10 P 1 1 黒褐色土 (10 Y R 3/2) しまりやや強い 粘性やや弱い 地山ブロック含む (5 mm30%) Ρ2 C - 155.70m - D P 2 黒褐色土 (10 Y R 3/2) しまりやや強い 粘性やや弱い 地山ブロック含む (5 mm30%) にぶい黄褐色土 (10 Y R4/3) しまりやや強い 粘性やや強い P2 地山ブロック含む (20mm50%) 焼土粒含む C -D 2 m

第87図 SI04竪穴住居跡土層断面・カマド、SI10竪穴住居跡

《壁 溝》 検出されなかった。

《床 面》 平坦で堅くしまっている。

《カマド》 不明である。

《柱 穴》 検出した柱穴は2基である。P1の平面形は径26cmの円形を呈し、深さは床面より11cmである。P2の平面形は、長軸39cm、短軸33cmの隅丸方形を呈し、深さは床面より12cmである。

《出土遺物》なし。

(2) 土坑

S K 06土坑 (第88図、図版33)

《位置》 NC68グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、径84cmのほぼ円形を呈し、深さは地山面より10cmである。主軸方向はN - 33°-Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》なし。

S K 09土坑 (第88図、図版33)

《位 置》 ND65グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸84cm、短軸74cmの楕円形を呈し、深さは地山面より14cmである。 主軸方向はN - 33° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》 なし。

S K 14土坑 (第88図、図版33)

《位 置》 N A 69・70、N B 69・70グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

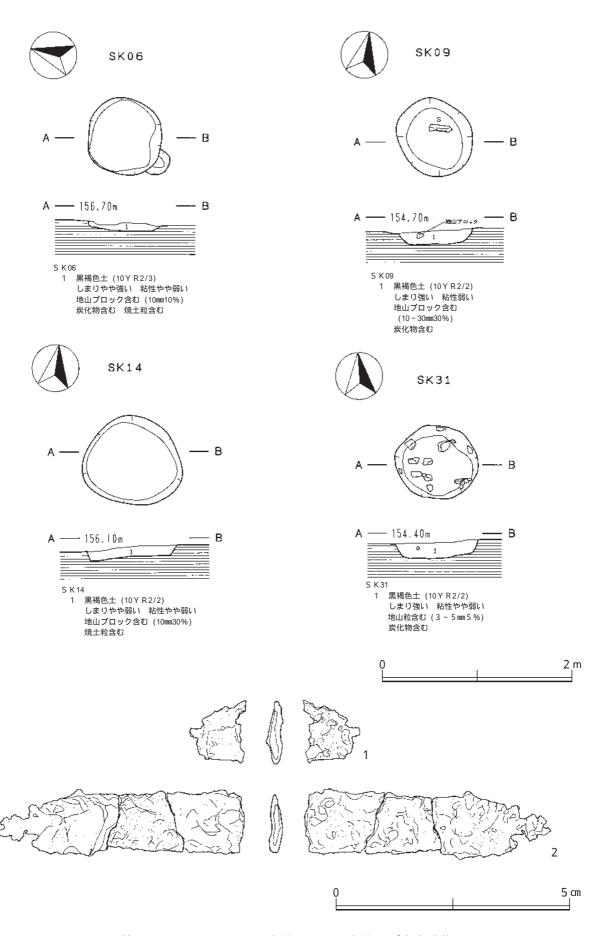
《規模と平面形》 平面形は、長軸1.04m、短軸0.92mの楕円形を呈し、深さは地山面より10cmである。主軸方向はN - 73° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

向様田E遺跡



第88図 SK06・09・14土坑、SK31土坑及び出土遺物

《出土遺物》なし。

S K 31土坑 (第88図、図版33・41)

《位 置》 ND64グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸88cm、短軸76cmの楕円形を呈し、深さは地山面より16cmである。 主軸方向はN - 75° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より鉄製品破片4点が出土した。そのうち3点は接合し、残りの1点も同一 個体と考えられる。鉄分のほとんどが酸化しており内部は中空構造であるが、断面 からは刀子のようなものと考えられる。

S K 32土坑 (第89図、図版33・37)

《位 置》 ND64グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸74cm、短軸70cmの楕円形を呈し、深さは地山面より12cmである。 主軸方向はN - 31° - Wを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》 埋土より、頁岩製の縦型石匙が出土した。

S K 35土坑 (第89図、図版33)

《位 置》 NF63グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸92cm、短軸90cmの隅丸方形を呈し、深さは地山面より12cmである。 主軸方向はN‐ 36゜- E を示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》なし。

S K 36土坑 (第89図、図版33)

《位 置》 N F 62、N F 63グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸84cm、短軸76cmの隅丸方形を呈し、深さは地山面より14cmである。 主軸方向はN - 42° - Eを示す。

《埋 土》 単一層である。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》なし。

(3) 溝跡

S D 37溝跡 (第89図)

《位 置》 ND67・68、NE66・67、NF66グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 南西から北西に直線的に延び、検出した長さは9.2m、幅は80cm、深さは地山面より20cmである。

《埋 土》 単一層である。

《出土遺物》なし。

S D 38溝跡 (第82・84図、図版33)

《位 置》 N C 69、N D 69 グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複数 8 I 03竪穴住居跡西側の壁より掘り込んでいる。

《規模と平面形》 SI03竪穴住居跡西壁から西にほぼ直線的に延びる。検出した長さは4.02m、幅 35cm、深さは地山面から23cmである。

《埋 土》 単一層である。

《出土遺物》 なし。

4 中世の検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物跡

S B 28掘立柱建物跡 (第90~92図、図版34)

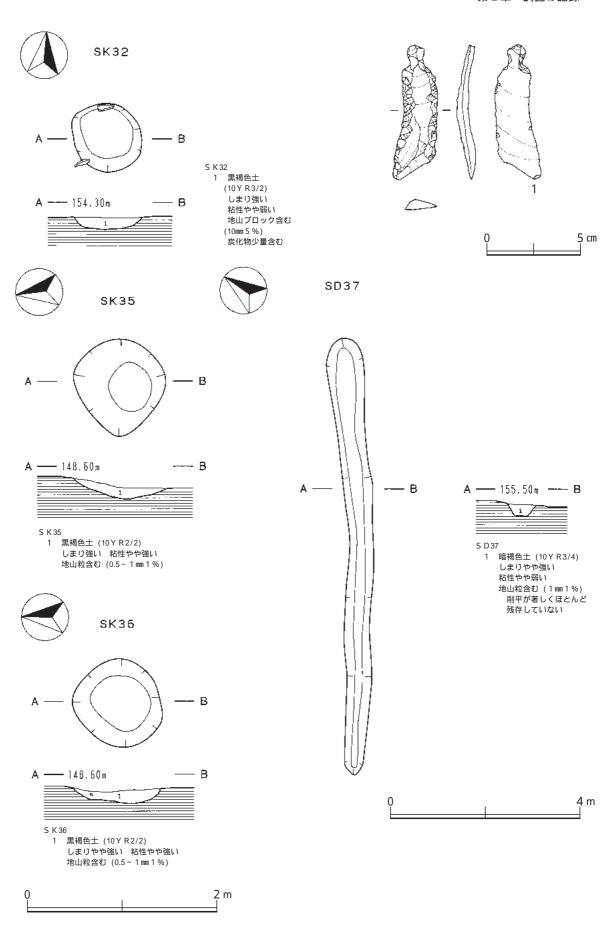
《位 置》 N L 54、N M 53 ~ 55、N N 52 ~ 55、N O 51 ~ 55、N P 51 ~ 54、N Q 52 * 53 グリッドに位置する。

《確認した。 認》 精査中に地山面で柱穴群を検出し、その後38基の柱穴が掘立柱建物跡であること

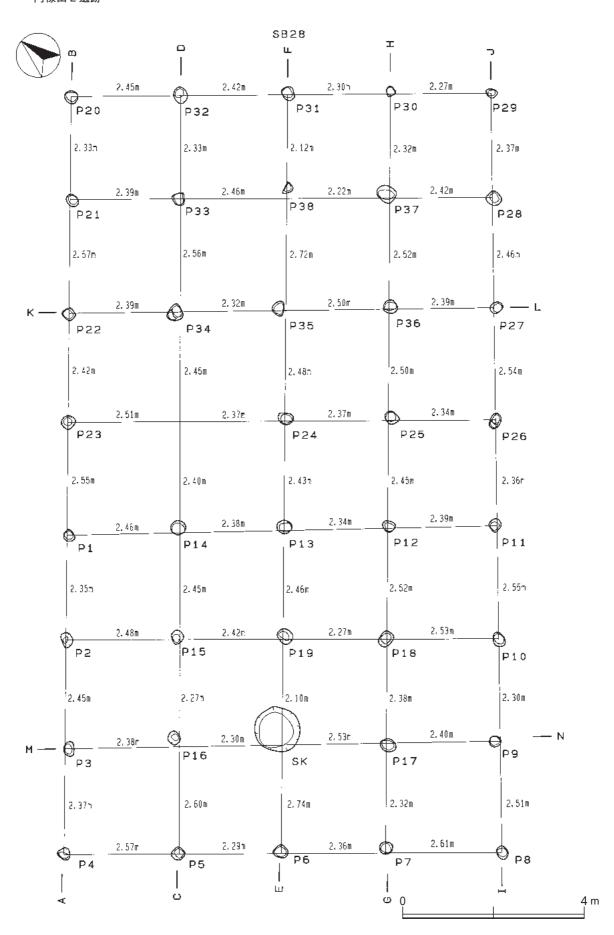
《重 複》 本建物内西側で、平面形は長軸1.40m、短軸1.00mのほぼ円形を呈し、深さが地 山面より12cmの土坑を検出した。埋土は3層に分かれ、底面には炭化物の層が広がっ ていた。この土坑は本掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。

《規 模》 桁行 7 間 × 梁行 4 間の総柱の掘立柱建物跡で、桁行17.4~17.8 m、梁行9.42~9.85 mを測る。建物方位はN - 41° - Eを示す。

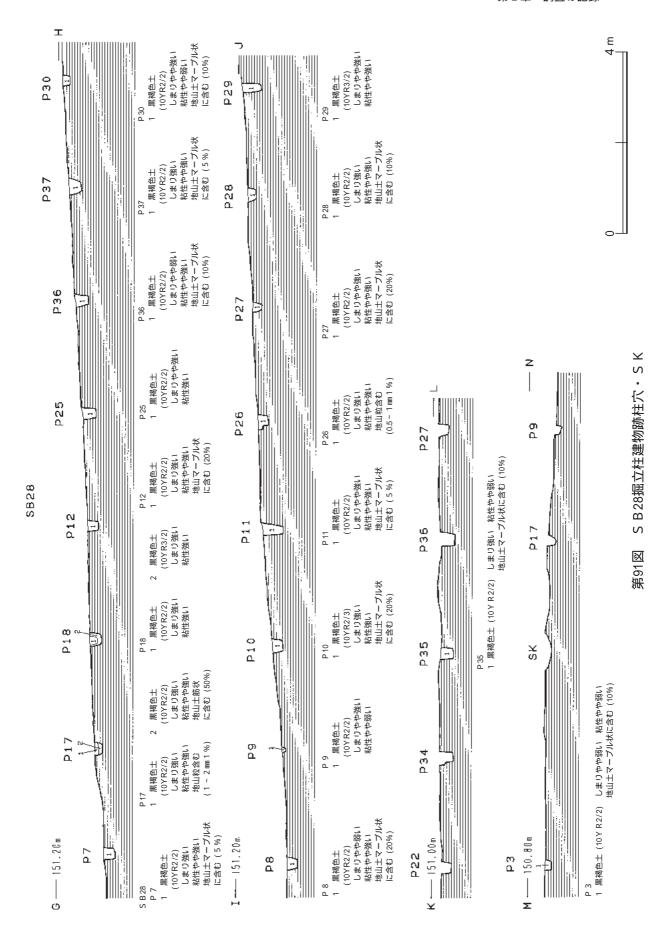
《柱 穴》 検出した柱穴は38基である。平面形は、長軸30~42cm、短軸24~36cmの楕円形や 径20~32cmのほぼ円形を呈し、P38のみ不整形を呈する。深さは地山面から12~52



第89図 SK32土坑及び出土遺物、SK35・36土坑、SD37溝跡



第90図 SB28掘立柱建物跡





B 掘立柱建物跡柱穴・ H フベーション

S

第92図

196

cmである。それぞれの柱穴間の距離は2.22~2.74mである。

《出土遺物》 なし。

(2) 柱列

SA17柱列 (第93図、図版33)

《位 置》 N C 70、N D 68~70 グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で柱穴群を検出し、7基の柱穴が柱列であることを確認した。

《重複》 P4はSI03竪穴住居跡に付設するSD38溝跡を掘り込んでいる。

(規模) 検出したピットの平面形は、径29~39cmのほぼ円形を呈し、深さは地山面より16~44cmである。検出した長さは7.4mを測り、それぞれの柱穴間の距離は0.9~1.4mである。主軸方向はN-22°-Eを示す。

《出土遺物》なし。

(3)炉

SQN05炉 (第94図、図版34~36)

《位 置》 N B 68・69 グリッドに位置する。

《確認》 精査中に地山面で石組部と土坑部を確認した。初めは製鉄関連遺構と考えたが、 鉄滓や鍛造剥片など製鉄に関する遺物が出土しなかったことより、炉とした。

《重 複》 SI03竪穴住居跡の南側を掘り込んでいる。

《規模と平面形》 石組部と土坑部を構築している。石組部は東側と西側に数個の角礫を配しており、 1.3 × 0.72mの長方形を呈する。深さは礫の頭頂部より25cmである。礫は8 × 12cm ~ 16 × 50cm程の大きさで、側面を上にして埋めている。これらの礫は被熱しており、 ひび割れているものもある。土坑部は、長軸1.6m、短軸1.28mの楕円形を呈し、 深さは地山面より24cmである。

《埋 土》 7層に分かれ、石組部及び土坑部の底面には厚く炭化物の層が広がっている。

《 壁 》 土坑部西側がやや緩やかに、それ以外は急に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》 埋土より、須恵器壺形土器肩部小破片(1)が出土した。

5 時代不明の検出遺構と出土遺物

(1) 土坑

S K 01土坑 (第95図)

《位 置》 NE84グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重 複》 なし。

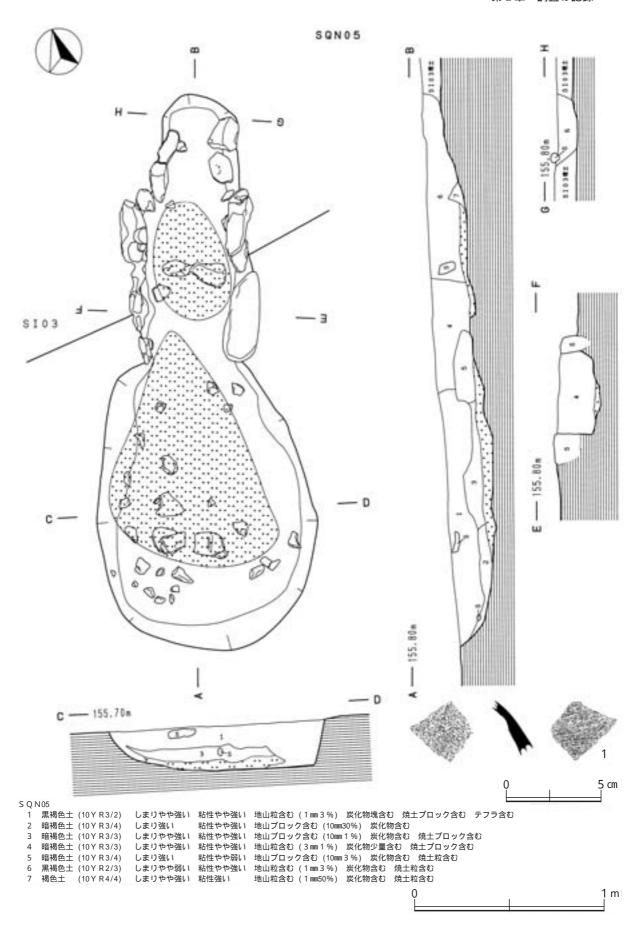
《規模と平面形》 平面形は、長軸84cm、短軸76cmの楕円形を呈し、深さは地山面より40cmである。 主軸方向はN・ 28° - Wを示す。

《埋土》2層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

第93図 S A 17柱列



第94図 SQN05炉及び出土遺物

向様田E遺跡

《出土遺物》なし。

S K 02土坑 (第95図)

《位 置》 N E 76、N F 76 グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《規模と平面形》 平面形は、長軸76cm、短軸60cmの楕円形を呈し、深さは地山面より40cmである。 主軸方向はN - 75° - Wを示す。

《埋土ン2層に分かれた。

《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底 面》 平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》 なし。

(2) 焼土遺構

S N30焼土遺構 (第95図)

《位 置》 N C 69、N D 69 グリッドに位置する。

《確認》精査中に地山面で確認した。

《重複》なし。

《形 態》 平面形は、長軸88cm、短軸46cmの楕円形を呈し、地山面より8cmである。

《出土遺物》なし。

(3) 溝跡

S D 18溝跡 (第95図)

《位 置》 N F 76・77、N G 75・76、N H 74・75、N I 73・74、N J 73 グリッドに位置する。

《確認》削平が著しく、精査中に地山面で南西側と北東側の一部を確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 南西から北東に直線的に延び、検出した長さは24m、幅は32cm、深さは地山面より6cmである。

《埋 土》 単一層である。

《出土遺物》 なし。

第3節 遺構外出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器である。遺物については、観察表を掲載しているので、ここでは大まかな特徴を述べる。

1 縄文土器

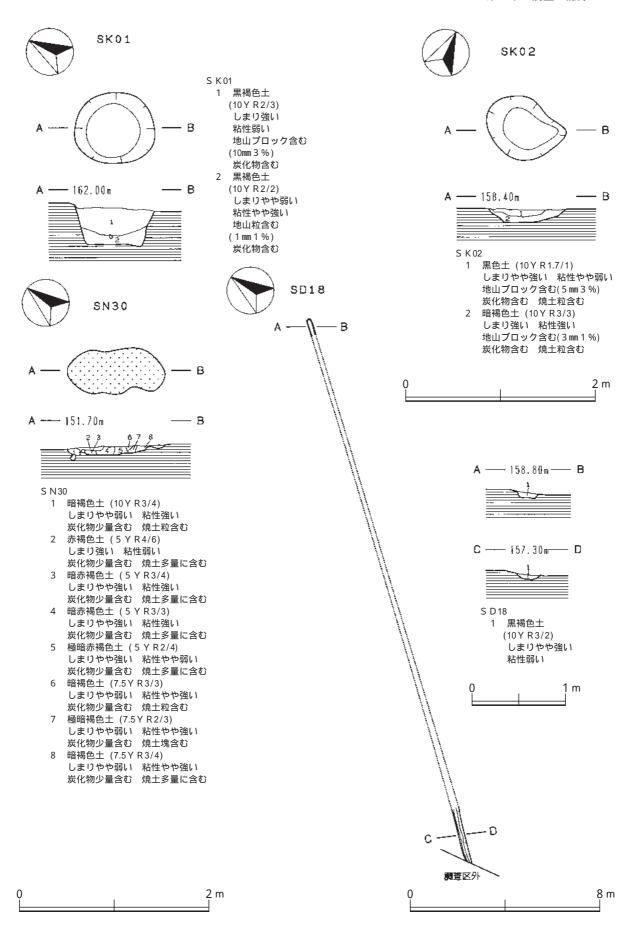
【第 群土器】早期の土器 (第96図1、図版37)

爪形文を施文した深鉢形土器小破片である。胎土には繊維を含んでいる。

【第 群土器】前期の土器群 (第96図 2~21、図版37)

2~18は、深鉢形土器破片であり、19は底部破片である。いずれにも不整撚糸文を施文している。

第2章 調査の記録



第95図 SK01·02土坑、SN30焼土遺構、SD18溝跡

20は1条の隆帯を貼り付けており、21はRL縄文を施文している。胎土には全て繊維を含んでいる。

【第 群土器】後期の土器 (第96図22、図版37)

小突起を有する深鉢形土器口縁部破片である。1条の平行沈線を施文している。

【第 群土器】晩期の土器 (第96図23・24、図版37)

23は、LR縄文を施文した深鉢形土器口縁部破片である。24は、3条の平行沈線を配し、沈線間に刻み目が巡る深鉢形土器胴部小破片である。

2 古代の土器

【第 群土器】土師器 (第96図25~32、図版37)

25~27は土師器坏破片であり、27の底部には回転糸切り痕がある。28~31は甕口縁部または胴部破片である。32は器形不明の底部破片であり、底部内側にケズリ痕がある。

【第 群土器】須恵器 (第96図33~35、図版37)

いずれも壺形土器破片であり、33の頸部には隆帯が配されている。

遺跡全体が著しく削平を受けており、出土土器の量は少ない。1は爪形文土器破片である。小又川流域では、桂の沢遺跡で爪形文土器が出土している。報告書では、土器の胎土や色調等から、鹿角市飛鳥平遺跡・山内村岩瀬遺跡で出土した草創期爪形文土器とするのは躊躇せざるえない、としている。本遺跡での出土は小破片がわずかに1点のみであり、詳細を語るにはあまりに乏しい資料であるが一応早期の土器と位置づけておく。第 群土器は胎土に繊維を含む土器であり、2~19は不整撚糸文を施文する円筒下層a式土器、20は円筒下層b式土器であろう。22~24の土器型式は不明である。

3 石器

石鏃 (第97図36・37、図版37)

石鏃は2点出土し、36は円基鏃、37は平基鏃である。

石槍 (第97図38、図版37)

石槍は1点のみ出土した。両面にていねいな調整を施している。

石匙 (第97図39~42、図版38)

石匙は4点出土した。すべて縦型石匙である。39・40は黒曜石製であり、産地同定の結果、39は深浦産、40は出来島・鶴ヶ坂産の可能性が高い。40は刃部が折損している。42は、刃部だけでなく器面全体に調整を施している。

石箆 (第97図43・第98図44、図版38)

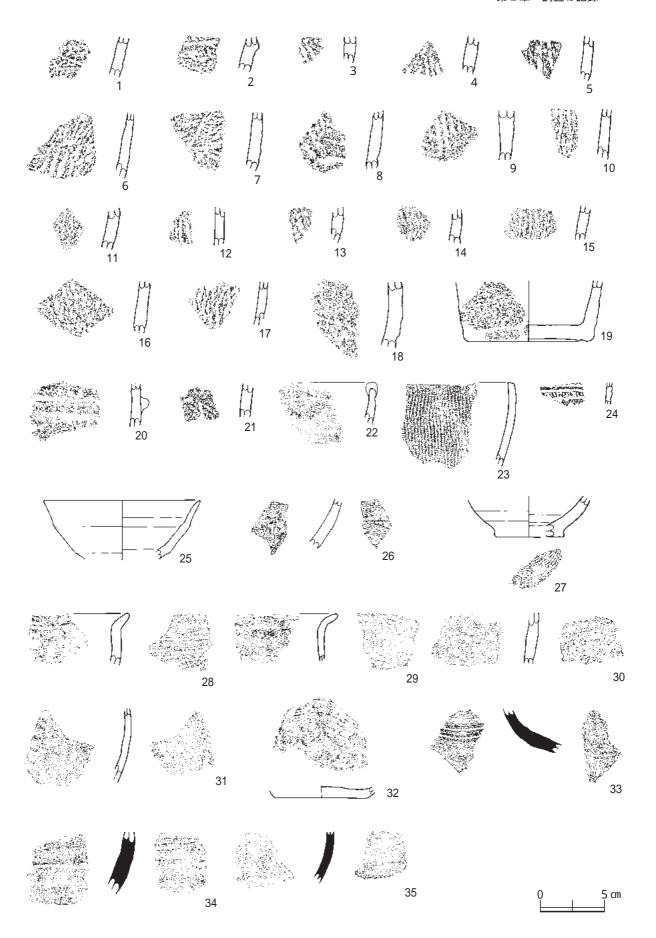
石箆は2点出土した。どちらも頭部にやや幅があり円刃を呈する。43は下部側面が、44は刃部が折損している。

スクレイパー (第98図45~50、図版38)

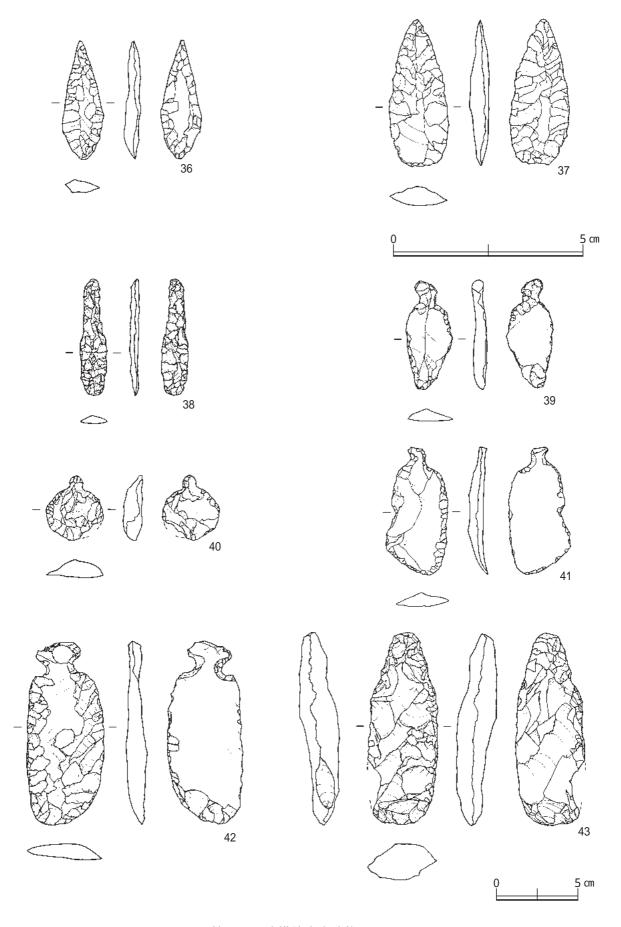
スクレイパーは6点図示した。45・46は両面に調整を加えて刃部を作り出しており、その他は片面のみの調整で刃部を作り出している。

磨石 (第98図51・52、図版38)

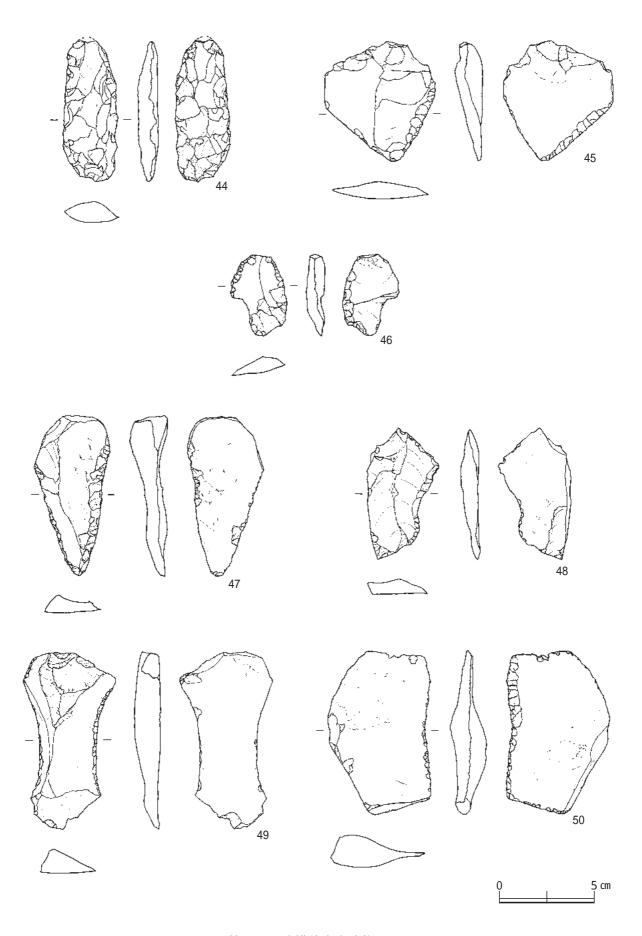
磨石は2点出土した。どちらも安山岩製で、敲打痕が残る。



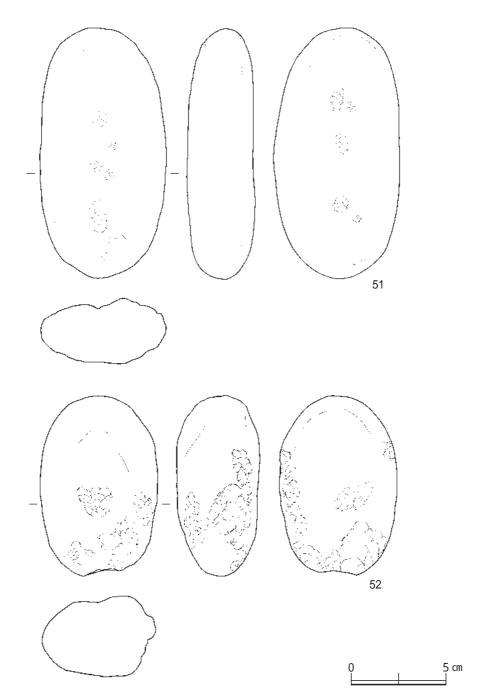
第96図 遺構外出土遺物 (35)



第97図 遺構外出土遺物 (36)



第98図 遺構外出土遺物 (37)



第99図 遺構外出土遺物 (38)

第11表 石器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
79 - 2	37 - 52	S K 11	石鏃	頁岩	39.0	16.0	4.0	1.6
89 - 1	37 - 53	S K 32	石匙	頁岩	72.5	24.0	5.5	9.8
97 - 36	37 - 54	N J 51	石鏃	頁岩	38.3	16.0	5.3	2.9
97 - 37	37 - 55	不明	石鏃	頁岩	31.1	11.0	4.0	1.2
97 - 38	37 - 56	N N 55	石槍	頁岩	62.0	14.1	4.1	4.4
97 - 39	38 - 57	O F 45	石匙	黒曜石	58.8	24.9	7.1	8.5
97 - 40	38 - 58	O E 44	石匙	黒曜石	34.5	31.0	10.0	8.7
97 - 41	38 - 59	不明	石匙	頁岩	67.0	33.5	8.0	15.9
97 - 42	38 - 60	N P 52	石匙	頁岩	97.5	41.0	9.0	37.3
97 - 43	38 - 61	N B 77	石篦	頁岩	102.5	38.0	17.5	71.2

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
98 - 44	38 - 62	N P 55	石篦	頁岩	75.0	24.1	11.0	28.2
98 - 45	38 - 63	N O 55	スクレイパー	頁岩	63.0	58.1	9.5	37.7
98 - 46	38 - 64	N O 49	スクレイパー	頁岩	44.1	30.5	10.0	10.4
98 - 47	38 - 65	N P 53	スクレイパー	頁岩	85.0	41.0	9.5	39.3
98 - 48	38 - 66	N P 50	スクレイパー	頁岩	69.1	38.0	8.0	18.9
98 - 49	38 - 67	不明	スクレイパー	頁岩	94.1	50.0	13.0	51.4
98 - 50	38 - 68	不明	スクレイパー	頁岩	87.1	55.0	17.0	59.6
99 - 51	38 - 69	N P 55	磨石	安山岩	133.0	67.0	37.0	392.8
99 - 52	38 - 70	N P 55	磨石	安山岩	96.0	62.0	44.0	318.7

第12表 縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器形	部位	口唇部・口縁部	頸部	肩 部・胴 部	底部	分 類	備考
77 - 1	36 - 1	S I 20	深鉢	口縁部			0 段多条 R L 縄文		群	外煤状炭化物
78 - 1	36 - 2	S K11	鉢	口縁部			RL縄文 母指痕		群	内外煤状炭化物 78 - 2 と同一個体
78 - 2	36 - 3	S K 11	鉢	口縁部			RL縄文		群	78 - 1と同一個体
79 - 1	36 - 4	S K11	鉢		口唇刻み目による文様帯 口縁内沈線 1	上端沈線 1 ミガキ	上端・中央沈線 2 磨消 雲 形文 L R縄文	沈線で 円形に 区画	群大洞口。	
81 - 1	36 - 5	S R 26	台付鉢		口縁小突起 5 沈線 2 刺突文	沈線による 曲線文	肩部沈線 2 刺突文 胴部 R L 縄文		群大洞B	外煤状炭化物
85 - 1	36 - 6	S I 03	深鉢	口縁部	口縁沈線1 LR縄文		沈線による曲線文 磨消 L R縄文		群	85 - 2 ~ 4と同一 個体
85 - 2	36 - 7	S I 03	深鉢	胴部			沈線による曲線文 磨消 L R縄文		群	85 - 1・3・4と 同一個体
85 - 3	36 - 8	S I 03	深鉢	胴部			沈線による曲線文 磨消 L R縄文		群	85 - 1・2・4と 同一個体
85 - 4	36 - 9	S I 03	深鉢	胴部			沈線による曲線文 磨消 L R縄文		群	85 - 1 ~ 3と同一 個体
85 - 5	36 - 10	S I 03	深鉢	胴部			L R縄文		群	外煤状炭化物
96 - 1	37 - 18	N K 56	深鉢	胴部			爪形文		群	繊維含む
96 - 2	37 - 19	排土	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 3	37 - 20	N P 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 4	37 - 21	N O 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層a	繊維含む
96 - 5	37 - 22	N N 52	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 6	37 - 23	N Q 57	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 7	37 - 24	N S 51	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層a	繊維含む
96 - 8	37 - 25	N R 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 9	37 - 26	N N 53	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 10	37 - 27	M Q 51	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 11	37 - 28	P 162	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 12	37 - 29	N Q 51	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 13	37 - 30	N P 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 14	37 - 31	N O 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 15	37 - 32	N L 55	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 16	37 - 33	N O 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 17	37 - 34	N N 54	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 18	37 - 35	N P 49	深鉢	胴部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 19		N K 56	深鉢	底部			不整撚糸文		群 円筒下層 a	繊維含む
96 - 20	37 - 36	N O 54	深鉢	頸部		隆帯	原体不明		群円筒下層b	繊維含む
96 - 21	37 - 37	N K 56	深鉢	胴部			RL縄文		群円筒下層c~d	繊維含む
96 - 22	37 - 38	M Q 71	深鉢	口縁部	小突起 沈線 1		無文		群	
96 - 23	37 - 39	排土	深鉢	口縁部	口唇面取り		LR縄文		群	
96 - 24	37 - 40	N F 72	深鉢	胴部			沈線3 刻み目		群	外煤状炭化物

第13表 土師器・須恵器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器 種	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外面調整 内面調整		底部調整	備考
85 - 6	36 - 11	S I 03	土師器坏	120	45	57	口 - 肥厚 体 - ロクロ 調整	ロクロ調整	回転糸切り痕	
85 - 7	36 - 12	S I 03	土師器碗	130	46	69	口 - 横ナデ	ヘラミガキ		黒色処理
85 - 8	36 - 13	S I 03	土師器碗				口 - 横ナデ 体 - ロク 口調整	ロクロ調整		
85 - 9	36 - 14	S I 03	土師器碗		(56)		体 - 横ナデ		ナデ 張り出し	
85 - 10	37 - 17	S I 03	土師器甕	129	81	126	胴 - 上横ナデ	横ナデ	砂底	外煤状炭化物
85 - 11	36 - 15	S I 03	不明		(46)				回転糸切り痕	
94 - 1	36 - 16	S Q N 05	須恵器壺				胴 - ロクロ調整	ロクロ調整		
96 - 25	37 - 41	N Q 72	土師器坏	(123)			体 - ロクロ調整	有段 横ナデ ロクロ 調整		
96 - 26	37 - 42	P 78	土師器坏					横ナデ		
96 - 27	37 - 43	M Q 71	土師器坏		(52)		ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り痕	
96 - 28	37 - 44	P 77	土師器甕				横ナデ	横ナデ		
96 - 29	37 - 45	P 78	土師器甕				胴 - 縦ナデ	横ナデ		
96 - 30	37 - 46	P 78	土師器甕				横ナデ	横ナデ		
96 - 31	37 - 47	P 77	土師器甕					横ナデ		
96 - 32	37 - 48	N E 67	不明		72				内面ケズリ	
96 - 33	37 - 49	N F 67	須恵器壺				ロクロ調整 頸部隆帯	横ナデ		
96 - 34	37 - 50	N F 67	須恵器壺					横ナデ	-	
96 - 35	37 - 51	N F 67	須恵器壺					横ナデ		

()は推定

第3章 自然科学的分析

第1節 テフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県北秋田郡森吉町に所在する向様田遺跡群は、秋田県北部の阿仁川上流の支流である小又川右岸に広がる段丘上に分布する。秋田県埋蔵文化財センター (2001) にある地形図から、向様田遺跡群は2段の段丘にわたって分布していることがわかる。これらのうち、下位の段丘は比較的広く、傾斜も少ないが、上位の段丘は狭小であり、斜面となっている。

向様田遺跡群のうち、向様田A~Dまでの各遺跡は低位の段丘上に位置し、向様田EおよびFの各遺跡は上位の段丘上に位置している。今回のテフラ試料が採取されたのは、向様田E遺跡である。向様田A~Dの各遺跡では、縄文時代晩期とされる大規模な環状配石遺構や墓域、土坑群などが検出され、捨て場とされる場所からは、多量の土器、土偶、石器などが出土している。一方、向様田E遺跡では、縄文時代後期とされる土坑と、平安時代と考えられている住居跡およびその床面を掘り込んで構築されている石組みの炉跡が検出されている。この炉跡は、製鉄関連遺構の可能性があると考えられているが、鉄滓等の遺物は認められていない。

今回の分析調査では、縄文時代後期とされる土坑覆土の上部、および平安時代の炉跡の覆土各層より採取された砂質の堆積物が火山灰 (テフラ) であるかどうかを検証し、テフラであれば既存の資料との比較から給源火山と噴出年代を特定し、遺構の年代について考察する。

1 試料

試料は、向様田 E 遺跡で検出された、S K 27および S Q N 05の各遺構覆土より 1 点ずつ採取された砂質の堆積物 2 点 (本文では便宜上試料名を S K 27、 S Q N 05とする)である。発掘調査所見によれば、S K 27は、縄文時代後期とされる土坑であり、試料は土坑覆土の上部に堆積する砂層から採取された。 S Q N 05は、平安時代とされる住居跡床面を掘り込んで構築された、石組炉の覆土より採取された砂質シルトである。前述のように、石組炉は製鉄に関連する遺構の可能性があると考えられている。

2 分析方法

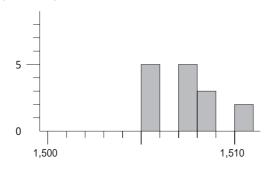
試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

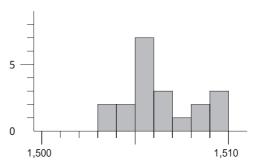
3 結果

SK27:砂分中には、多量の軽石と中量の火山ガラスが確認された。軽石は、最大径約2.5mmであり、粒径の淘汰度は良好である。色調は黄白色を呈し、発泡は不良~やや不良である。火山ガラスは、細砂~極細砂径であり、無色透明で塊状の軽石型が多く、少量の無色透明繊維束状の軽石型と無色透明パブル型が含まれる。火山ガラスの屈折率は1.505~1.510(モードは1.505~1.507)である(第100図)。

SQN05:砂分中には、少量の軽石と中量の火山ガラスが確認された。軽石は、最大径約2.0mmであり、粒径の淘汰度はやや良好である。色調は白色を呈し、発泡は良好~やや良好である。火山ガラスは、細砂~極細砂径であり、無色透明のバブル型が多く、少量の無色透明で塊状の軽石型と微量の褐色のバブル型が含まれる。火山ガラスの屈折率は、1.503~1.509 (モードは1.505~1.506) である(第101図)。



第100図 S K 27の火山ガラスの屈折率 横軸は屈折率、縦軸は測定個数



第101図 SQN05の火山ガラスの屈折率 横軸は屈折率、縦軸は測定個数

4 考察

(1) S K 27 について

SK27で認められた多量の軽石は、粒径が比較的良く揃っていることから、火山の噴火時に空中を飛んで遺跡周辺に降下堆積した軽石質テフラに由来すると考えられる。軽石の層位は、縄文時代後期の土坑覆土の上部であったということから、土坑中に再堆積した可能性を含めても、軽石は完新世に降下堆積したテフラに由来する可能性が高い。東北地方におけるテフラの産状(例えば、町田ほか(1981;1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井 (1992) など)から、秋田県北部に降下堆積した可能性のある完新世のテフラは、上位より十和田 a (To-a)、十和田 b (To-b)、十和田中掫 (To-Cu)、十和田南部 (To-Nb) で、いずれも十和田カルデラを給源とする各テフラである。しかし、これらのうち、十和田 a テフラ以外のテフラは、いずれもその分布軸が東~東南東あるいは南東方向であることから、十和田カルデラ南西方向に位置する本遺跡付近で最大粒径2.5mmもの軽石が降下堆積する可能性は低い。一方、To-a は、分布軸が南~南西方向にあり、町田ほか (1981) の記載によれば、十和田カルデラ南方約45kmの岩手県安代町付近で軽石の最大径は5 mm、さらに南方の盛岡市付近でも1mmはある。したがって、分布主軸に近く十和田カルデラから約60kmほどの距離にある森吉町で軽石の最大径が約2.5mmという値は、これらの記載と矛盾しない。

以上のことから、S K 27で認められた軽石は、To-a に由来する可能性が高い。To-a の噴出年代については、A.D.915年(町田・新井,1992;早川・小山,1998)とされている。なお、To-a を噴出した際の十和田カルデラの活動は、Hayakawa (1985)により詳細に記載されている。活動は、大湯1軽石、大湯2火山灰、大湯3軽石の順に続き、そして毛馬内火砕流の噴出、最後に小倉山溶岩の噴

向様田E遺跡

出という過程が説明されている。今回のSK27で認められた軽石は、これらのうちの大湯1軽石に相当すると考えられる。

ところで、S K 27に含まれていた火山ガラスの形態は To-a と類似するが、屈折率において明らかにレンジが異なる (To-a の火山ガラスの屈折率は1.496~1.504 (町田・新井, 1992))。したがって、火山ガラスは、To-a とは異なるテフラに由来する可能性がある。上述のように森吉町付近に分布する可能性のある完新世の降下軽石はおそらく To-a のみであると考えられるが、火山ガラスからなる細粒のテフラについては、白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm:町田ほか, 1981) がある。このテフラは To-a の約30年後 (早川・小山, 1998) に、中国と朝鮮民主主義人民共和国との国境にある白頭山より噴出したテフラである。しかし、その火山ガラスの屈折率は1.511~1.522と非常に高い値を示すことから、S K 27に含まれていた火山ガラスが、このテフラに由来する可能性は低い。したがって、S K 27の火山ガラスは降下テフラに由来するのではなく、完新世以前にすでに周辺に堆積しているテフラ層からの混入物である可能性がある。

向様田 E 遺跡の位置する森吉町周辺の地質については、角・盛谷(1973)に記載があるが、その地 質図上では、向様田遺跡群の載る段丘は規模が小さいためか、段丘としては記載されていない。しか し、同図上で鷹巣盆地を模式地として記載している第1~第6段丘の区分に従えば、向様田A~D遺 跡の載る段丘は第6段丘に対比される可能性が高い。したがって、向様田 E 遺跡の載る段丘は、それ より一段高い第5段丘に対比されると考えられる。第5段丘の構成層については、大半が軽石凝灰岩 からなっているという記載しかなく、軽石凝灰岩の由来については触れられていない。一方、米代川 支流の小猿部川および品類川の段丘について記載した豊島 (1987) によれば、この流域の段丘は上位 より品類段丘、仙戸石段丘および中畑段丘に区分され、部分的に中畑段丘の背後には鳥越火砕流の堆 積面が分布している。鳥越火砕流は、十和田八戸テフラ (To-H: Hayakawa, 1985) 噴出時の火砕流堆 積物であるとされており、その分布図によれ森吉町付近にも分布が確認されている。角・盛谷(1973) の地質図により、豊島 (1987) の中畑段丘は第6段丘に相当することが確かめられるから、向様田 E 遺跡の載る段丘は鳥越火砕流の堆積面あるいは仙戸石段丘に対比される。したがって、上記の軽石凝 灰岩は鳥越火砕流すなわち To-H の火砕流堆積物に相当する。To-H の火砕流堆積物中の含まれる火山 ガラスの屈折率は、1.502~1.509 (mode1.503~1.508) とあり (町田・新井, 1992)、S K 27中の火山 ガラスのそれとレンジが重複する。以上のことから、SK27中の火山ガラスは、遺跡の載る段丘を構 成している火砕流堆積物からの混入物である可能性が高い。なお、To-H の噴出年代は、1.2~3万年 前とされている (町田・新井, 1992)。

S K 27の試料は、To-a に由来する軽石を多く含み、段丘を構成している火砕流堆積物に由来する 火山ガラスも混在する堆積物であるということになる。したがって、S K 27の試料は土坑開口時に To-a が降下堆積したものが、そのまま遺構内に埋積したのではなく、土坑周囲の砕屑物が流れ込み や後世の撹乱などによって周囲から混入した可能性もある。いずれにしても、今回の分析結果から見 る限り、この火山灰試料は、縄文時代後期とされる土坑の年代を示唆する資料とはならない可能性が 大きい。

(2) SQN05について

SQN05に認められた軽石は、色調および発泡度ともSK27の軽石とは若干異なることと、粒径の

淘汰度もやや落ちること、さらに砂分全体における量が少ないことなどから、S K 27の To-a の軽石とは異なるテフラに由来する可能性がある。一方、中量認められた火山ガラスは、その形態と屈折率から、上述の To-H の火砕流堆積物に由来する可能性が高い。したがって、軽石も同じ火砕流堆積物に由来する可能性がある。この試料は、平安時代とされる石組炉を覆っていた堆積物であるが、その由来が周囲の火砕流堆積物であるとすると、現時点では遺構の年代を示唆するような資料とはならない可能性が大きい。

引用文献

秋田県埋蔵文化財センター (2001) 遺跡見学会資料 秋田県森吉町 向様田遺跡群 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財 発掘調査 - , 16p.

Arai,F. Machida,H. Okumura,K. Miyauchi,T. Soda,T. Yamagata,K (1986) Cataalog for late quatrnary markertephras in Japan -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,p.223-250.

角 清愛・盛谷智之 (1973) 米内沢地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 46p., 地質調査所.

古澤 明 (1995) 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p.123-133.

HAYAKAWA, Y. (1985) Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake ReserchInstitute University of Tokyo,vol.60 p.507-592.

早川由紀夫・小山真人 (1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日 - 十和田湖と白頭山 - . 火山, 43, p.403-407.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276p., 東京大学出版会.

町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 (1984) テフラと日本考古学 - 考古学研究と関連するテフラのカタログ - . 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.

豊島正幸 (1987) 米代川支流、小猿部川における最終氷期後半以降の河成段丘形成. 地理学評論, 60, p.40-51.

第2節 赤色顔料の素材推定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

向様田遺跡群は、森吉山の北麓を西に流れる小又川右岸の河成段丘上に立地し、縄文時代晩期前半の環状配石遺構・捨て場・土坑墓・土坑・配石墓・配石遺構などが検出されている。本遺跡群では、これまでにも自然科学分析を応用し、年代の検証、用材、赤色物質の素材、遺構の用途に関して検討を行っている。

今回、分析調査を行う向様田 E 遺跡では、土坑 6 基、竪穴住居跡 3 基、製鉄に関連する可能性がある遺構 1 基、性格不明遺構 1 基が検出されている。その内、 S K 19の覆土には、赤色顔料が認められた。そこで、赤色顔料の素材を明らかにするため、 X 線回折分析を実施した。

1 試料

試料は、S K19の覆土から採取された 1 点である。暗褐色砂混じりシルトからなり、特に赤色物質が濃集している状況は認められない。

2 分析方法

105 で 2 時間乾燥させた試料を、メノウ乳鉢で微粉砕し、アセトンを用いてスライドグラスに塗布し、X線回折測定試料とする。作成した X線回折測定試料について、以下の条件で測定を実施する(足立,1980;日本粘土学会,1987)。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を X 線粉末回折線総合解析プログラム (五十嵐、未公表) により検索する。

装置:島津制作所製XD-3A Time Constant:1.0sec

Target: C u (K α) Scanning Speed: 2°/min

Filter: N i Chart Speed: 2 cm/min

Voltage: 30 K V P Divergency: 1°

Current: 30mA Recieving Slit: 0.3mm

Count Full Scale: 5,000 C/S Scanning Range: 3~45°

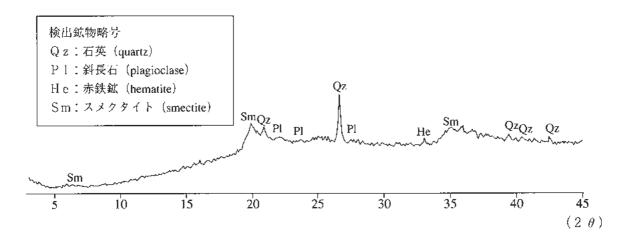
3 結果

赤色顔料のX線回折図を第102図に示す。赤色顔料と考えられる試料において検出された鉱物は、石英 (quartz)、斜長石 (plagioclase)、赤鉄鉱 (hematite) およびスメクタイト (smectite) の4鉱物である。なお、約20°付近からバックグラウンドが上昇する傾向が見られることから、試料中には比較的多くの鉄が含まれていると推察される。

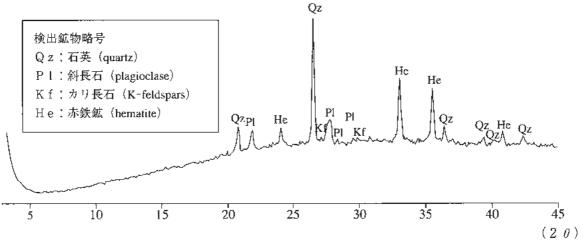
4 考察

上記検出鉱物のうち赤色を呈する鉱物は、赤鉄鉱 (hematite) が代表的である。今回のX線回折 図をみると、赤鉄鉱の回折強度は、向様田A遺跡SK42でみられた赤色物質のX線回折 (第103図) と比較しても明らかなように、それほど強く認められない。したがって、本試料は、いわゆるベンガラと呼ばれる顔料とは異なると思われる。ただし、本試料中には比較的多くの鉄が含まれていると推察されたことから、主たる呈色要因として結晶度の低い、酸化鉄が寄与している可能性がある。一般

に土壌が還元状態にある場合、遊離鉄は可溶性となって水分中に溶出して下層に移動し、不飽和で酸化状態の堆積物で酸化・沈殿することが知られている。おそらく、本試料の場合も、土壌水分中に含まれていた鉄分が、土坑覆土において沈着したものと想定される。



第102図 向様田 E 遺跡 S K 19における赤色顔料の X 線回折図



第103図 向様田 A 遺跡 S K 42における赤色顔料の X 線回折図

引用文献

足立吟也 (1980)「6章 粉末 X 線回折法 機器分析のてびき 3」. p.64-76, 化学同人.

日本粘土学会編 (1987) 「粘土ハンドブック 第二版」. 1289p., 技報堂出版.

第3節 出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

北秋田郡森吉町に所在する当遺跡の竪穴住居跡 S I 03・04・20、炉 S Q N 05、掘建柱建物跡 S B 28 から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。この樹種調査は、当遺跡や周辺地域の古環境を復元していく目的で資料を蓄積していく一環として実施されている。

2 炭化材樹種同定の方法

一括採取された試料であり、出土した炭化材破片は小さいものが多かった。樹種同定は、同定可能な大きさの破片を出来るだけ多く観察した。また試料中に複数の樹種が含まれていた試料では、樹種同定用と年代用が同一破片で確保できる大きさのものを年代測定用試料として選別した。

樹種同定は、炭化材の3方向 (横断面・接線断面・放射断面) の断面を走査電子顕微鏡 (日本電子 (株製 JSM-T100型) で拡大し、材組織の特徴を観察し、同定と写真撮影を行った。

3 結果

同定結果の一覧を、第14表にまとめた。検出された分類群は、マツ属・スギの針葉樹 2 分類群、ヤナギ属・ブナ属・クリ・モクレン属・クスノキ科・イヌエンジュ・ヌルデ・カエデ属の落葉広葉樹 8 分類群であった。

3件の竪穴住居跡(S I 03・04・20)からは、それぞれ複数の樹種が検出された。出土した炭化材は小破片であり建築材とは特定できないが、針葉樹材と落葉広葉樹材の複数の樹種を利用していた可能性が推測される。特にスギとクリは、S I 03とS I 04から共通して検出された。また掘建柱建物 S B 28内土坑から出土した炭化材は、クリであった。

炉 (SQN05) からは、スギ・ヤナギ属・カエデ属が検出された。以下に同定の根拠とした材組織の観察結果を、分類配列順に記載する。

マツ属 Pinus マツ科 図版39 1a-1c (SIO3)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、分野壁孔は窓状である。 放射断面をいくつか作成して観察したが、放射仮道管内壁の特徴が充分に捕えられなかったので、マ ツ属までの同定に留めた。

スギ Cryptomeria japonica D. Don スギ科 図版39 2a-2c (SI04) 3a-3b (SI03 PLD-1200)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量が少ない仮道管の肥厚も薄い。分野壁 孔は大きなスギ型、1分野に2~3個である

ヤナギ属 Salix ヤナギ科 図版39 4a-4c (SQN05 PLD-1202)

小型の管孔が単独または2~4個が複合し晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材。道管の壁孔 は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

ブナ属 Fagus ブナ科 図版39 5a-5c (SIO4)

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る 散孔材。道管の穿孔は主に単穿孔で、階段数が10~20本の階段穿孔も混じる。放射組織は異性、1~ 3細胞幅と細胞幅が広く背の高い広放射組織がある。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 図版39・40 6a-6c (SB28内土坑)

年輪の始めに中型の管孔が密に配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列しする環孔材。 道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロ - スがある。放射組織は単列同性、道管との 壁孔は孔口が大きく交互状である。

モクレン属 Magnolia モクレン属 図版40 7a-7c (SI04)

小型の管孔が単独または2~数個が複合して散在し管孔の分布数は多い散孔材。道管の壁孔は階段 状、穿孔は主に単一であるが階段穿孔も見られ、内腔には水平や弧状のチロ-スがある。放射組織は 異性、1~2細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と 配列している。

クスノキ科 Lauraceae 図版40 8a-8c (SI03)

小型の管孔が単独または2~3個が主に放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材。道管の 壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は方形細胞を含む異性、1~2細胞幅、上下端に大きな 油細胞が見られる。

クスノキ・タブノキ・ヤブニッケイなど管孔が大きく油細胞の出現頻度の高い樹種以外で、温帯から冷温帯にも分布する小型管孔からなるクロモジ属の可能性が高い。

イヌエンジュ Maackia amurensis Rupr. et Maxim. subsp. buergeri (Maxim.) Kitamura マメ科 図版40 9a-9c (SI04)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が塊状や波状の集合帯となる環孔材。 小道管にはらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1~4細胞幅、上下端に方形細胞が見られる。

キハダにも類似していたが、放射組織の細胞高の高さは不揃いで、放射組織は同性に近いが方形細 胞も見られたので、イヌエンジュと同定した。

ヌルデ Rhus javanica L. ウルシ科 図版40 10a-10c (SI04)

年輪の始めに中型の管孔が配列し晩材に向かい徐々に径を減じて行き、晩材部では非常に小型の管孔が塊状に集合して接線状・斜状に配列する環孔材。木部柔組織は周囲状、特に晩材部では集合管孔の周囲に多い。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~2細胞幅、輪郭はやや不斉、道管との壁孔はやや大きく孔口もレンズ状に大きく開き交互状配列である。

カエデ属 Acer カエデ科 図版40 11a-11c (SI04 PLD-1201)

小型の管孔が単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の 壁孔は交互状、穿孔は単一、一部で内腔に細いらせん肥厚が確認された。放射組織は同性、1~6細 胞幅である。

遺跡	遺構	検出樹種	備考	年代測定試料		
向樣田 E		マツ属	破片 1			
	S I 03	スギ	破片複数	PLD - 1200 (1片)		
		クリ	破片 1			
		クスノキ科	破片 1			
	S I 04	スギ	破片 2			
		ブナ属	破片 2			
		クリ	破片 1			
		モクレン属	破片 1			
		イヌエンジュ	破片 2			
		ヌルデ	樹芯部破片 1			
		カエデ属	破片 3	PLD - 1201 (1片)		
	S I 20	ヤナギ属	樹芯部破片 2	PLD - 1202 (1片)		
	3 1 20	カエデ属	破片 1			
	S Q N 05	スギ	破片 1			
		ヤナギ属	破片 2	PLD - 1203 (1片)		
		カエデ属	破片 1			
	S B 28	クリ	破片複数	PLD - 1204 (1片)		

第14表 出土炭化材の樹種同定結果

第4節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

向様田 E 遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2 試料と方法

試料は、SI03から出土した炭化材 (スギ) 1点、SI04から出土した炭化材 (カエデ属) 1点、SI20から出土した炭化材 (ヤナギ属) 1点、SQN05から出土した炭化材 (ヤナギ属) 1点、SB28内土坑から出土した炭化材 (クリ) 1点の併せて5点である。これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計 (AMS法) にて測定した。測定された14C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した14C濃度を用いて14C年代を算出した。

3 結果

第15表に、各試料の同位体分別効果の補正値 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を 補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

14 C 年代値(yrBP)の算出は、14 C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した14 C 年代誤差(± 1)は、計数値の標準偏差 に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の14 C 年代が、その14 C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の14 C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14 C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14 C 濃度の変動、および半減期の違い(14 C の半減期5,730 ± 40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、14 C 年代を暦年代に変換することである。 具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と14 C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて14 C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて14 C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

14 C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正値は14 C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された14 C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

測定番号	試料データ	¹³ CPDB	¹⁴ C 年代	14 C 年代を暦年代に較正した年代		
(測定法)	記入イナノ 一・ラ	(‰)	(yrBP ± 1)	暦年代較正値	1 暦年代範囲	
PLD-1200 (AMS)	炭化材 6 (スギ) S I 03	- 23.3	1180 ± 30	cal AD 885	cal AD 780 - 790 (11.6%) cal AD 810 - 890 (88.4%)	
PLD-1201 (AMS)	炭化材 7 (カエデ属) S I 04	- 25.1	2940 ± 30	cal BC 1205 cal BC 1190 cal BC 1180 cal BC 1150 cal BC 1145 cal BC 1130	cal BC 1210 - 1200 (11.8%) cal BC 1195 - 1140 (47.1%) cal BC 1135 - 1110 (16.6%) cal BC 1100 - 1080 (12.1%)	
PLD-1202 (AMS)	炭化材 8 (ヤナギ属) S I 20	- 25.7	120 ± 30	cal AD 1695 cal AD 1725 cal AD 1810 cal AD 1850 cal AD 1860 cal AD 1920 cal AD 1950	cal AD 1685 - 1710 (18.7%) cal AD 1720 - 1730 (10.4%) cal AD 1810 - 1885 (58.4%) cal AD 1910 - 1925 (11.2%)	
PLD-1203 (AMS)	炭化材 9 (ヤナギ属) SQN5	- 25.8	680 ± 30	cal AD 1295	cal AD 1285 - 1305 (62.6%) cal AD 1370 - 1380 (37.4%)	
PLD-1204 (AMS)	炭化材 10 (クリ) S B 28内土坑	- 26.1	600 ± 30	cal AD 1325 cal AD 1345 cal AD 1395	cal AD 1305 - 1335 (45.0%) cal AD 1340 - 1355 (26.7%) cal AD 1385 - 1400 (19.9%)	

第15表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の¹⁴C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibrati on Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第5節 鉄滓の蛍光 X 線分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1 試料と方法

ここでは、SK31から出土した鉄滓の蛍光X線分析を行った。

試料は、ガラスビーズパウダーを用いたエアーブラシにより鉄滓の表面に付着した土壌を除去した。 表面研磨を行った試料は、その表面について蛍光×線分析を行い定性的に調べた。

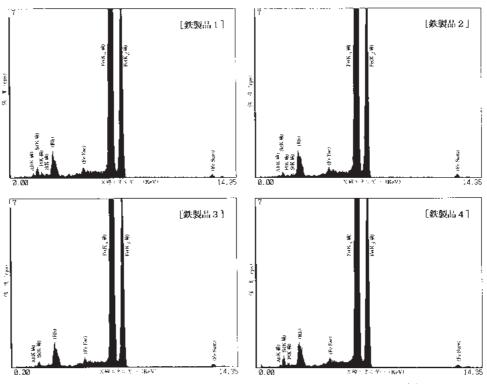
測定は、セイコ - 電子工業(株)製のエネルギ - 分散型の蛍光 X 線分析装置 SEA-2001L を用いた。 装置の仕様は、 X 線発生部はロジウム (Rh) 管球、ベリリウム (Be) 窓、 X 線検出器は Si (Li) 半 導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流15 μm、電圧15kV、試料室内は真 空である。

2 結果および考察

鉄滓の表面に付着する土壌を除去した。その結果、4試料は、いずれも比較的硬い部分の断面形状が表面において非対称の凸面、裏側において平坦面を示す。また、その内部は中空構造を持つ。

これらのうち3試料は、接合することが判明した (写真図版)。こうしたことから、この鉄滓は、何らかの鉄製品が錆びたものと考えられる。なお、磁石を近づけると弱いものの吸着することから金属部を多少残しているものと予想される。

蛍光 X 線分析による定性分析では、鉄のピークが顕著である (第104図)。なお、アルミニウム (A1) やケイ素 (Si) あるいはリン (P) などが検出されたが、これらの元素は土壌に伴う元素と推定される。



[元素記号] AI; アルミニウム、SI; ケイ素、P; リン、S; イオン、Fe; 鉄、(Fe Esc); 鉄のエスケーブピーク、(Fe Sum); 鉄のサムピーク、(Rh); ロジウム (管球から)

第104図 各鉄製品表面の蛍光 X 線スペクトル図

第4章 まとめ

向様田 E 遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。検出した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡 1 軒、土坑 5 基、土器埋設遺構 1 基である。 S K 11土坑を除くすべての遺構は、遺跡南端部の細長い尾根上に集中する。竪穴住居跡は、長軸2.39m、短軸2.1 (推定)の楕円形を呈する小形の住居跡である。住居内中央やや南寄りに地床炉をもつ。出土土器よりこの住居跡は、縄文時代後期の所産と考えられる。向様田 E 遺跡の南側は急崖であり、元々はもう 1 ・ 2 件程度の竪穴住居が縁辺に建てられていた可能性が高い。現在の地形に至るまでの間に崩落してしまったのではないだろうか。検出土坑からは時代を確定する遺物の出土はないが、これらの土坑も縄文時代後期に帰属するものだろう。遺跡南端は小規模な縄文時代後期の集落跡と考えられる。この住居跡を掘り込んでいる、縄文時代晩期の土器埋設遺構を検出した。土器は逆位に設置されている。この土器は、縄文時代晩期の大洞B式土器である。また、東端部にも縄文時代晩期の S K 11土坑を検出した。この土坑は、長軸4.08m、短軸2.78mと規模が大きい。出土遺物より縄文時代晩期中葉の所産と考えられる。どちらも縁辺で検出されており、縄文時代晩期の遺構も後期と同様崩落した可能性がある。

検出した古代の遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑7基、溝跡2条であり、遺跡東部南側にまとまっている。竪穴住居跡はすべて方形プランを呈する。SI03・04竪穴住居跡は建物方位が等しく、共に東壁やや南側にカマドを構築している。SI03竪穴住居跡の西壁からは、西側のゆるやかな斜面に向かって排水のための溝跡が延びる。SI03竪穴住居跡のカマドには、扁平な礫が燃焼面に覆い被さっており、北側床面には炭化物が広がっていた。この住居は焼失家屋であり、炭化物の広がりから考えると、北側と西側の壁材が住居内に倒れたのであろう。そして、焼失する際にカマドがつぶれ、芯材に使用していた礫が覆い被さったものと考えられる。床面からは、底部に回転糸切り痕のある土師器坏や黒色処理が施された非ロクロ土師器が出土している。これらの出土遺物と、放射性炭素年代測定結果から、この住居跡は9世紀の所産であろう。SK31土坑では、刀子と思われる金属製品が出土している。この時代に刀子のような金属製品は一般的な持ち物ではない。本遺跡は、標高が145~159mの丘陵地上にあり、向様田地区にある他の遺跡との標高差は15~20mもある。遺跡北側以外は急崖になっており、小規模な防御性集落を形成していた可能性もある。このように考えると、掘り込みが浅く遺物も出土しなかったため、第2章で時代不明にしたSD18溝跡は、集落を区画していた溝または板塀跡だったのかもしれない。

中世の遺構は、掘立柱建物跡 1 軒、柱列 1 列、炉 1 基を検出した。遺跡南西部尾根上で検出した掘立柱建物跡は、桁行 7 間×梁行 4 間の総柱式である。桁行の総長は約17m、梁行の総長は約9.5mと大規模な建物跡である。掘立柱建物内には、長軸1.4m、短軸 1 mの土坑がある。底面に炭化物の層が広がり、当初は本建物に伴わない中世の火葬墓とも考えた。しかし、本来あるべき掘立柱建物跡の柱穴との重複がなかったことより、本遺構に伴う炉ととらえた。遺物の出土はないが、土坑内から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果から、本遺構は14世紀に帰属する平地式の掘立柱建物跡と考えられる。古代の S I 03竪穴住居跡を掘り込んで構築している S Q N 05 炉も、遺構内から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果から、14世紀の所産と考えられる。 S Q N 05 炉は、ゆるやかな斜面上の北側に石組み部を、南側には土坑部を形成している。礫は被熱を受けており、遺構内には炭化物が

向様田E遺跡

充満している。形態から長方形箱形製鉄炉とも考えられるが、製鉄に関する遺物は出土していない。本遺構の周りには柱穴が検出されず、上屋は付設しなかったと考えられる。SQN05炉と平行にSA17柱列が並んでいることより、この柱列はSQN05炉の風除けだったのだろう。SB28掘立柱建物跡とSQN05炉は構築年代が一致することより、掘立柱建物跡で生活した人たちが、SQN05炉で製鉄か何かを生産したのだろう。本遺跡の南側には向様田A遺跡がある。向様田A遺跡では、13世紀末から14世紀の生産と考えられる青磁碗底部破片が出土している。この遺物は、掘立柱建物跡で生活していた人が所持していた可能性もある。建物の規模や生産遺構から考えると、上層階級または生産に関係した特別な人が生活していた可能性が高い。

向様田 E 遺跡は全体的に著しく削平されており、遺物の出土量は非常に少ない。出土した爪形文土器破片は、本遺跡の時期が縄文時代早期までさかのぼる可能性を示している。森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡の中で、古代の遺跡は 6 遺跡確認されている。これらの遺跡はすべて、本遺跡より小又川上流の離れた場所に位置する。本遺跡は防御性集落の可能性もあり、他の古代の遺跡とは性格を異にするのかもしれない。中世の遺跡では、平成 8 年度に森吉町教育委員会で調査した森吉家ノ前B遺跡がある。その後、平成14年度に調査を実施した漆下遺跡と森吉家ノ前A遺跡で中世の遺構が検出された。漆下遺跡では、掘立柱建物跡や竪穴状遺構の他に、造成したゆるやかな斜面に方形の石組炉を 2 基検出した。 2 基の石組炉は、形態的には S Q N 05 炉と類似し、生産関連の遺構と考えられている。また、森吉家ノ前 A 遺跡では、底部に菊花文を押印した灰釉小皿が大溝跡から出土している。

秋田県教育委員会と森吉町教育委員会による森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群の発掘調査 も、遺跡数の3分の2を終了した。今までの発掘調査により、この地域の歴史の解明が進んでいるが、 今後の調査により向様田 E 遺跡の性格がさらに解明されるだろう。

参考文献

秋田県教育委員会 『桂の沢遺跡発掘調査報告書 - 小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査 - 』 秋田県文化財調査報告書第247集 1994 (平成6) 年

秋田県教育委員会 『桐内 C 遺跡 - 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県文化財調査報告書第 299集 2000 (平成12) 年

村越潔 『円筒土器文化』 雄山閣 1974 (昭和49) 年

渡辺誠・南博史 共編 『古代學研究所研究報告 第5輯 青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』 財團法人古代學協 會 1997 (平成9) 年

秋田県教育委員会 『からむし岱 遺跡 - 大館能代空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県 教育委員会 2002 (平成14) 年

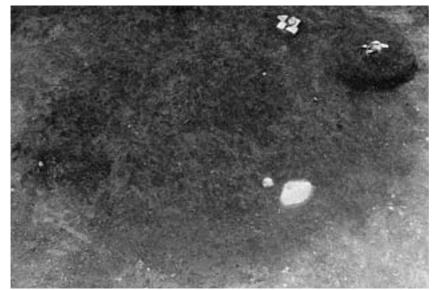
秋田県教育委員会 『盤若台遺跡 - 主要地方道琴丘上小阿仁線高速交通関連整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 秋田県教育委員会 2001 (平成13) 年

大田区立郷土博物館 『製作工程の考古学』 1998 (平成10) 年

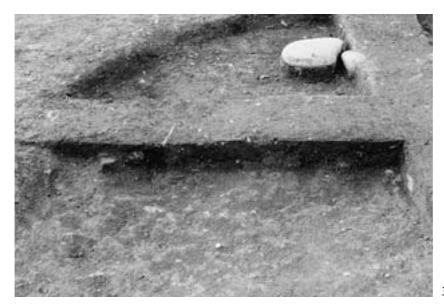
鈴木道之助 『図録・石器入門事典 < 縄文 > 』 柏書房 1994 (平成6) 年



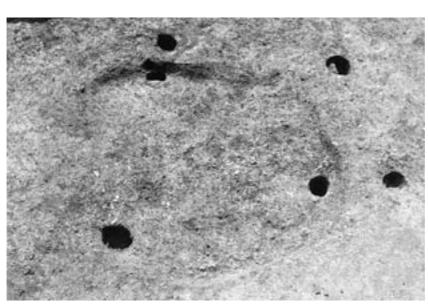
1 向様田 E 遺跡全景 遺跡全景



2 SI20確認状況 (北)

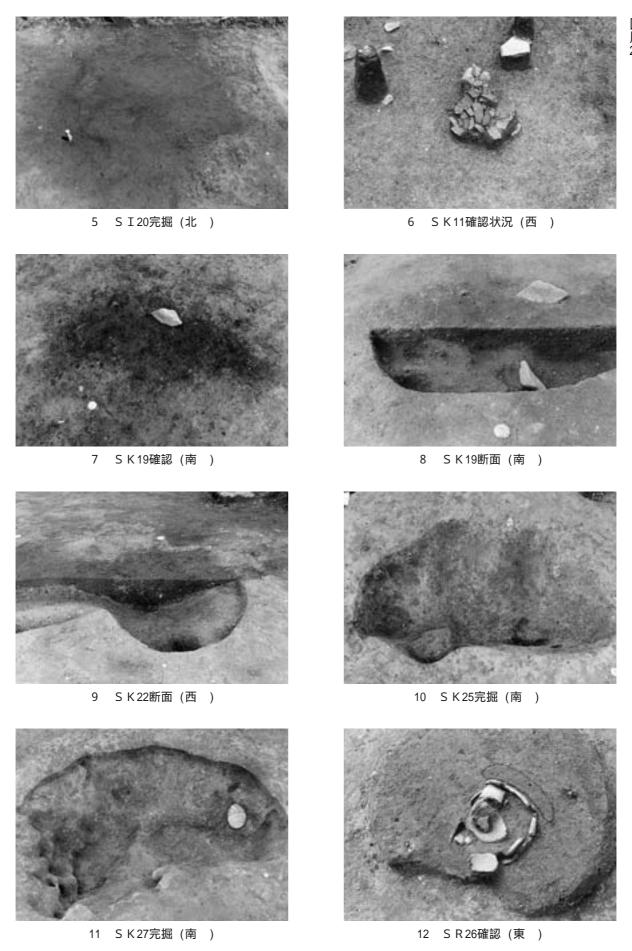


3 SI20断面 (南)



4 SI20断面 (南)

検出遺構 (1)



検出遺構 (2)



13 SR26断面(北)



14 SI03確認 (西)

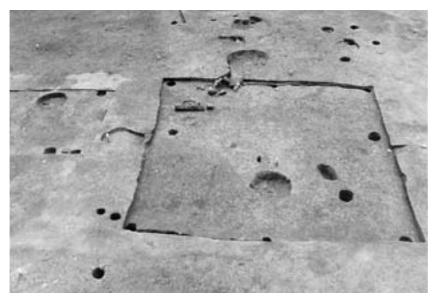


15 SI03カマド現況 (西)

検出遺構 (3)



16 SI03カマド断面 (北)



17 S I 03完掘 (北)

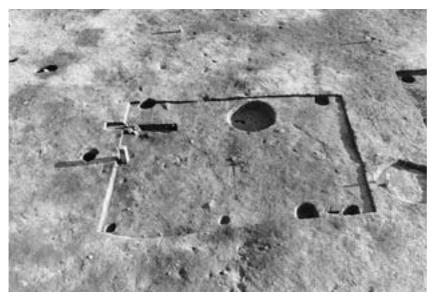


18 SI04確認(北)

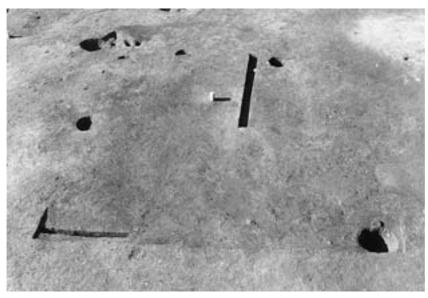
検出遺構 (4)



19 SI04カマド完掘 (西)

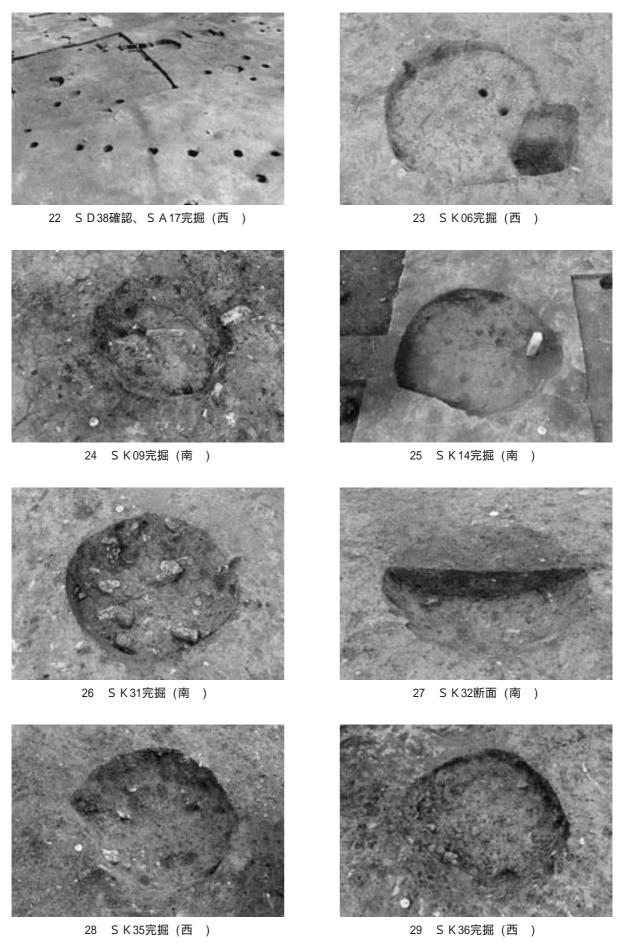


20 SI04完掘 (北)

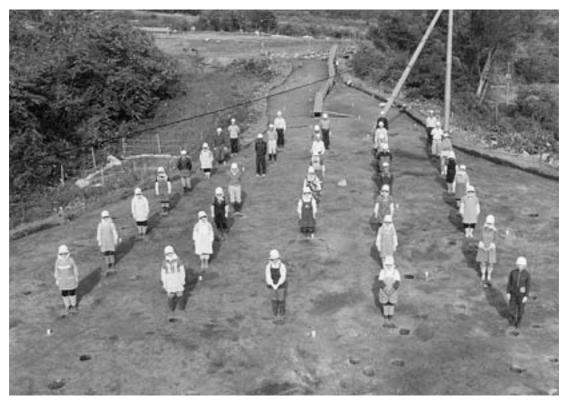


21 SI10完掘(南)

検出遺構 (5)



検出遺構 (6)



30 SB28完掘 (西) 人の立っているところが柱穴



31 SQN05完掘(南)

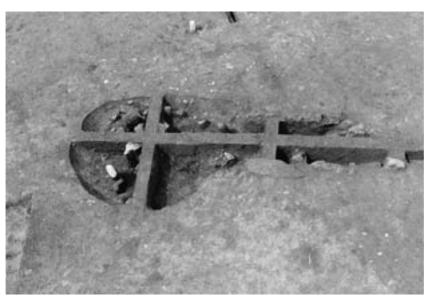
検出遺構 (7)



32 SQN05確認状況 (西)



33 SQN05確認状況 (北西)

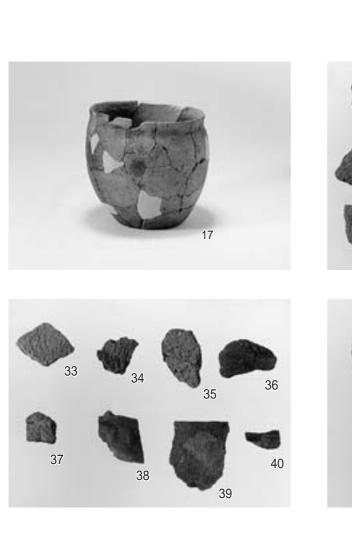


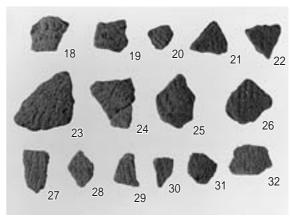
| | 34 SQN05土層断面(東)

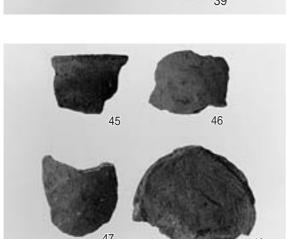
検出遺構 (8)

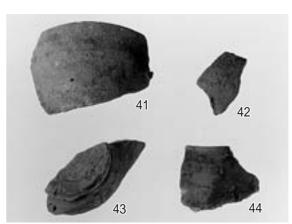


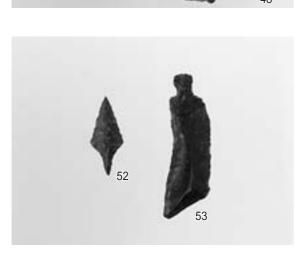
出土遺物 (1)

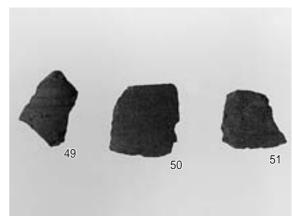






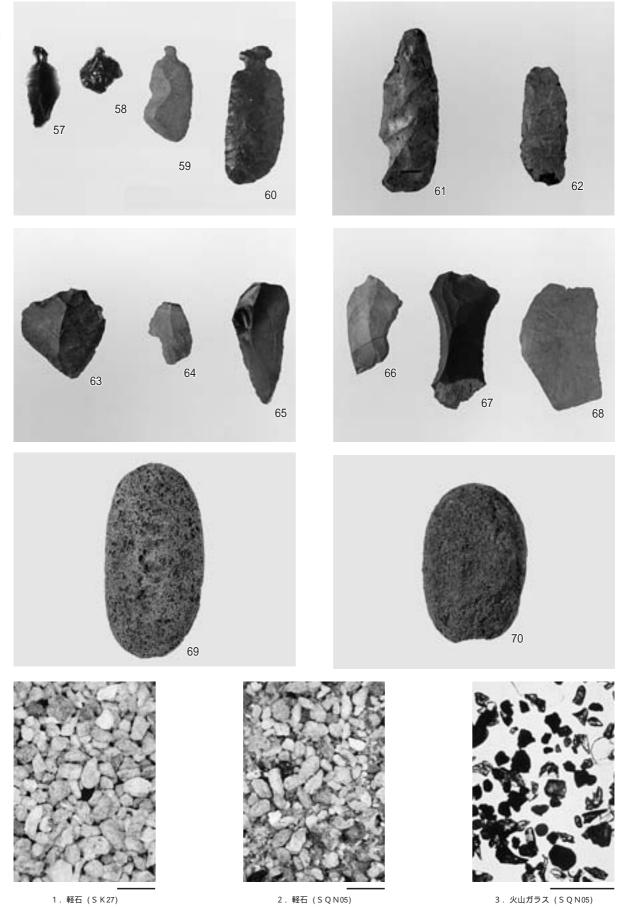




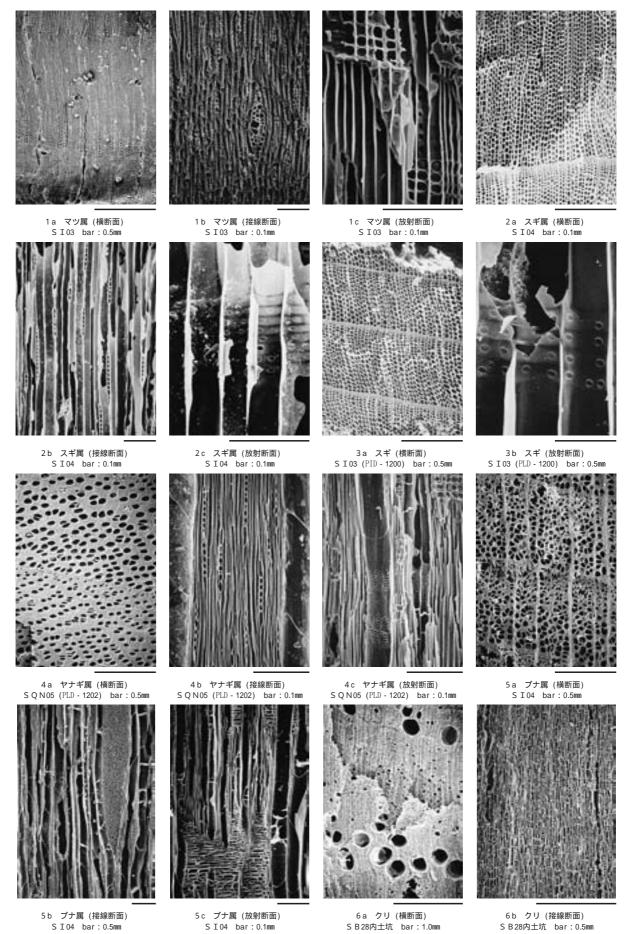


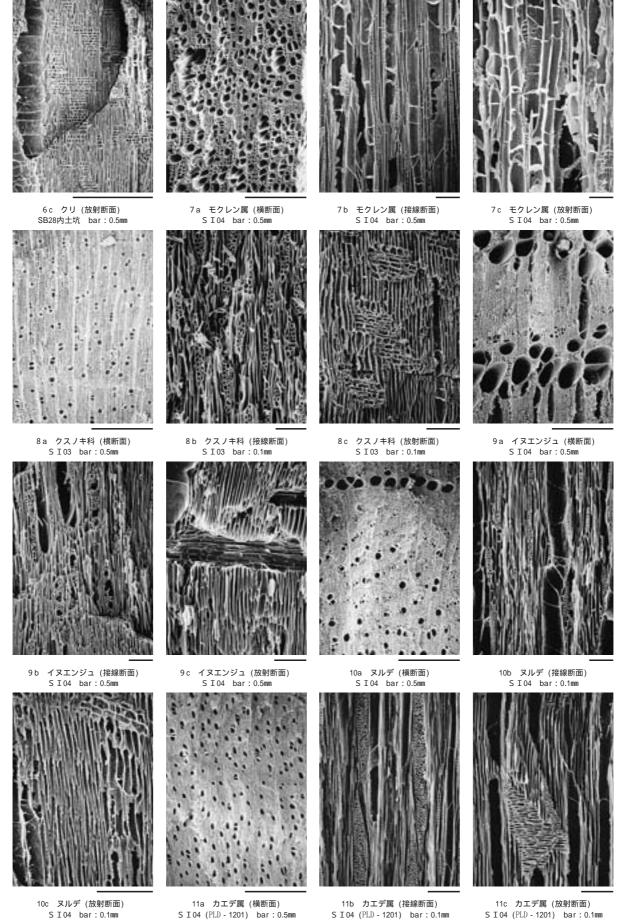


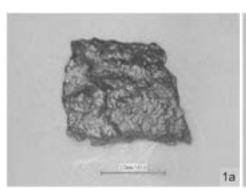
出土遺物 (2)

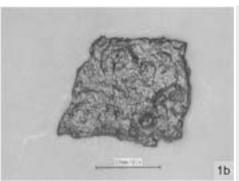


出土遺物 (3) と軽石・火山ガラス

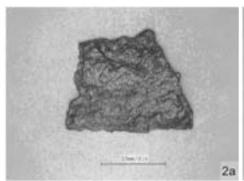


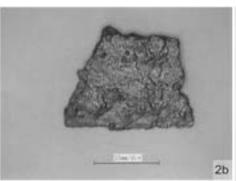




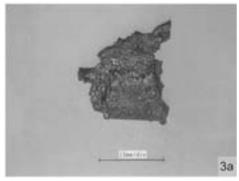


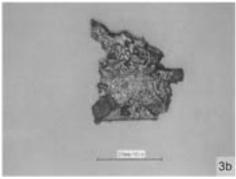




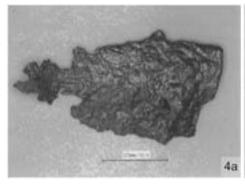


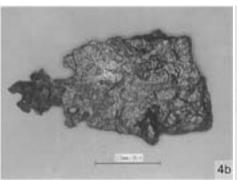


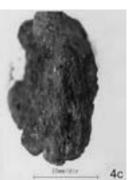












各鉄製品のマイクロスコープ写真 (a. 表面、b. 裏面、c. 断面) 1 a ~ 1 c; 鉄製品1、2 a ~ 2 c; 鉄製品2、3 a ~ 3 c; 鉄製品3、4 a ~ 4 c; 鉄製品4

報告書抄録

		(I+	<u> </u>		1 12	业水			
ふりが	な むかいさま	だ いせき	き むかいさま	だ	いせ	き むかいさ	まだ い	せき	
書	名 向様	田 B 遺 跡	・ 向 様	田	C遺跟	亦・向 柞	兼田 E 遺	跡	
		ダム建設事業	業に係る:	埋蔵	文化財务	発掘調 査	報告書		
	次		141 - 141 -		7,2,,,,,				
シリーズ		文化財調査	据 生 聿						
	名 河田弘		h>. h						
		埋蔵文化財		7 /. .	LmT+/	<u> </u>	- 	FEL (0407)	00.0004
		0802 秋田	県仙北郡	<u>ұЩ</u>	凹払出	子午嗎2	20番地	ΓEL (0187)	69-3331
		3年3月			II. /-	- 4-7	1	I	
ふりがな	ふりがな		ード		北緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地		村遺跡都	野	۰	0		m²	門旦水凸
むかいさま だ 向 様田 B	あき た けんきたあき た 秋田県北秋田	<i>ζ</i> _{<i>h</i>} 05000			40°	4.40°	00040540		ᅕᆂᆡᅜ
PI 依田 B	秋田県北秋田	郡 05323		-	40	140°	20010513		森吉山ダ
in the 遺跡	もりょしまちもりょし森吉町森吉	字			2	28	~	5,400m²	ム建設事
~~~	的樣田67 -							,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	
	回 様田67 -	1			26	40	20010907		業に係る
	外								埋蔵文化
	×1								
									財発掘調
	あき た けんきたあき た 秋田県北秋田	部 05323			40°	140°	20010517		查
むかいさま だ				-	40	140	20010317		且
向 様田 C	おいまりまりまり	字	İ		2	28	~	810m²	
い せき	むかいさまだ 向 様田76外					4.0	00040040		
遺跡	回 禄田76外				25	40	20010810		
	あき た けんきたあき た	€h							
	秋田県北秋田	都   05323		-	40°	140°	20010827		
	おいまりまりまり	あざ	į		2	20		4.000 m²	
むかいさま だ	深 古 町 深 古	子			2	28	~	4,200mf	
向 様田 E	むかいさま だ いえ 向 様田家丿	Ť			30	32	20011019		
い せき		.							
遺跡	モ36外		İ						
所収遺跡名	種 別	主な時代	主	な	遺構	一主	な遺物	物 特記	事 項
									X
│ 向様田 B 遺跡	-	: 縄文時代			5		土器・石器	<del> </del>	
	は墓域		配石遺	構	1	9   土製	品		
	祭祀		性格不	明遺	構	1			
│ │ 向様田 C 遺跡		縄文時代					土器・石器	縄文時代	代晩期の祭
1 3 100 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 2	, ,,,,,,	1.02	配石遺	燼		1	品・石製品		0.70703 02 23
   向様田 E 遺跡		细六吐化	1						弋から中世
川塚田   退均	小   宋洛娜	縄文時代	1	占岰		" "	土器・石器		
			土坑			5			ての複合遺
			土器埋	设遺		1		跡	
		古代	竪穴住	居跡	3	3  土師	i器・須恵器	<u> </u>	
			土坑			7 鉄製	!品		
			溝跡			2			
		中世	掘立柱	中州		1			
		+		生彻					
			柱列			1			
			炉			1			
		不明	土坑		2	2			
			焼土遺	構	•	1			
			溝跡			1			
			11-3 11/1						

秋田県文化財調査報告書第347集 向様田 B 遺跡・向様田 C 遺跡・向様田 E 遺跡 一 森吉山ダム建設事業に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書 一

印刷・発行 平成15年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号

電話 (018) 860 - 5193

印 刷 株式会社 三戸印刷所



